

鳥居松遺跡5次

弥生時代編

2009年12月

(財)浜松市文化振興財団

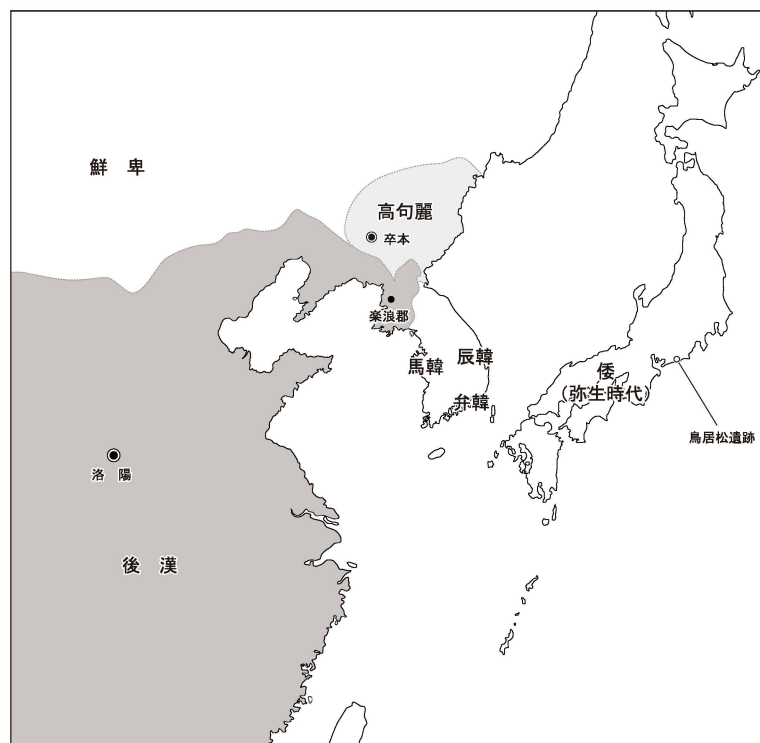


鳥居松遺跡 5 次

弥生時代編

2009 年 12 月

(財) 浜松市文化振興財団



2世紀の東アジア



弥生時代主要出土遺物



B区水田関連遺構（東から）



C区下層遺構（東から）



1 SD201 下層出土主要遺物



2 南関東系土器

例 言

- 1 本書は浜松市中区森田町 133 他において実施した鳥居松遺跡（5 次調査）の発掘調査にかかわる報告である。当発掘調査の報告書は、弥生時代編（第 1 分冊）、伊場大溝編（第 2 分冊）、円頭大刀編（第 3 分冊）の 3 部で構成される。本書は第 1 分冊に相当する弥生時代編であり、調査経緯、および弥生時代にかかわる調査成果を扱う。
- 2 当発掘調査は集合住宅建設および宅地造成に先立つ事前調査として実施した。調査は、株式会社マルハンおよびセキスイハイム東海株式会社の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。
なお、当初、集合住宅の建設が計画されていた対象地北側については、発掘調査終了後に開発計画が変更されたため、別途に発掘調査を実施した部分がある（財団法人浜松市文化振興財団 2009『鳥居松遺跡 6 次』）。
- 3 当発掘調査にかかわる契約期間は平成 19 年 11 月 9 日から平成 21 年 12 月 25 日までである。このうち現地発掘調査は、平成 20 年 1 月 4 日から 6 月 16 日の間に実施した。調査面積は 1200m² である。
- 4 発掘調査は、安藤 憲、小粥良和、鈴木一有（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）が担当し、原田和子、鈴井けい子、藤森紀子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）が補助した。
- 5 本書の編集、事実記載などの執筆は鈴木一有が行った。
- 6 調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。

SB：竪穴建物	SH：掘立柱建物	SK：土坑	SX：遺物集積
SD：溝	SP：小穴	SE：井戸	SL：畦畔
- 3 遺物番号は、試掘調査、本調査で出土した遺物について、遺物の種別にかかわらず、それぞれ連番を付した。
- 4 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

	弥生土器・土師器
	須恵器
	灰釉陶器・山茶碗
- 5 引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博
(財) 浜松市文化協会→浜文協
(財) 浜松市文化振興財団→浜文振
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
教育委員会→教委
遺跡調査会→調査会

鳥居松遺跡 5 次 弥生時代編

目 次

巻頭図版

例言・凡例

第 1 章 序 論	1
-----------	---

1 調査にいたる経緯	1
2 遺跡をめぐる環境	2
3 試掘調査	10
4 本発掘調査の方法と経過	22

第 2 章 調査成果	27
------------	----

1 基本層位と遺構検出面	27
2 A 区の遺構と遺物	28
3 B 区の遺構と遺物	37
4 C 区の遺構と遺物	75

第 3 章 後 論	117
-----------	-----

1 鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年	117
2 鳥居松遺跡の集落構造とその特質	129

第 4 章 総 括	139
-----------	-----

1 発掘調査の成果	139
2 特筆すべきことがら	140
3 今後の展望	140

出土遺物観察表	141
---------	-----

図 版

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 弥生時代主要出土遺物
- 2 B区水田関連遺構（東から）
- 3 C区下層遺構（東から）
- 4 1 SD201 下層出土主要遺物
2 南関東系土器

図 版

- 1 A区下層遺構（東から）
- 2 1 SX12 下層遺物出土状態（南西から）
2 SX11 上層遺物出土状態（北東から）
3 SX11 上層遺物出土状態（西から）
- 3 B区下層遺構全景（南西から）
- 4 1 SD104（南東から）
2 SD104 東側遺物出土状態（西から）
3 SD104 西側遺物出土状態（西から）
- 5 1 SD108（北東から）
2 SD108 遺物出土状態（南から）
3 SD108 完掘状況（北から）
- 6 B区上層遺構（西から）
- 7 1 SB101（北西から）
2 SX103 遺物出土状態（南東から）
- 8 B区水田関連遺構（東から）
- 9 1 SX101 遺物出土状態（北西から）
2 SX101 遺物出土状態（南東から）
- 10 1 SX101・102、SD103 遺物出土状態（北西から）
2 SD103 土層断面（北から）
- 11 C区下層遺構（西から）
- 12 1 SD201 下層遺物出土状態（東から）
2 SD201 下層遺物出土状態（南西から）
3 SD201 下層遺物出土状態（南東から）
- 13 C区上層遺構（西から）
- 14 1 SD201 上層北西群遺物出土状態（北西から）
2 SD201 上層北西群遺物出土状態（西から）

- 3 SD201 上層北西群遠景（西から）
- 15 1 SD201 上層遺物出土状態（北西から）
 - 2 SD201 上層遺物出土状態（北西から）
 - 3 SD201 上層遺物出土状態（北東から）
- 16 1 SX204 遺物出土状態（北東から）
 - 2 C区最上層遺構（西から）
- 17 1 SK202 遺物出土状態（北から）
 - 2 SK202 遺物出土状態（北東から）
 - 3 SK203 遺物出土状態（東から）
 - 4 SP202 遺物出土状態（南東から）
- 18 1 SX201 遺物出土状態（北東から）
 - 2 SX201 遺物出土状態（南東から）
 - 3 SX201 遺物出土状態（北から）
- 19 弥生時代主要出土遺物
- 20 SX11 出土遺物
- 21 SX12 出土遺物
- 22 SD108 出土遺物
- 23 SD104 出土遺物
- 24 SX103 中央群出土遺物
- 25 SX103 西群出土遺物
- 26 SX101 出土遺物
- 27 1 SD103 出土遺物
 - 2 水田層出土遺物
- 28 SD201 下層出土主要遺物
- 29 SD201 下層出土遺物（1）
- 30 SD201 下層出土遺物（2）
- 31 SD201 下層出土遺物（3）
- 32 SD201 下層出土遺物（4）
- 33 SD201 下層出土遺物（5）
- 34 SD201 下層出土遺物（6）
- 35 1 家形土器
 - 2 SD201 上層出土主要遺物
- 36 SD201 上層出土遺物（1）
- 37 SD201 上層出土遺物（2）
- 38 SX204 出土遺物

挿 図 目 次

Fig.1	鳥居松遺跡の位置	1	Fig.35	SD108 遺物出土状態	40
Fig.2	鳥居松遺跡周辺の微地形	2	Fig.36	SD108 出土遺物 (1)	41
Fig.3	中村遺跡出土弥生土器	3	Fig.37	SD108 出土遺物 (2)	42
Fig.4	鳥居松遺跡周辺の自然地形	4	Fig.38	SD108 出土遺物 (3)	43
Fig.5	鳥居松遺跡周辺の遺跡分布図	5	Fig.39	B 区土坑等出土遺物 (1)	44
Fig.6	伊場遺跡群出土郡家関連遺物	6	Fig.40	B 区土坑等出土遺物 (2)	45
Fig.7	鳥居松遺跡 1 次調査の検出遺構	7	Fig.41	SD104 土層断面図	46
Fig.8	鳥居松遺跡調査区配置図	8	Fig.42	SD104 遺物出土状態	47
Fig.9	鳥居松遺跡出土 家形土器	9	Fig.43	SD104 出土遺物 (1)	48
Fig.10	試掘坑配置図	12	Fig.44	SD104 出土遺物 (2)	49
Fig.11	試掘坑土層柱状図	13	Fig.45	SD104 出土遺物 (3)	50
Fig.12	試掘坑 1・2 出土遺物	14	Fig.46	SD104 出土遺物 (4) ・ その他 SD 出土遺物	51
Fig.13	試掘坑 3・4・5 出土遺物	15	Fig.47	B 区上層遺構	53
Fig.14	試掘坑 6・7・8 出土遺物	16	Fig.48	SX103 東群遺物出土状態	54
Fig.15	試掘坑 9・11 出土遺物	17	Fig.49	SX103 中央群遺物出土状態	55
Fig.16	試掘坑 12 出土遺物	18	Fig.50	SX103 西群遺物出土状態	56
Fig.17	試掘坑 13・14・15 出土遺物	19	Fig.51	SX103 出土遺物 (1)	57
Fig.18	試掘坑 17 出土遺物	20	Fig.52	SX103 出土遺物 (2)	58
Fig.19	基礎杭撤去坑出土遺物	21	Fig.53	SX103 出土遺物 (3)	59
Fig.20	グリッド配置図	23	Fig.54	SX103 出土遺物 (4)	60
Fig.21	伊場大溝の調査風景	24	Fig.55	SX103 西群出土 南関東系土器	61
Fig.22	伊場大溝の体験発掘	24	Fig.56	SB101 実測図	61
Fig.23	弥生時代遺構の調査風景	25	Fig.57	SB101 出土遺物	62
Fig.24	弥生時代遺構の現地説明会	25	Fig.58	B 区包含層出土遺物	62
Fig.25	A 区最下層遺構	28	Fig.59	B 区水田関連遺構	63
Fig.26	A 区下層・上層遺構	29	Fig.60	SX101・102 遺物出土状態	65
Fig.27	SX11 下層・SX12 遺物出土状態	31	Fig.61	SL101・103 出土遺物 ・ SX101 出土遺物 (1)	66
Fig.28	SX11 上層遺物出土状態	32	Fig.62	SX101 出土遺物 (2)	67
Fig.29	SX11 等出土遺物 (1)	33	Fig.63	SX101 出土遺物 (3)	68
Fig.30	SX11 等出土遺物 (2)	34	Fig.64	SL102・SX102 出土遺物	69
Fig.31	SX12 下層出土遺物	35	Fig.65	SD103 遺物出土状態	71
Fig.32	SX12 上層出土遺物	36	Fig.66	SD103 出土遺物 (1)	72
Fig.33	B 区下層遺構	38			
Fig.34	B 区土層断面詳細図	39			

Fig.67	SD103 出土遺物 (2)	73	Fig.95	SD201 上層出土遺物 (3)	103
Fig.68	B 区水田層関連出土遺物	74	Fig.96	SD201 上層出土遺物 (4)	104
Fig.69	C 区下層遺構	75	Fig.97	SD201 上層出土遺物 (5)	105
Fig.70	口縁外面の布目状押捺	77	Fig.98	SD201 上層出土遺物 (6)	106
Fig.71	SD201 下層遺物出土状態	78	Fig.99	SD201 上層出土遺物 (7)	107
Fig.72	SD201 下層出土遺物 (1)	79	Fig.100	SX204 遺物出土状態	108
Fig.73	SD201 下層出土遺物 (2)	80	Fig.101	SX204 出土遺物 (1)	109
Fig.74	SD201 下層出土遺物 (3)	81	Fig.102	SX204 出土遺物 (2)	110
Fig.75	SD201 下層出土遺物 (4)	82	Fig.103	C 区最上層遺構	111
Fig.76	SD201 下層出土遺物 (5)	83	Fig.104	C 区土坑実測図	112
Fig.77	SD201 下層出土遺物 (6)	84	Fig.105	C 区土坑等出土遺物	113
Fig.78	SD201 下層出土遺物 (7)	85	Fig.106	SX201 遺物出土状態	115
Fig.79	SD201 下層出土遺物 (8)	86	Fig.107	SX201・202 出土遺物	116
Fig.80	SD201 下層出土遺物 (9)	87	Fig.108	弥生時代後期後半における 土器の分類	118
Fig.81	SD201 下層出土遺物 (10)	88	Fig.109	西遠江における弥生時代後期の 土器編年 (1)	122
Fig.82	SD201 下層出土遺物 (11)	89	Fig.110	西遠江における弥生時代後期の 土器編年 (2)	123
Fig.83	SD201 下層出土遺物 (12)	90	Fig.111	西遠江における弥生時代後期の 土器編年 (3)	124
Fig.84	SD201 下層出土遺物 (13)	91	Fig.112	西遠江における弥生時代後期の 土器編年 (4)	125
Fig.85	SD201 下層出土遺物 (14)	92	Fig.113	伊場遺跡群出土の弥生時代 特殊遺物	130
Fig.86	SD201 下層出土遺物 (15)	93	Fig.114	外来系土器	133
Fig.87	C 区上層遺構	94	Fig.115	鳥居松遺跡の変遷	135
Fig.88	C 区上層遺物出土状態	95			
Fig.89	SD201 上層北西群等遺物出土状態	96			
Fig.90	家形土器	97			
Fig.91	SD201 上層北西群出土遺物	98			
Fig.92	SD201 上層遺物出土状態	100			
Fig.93	SD201 上層出土遺物 (1)	101			
Fig.94	SD201 上層出土遺物 (2)	102			

表 目 次

Tab.1	鳥居松遺跡における発掘調査一覧	9
Tab.2	鳥居松遺跡 5 次調査地点 試掘調査成果一覧	11
Tab.3	鳥居松遺跡における基本層位	27
Tab.4	弥生時代後期を中心とした西遠江の一括資料	117
Tab.5	出土資料の組成比較	120
Tab.6	出土資料の器種比率	121
Tab.7	一括資料における属性の変遷	126
Tab.8	他地域との併行関係	128
Tab.9	外来系土器	132

第1章 序 論

1 調査にいたる経緯

鳥居松遺跡の概要 鳥居松遺跡は、静岡県浜松市中区森田町・神田町にまたがる弥生時代後期の集落遺跡として1995年に新たに登録された。鳥居松遺跡では、過去4回にわたる発掘調査が実施されている。弥生時代後期の環濠集落や、奈良時代に中心がある埋没河川「伊場大溝」などが発掘され、西方700mほどに位置する伊場遺跡と一連の様相が明確になりつつある。過去の調査で出土した遺物の中には、弥生時代後期の家形土器や、奈良・平安時代の墨書土器など、注目できるものが多く含まれ、遺跡の重要性は広く認識されるようになっていく。

開発計画の浮上 2006年、鳥居松遺跡の中心地とみられる森田町133番地とその周囲において、開発事業の計画がなされた。直ちに試掘調査を実施し、遺構・遺物の有無と遺構の深さを確認した。試掘調査は2006年11月、開発対象地に18箇所の試掘坑を設定して実施した。試掘調査の結果、対象地の中央に伊場大溝が貫入し、その両側には弥生時代から平安時代にかけての集落が広がっていることが判明した（本章第3節）。

本発掘調査の実施 試掘調査の結果を受けて、開発に伴う遺跡の取り扱いについて事業計画者と浜松市教育委員会（浜松市生涯学習課文化財担当が補助執行）によって協議を重ねられた。その結果、具体的な開発計画に合わせて、集合住宅建設部分（A区）と宅地造成地のうち市道移管部分（B・C区）において本発掘調査を実施することになった。発掘調査は（財）浜松市文化振興財団が受託し、浜松市教育委員会（浜松市生涯学習課文化財担当が補助執行）が指導にあたった。現地調査は2008年の1月から6月にかけて実施した。また、2009年には宅地造成部分の一部に土壌入れ替えの必要が発生したため、2009年5月に、当該部分（D区）においても本発掘調査を実施した。

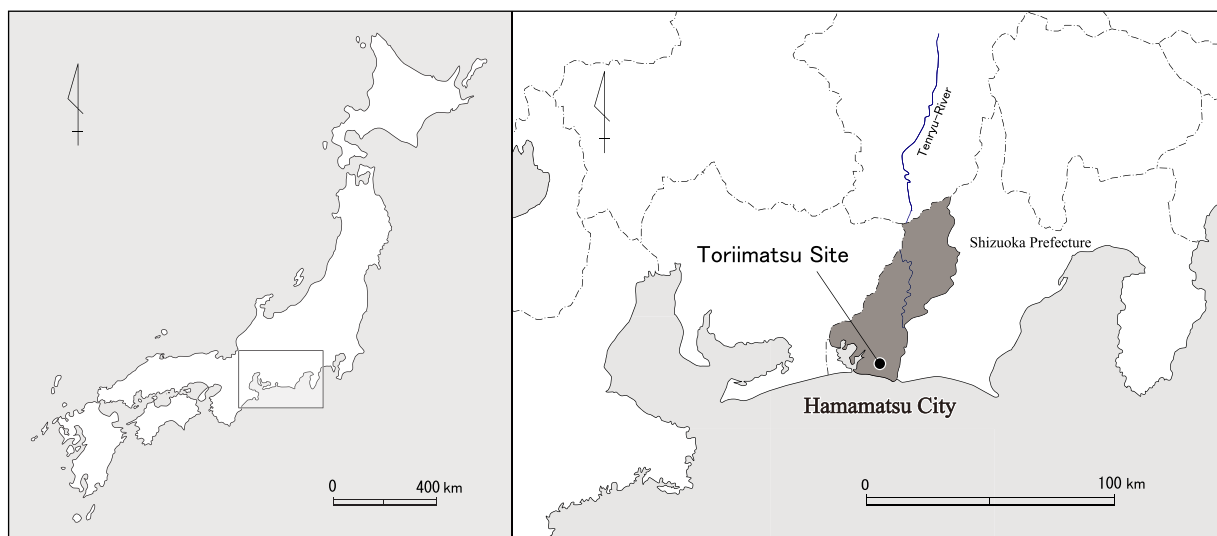


Fig.1 鳥居松遺跡の位置

2 遺跡をめぐる環境

(1) 立地環境

鳥居松遺跡は、浜松市南部地域に広がる平野部に立地する。この地には、東西方向に伸びる数条の砂堤列と砂堤列間低地が交錯し、数メートルの高低差がみられる。鳥居松遺跡はこの砂堤列が広がる地帯の東側にあたり、馬込川が形成した沖積地上に展開している。馬込川は天竜川の旧流路の一つとして現在までその名残を留める。弥生時代後期段階での自然地形は、低位面と高位面が複雑に入り組んでいたとみられるが、集落の繁栄振りをみると鳥居松遺跡とその周辺は居住域として充分利用できる環境にあったと考えられる。

1957年作成の地形図から、仮に標高1.5m以下の部分を低位面として想定すると、鳥居松遺跡や伊場遺跡は高位面と低位面の境界付近にあるという共通した立地の特徴が復元できる（Fig.2）。弥生時代から奈良時代にかけて比較的安定した微高地が広がり、その南には湿地が展開する環境であったとみられよう。弥生時代以降こうした湿地の多くを水田として利用していたことは想像に難くない。

近世の砂堤列間低地にみられる沼田池は馬込川を介して遠州灘に繋がる潟湖の痕跡と捉えられる。古代以前においては、潟湖の岸は鳥居松遺跡の近辺まで迫っていた可能性がある。鳥居松遺跡は潟湖を介して外洋からの物資の流通においても利便性が高い位置にあるといえよう。

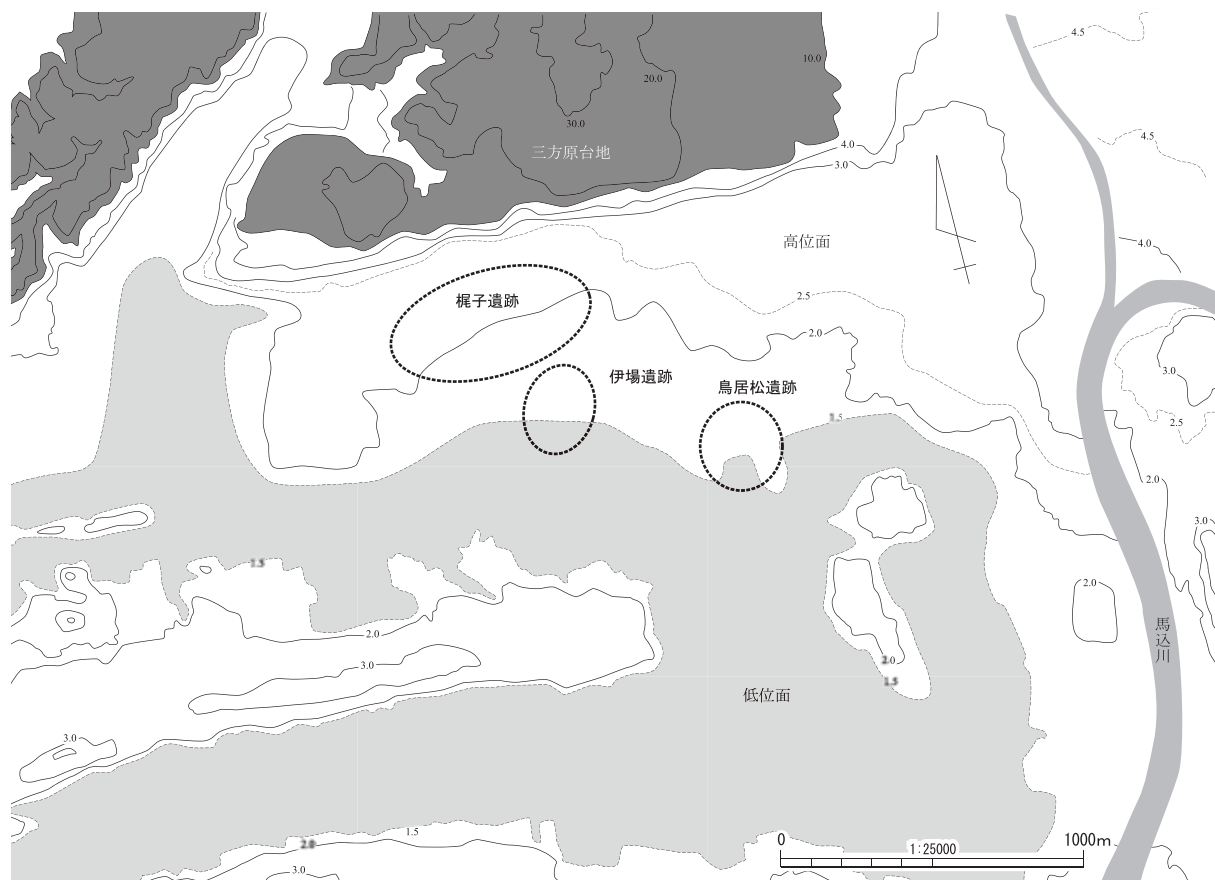


Fig.2 鳥居松遺跡周辺の微地形

（２）伊場遺跡群をめぐる歴史的環境

縄文時代 浜松南部平野における縄文時代の様相は、度重なる発掘調査によって明確になりつつある。第1砂堤列上の梶子北・中村遺跡と第3砂堤列上の村西遺跡からは前期末から中期初頭の縄文土器が、第1砂堤列と第2砂堤列の間の高位面に位置する梶子遺跡からは中期初頭（9次調査A区）および後期（10次調査B区）の縄文土器が出土している。さらに梶子北・中村遺跡では後期から晩期の縄文土器が出土しており、およそその消長の傾向を知ることができる。

注目できる遺構として、第1砂堤列の南側斜面に展開する、前期末から中期初頭の礫群があげられる（梶子北・中村遺跡）。礫群に伴って石器類も豊富に出土しており、湿地の岸で縄文人たちが盛んに活動していたことがうかがえるだろう。なお、これらの礫群の検出高は、海拔0m付近である。一般的に縄文時代前期は海進期とされていることから、当地は数千年の間に地盤が数メートル沈降していた可能性がある。

弥生時代 弥生時代前期を中心とするとみられる条痕文土器が、僅かであるが梶子北遺跡や中村遺跡で出土しており、縄文時代から続く人びとの活動の痕跡は途絶えない。ただし、この時期の生業の主体はなお不明瞭であり、当地における本格的な水稻農耕の出現は弥生時代中期中葉（瓜郷様式期）のこととみられる。

中期中葉には、伊場遺跡群内に中核的な集落が築かれる。梶子・梶子北・中村の各遺跡では、木製農具や石製工具類が出土し、安定的な生活が始まっていたことが判明する。この時期に進行した海水面の下降とともに、砂堤列間の湿地が水田経営にとって絶好の自然環境となったことも、当地の水稻農耕の開始と関係していよう。同時期の方形周溝墓も梶子北・中村遺跡で広範囲に検出されている。伊場遺跡群に出現した本格的な水稻農耕集落は、続く中期後葉まで連続性が高い。

弥生時代後期前半（山中式期）は、伊場遺跡群の弥生時代集落が最大規模になる段階である。伊場遺跡には三重の環濠をもつ集落が築かれ、その北側の梶子遺跡では東西数百メートルにわたって大規模な集落が営まれている。また、伊場遺跡や梶子遺跡の集落形成からやや遅れて、鳥居松遺跡や暇東遺跡に集落が出現する。出現時期の差異をみると、鳥居松遺跡集落の出現当初は、伊場・梶子遺跡からの分村的な性格をもっていたとみられよう。

弥生時代後期後半（欠山式期）になると、伊場・梶子遺跡の集落は急速に衰退する。こうした状況と入れ替わるように、この時期、鳥居松遺跡では最も集落の繁栄をみた。伊場・梶子遺跡の居住機能のすべてが鳥居松遺跡に



Fig.3 中村遺跡出土弥生土器

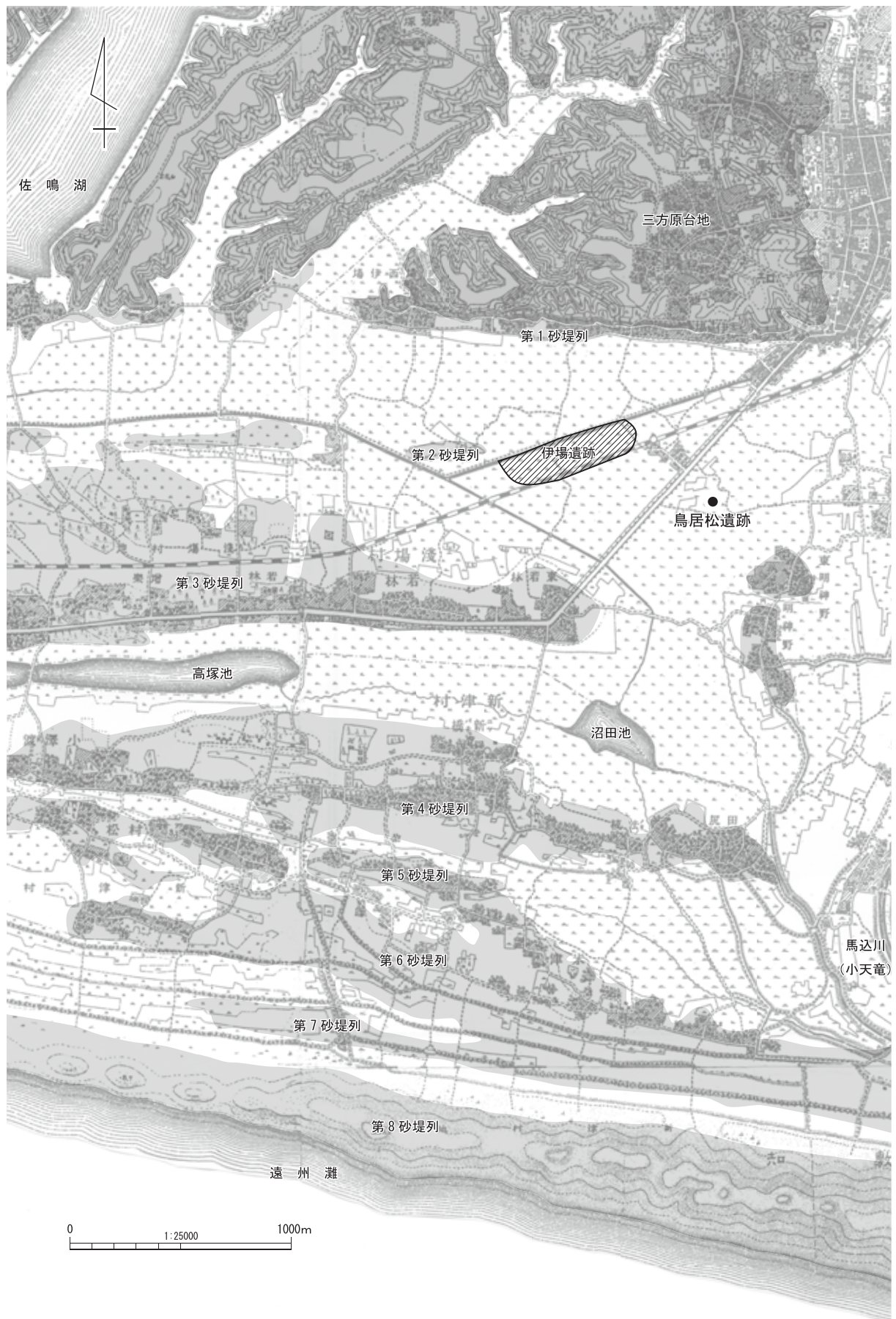


Fig.4 鳥居松遺跡周辺の自然地形



Fig.5 鳥居松遺跡周辺の遺跡分布図

移ったとはいえないものの、豊富な外来系土器や家形土器などの特殊な遺物の存在をみると、鳥居松遺跡では、物資の流通や祭祀の中心的な性格を担っていたことがうかがえる。

古墳時代 隆盛を極めた伊場遺跡群の集落は、古墳時代に入ると急速に縮小する。古墳時代前期の集落は、梶子北遺跡において確認されているが、弥生時代後期に比べるとその差は歴然である。かつての居住域が湿地化し、一部は水田として利用されているとみられる。

伊場遺跡群の広域で再び集落が形成されるのは、古墳時代中期に入ってからである。古墳時代中期の遺構は、伊場遺跡、梶子遺跡（8次調査A区）、城山遺跡（7次調査）、三永遺跡などで確認されている。なお、この時期に、伊場大溝が形成された可能性が高い。

古墳時代中期に始まる集落は、中心地を移動しながらも古墳時代後期、飛鳥時代へと連綿と存続している。とくに飛鳥時代の集落は、後の敷智郡家の母体となる初期官衙との関連が留意され、その具体像の把握が急務である。飛鳥時代の集落としては城山遺跡（5次調査）で確認された掘立柱建物群が注目できる。

奈良・平安時代 飛鳥時代の後半から、伊場遺跡群には遠江国敷智郡家（評家）が置かれ、以後、平安時代中ごろに至るまで地方行政の中心であったことが、木簡をはじめとする豊富な出土遺物から明らかになっている。敷智郡家の政庁の位置については、なお不明確である。特徴的な出土遺物が知られる城山遺跡が奈良時代の中心部にあたると推定されているが、それを決定付ける遺構群は未検出である。つづく平安時代にかんしては、梶子北遺跡において、政庁もしくは館と考えられる計画的配置の大型掘立柱建物群が確認された。平安時代に至ると、郡家の中心地が移動していると捉えられよう。

伊場遺跡群からは100点をこえる古代の木簡が出土しているが、そのほとんどが、遺跡群の中心



Fig.6 伊場遺跡群出土郡家関連遺物

を流れる伊場大溝からの出土である。伊場大溝は幅20m、深さ2.5mをこえる自然河川で、古墳時代中期後半に形成されたものと考えられる。その流路は、城山遺跡（6次調査地点）から、梶子遺跡（9次調査地点）、伊場遺跡、九反田遺跡、鳥居松遺跡（2次、4次、5次調査地点）と伊場遺跡群の東西を大きく貫いている。

伊場遺跡群に展開した郡家関連の施設は10世紀末を境界に急速に衰退している。国衙領の衰退とともに、荘園経営が本格化する。伊場遺跡群は皇室領の浜松荘域に含まれた。浜松荘の荘域は三方原台地の南側に長く、東は馬込川左岸の敷智郡域境界から、西は浜松市西区雄踏町付近に至ると推定されている。

(3) 鳥居松遺跡をめぐる発掘調査

発見の経緯 鳥居松遺跡は1995年、開発行為に伴う試掘調査によって新たに確認された遺跡である。発見の経緯になった地点は、北側に位置する畷東遺跡（旧名称、南消防署内遺跡）と距離があることからそれぞれ別の遺跡と認識され、新たな遺跡名称が付けられることになった。

1次調査 1996年に実施した1次調査では、弥生時代後期の環濠を伴う集落と水田が確認された。弥生時代後期の遺構は、層位的な重なりが顕著であり、複数段階に分離した発掘調査が行われた。確認された環濠は断面V字形で、高位面に展開する集落の南側を区画する部分と捉えられた。埋没の時期は山中Ⅲ式であり、掘削の時期は山中Ⅱ式期まで遡る可能性がある。鳥居松遺跡における集落形成開始期の遺構と捉えられる。また、故意に口縁などを分割した壺を埋納した土坑群が検出された。低地に掘削される土坑は、伊場遺跡群において比較的多く検出されている。鳥居松遺跡1次調査では儀礼の痕跡がみられ、墓である可能性が指摘された。この調査において、集落が欠山Ⅲ式期まで降ることが明確になった。従来の伊場遺跡群の調査では、欠山式期の集落の様相は不明瞭であったが、鳥居松遺跡にその中心が移動したことが推定できるようになった。欠山Ⅲ式期の土器集積SX03・06は、浜松南部地域で始めて確認された欠山式期の一括資料として、土器編年上の基準資料にあげられるようになった。

2次調査 2000年に実施した2次調査では、弥生時代の集落域が南方に広がることが確認された。また、奈良時代に中心がある埋没河川「伊場大溝」の一部が確認された。伊場大溝内には貝塚が検出され、墨書土器も複数出土するなど、敷智郡家の一部が鳥居松遺跡まで広がっている可能性が考えられるようになった。

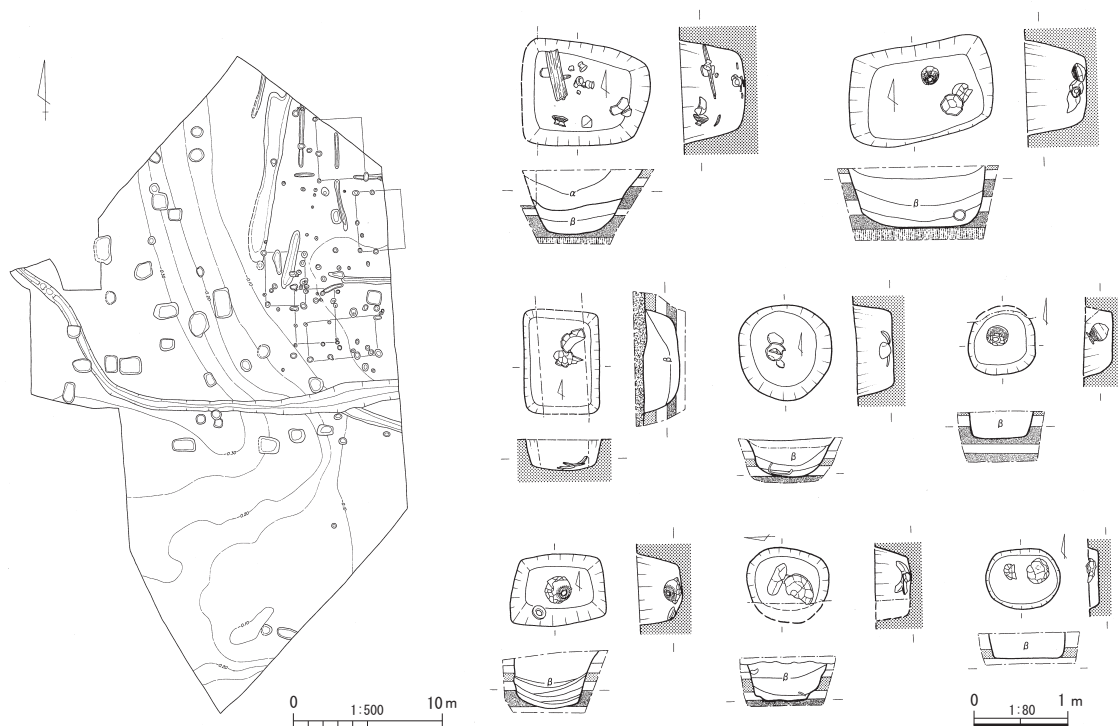


Fig.7 鳥居松遺跡1次調査の検出遺構（弥生時代後期前半）

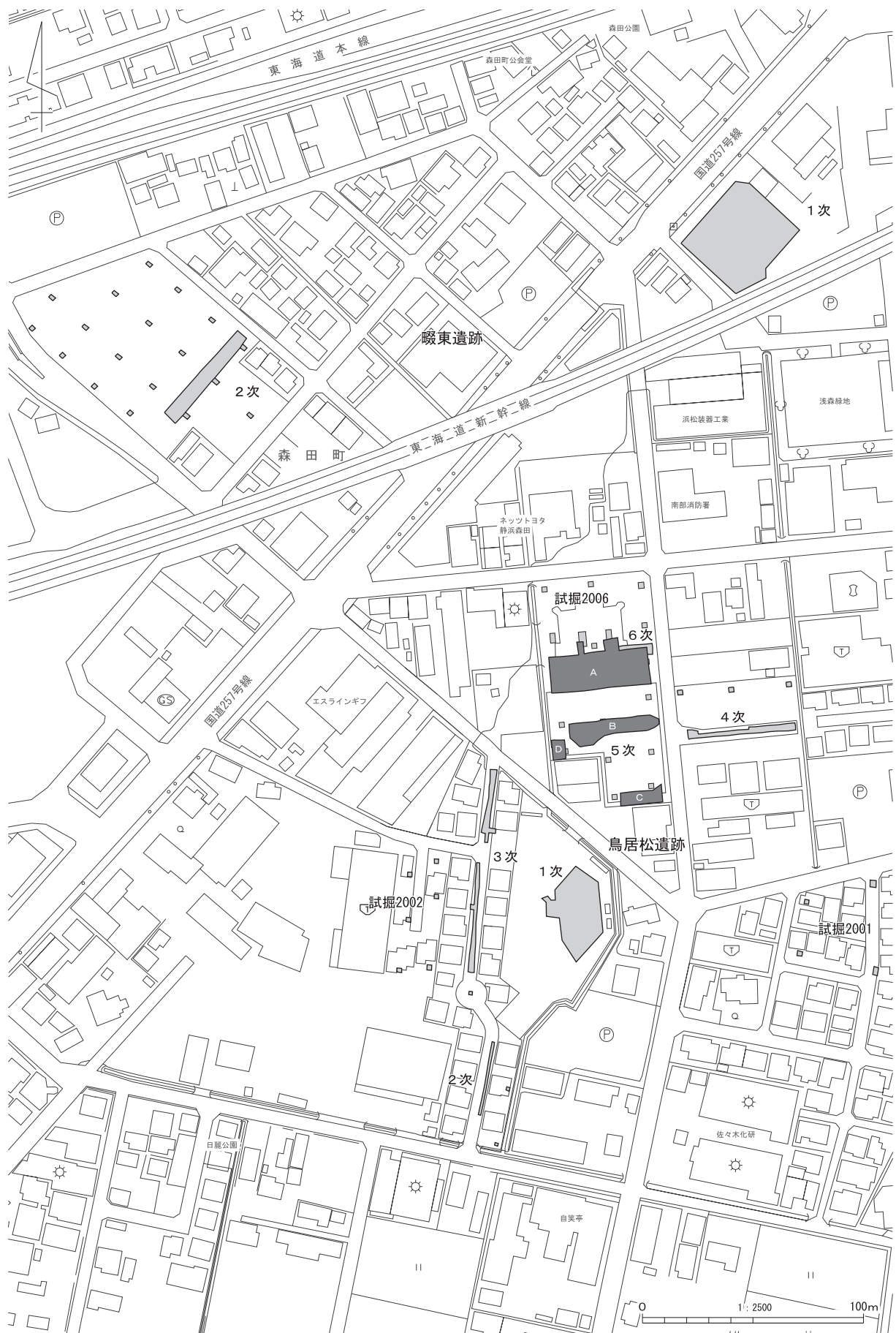


Fig.8 鳥居松遺跡調査区配置図

Tab.1 鳥居松遺跡における発掘調査一覧

次数	調査期間	調査面積	主な時代	特記事項	文 献
1次	1995. 12～1996. 2	700㎡	弥生・平安	環濠の確認	(財)浜松市文化協会 1997 『鳥居松遺跡』
2次	2000. 4	35㎡	弥生・奈良	伊場大溝の確認	(財)浜松市文化協会 2000 『鳥居松遺跡2』
3次	2002. 1	172㎡	弥生・奈良	家形土器の出土	(財)浜松市文化協会 2002 『鳥居松遺跡-3次調査-』
4次	2003. 6	122㎡	弥生・奈良	伊場大溝の確認	(財)浜松市文化協会 2003 『鳥居松遺跡-4次調査-』
5次	2008. 1～2008. 6	1200㎡	弥生・古墳・奈良	伊場大溝の確認	(財)浜松市文化振興財団 2009 『鳥居松遺跡5次』(本書)
6次	2008. 12	41㎡	弥生	—	(財)浜松市文化振興財団 2009 『鳥居松遺跡6次』

3次調査 2002年に実施した3次調査では、弥生時代の集落の西側が確認された。水田の土層からは、畦畔から転落した状態で、完形の家形土器が出土し、注目を集めた (Fig.9)。

家形土器は脚部と口縁部をもち、脚付の壺と同様の機能を有していたとみられる。時期は、脚部や口縁の特徴および共伴遺物から、山中Ⅲ式期とみられる。建物部分は切妻造りであり、独立棟持柱を表現している可能性が考えられる。倉庫や神殿などを模したものと捉えられ、水稻農耕にかかわる重要な祭祀に用いられた特殊な儀礼具と評価できる。

このほか、3次調査においては、ヒノキ材を井桁組した枠をもつ奈良時代の井戸が検出された。当地の同時代の井戸としては、優位な構造をもち、郡家関連の遺構と捉えられた。

4次調査 2003年に実施した4次調査では、再び伊場大溝が確認された。2次調査で確認された位置との関係から、鳥居松遺跡内における伊場大溝の流路はほぼ特定された。伊場大溝からは、「稲万呂」と書かれた墨書土器をはじめ、木製形代といった伊場遺跡と共通性が高い遺物が出土し、鳥居松遺跡が伊場遺跡と一連の遺跡であることが明確になった。「稲万呂」墨書土器における独特の記号で字が囲まれる特徴も、伊場遺跡出土品と共通している。

また、4次調査によって、北側にも大きく弥生時代の集落が展開していることも明らかになった。北側に隣接する暖東遺跡と集落域が繋がることは、明白であろう。

伊場遺跡群としての一体性 弥生時代後期の拠点集落と、奈良時代の郡家（敷智郡家）の存在を想定させる鳥居松遺跡の遺構群のあり方は、西方700mほどに位置する伊場遺跡の内容と大きく重なる。遺跡の名称は異なるものの、鳥居松遺跡と伊場遺跡は一連の遺跡として認識してよいことが、これまでの調査の進展によって明確になっている。

近年、伊場遺跡とその周辺に広がる遺跡群をひとまとめにして「伊場遺跡群」として総称し、互いに有機的に関連づけて捉える視点が強く意識されている。今回の5次調査によって、鳥居松遺跡と伊場遺跡の一体性が、さらに高まったといえるだろう。



Fig.9 鳥居松遺跡出土 家形土器

3 試掘調査

(1) 試掘調査の概要

調査経緯 鳥居松遺跡 5 次調査地点における試掘調査は、2006 年 11 月 27 日から 29 日にかけて実施した。調査対象地に 2.0m 四方の試掘坑を 18 箇所設定した。試掘調査坑は北西の隅から順に試掘坑 1、2、3 といった具合に命名した。なお、試掘坑 15 については、埋没遺構の状況確認をする必要があり、北側に別の試掘坑（試掘坑 15N）を設定している。試掘調査の総面積は 72m² である。

また、試掘調査に先立ち、2006 年 11 月 22 日に、既存建物の解体に伴う基礎杭撤去工事の工事立会いを 2 箇所で行った。この工事立会い調査部分を基礎杭撤去坑 1、2 とし、出土遺物を合わせて報告する。

試掘調査は、バックホーによる掘削の後、人力で断面の精査や平面精査を行い、遺構や遺物を検出した。調査終了後は埋め戻しを行い、旧状に復している。

検出遺構 試掘調査によって、調査対象地のほぼ中央部を東西に横断する幅約 25m の自然河川（伊場大溝）を確認した。伊場大溝を確認した調査区は、試掘坑 2、3、7、8、14、15N、および基礎杭撤去坑 1 である。伊場大溝の年代は、出土遺物から判断すると、古墳時代後期から奈良時代とみられる。基礎杭撤去坑 1 の観察によると、伊場大溝中の北縁には小貝塚が形成されていることが明らかになった。この貝塚は本発掘調査においても追認でき、SS04 と命名した。

伊場大溝を挟んだ南北両側には、弥生時代の溝、土坑、小穴などの遺構、および土器が確認できた。このことから、用地全域に弥生時代の集落が広がっていると判断できる。弥生時代の包含層は南側では標高 0.6m ～ 0.3m、北側では標高 1.0m ～ 0.2m において確認できた。

古墳時代後期から奈良時代の遺構は、南西部の試掘坑 5 でカマドを伴う竪穴建物が確認できた。カマドには土製支脚（42）が伴っていた。南東部の試掘坑 17 では、柱穴とみられる小穴が複数検出できたことから、建物の存在が確実視できる。また、用地北側においても、試掘坑 1、6 で完形の壺（8）や坏蓋（43）が出土していることから、土坑や建物跡などの存在が推定できる。試掘坑 12 では、溝状遺構も検出できた。当該期の包含層は、南側で標高 1.0m ～ 0.6m、北端では標高 1.6m ～ 1.0m において確認できた。

(2) 出土遺物

弥生時代 弥生時代後期の土器が、大溝を除く全域で確認できた。帰属時期は山中Ⅲ式から欠山Ⅲ式に限られる。本発掘調査で確認できた時期と重なるといえるだろう。

とくに試掘坑 2、5、6、11、12、17 では弥生土器が大量に出土している。試掘坑 12 で検出した溝は出土遺物量が多く、時期的にもまとまりがある。試掘坑 12 で検出した溝は、大規模な遺構とみられる。また、試掘坑 17 は本調査において SD201 を検出した位置に相当する。出土遺物の層位は必ずしも明確でないが、試掘坑 17 から出土した 114 ～ 127 は、SD201 下層出土遺物に含めてよいものが多いと判断できる。

Tab.2 鳥居松遺跡 5 次調査地点 試掘調査成果一覧

試掘坑	弥生時代		7～8世紀		遺 跡 有無・評価	詳 細	出土遺物	
	遺構	遺物	遺構	遺物			Fig.	遺物番号
試掘坑1	△	◎	△	○	◎	5世紀末長頸壺完形品、土坑内	12	1～8
試掘坑2	△	◎	◎	○	◎	大溝北肩部、弥生土器多量	12	9～21
試掘坑3	×	×	◎	○	◎	大溝内	13	22～28
試掘坑4	○	○	△	○	○	弥生小穴	13	29～36
試掘坑5	○	◎	◎	○	◎	6・7世紀竪穴建物（カマド付）、弥生溝	13	37～42
試掘坑6	○	◎	○	○	◎	7世紀坏蓋完形、土坑内、弥生溝	14	43～46
試掘坑7	×	×	◎	○	◎	大溝内、木製品	14	47～50
試掘坑8	×	×	◎	◎	◎	大溝内、木製品	14	51～57
試掘坑9	△	○	×	△	○	弥生土器壺蓋	15	58～61
試掘坑10	△	△	△	△	○	—	—	—
試掘坑11	○	◎	△	△	◎	弥生土器多量、遺構内	15	62～83
試掘坑12	△	◎	○	○	◎	弥生土器多量、遺構内、古代溝	16	84～96
試掘坑13	△	○	△	△	○	弥生遺構	17	97～100
試掘坑14	○	○	◎	○	◎	大溝北肩部、弥生遺構	17	101～110
試掘坑15N	×	×	◎	○	◎	大溝内（最深部）	—	—
試掘坑15	△	○	○	○	○	大溝南肩部、枝溝か	17	111～113
試掘坑16	△	○	△	△	○	—	—	—
試掘坑17	△	◎	◎	○	◎	弥生土器多量、古代柱穴	18	114～127
基礎杭撤去坑1	×	○	◎	◎	◎	大溝北肩部、貝塚、階段状遺構	19	128～136
基礎杭撤去坑2	○	◎	△	△	◎	弥生土器多量、弥生溝	19	137～155

凡 例	遺構	遺物	有無・評価
	◎ 存在（重要・多）	◎ 多数	◎ 多量土器・遺構、重要な遺構
	○ 存在	○ 存在	○ 土器、遺構の存在
	△ 推定	△ 少数	△ 僅かな土器、遺構不明確
	× 確認できず	× 確認できず	× 遺物・遺構無し

特筆できる遺物について若干触れておきたい。29は肩部に円形のスカシ穴をもつ壺である。上半部の形状が明確でないが、円形丸窓と似た形態になると推定できる。59は紐通しの突起をもつ無頸壺の蓋である。同様の特徴をもつ個体として、SD201下層出土のFig.76-443がある。81は、受口状口縁の甕である。口縁外面には弱い2条の沈線がみられ、口縁上端部も明確な端面をもつ。近江系の甕の可能性がある。91は環状の把手がつく壺蓋である。壺蓋の形態としては類例が少ない形態である。

古墳時代から奈良時代 古墳時代から奈良時代の遺物は、伊場大溝からの出土品と、伊場大溝を挟んだ南北域からの出土品に分けられる。伊場大溝からの出土遺物は、20～28、47～57、111～113である。伊場大溝からは、須恵器や土師器のほか、田下駄（55・56）、楕円形曲物底板（57）といった木製品が出土した。伊場大溝の北側から出土した遺物は、8・43～46、南側から出土した遺物は、42・82・83である。土製支脚（42）は、試掘坑5で確認した竪穴建物のカマドに伴うものである。

（3）小 結

鳥居松遺跡5次調査地点では、試掘坑のすべてにおいて、遺構、遺物が確認できたことから、開発対象地全域が弥生時代後期から奈良時代の遺跡内にあることが判明した。検出遺構のなかでは、用地中央部で確認できた自然河川（伊場大溝）の存在が特筆できる。また、伊場大溝の南北両側には弥生時代後期から奈良時代の集落が存在することが明らかになった。出土遺物は多種多様でその出土数は極めて多い。このことは本調査の結果によっても追認された。

弥生時代の集落は開発予定地の北側にも広がっていることが確実である。鳥居松遺跡と北側に隣接する畷東遺跡は一連の遺跡である可能性が高いといえよう。

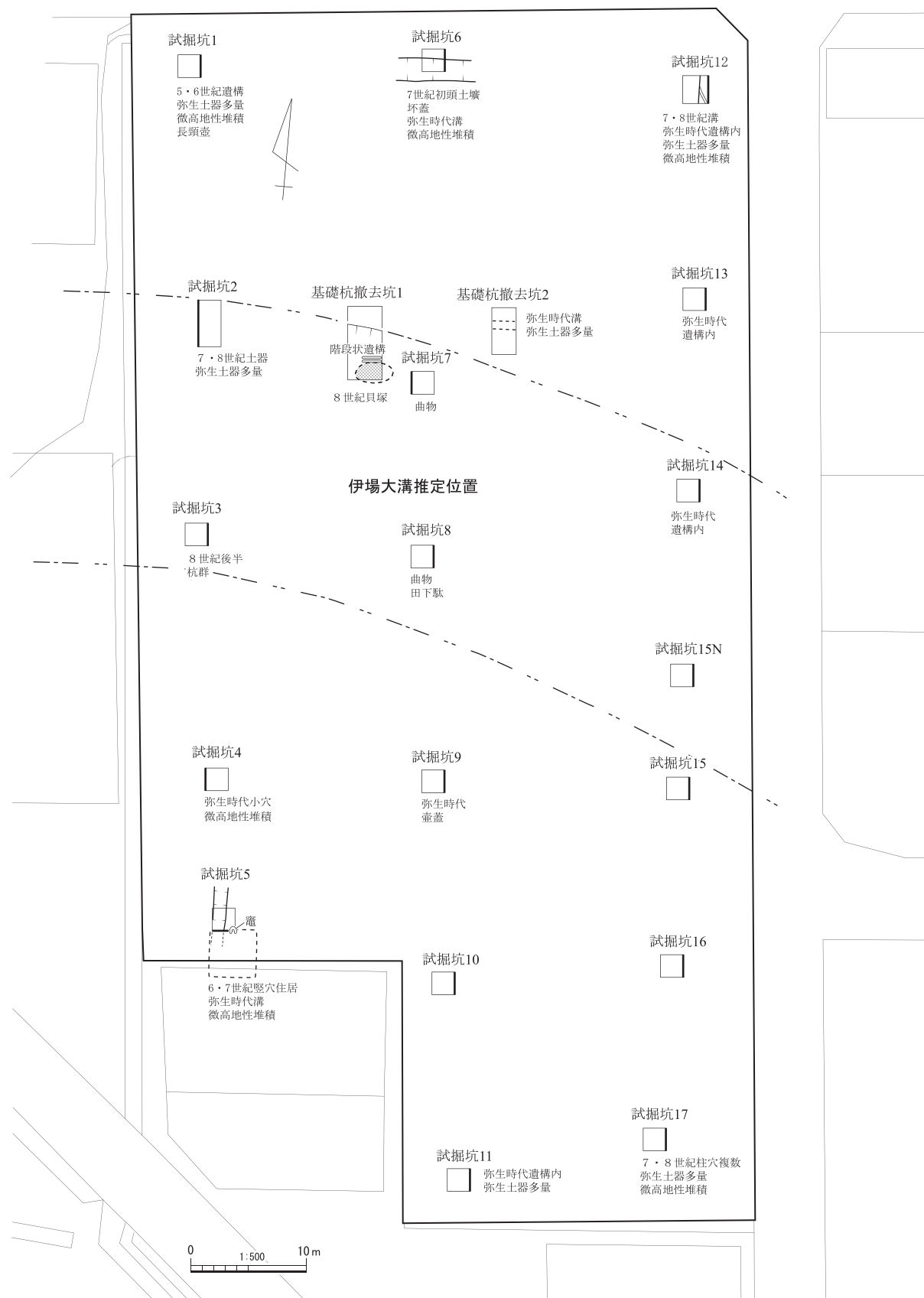


Fig.10 試掘坑配置図

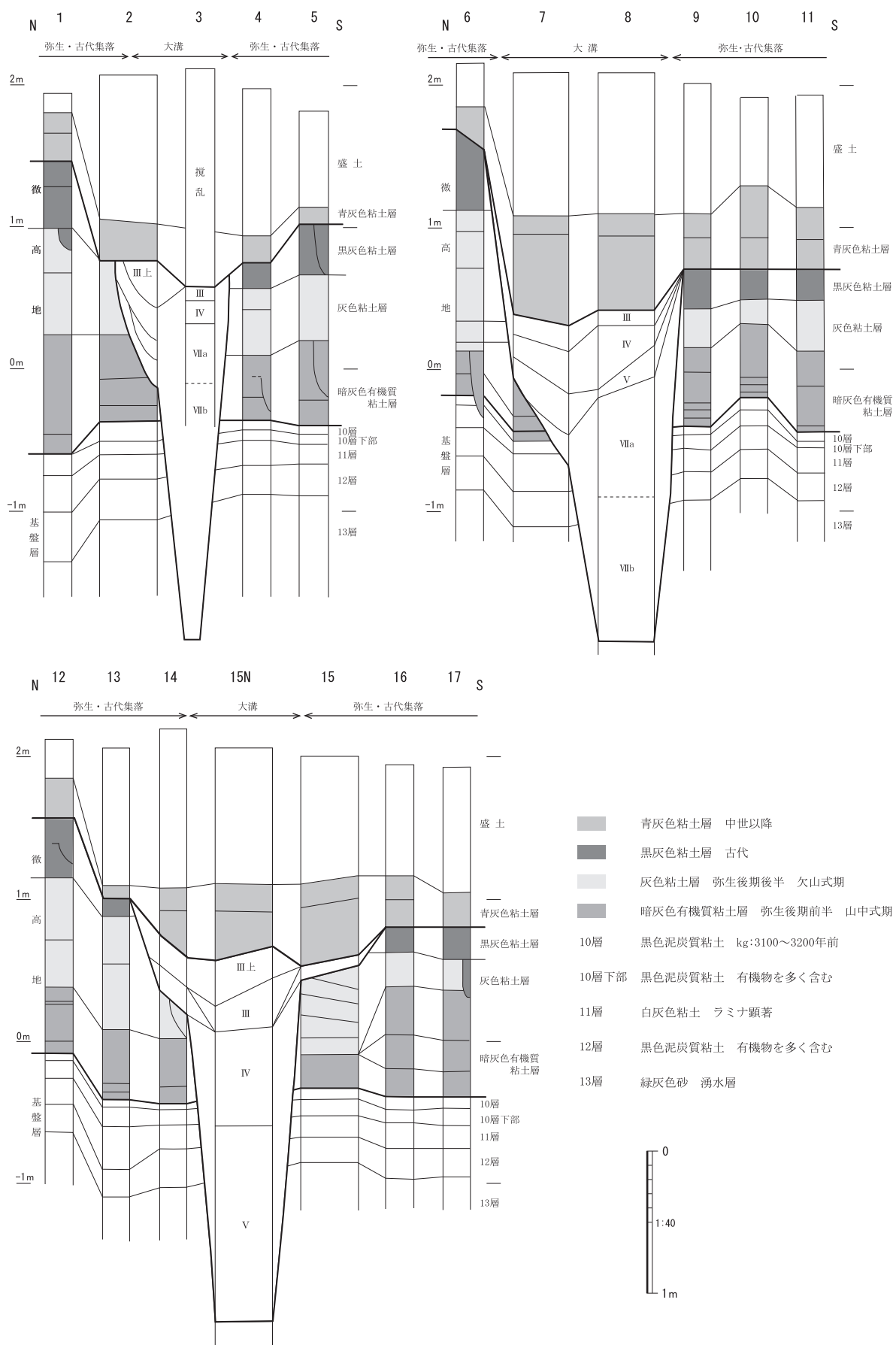


Fig.11 試掘坑土層柱状図

3 試掘調査

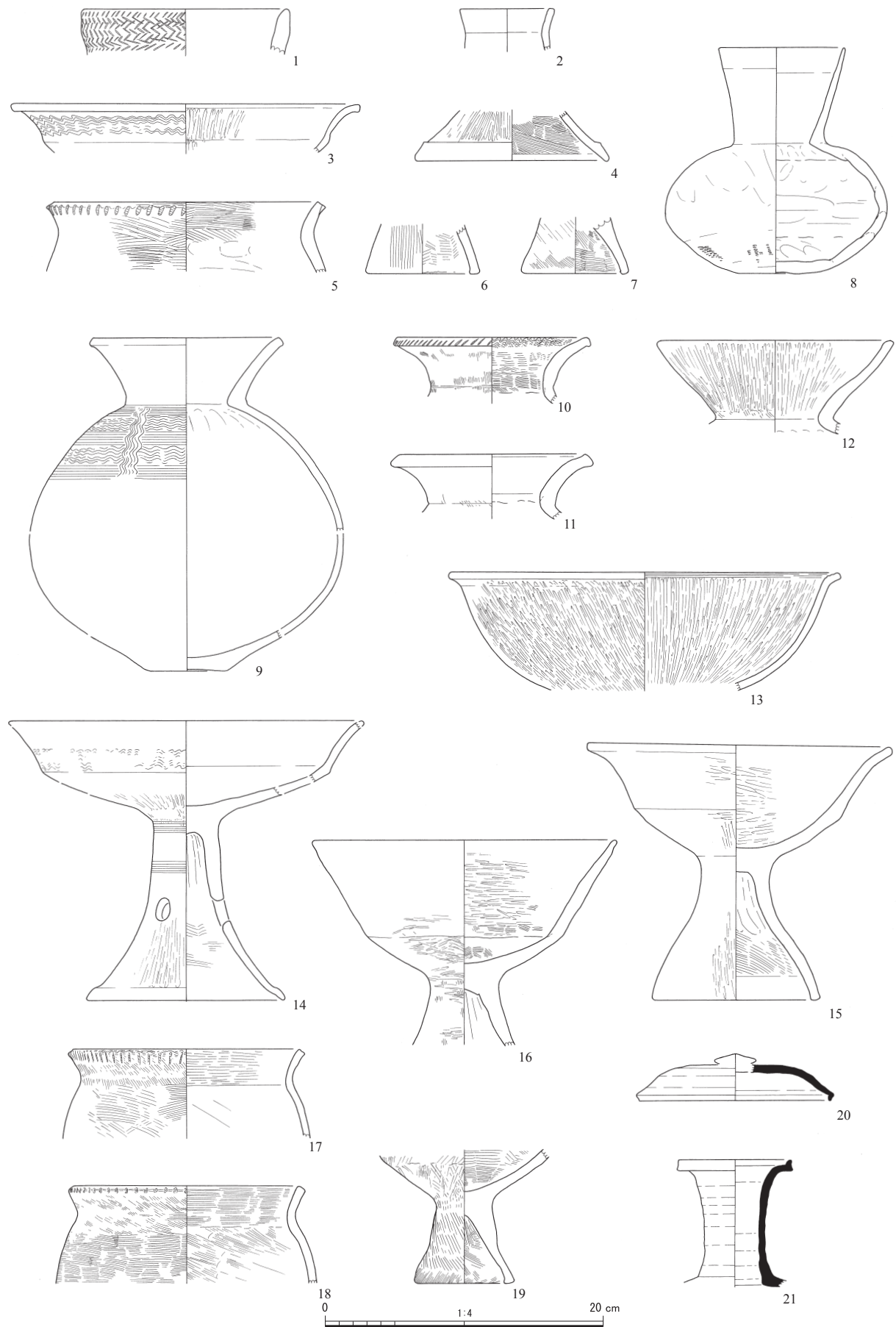


Fig.12 試掘坑 1・2 出土遺物

1～8：試掘坑 1 9～21：試掘坑 2



Fig.13 試掘坑3・4・5出土遺物
22～28：試掘坑3 29～36：試掘坑4 37～42：試掘坑5

3 試掘調査

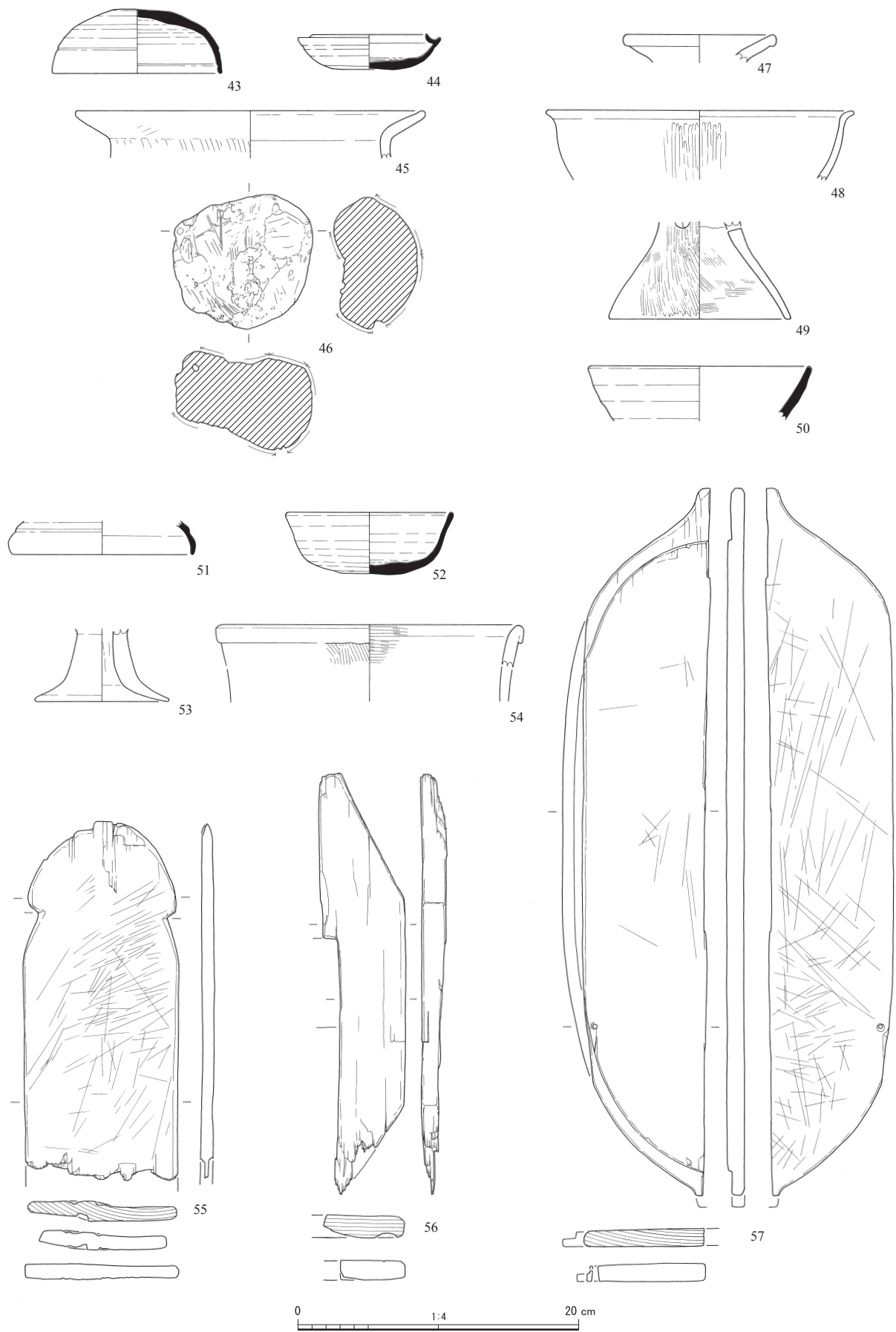


Fig.14 試掘坑 6・7・8 出土遺物

43～46：試掘坑 6 47～50：試掘坑 7 51～57：試掘坑 8

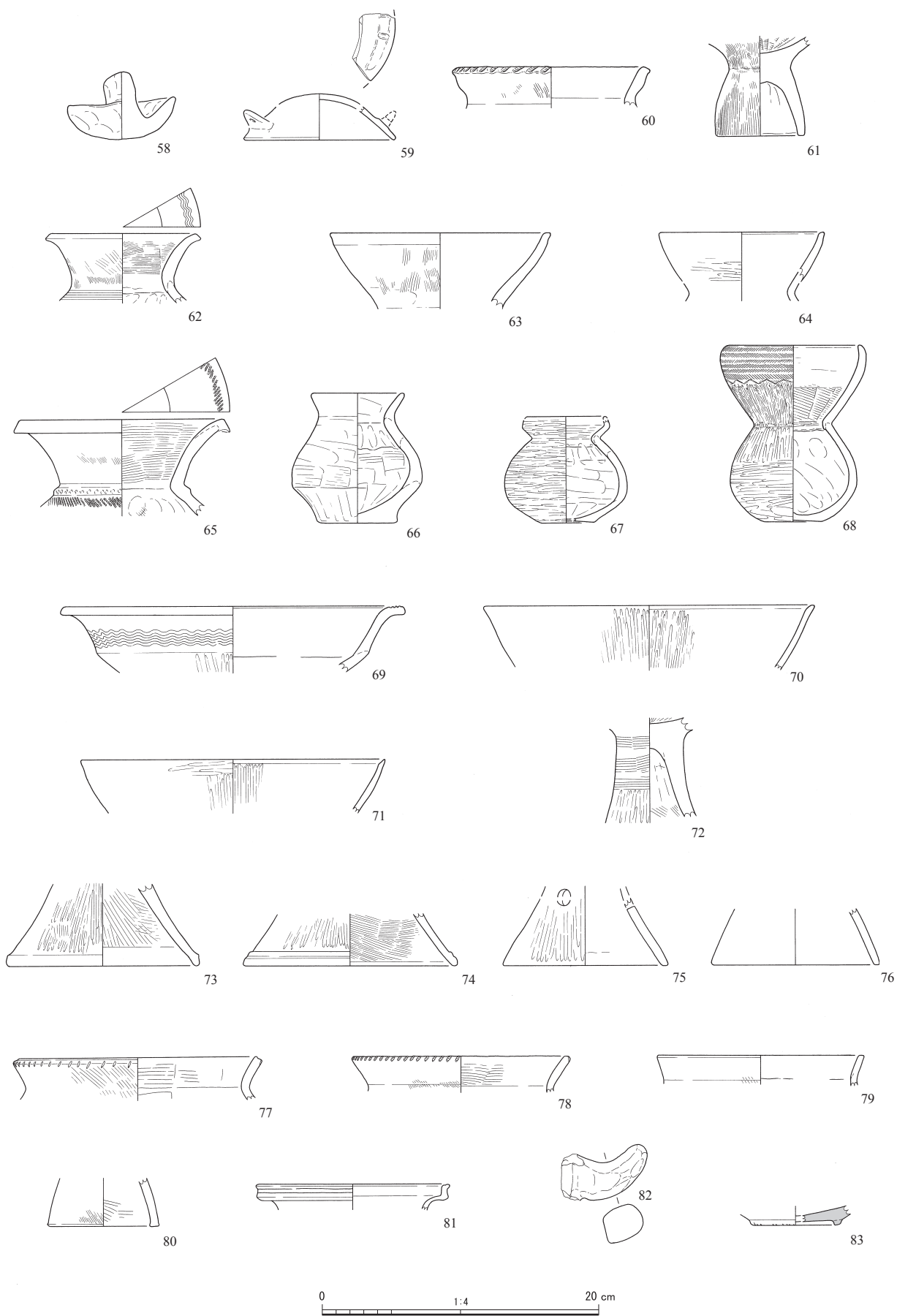


Fig.15 試掘坑 9・11 出土遺物

58～61：試掘坑 9 62～83：試掘坑 11

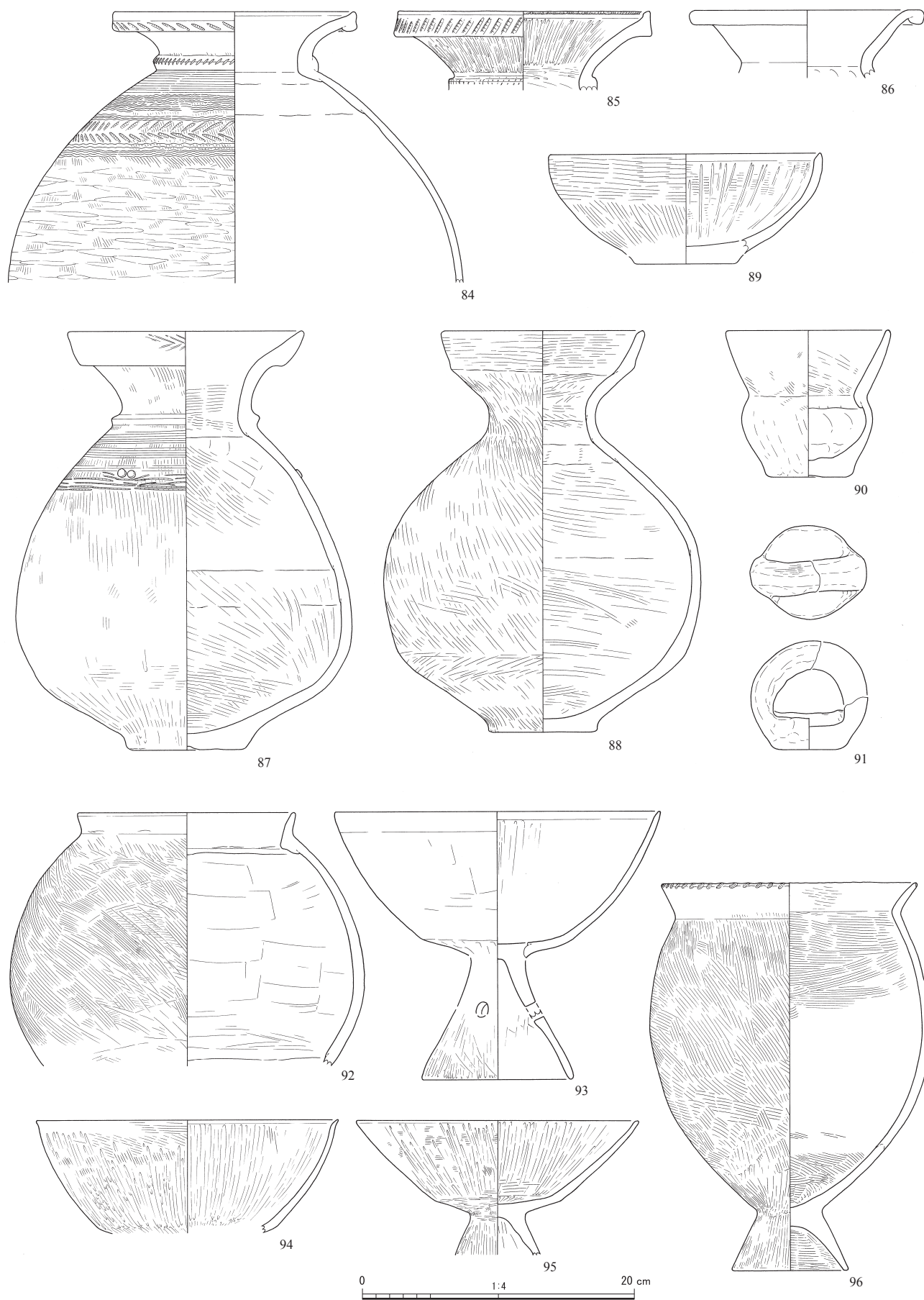


Fig.16 試掘坑 12 出土遺物

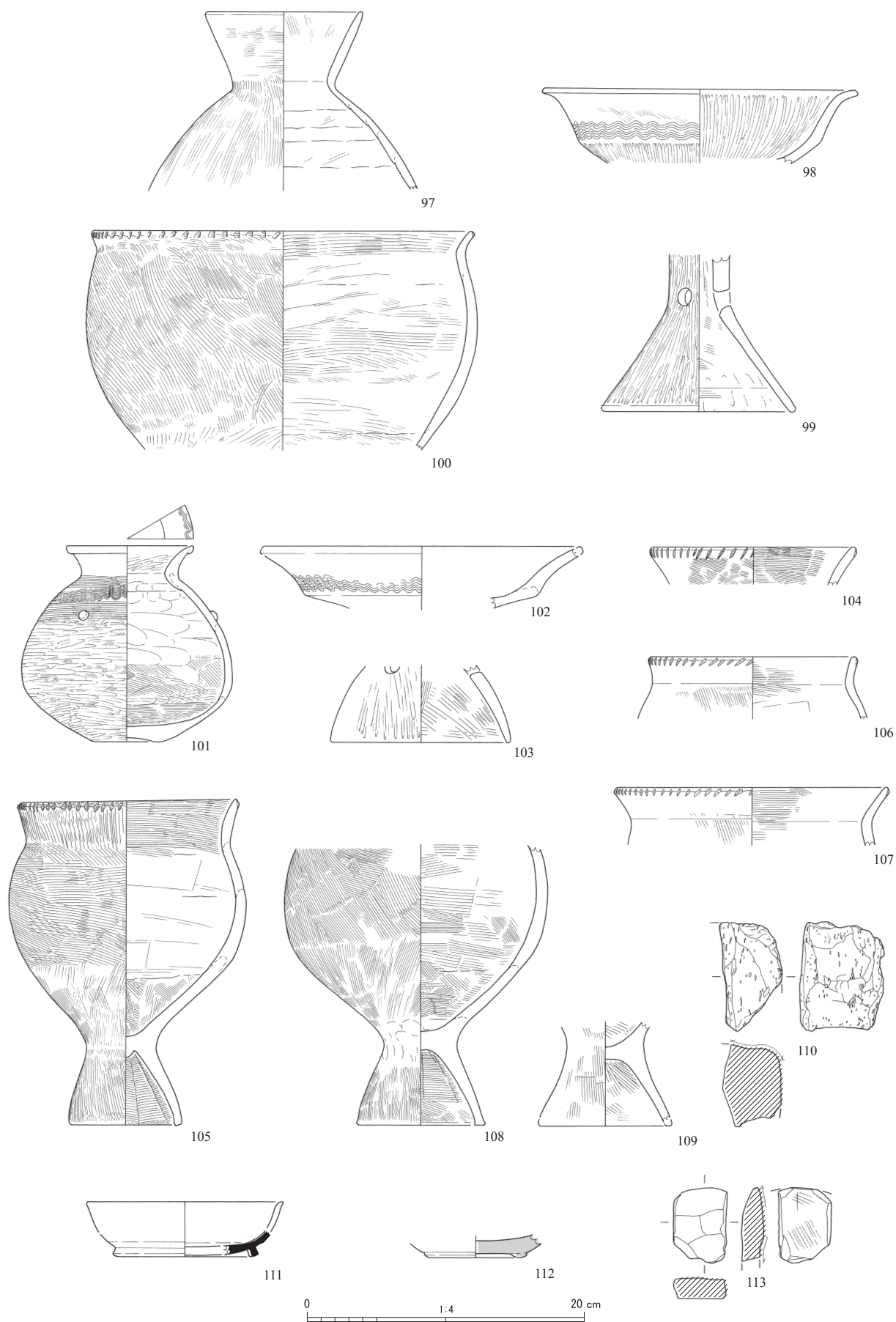


Fig.17 試掘坑 13・14・15 出土遺物
97 ~ 100 : 試掘坑 13 101 ~ 110 : 試掘坑 14 111 ~ 113 : 試掘坑 15

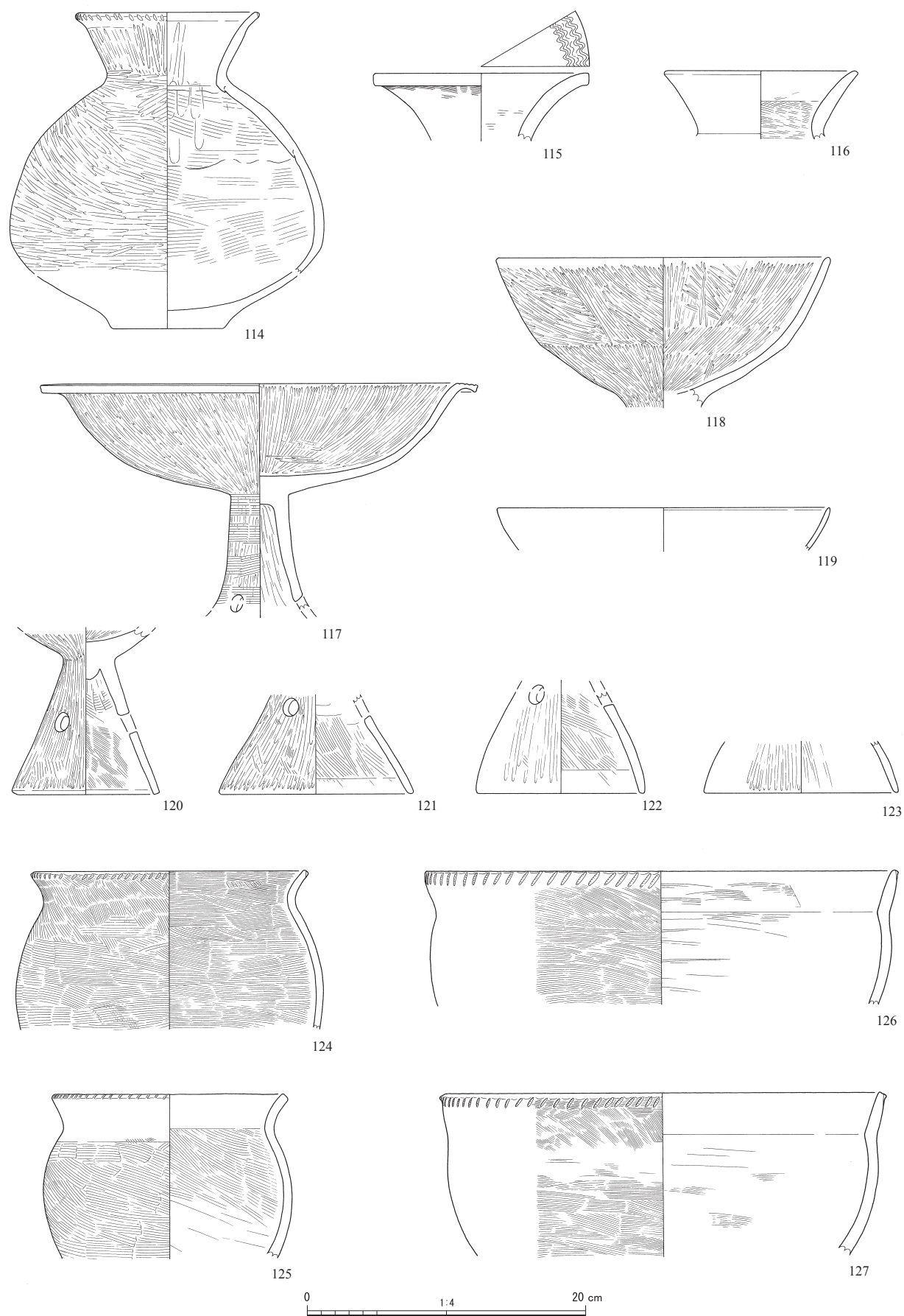


Fig.18 試掘坑 17 出土遺物

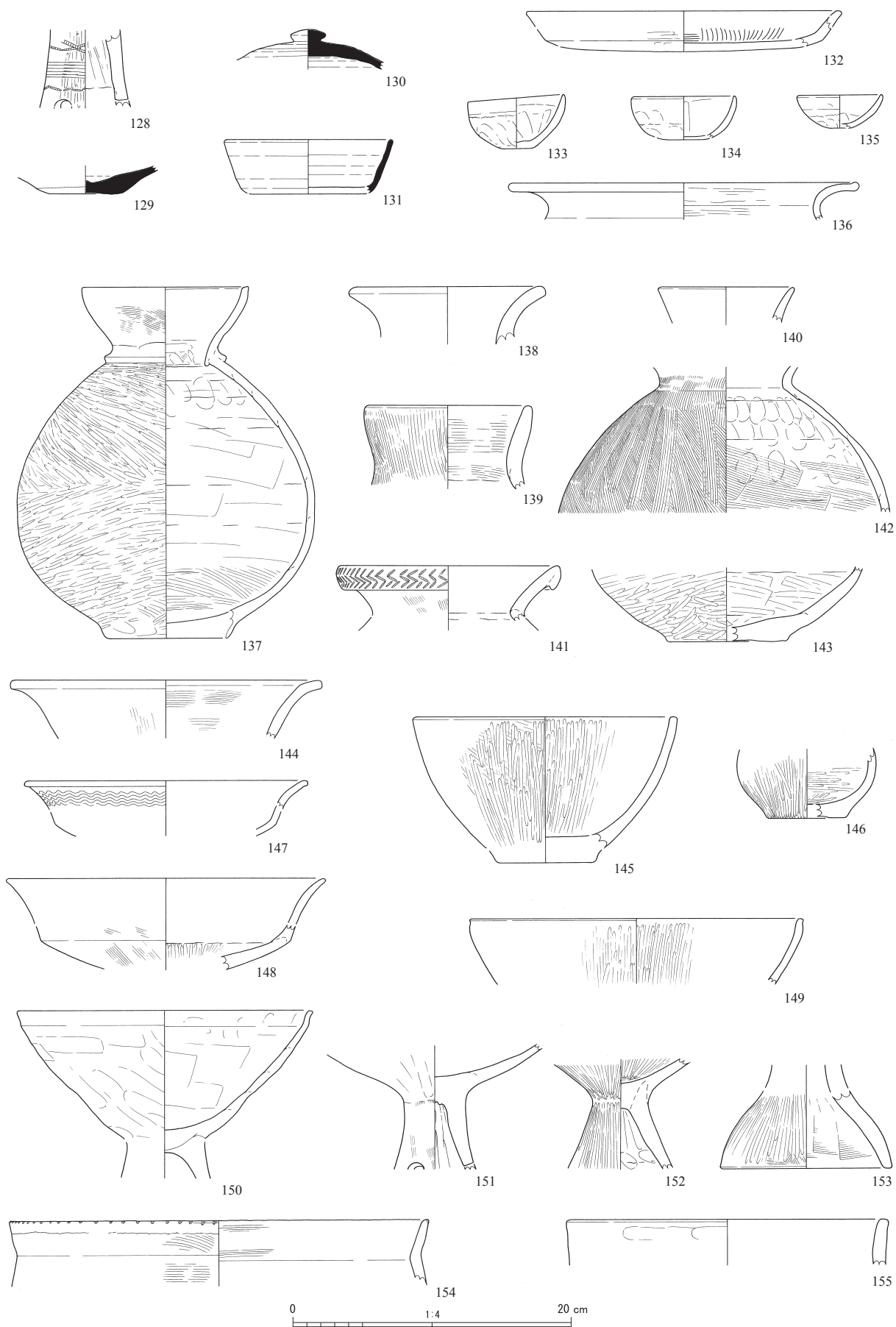


Fig.19 基礎杭撤去坑出土遺物

128 ~ 136 : 撤去坑 1 137 ~ 155 : 撤去坑 2

4 本発掘調査の方法と経過

(1) 調査方法

調査区とグリッドの設定 発掘調査を開始するにあたり、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に合わせた10m間隔のグリッドを設定した。原点は、調査地区の北西隅（ $X = -144670$ 、 $Y = -71510$ ）に定め、東西方向にアルファベットを、南北方向に数字を組み合わせた（Fig.20）。各グリッドの名称は、北西の基準点に従って命名した。

発掘調査区は、開発計画と開発予定地の形状に合わせ、4箇所に分かれている。調査区は便宜的にA区～D区と名付けた。北側の集合住宅建設部分（発掘調査終了後、開発計画が変更）の調査区をA区、南側の宅地造成部分の市道移管部分の調査区をB区およびC区とし、南側の宅地造成部分において土壌入れ替えによって部分的に発掘調査を実施した部分をD区とした。

A区からC区にかんしては、調査対象地に埋没している遺構のすべてを発掘調査したが、D区においては、上層の遺構群のみの調査にとどまっている。

表土掘削 調査対象地の盛土および近現代の耕作土は重機（バックホー）を用いて除去した。盛土の高さは部分的に異なるが、現地表から平均1mほど、標高換算で0.7m付近まで重機による掘削を行った。また、現地の調査は標高0m以下に至ることが確実であったことから、表土掘削直後にウエルポイントを設置し、湧水に備えた。

堆積層の掘削 盛土除去後、発掘区の壁面に沿って排水路兼用のトレンチを設定し、遺構の埋没状況を把握するとともに、土層の堆積状況を確認した。また、A区については、伊場大溝の流路に直交する方向でトレンチおよび土層観察用アゼを設定し、流路内の埋没過程の把握に努めた。

堆積層の掘削は、スコップおよび四本鋤（発掘調査用の特注品）を用いた。四本鋤は遺物を大きく痛めることなく堆積層を除去できることから、伊場大溝内での掘削作業に威力を発揮した。

遺構検出 遺構の検出には鋤簾を用いたほか、粘性が強い層位については、鋭利に研いだスコップを用い、土を薄くすき取るようにして平面形を確認した。弥生時代の遺構面の多くは、後者の方法を採用している。また、水田層の検出においては水田耕作土中に確認できた薄い炭化物層を鍵層とした。炭化物層の表出作業は一本鍬を用い、上位堆積層を剥がすようにして行った。

遺構精査 遺構内の精査については、移植ゴテ、竹ベラなどを用い、掘り下げを行った。遺構内の調査にあたっては土層観察用アゼなどを設定し、埋没状況の把握に努めた、また、埋土が特徴的な遺構については、土層断面図を作成した。さらに、遺構内において特徴的な遺物の出土状態が認められる場合、10分の1で出土状態図（平面および立面）を作図した。なお、伊場大溝からの出土遺物については、現地で特徴的な遺物と認めた場合は、出土位置をトータルステーションによって記録し、取り上げを行った。

遺構測量 遺構の測量は主にトータルステーションを用いた。弥生集落にかかわる基礎図は縮尺20分の1で作成した。伊場大溝の測量については、各層位の調査完了後に、掘削底面の高さを記録し、流路の形状を記録した。

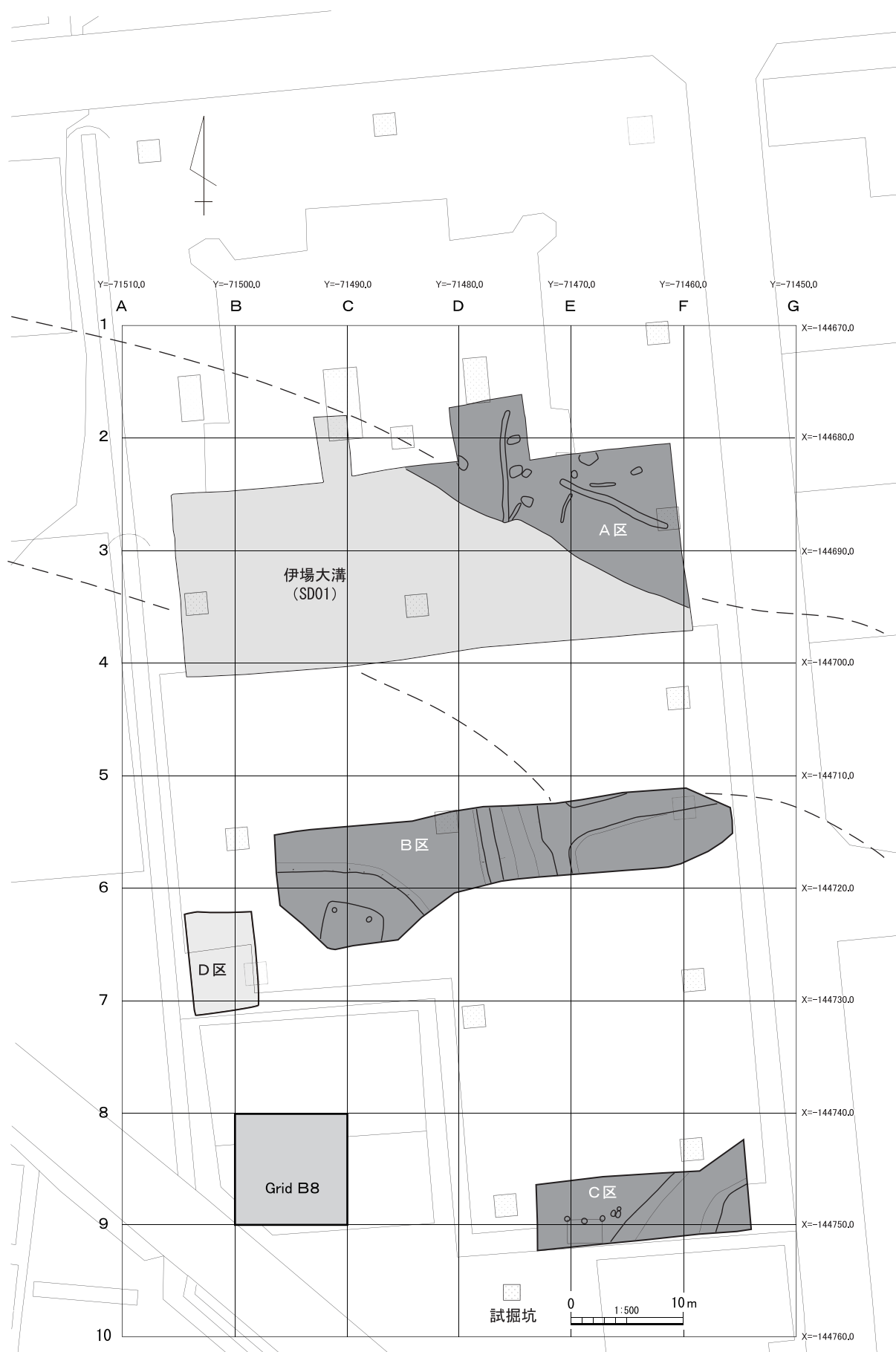


Fig.20 グリッド配置図

写真撮影 写真撮影には基本的に銀塩フィルムを用いたが、補足的にデジタル画像も撮影した。銀塩フィルムによる写真撮影は、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムの双方を用い、6×7判を主体に、部分的に4×5判を使用した。また35mm判もカラーリバーサルフィルムに限り、補足的に用いた。高所からの撮影にはローリングタワーを利用した。

(2) 調査経過

A区の表土掘削 鳥居松遺跡5次調査はA区の伊場大溝を手始めに実施した。2008年1月7日から重機によるA区の表土掘削を開始し、1月10日までの4日間の作業で、土留工事を含め表土掘削を完了した。表土掘削の完了後、排水用ウェルを設置し、1月22日から作業員を導入した本格的な発掘調査を開始した。

伊場大溝上層の調査 伊場大溝は調査開始直後に底面まで横断トレンチを2本分（西トレンチ、中央トレンチ）掘削し、土層の堆積状況と底面の高さを確認した。大溝内の層位は、伊場遺跡や梶子遺跡9次調査のそれと同様であったことから、これらの調査で用いられたローマ数字の層位名を踏襲し、上から順に、Ⅲ層、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅴ層、Ⅶa層、Ⅶb層、Ⅷ層の7段階の層位に分離した。伊場大溝内の調査は、これらの層位の分別に従って上から順に層位的に進めた。Ⅲ層、Ⅳa層は掘削土量が少なく、含まれる遺物量も限られることから、調査開始後、数日で調査を完了した。

伊場大溝中層の調査 Ⅳb層の調査は、1月25日から2月4日にかけて実施した。Ⅳb層からは墨書土器、人面墨書土器、人形、斎串などが集中的に出土した。墨書土器の多くに「稲万呂」の文字が確認できたことから、比較的小さな破片においても出土位置の記録に努めた。

Ⅴ層の調査は、2月5日から2月14日にかけて実施した。Ⅴ層から出土する土器の量は少ないが、6点にわたる木簡が出土し、調査現場での緊張感が高まった。情報量が最も多い3号木簡はⅤ層を調査開始して間もない2月5日に出土した。木簡に多くの文字が遺存していることが確認できたことから、埋蔵文化財調査事務所に設置してある赤外線照射装置を使用して、判読を試みた。また、Ⅴ層からは貝塚を4箇所（SS01～04）確認した。貝塚の土壌は、すべて取り上げた。貝塚土壌の一部は分析用のサンプルとしてそのまま保管し、残りの土壌は発掘現場において水洗、篩い分けを行い、遺物を回収した。

Ⅶb層の調査は、2月15日から3月5日にかけて実施した。Ⅶb層は土量が多いことに加え、



Fig.21 伊場大溝の調査風景



Fig.22 伊場大溝の体験発掘

掘削面が標高－2m以下の深さに達したことから、廃土作業が困難になりつつあった。Ⅶb層からは土器や木器が比較的多く出土し、出土位置の記録や遺物の確認作業に追われた。

弥生時代水田面の調査 Ⅶb層の調査完了後、伊場大溝底面と岸上面との高低差が顕著になってきたことから、調査区の北東部に高まりとして残っていた弥生時代の遺構面の調査を開始した。弥生時代の遺構面の調査は3月6日から3月14日にかけて実施した。A区の弥生時代の遺構は明確なものはすべて水田にかかわるもので、畦畔に伴うとみられる土器集積が確認できた。

調査指導 伊場大溝の全貌がほぼ明らかになったことから、慶應義塾大学の松原彰子氏（自然地理学）および奈良教育大学の金原正明氏（古環境学）の両氏を発掘現場に招聘し、調査指導をいただくとともに、分析用のサンプルを採取した。また、同時期、出土した木簡を奈良文化財研究所に持ち込み、釈文の作成を依頼した。

A区の現地説明会 木簡に記載されている内容が判明し、A区の調査成果がほぼ明らかになったと判断したことから、木簡の内容を中心とした報道公開を3月13日に行い、3月16日に現地説明会を実施した。現地説明会では、伊場大溝の調査成果の公開と伊場大溝最下層の埋土を体験発掘するイベントを行い、近隣市民を中心に380名の参加を得た。

円頭大刀の出土 現地説明会の終了後、伊場大溝のⅦb層の調査を開始した。Ⅶb層の調査開始2日後、3月18日には、Ⅶb層中から金銀装円頭大刀が出土し、関係者を驚かせた。円頭大刀は特殊な構造をもち、かつ脆弱な状態であったことから、取り上げ、保存処理について（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所に協力を要請した。出土の翌日にあたる3月19日には、報道公開を経て、円頭大刀の取り上げを実施し、保存処理施設（静岡市）まで搬出した。

大溝の完掘 Ⅶb層の調査は3月17日から4月1日まで、Ⅷ層の調査は4月1日から4月3日にかけて実施した。円頭大刀の取り上げ後もⅦb層からは膨大な量の遺物が出土した。とくに土器集積SX05は、遺物の集中度も高く、出土状態の記録化に手間取った。

このように数多くの成果があがった伊場大溝の調査は、4月5日に完掘状況の写真撮影を行い、4月9日をもって終了した。

B・C区の表土掘削 弥生集落が埋没していると想定できるB・C区は、両者併行して調査することにした。A区の埋め戻しなどの期間を間に挟み、B・C区の表土掘削は、4月21・22日に実施した。



Fig.23 弥生時代遺構の調査風景



Fig.24 弥生時代遺構の現地説明会

弥生時代遺構の調査 B・C区は双方ともに弥生時代の遺構が複雑な層位関係をもって埋没していた。トレンチを数多く設定して上下関係の確認に努めたが、弥生土器の出土量が多く、詳細の把握は困難を極めた。なお、B区には古代・中世の遺構が若干認められた。これらの上層遺構は、4月25日から5月2日にかけて調査を終え、5月7日以降は、B区においても弥生時代の遺構群の調査に移行した。弥生土器の膨大な出土量に悩まされながら、灌漑用水路や土器祭祀を行った大畦畔を伴う水田、竪穴建物、土器廃棄土坑など良好な状態の遺構群を検出し、5月28日に弥生時代集落の調査成果にかかわる報道公開を行った。

B・C区の現地説明会 B・C区にかかわる現地説明会は2008年6月1日に実施し、弥生集落の調査に伴う遺物の出土状況を公開した。円頭大刀の報道効果もあり、当日は遠方からの来訪を含め、583名の見学者を迎えることができた。

調査の完了 現地説明会の終了後、弥生時代の下層遺構の調査に着手した。下層遺構群も大量の弥生土器に阻まれ、調査は難航した。とくにC区の下層遺構、SD201（下層）は遺物の密度が今回の調査区の中でも最も高く、出土状態図の作成に多くの手間がかかることになった。

大量の出土遺物と高密度の遺構に悩まされた発掘調査であったが、6月16日には補足調査を含めた現地調査を完了し、6月30日は現地を埋め戻しの上、完全に撤収した。

その他普及事業 今回の調査では、現地説明会以外にも、小学校の団体見学を数多く受け入れた。受け入れ校（参加人数）は、浜松市立東小学校（51名）、浅間小学校（114名）、瑞穂小学校（164名）、萩丘小学校（147名）、伎倍小学校（70名）、泉小学校（118名）である。また、調査中には発掘調査内容を速報的に伝えるチラシ「鳥居松遺跡通信」（1～14号を発行）を作成し、近隣市民への配布、浜松市ホームページへの掲載を通じて調査成果の周知をはかった。3回にわたる報道公開の機会にも恵まれ、調査中にはのべ186名にわたる一般見学者を受け入れた。

D区の調査 A～C区の本発掘調査を実施した約1年後、宅地造成部分の一部に土壌入れ替えの必要が生じ、掘削工事に関係する遺構面において本発掘調査を実施した（D区）。調査は上層の遺構面に限り行い、2009年5月18・19日の両日において完了した。

整理作業 整理作業は、発掘調査の終了後から2009年12月まで浜松市西区にある浜松市埋蔵文化財調査事務所で実施した。膨大な遺物量に圧倒され続けたが、従事者の効率よい作業によって、無事、整理作業を完遂することができた。

調査参加者

現地調査 植松雅子、金原佳子、倉田たき子、小林智子、鈴木秀子、鈴木みな、辻和子、湊保代、池谷力男、石山勝弘、伊藤敏文、内田久夫、大川喜平、大城光明、鈴木武彦、世田三男、高林直政、戸田英佑、根木義勝、藤田健治、渡辺時次、渡辺治男、柳田宏

整理作業 伊熊むつ子、伊藤道太郎、内山敦世、長田文子、加藤由美子、上村洋子、河島明美、北野恵子、斉藤晶子、武田裕美、中嶋陽子、中村玲子、西澤徳江、長谷川房枝、林至美、峯野洋子、湊安沙美、森下久美子、森下朋子、弓桁恵子

第2章 調査成果

1 基本層位と遺構検出面

鳥居松遺跡の基本層位は、1次調査時（浜文協 1997、pp.8-12）で確認できたものとほぼ同一である。本発掘調査においても、1次調査時における層位名を踏襲し、併行関係を明確にしておきたい。

伊場遺跡群の低位面には、共通した湿地性の堆積がみられる。基盤層は砂層（15層）であり、その上位に黒色の泥炭質土と砂層もしくは白灰色粘土層の互層がある（9～14層）。最上位の泥炭質土（10層）の堆積年代は、含有する火山灰が天城カワゴ平軽石（kg）であるので、約3100～3200年前であることが判明する。

弥生時代後期の遺構はこれら湿地性堆積層の上位に展開している。最下層の遺構の最終確認面は、青灰色粘土層（7層）であるが、遺構はこの上位の暗灰色粘土（6層）から掘り込まれている。最下層の遺構群の形成時期は山中Ⅲ式期とみられるが、その後、欠山Ⅲ式期までの間にある程度の堆積がみられる。弥生時代後期に堆積した層は、黒灰色粘土層（5層）とみられるが、その上位の灰色粘土層（4層）の一部も弥生時代後期に堆積した可能性がある。山中Ⅲ式期の遺構は標高－0.3m以上の位置に、欠山Ⅲ式期の遺構は標高0m以上の高位面に展開している。

高い位置に遺構が展開する箇所では、近代の水田耕作土を除去すると、弥生土器の集積が検出できる場合がある。1次調査のSX03、SX06や、今回の調査で検出したSX12、SX204などが相当する。これらの遺構は、標高0.5mを超えており、弥生時代後期の集落には数10cmほどの微妙な高低差があったことがうかがえる。

Tab.3 鳥居松遺跡における基本層位

土層名	土色・土質	特 徴	遺構面	年 代
1層	黒灰色粘土	耕作痕	伊場Ⅰ層	
2層	青灰色粘土	管鉄が発達	伊場Ⅱ層	
3層	暗茶褐色砂質土	有機物を多く含む	伊場Ⅲ層	12～13世紀か
4層	灰色粘土	漸移的な部分あり	古墳～奈良時代遺構確認面	弥生時代後期以降
5層	黒灰色粘土		弥生時代生活面	弥生時代後期以前
6層	暗灰色粘土		水田耕作土・遺物包含層	
7層	青灰色粘土/シルト	緑灰色の場合もあり	最下層弥生時代遺構確認面	
8層	黒色粘土			
9層	白灰色粘土			
10層	黒色泥炭質粘土	有機物を多く含む		kg、3100～3200年前
11層	白灰色粘土	ラミナ顕著		
12層	黒色泥炭質粘土	有機物を多く含む		
13層	緑灰色砂	湧水層		
14層	黒色泥炭質粘土	有機物を多く含む		
15層	緑灰色砂		鳥居松1次 17層相当（基盤砂層）	

2 A区の遺構と遺物

(1) 検出遺構の概観

A区は、調査区の大部分が古墳時代以降の自然流路「伊場大溝」(SD01)で占められる。伊場大溝によってA区の弥生時代後期の遺構の大部分は既に消滅していた。調査区の北東側には伊場大溝の岸があり、その外側でわずかに弥生時代の遺構が確認できたにすぎない。

A区において検出できた弥生時代の遺構は、土器集積と土坑、溝である。いずれも明確な居住域に伴うものではなく、大部分は水田として活用されていたとみられる。土坑はブロック状を呈する埋土の様子が確認できたことから、1次調査で確認できた土坑群(SK101～130)と同様のものと考えられる。土坑や溝は上位の地層では検出できず、黒色泥炭質粘土層(10層)上面において検出できたものばかりである。A区で検出できた溝は、水田の畦畔に沿うように掘削されて形成されたものと推定できる。明確な盛り土が確認できなかったが、土器集積SX11は、畦畔に伴うものとみられる。また、高位面に展開するSX12も、水田の傍らで執り行われた祭祀によって形成された可能性がある。

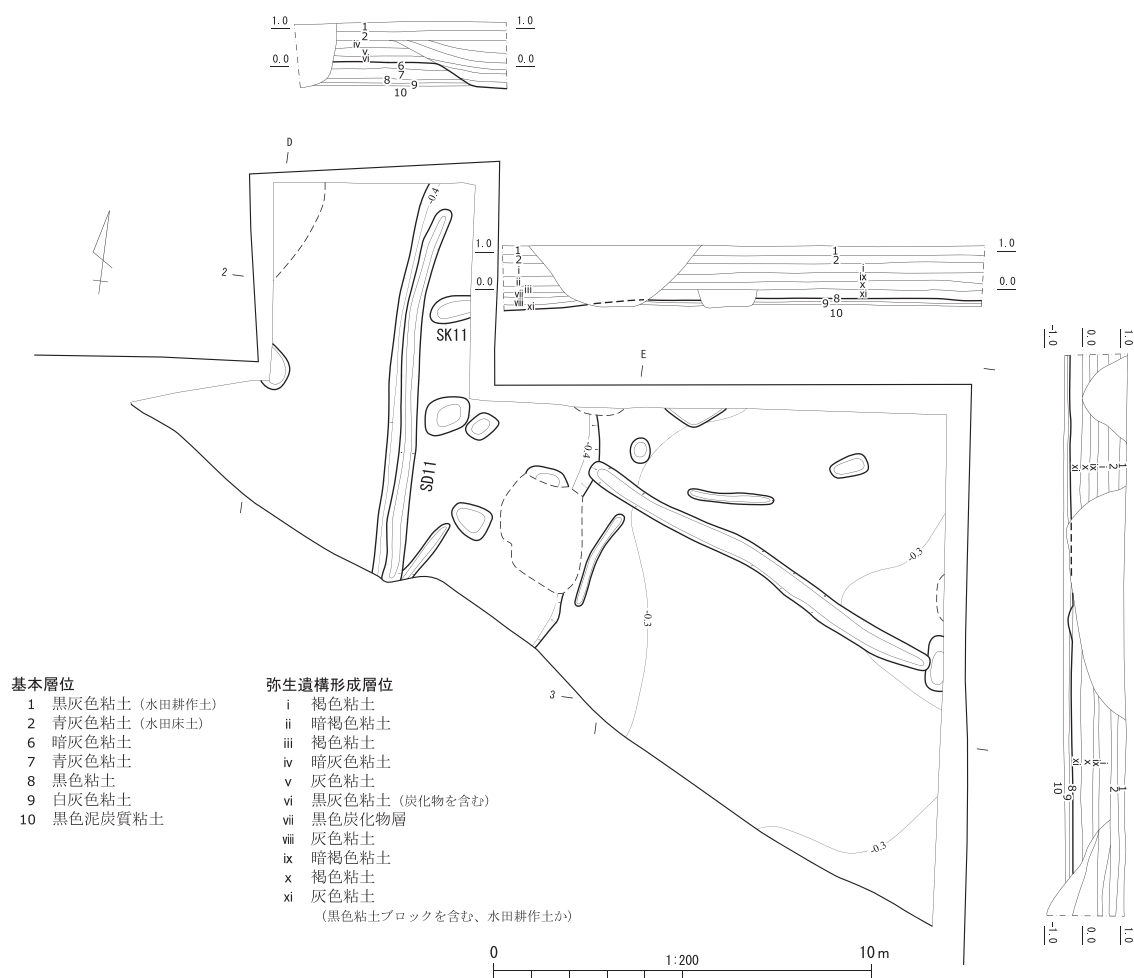
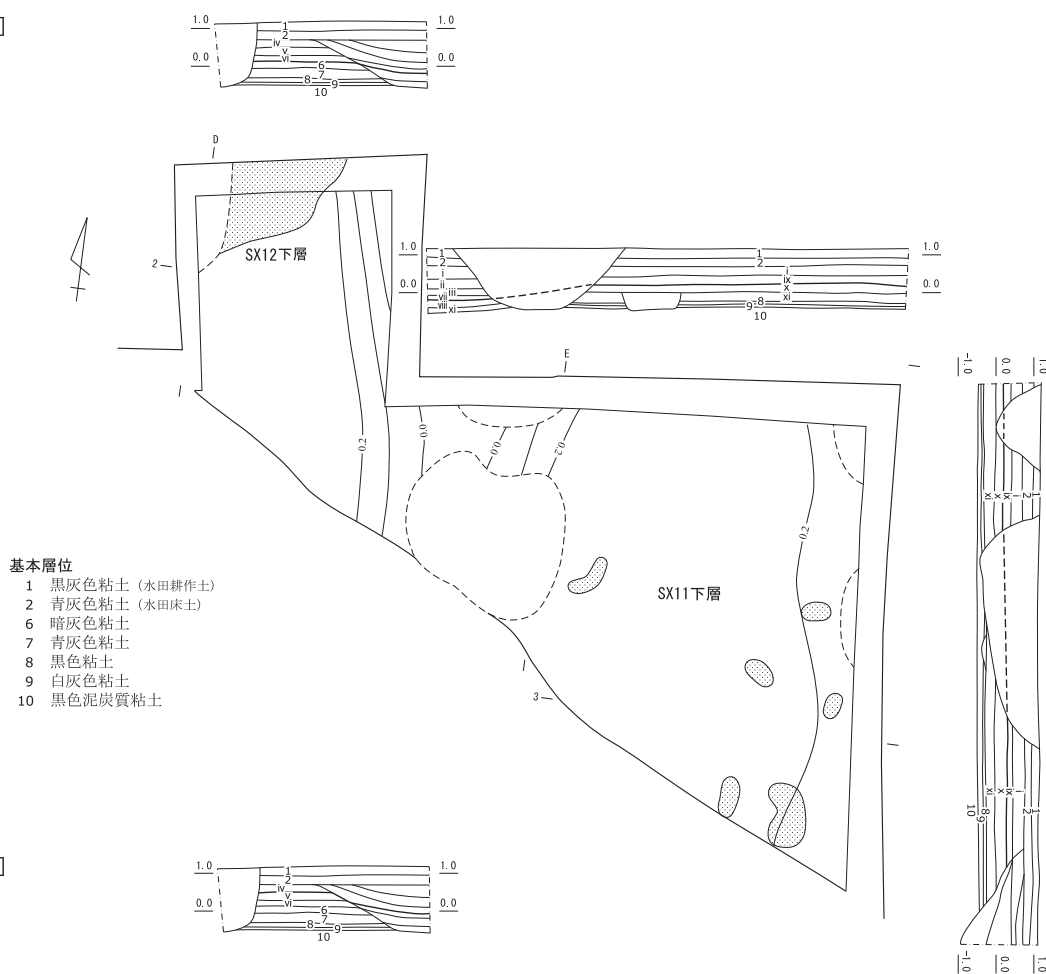


Fig.25 A区最下層遺構

[下層]



[上層]

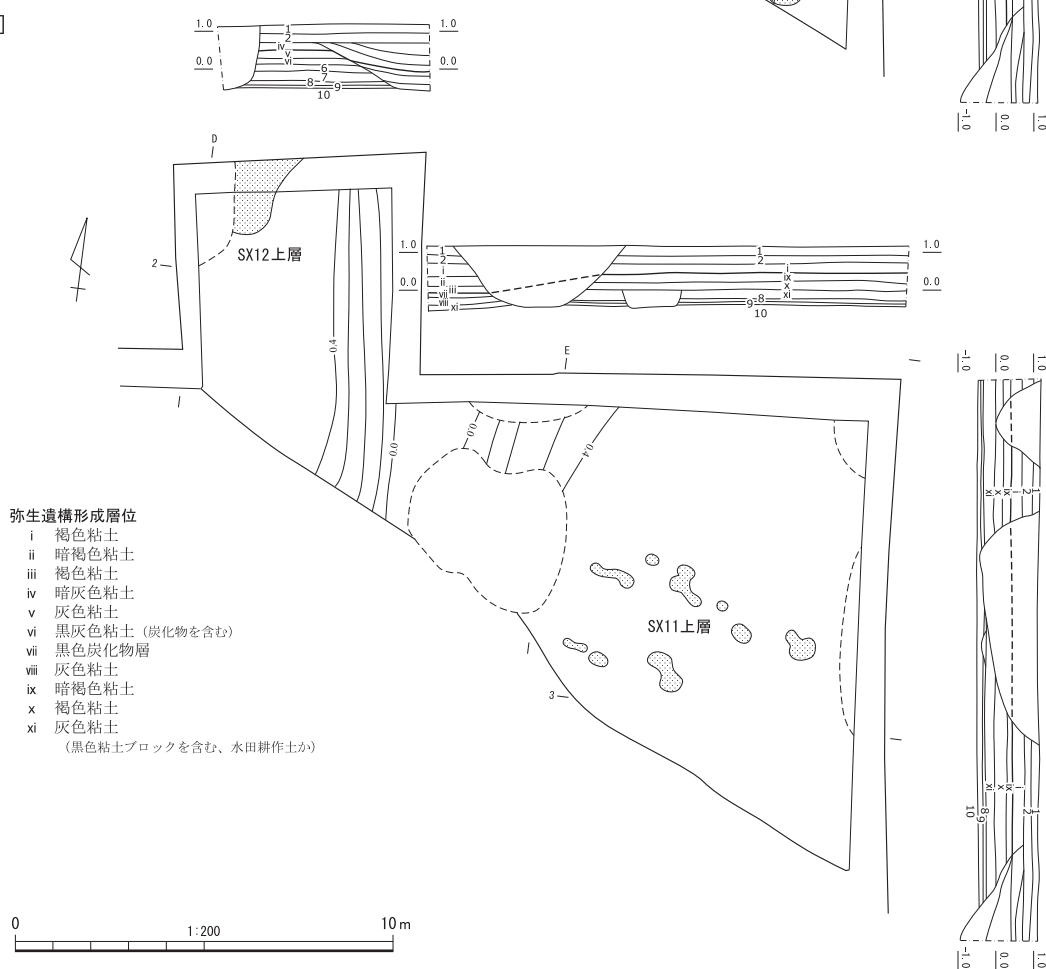


Fig.26 A区下層・上層遺構

(2) 水田関連遺構

水田耕作土 A区の大半は水田とみられる。畦畔や畦畔とかかわる可能性が高い土器集積、畦畔に伴うとみられる溝状遺構などが検出できている。弥生時代の水田は黒色粘土層（8層）もしくは青灰色粘土／シルト（7層）より上面の地層に相当する。水田耕作土の一部には薄い炭化物層の堆積がみられる部分があり、後述するB区の水田と遺存状況が類似する。

溝状遺構 (Fig.25) 最下層において検出された溝は、水田にかかわる可能性が高い。最下層で確認した溝は、非常に浅く、途中で途切れながらも延長部分に痕跡が連続している様子がみられた。明確な「溝」として掘削されたものではないことから、溝状遺構と仮称しておきたい。この溝は、黒色粘土（8層）の直上に展開する水田耕作土との区別がつけられない。水田耕作土中において、一定の方向に土が掘り起こされた結果、溝状にみえる遺構が形成されたものとみられよう。近隣の調査事例から判断すると（浜文協 1994、1997）、溝状遺構の傍らには畦畔がつくられていた可能性が高い。

土 坑 (Fig.25) 水田面の下層に、わずかながら土坑が検出できた。土坑の埋土は斑土状を呈しているものが含まれる。いずれも検出した部分は非常に浅く、上部は水田耕作土によって破壊されていた。土坑の形状、埋土の状態、上面が水田耕作土によって破壊されていることなど、1次調査で検出した土坑群(SK101～130)と共通する部分が多い。伊場遺跡群の低位面に展開する土坑は、土坑墓の可能性が考えられるが、明確な証拠が得られているとはいえない。

出土遺物 (Fig.29) 後述する土器集積を除くと、水田にかかわる遺構群からの遺物の出土は少ない。畦畔の下部構造とみられるSD11から出土した1・2が図示できる程度である。2は特徴的な形状から装飾高坏の坏部とみられる。出土遺物量が少ないが、水田関連の出土遺物は、山中Ⅲ式期に中心があるとみられよう。

(3) 土器集積

SX11 (Fig.27・28) SX11は水田耕作土中において確認できた土器集積である。土器が出土する高さに若干の違いがあり、下層と上層に分離する。遺物はまばらに出土するが、遺存部分が大きく、単なる土器の破片が集まったものとはみなせない。とくに下層においては、列をなして出土しており、同じ方向には畦畔にかかわるとみられる溝状遺構が最下層の確認面において検出できている。水田耕作土中に形成された土器集積SX11は、畦畔の中に取り込まれていたものであった可能性があるだろう。SX11の下層からは3～9が、上層からは10～23が出土した。出土遺物からSX11は欠山Ⅲ式期から元屋敷Ⅰ式期にかけて形成されたものとみられる。

SX12 (Fig.27) SX12は、水田面に隣接する高位面に形成された土器集積である。厚さ50cmにわたり、折り重なるように24～45の土器が集められていた。層位をなしているが、一連の集積とみてよいだろう。出土遺物から、欠山Ⅰ～Ⅱ式期の遺構とみられる。

SX11 出土遺物 (Fig.29・30) 3～9はSX11下層から10～23はSX11上層から出土した遺物である。下層遺物中に含まれる8は、S字状口縁台付甕（以下、S字甕と略す）B類の古段階に位

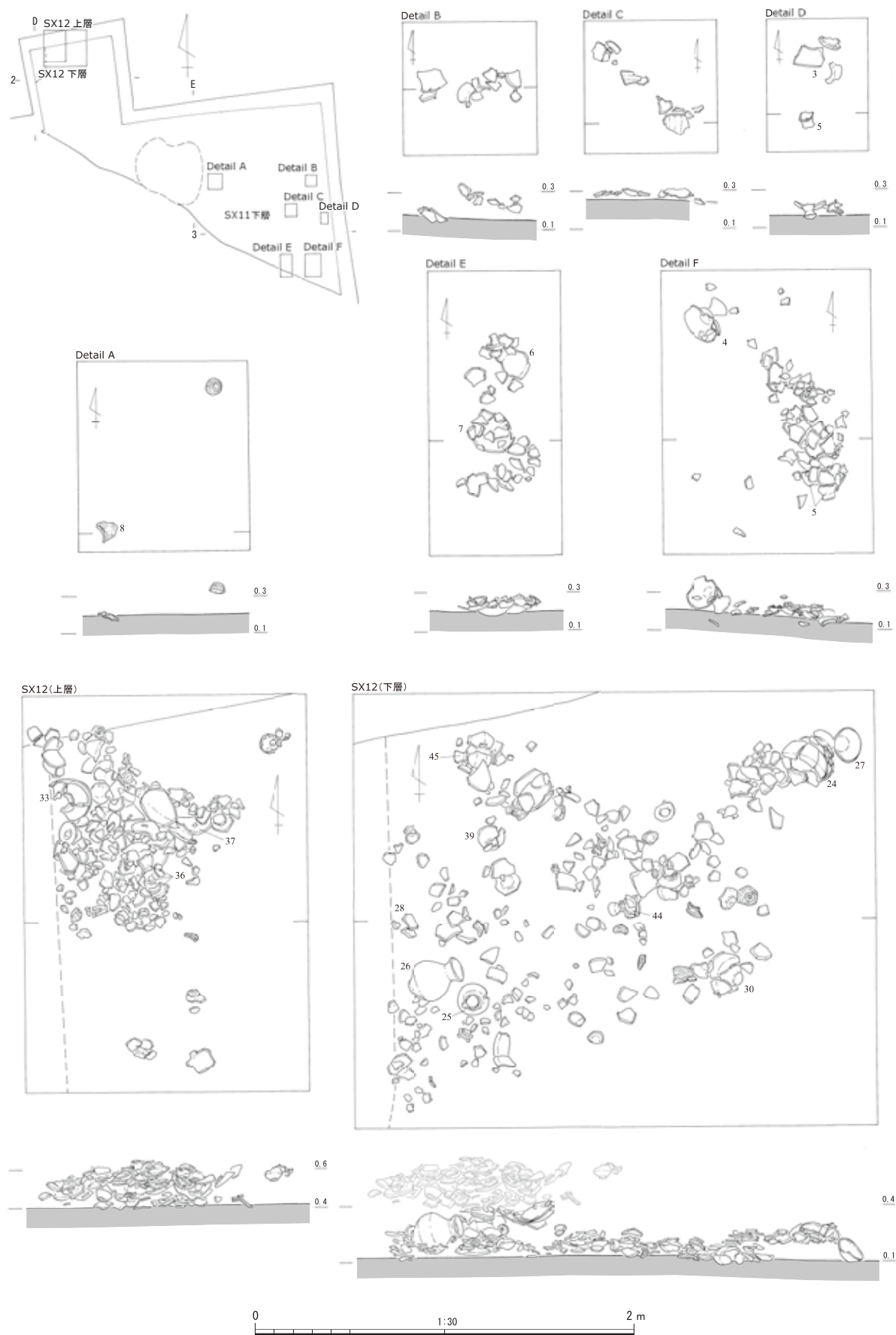


Fig.27 SX11 下層・SX12 遺物出土状態

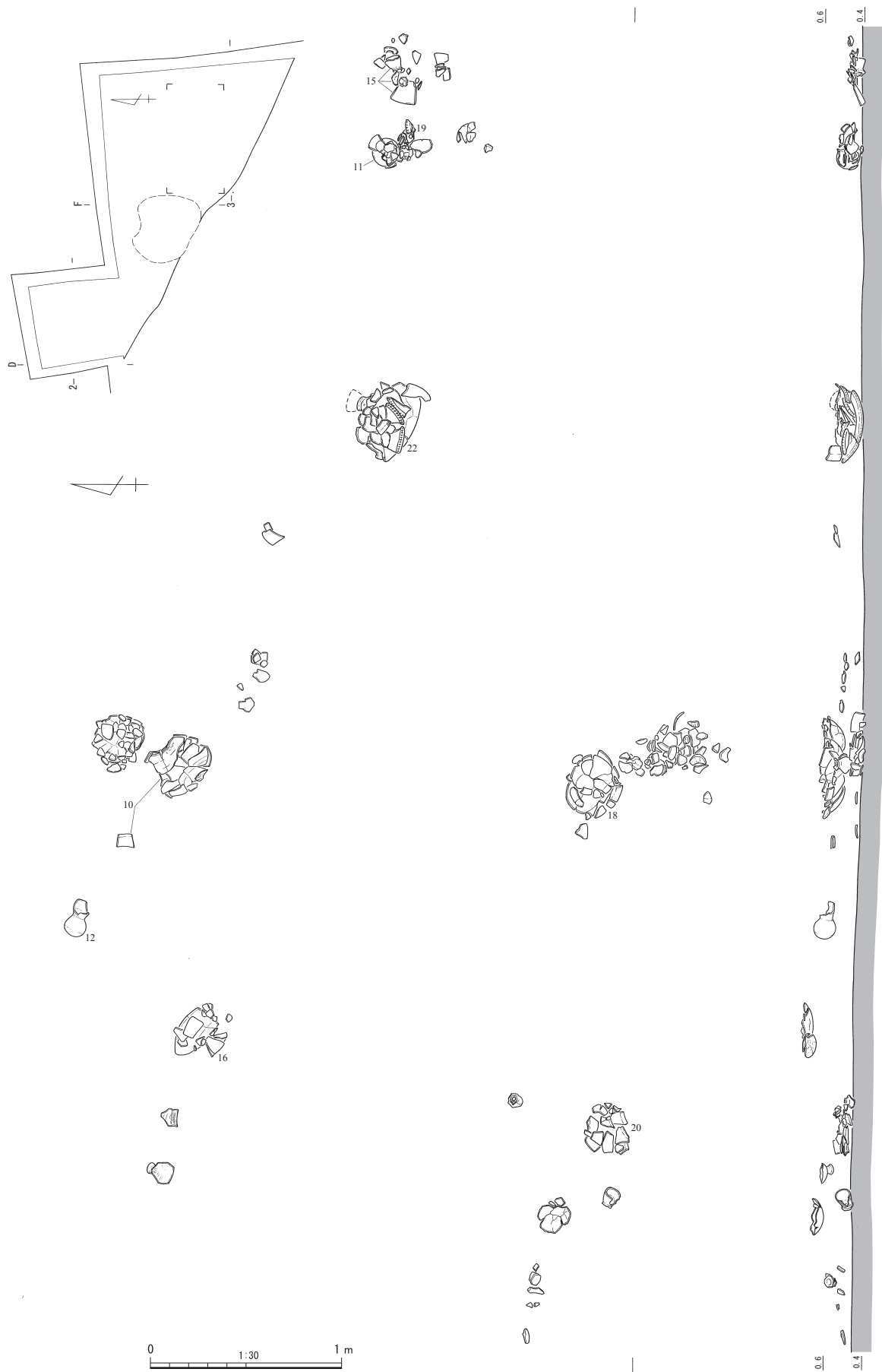


Fig.28 SX11 上層遺物出土状態



Fig.29 SX11 等出土遺物 (1)

1 ~ 2 : SD11 3 ~ 9 : SX11 下層 10 ~ 13 : SX11 上層

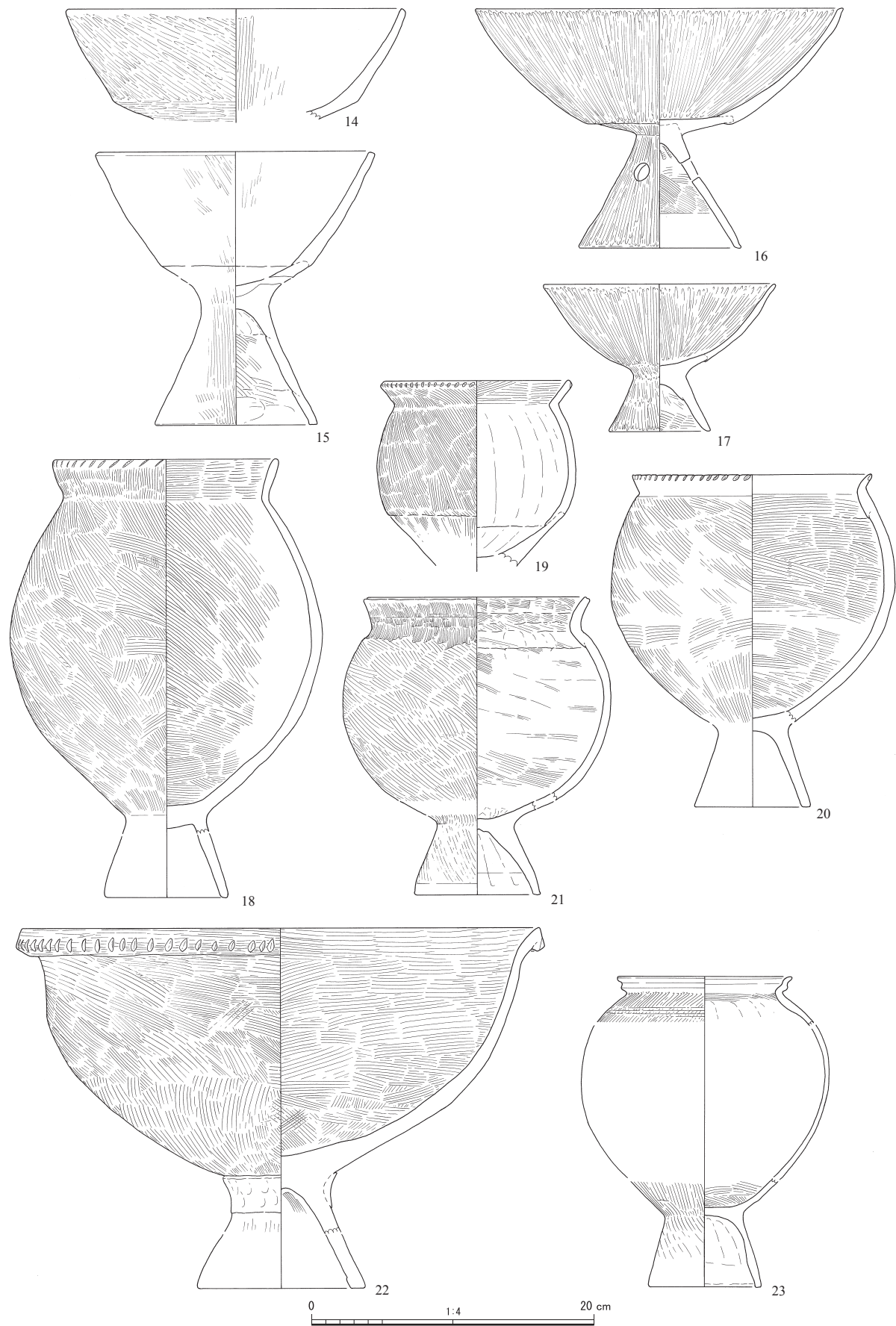


Fig.30 SX11 等出土遺物 (2)

14 ~ 23 : SX11 上層

置づけられる。また、上層遺物中に含まれる 23 は、同じく S 字甕 B 類の新段階に位置づけられる。これらの遺物の共伴を重視するなら、SX11 は元屋敷 I 式期に降る可能性があるだろう。

SX12 出土遺物 (Fig.31・32) 24～32 は SX12 の下層から、33～45 は SX12 の上層から出土した遺物である。上層と下層に分離して紹介したが、両者には明確な時期の断絶は見出せない。壺の肩部模様帯にみられる直線文の幅が比較的狭く、波状文をもつ個体も含まれる。欠山 I～II 式期に位置づけてよいだろう。なお、29 と 30 は菊川式の搬入品である。

(4) 小 結

A 区からは水田耕作土とみられる地層とともに、溝状遺構や土坑など、水田が形成されるような低位面に特徴的な遺構が確認できた。調査面積は限られるが、伊場遺跡群の低位面の様相として、典型的なあり方をみせているといえるだろう。

水田の形成開始の時期は最下層から出土した遺物群から山中Ⅲ式期とみられ、欠山 I～Ⅲ式期まで造営が続けられたとみられる。また、水田が造営される低位面と高位面の境界付近には、欠山 I～II 式期において、土器を集積した祭祀が執り行われたとみられる。なお、S 字甕 B 類の出土を重視すると、水田の廃絶の時期は元屋敷 I 式期まで降る可能性がある。

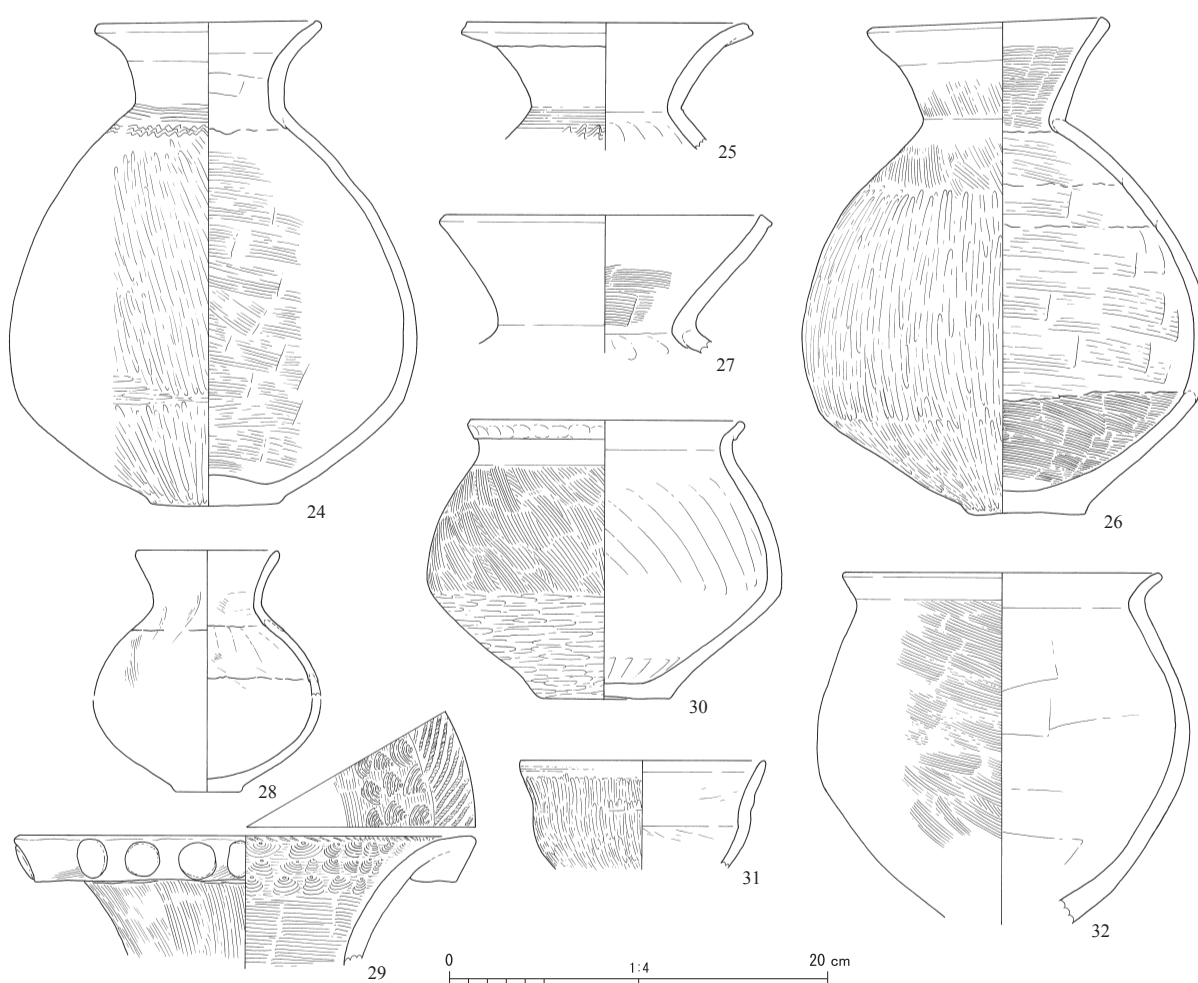


Fig.31 SX12 下層出土遺物

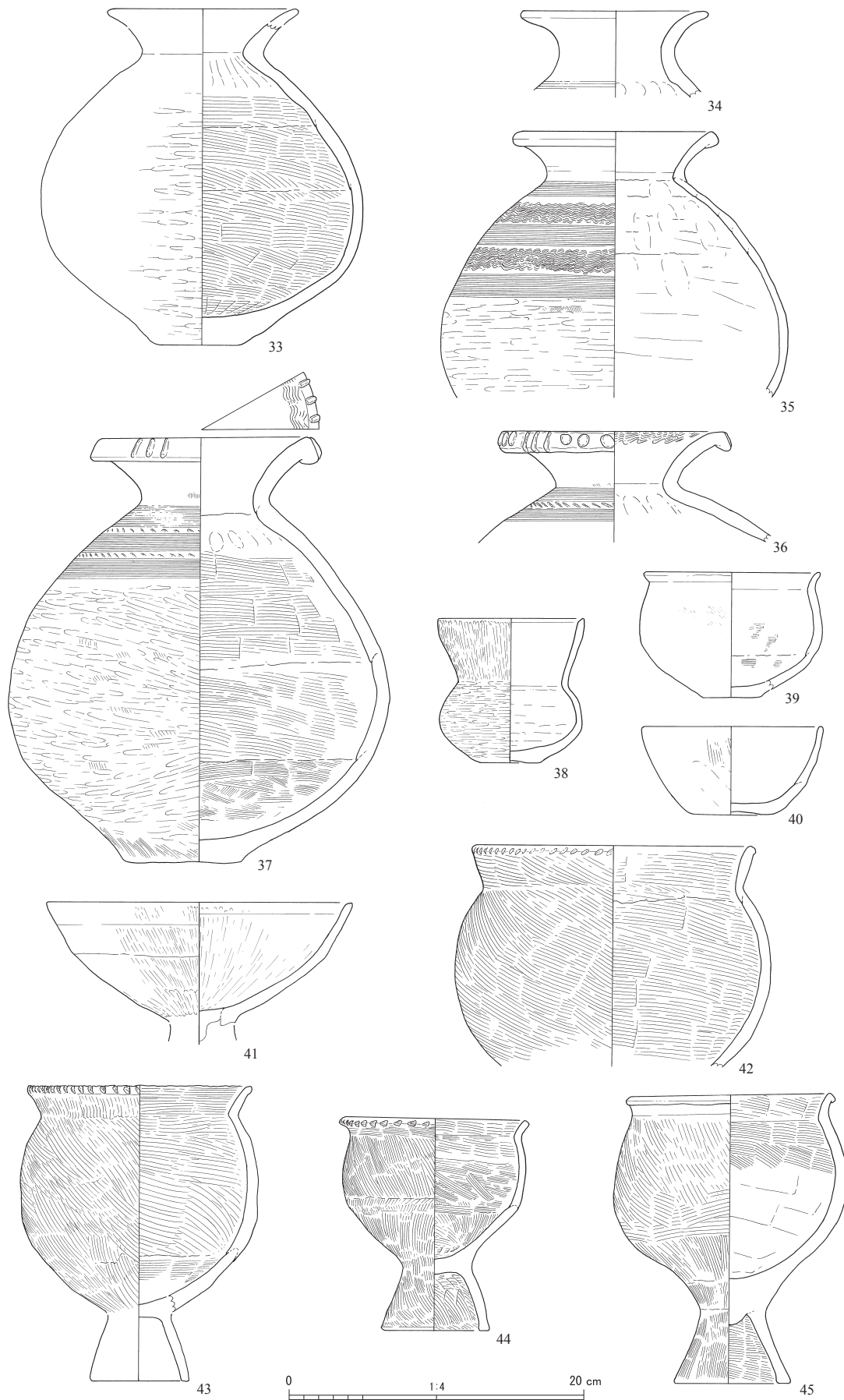


Fig.32 SX12 上層出土遺物

3 B区の遺構と遺物

(1) 検出遺構の概観

B区の弥生時代の遺構検出面は、下層と上層に分離することができる。下層遺構は山中Ⅲ式期～欠山Ⅱ式期に、上層遺構は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に位置づけられる。下層遺構の東側には環濠とみられるSD108があり、西側には土坑や小溝群がみられる。上層遺構の東側は水田にかかわる畦畔、灌漑用水路などが展開し、西側は竪穴建物を中心にその周りには土器集積が確認できた。

B区は、弥生時代の居住域の東端にあたるとみられ、西側の高位面には竪穴建物などの建物群が、東側の低位面には水田などが展開すると考えられる。

(2) 下層遺構

SD108 (Fig.35) SD108は、幅1.8m、検出面からの深さ0.8mであり、断面は頂点が緩やかなV字、もしくはU字形を呈する。壁面の土層を観察すると、本来は幅2m、深さ1mを超える規模であったとみられる。規模や形態の特長、掘削位置から判断して、集落の周りを区画する環濠と考えられる。東側の一部は上層の水田面によって破壊されているが、大部分は水田の畦畔の下に埋没していたため、遺存状態は良好である。遺構の下層は自然堆積によって埋没している状態が確認できる。下層からは遺物はほとんど出土していない。溝が完全に埋没する直前に土器がまとまって廃棄されている。SD108からの出土遺物としては、46～101があげられる。出土遺物は山中Ⅲ-2式期に位置づけられる。ただし、これらは溝の埋没段階での廃棄遺物であることから、掘削時期はさらに遡り、山中Ⅱ-2式期～山中Ⅲ-1式期頃に相当するとみられよう。

SD108 出土遺物 (Fig.36～38) SD108から出土した遺物を46～101に示す。器種、量ともに豊富で土器編年の基準資料になりうる。

46～62は壺である。口縁形態には、外反口縁(46～53)、内彎口縁(54～56)、折返口縁(58～61)の各種が認められる。57は菊川式の搬入品である。側肩部の模様帯には幅が狭い直線文を主体に、波状文、扇形文、刺突文が用いられる。

63～65、86～91は鉢である。中・大型の鉢には、く字口縁鉢(63・64)および片口鉢(65)が認められる。86～91の直口鉢は中型のものから小型のものまでみられる。

66～85は高坏である。山中式系統の高坏が主体であるが、坏部、脚部ともに多様性が認められる。坏部の形態は外反(66～70)、く字碗形(71～73)の二種がある。脚部は、すべて端部を僅かに折り返す特徴を有する。82は外反する坏部の屈曲が弱くなり直線的になった高坏である。84の坏部は内彎傾向をもつもので、欠山式系統の高坏に変化する萌芽がみられる。

92～101は甕である。甕の口縁端部には刺突をもつものがほとんどであるが、97のように無刺突のものが僅かに知られる。甕の脚台接合部には、98・99など、粘土帯を廻らすものが多い。

SD108出土遺物には、明確に欠山式に位置づけられる個体がみられない。高坏の脚部の特徴や、く字甕の特徴などを勘案すると、SD108出土遺物の帰属時期は、山中Ⅲ-2式期と考えられる。

3 B区の遺構と遺物

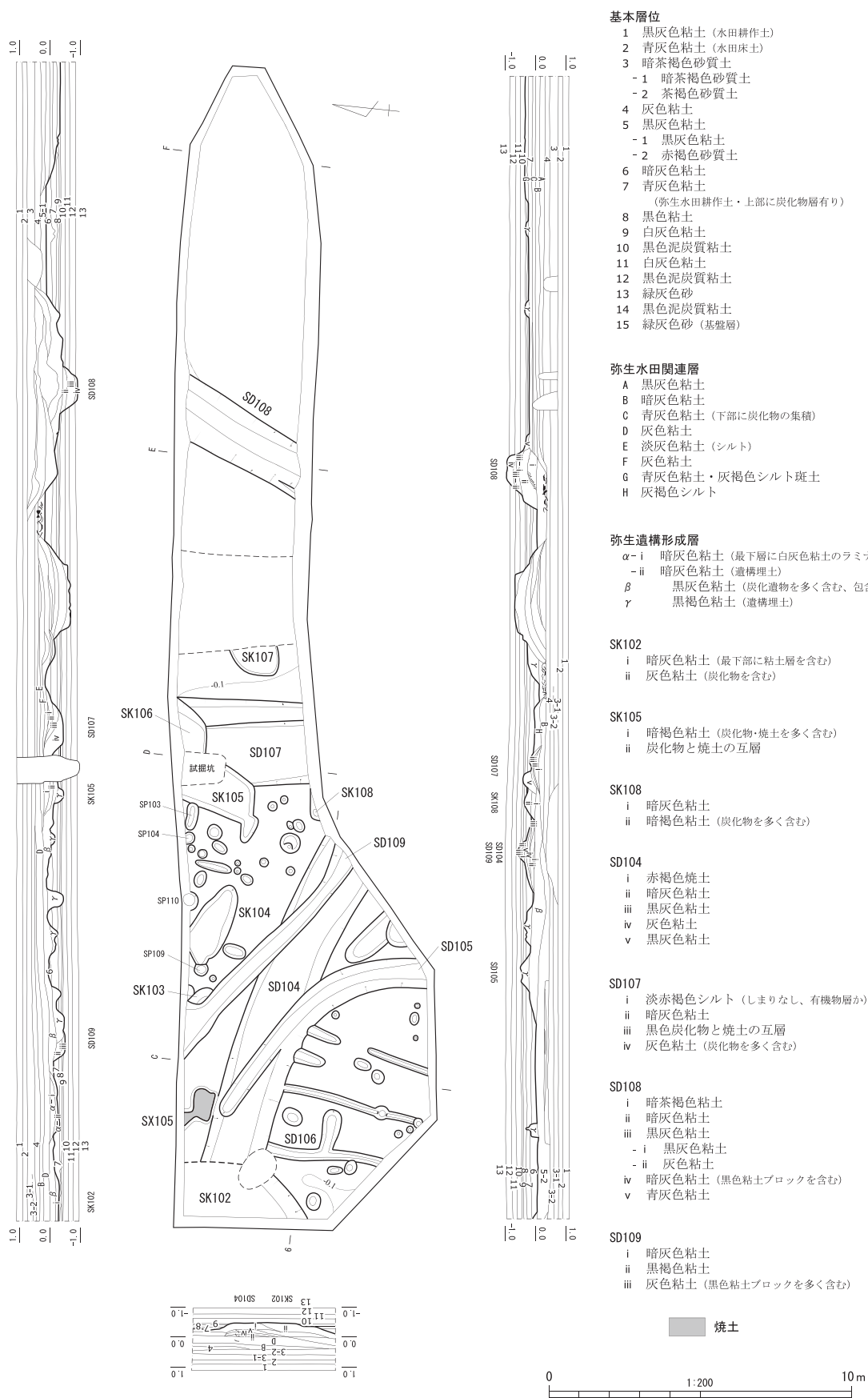


Fig.33 B区下層遺構

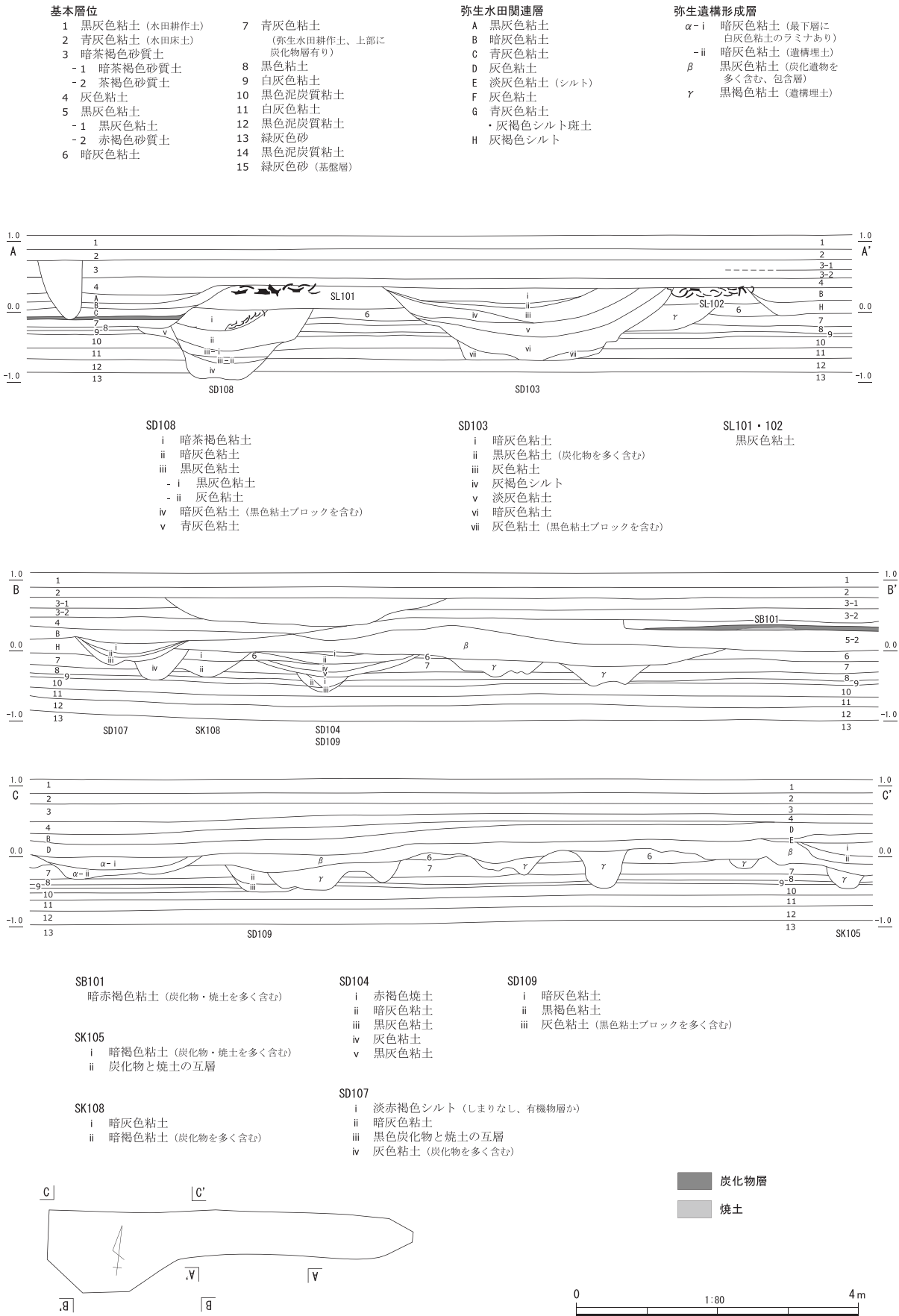


Fig.34 B区土層断面詳細図

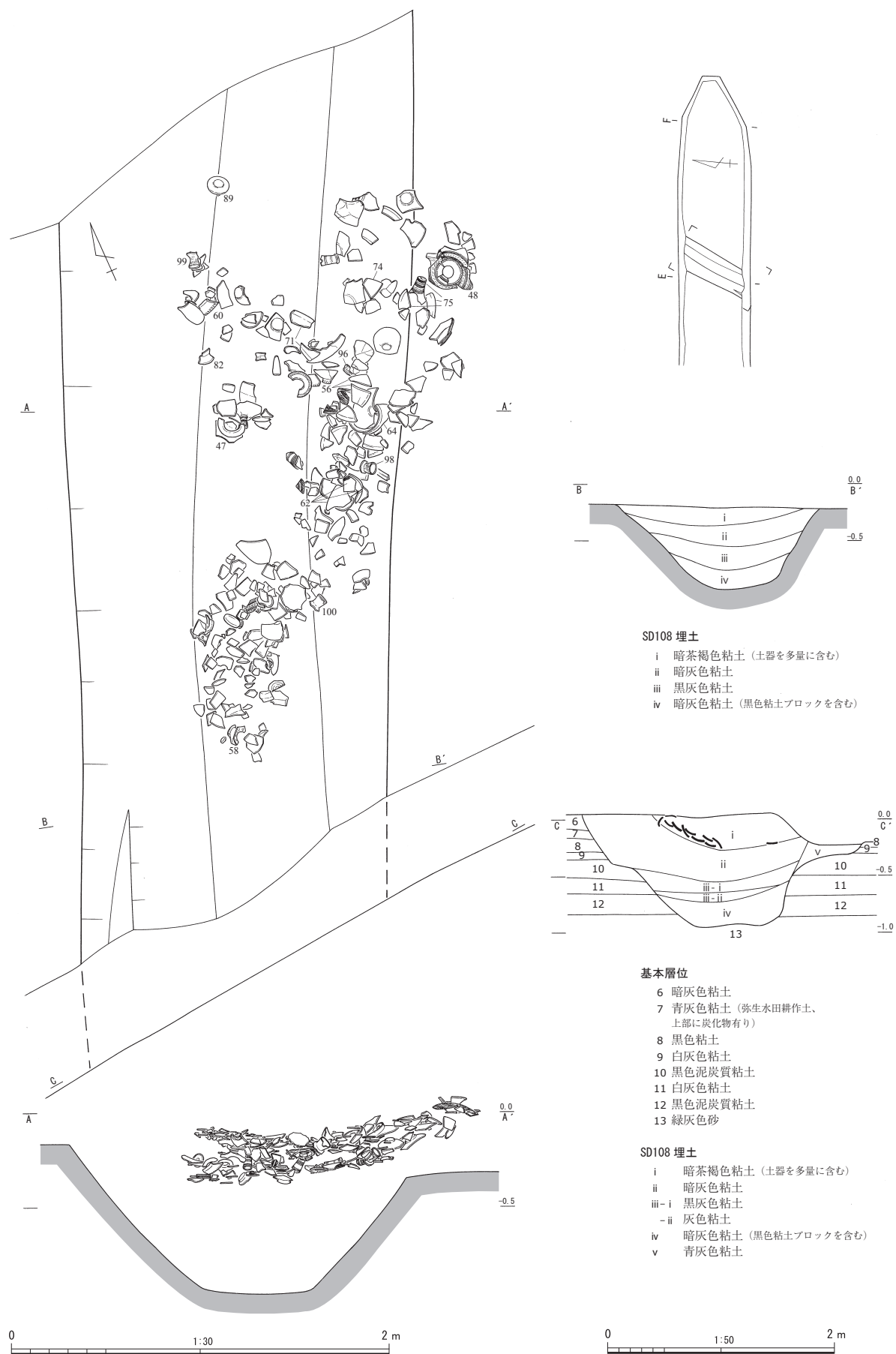


Fig.35 SD108 遺物出土状態

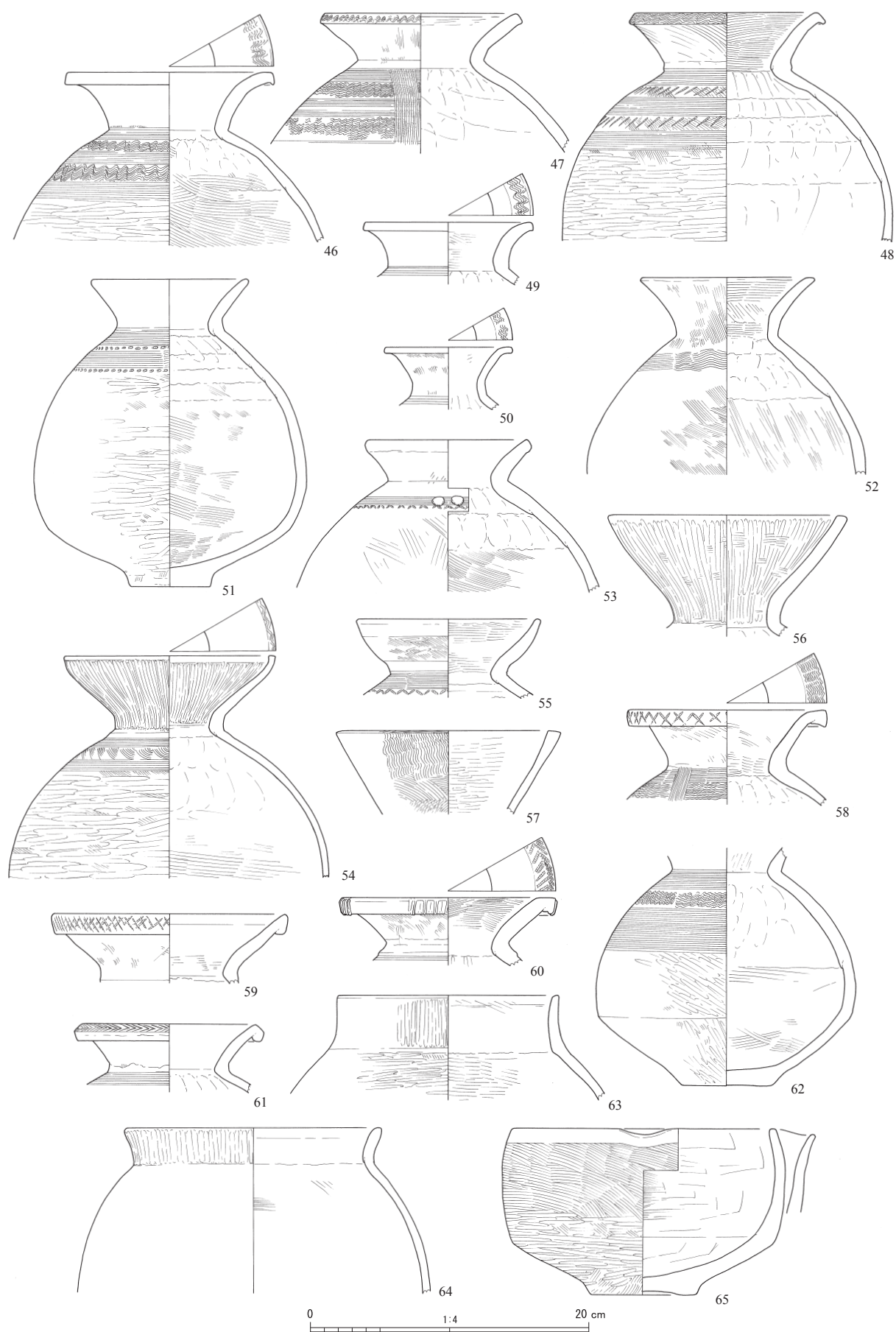


Fig.36 SD108 出土遺物 (1)

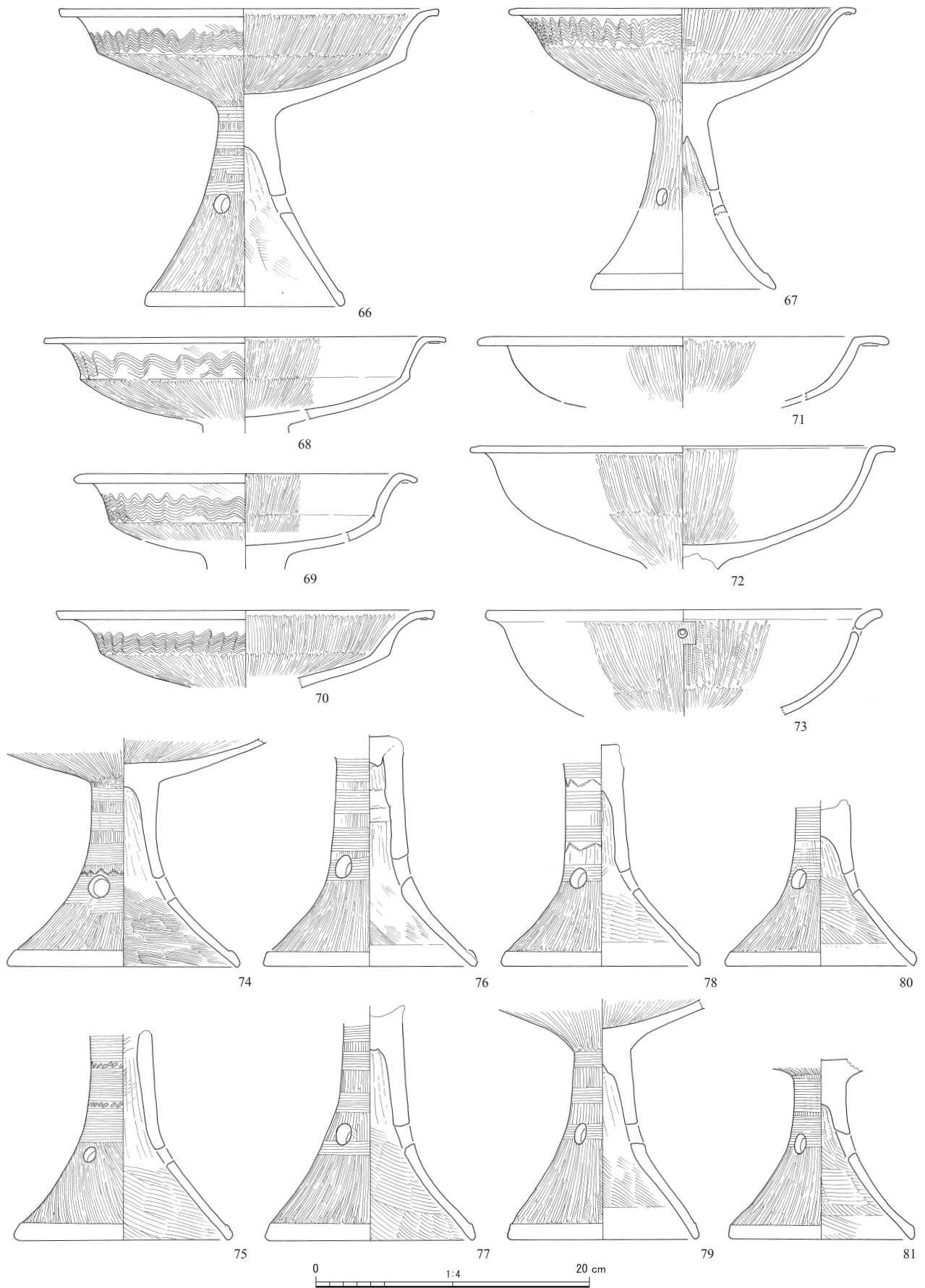


Fig.37 SD108 出土遺物 (2)

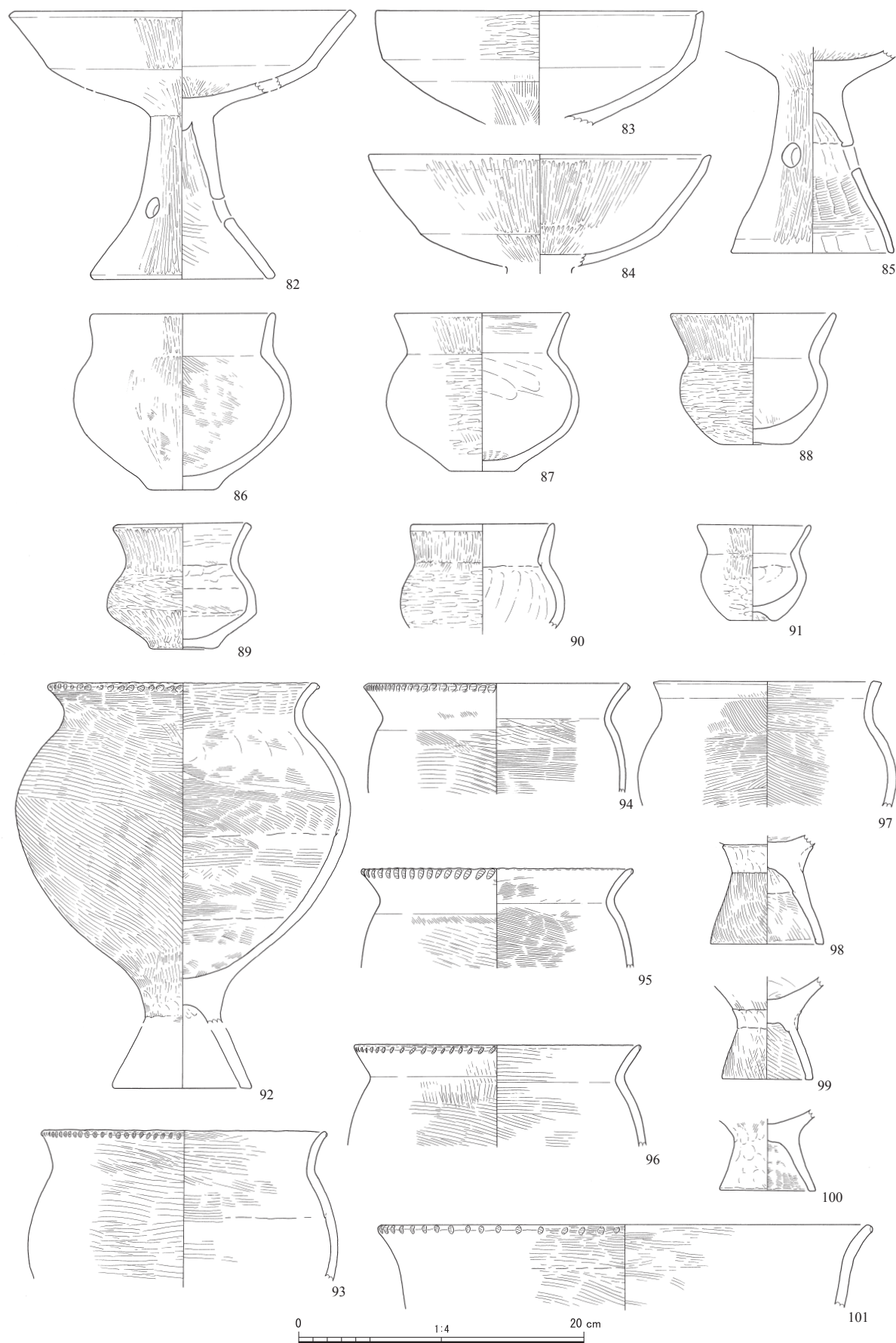


Fig.38 SD108 出土遺物 (3)

3 B区の遺構と遺物

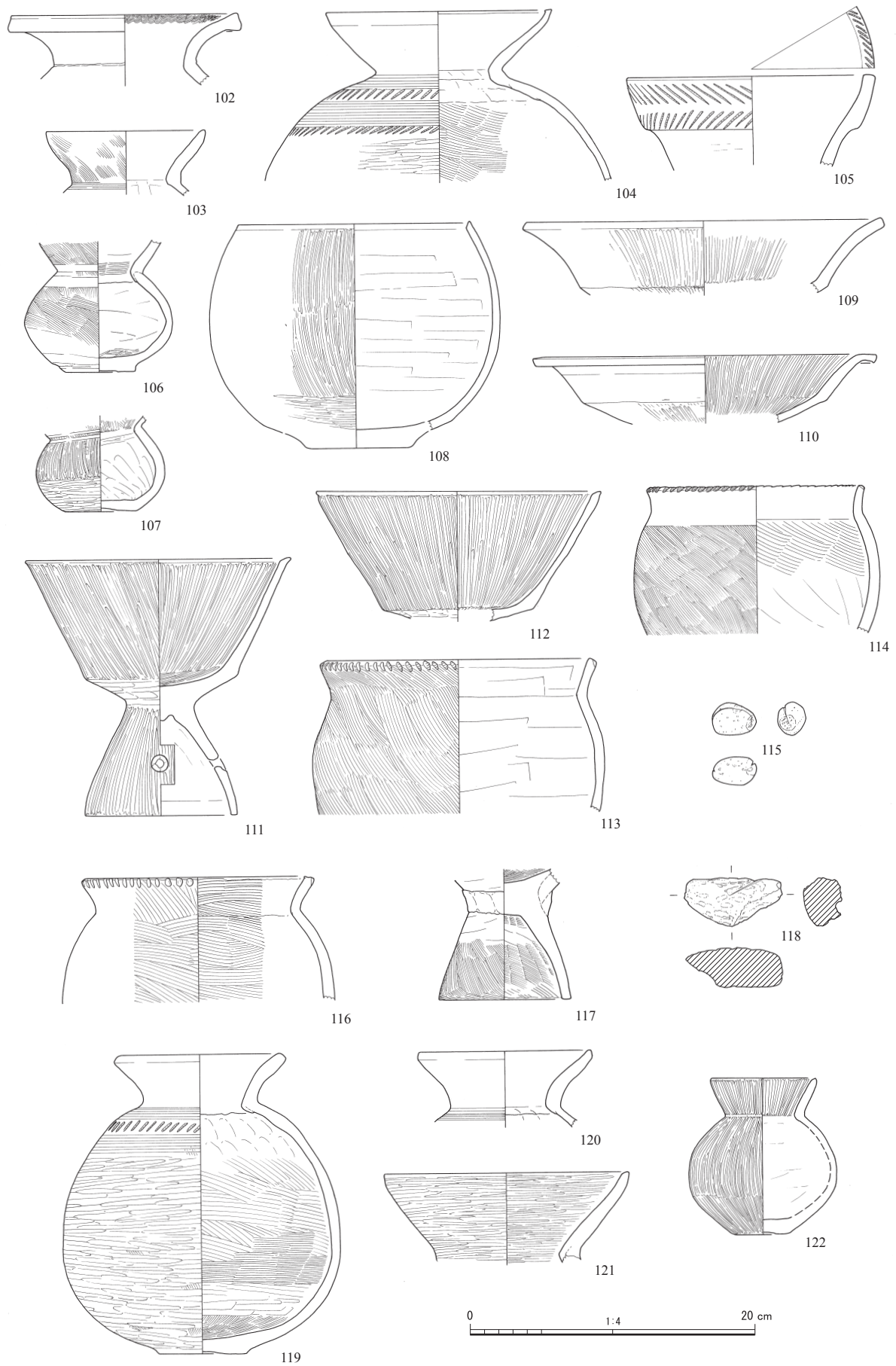


Fig.39 B区土坑等出土遺物 (1)

102 ~ 115 : SX105 116 ~ 118 : SK103 119 ~ 122 : SK104

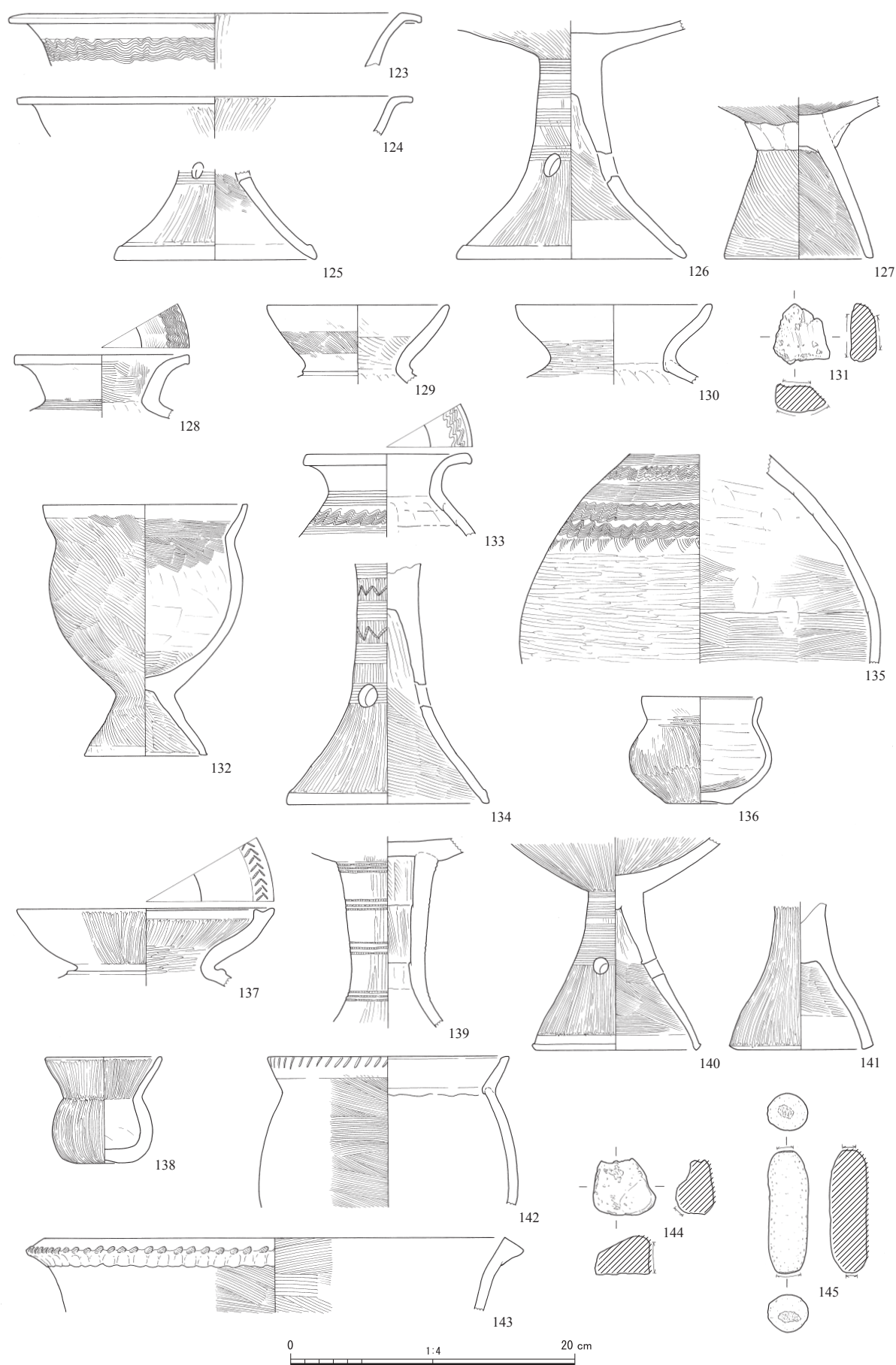


Fig.40 B区土坑等出土遺物 (2)

123 ~ 127 : SK104 128 ~ 131 : SK105 132 : SK106 133・134 : SK107 135・136 : SK108 137 ~ 145 : 包含層

土坑・小穴 (Fig.33) B区下層遺構群の西側において、不定形の土坑や小穴を比較的多く検出した。いずれも明確な遺構の性格は不明であるが、遺構の密度が高く、出土遺物も豊富なことから、これらの遺構が展開する部分は、居住域にあたとみられる。

土坑出土遺物 (Fig.39・40) 102～115はSX105から出土した遺物である。SX105出土遺物は、後述するSD104出土遺物と一連のものである可能性がある。深い坏部をもつ欠山式系統の高坏がみられることから、SX105出土遺物は、欠山Ⅱ式に位置づけられる。

116～145は、B区の下層遺構群を構成する土坑および包含層から出土した遺物である。遺物群の帰属時期は山中Ⅲ式期に主体があるが、一部欠山Ⅱ式期まで降る可能性があるものを含む。

SD104 (Fig.42) B区下層遺構群の西側で検出した浅い溝である。検出面での幅2.0m、深さ0.2mほどである。この溝の上層からは遺物がまともって出土した。遺物の出土状態をみると、本来の溝はさらに幅が広がったことが分かる。出土遺物から、欠山Ⅱ式期（古相）の遺構と考えられる。

なお、SD104に切られる溝SD105・109は横断面が箱形を呈し、環濠の可能性も考慮すべき形態である。切り合い関係から、これらの溝の時期は、山中Ⅲ式期～欠山Ⅰ式期とみてよいだろう。

SD104出土遺物 (Fig.43～46) 146～178は壺である。肩部の模様帯は、幅が狭い直線文を施すものが主体である。また、波状文、扇形文をもつものも多い。口縁形態には外反口縁（146～148）、内彎口縁（149～163）、折返口縁（164～168）、複合口縁（169～171）の各種が認められる。179～186は鉢である。装飾く字鉢（179～182）が一定量みられる点は古相の特徴である。この他、片口鉢（183）、碗形鉢（185・186）がみられる。187～202は高坏である。山中式系統の高坏（187～190）と欠山式系統の高坏（198～202）が混在する。長脚の高坏の端部は内彎傾向が看取でき、端部を折返すもの（191～193）と、折返しがみられないもの（194～197）がほぼ同数である。203～211は甕である。く字甕の口縁端部は、刺突をもつものがほとんどであるが、無刺突のものが僅かに知られる。甕の脚台接合部には、粘土帯を廻らすものが主体である。

SD104からの出土遺物には、山中式系統の高坏が一定量みられるいっぽうで、典型的な欠山式系統の高坏が混在する。欠山Ⅱ式期（古相）に位置づけられる遺物群といえるだろう。

SD105～109出土遺物 (Fig.46) 215～217は、B区の下層の溝から出土した遺物である。いずれも出土量が少なく、遺構の明確な時期を示すことは難しい。

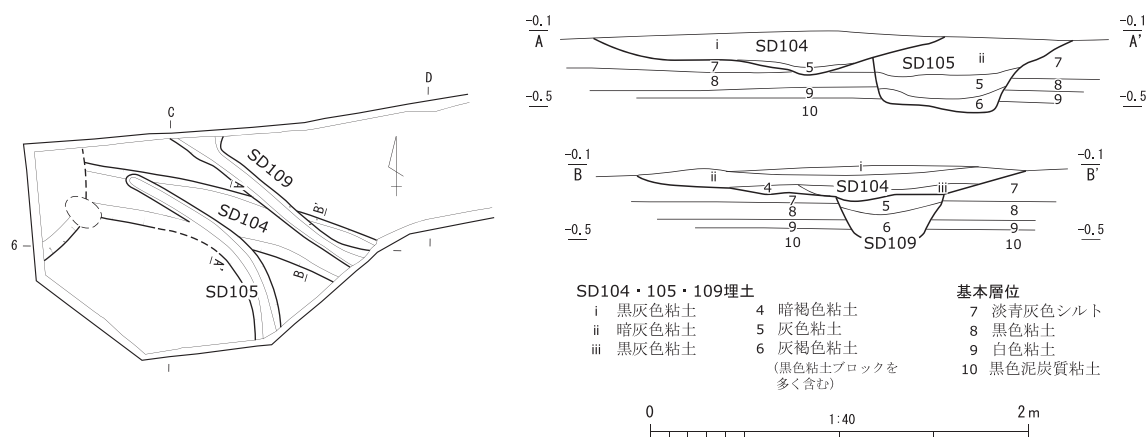


Fig.41 SD104 土層断面図



Fig.42 SD104 遺物出土状態

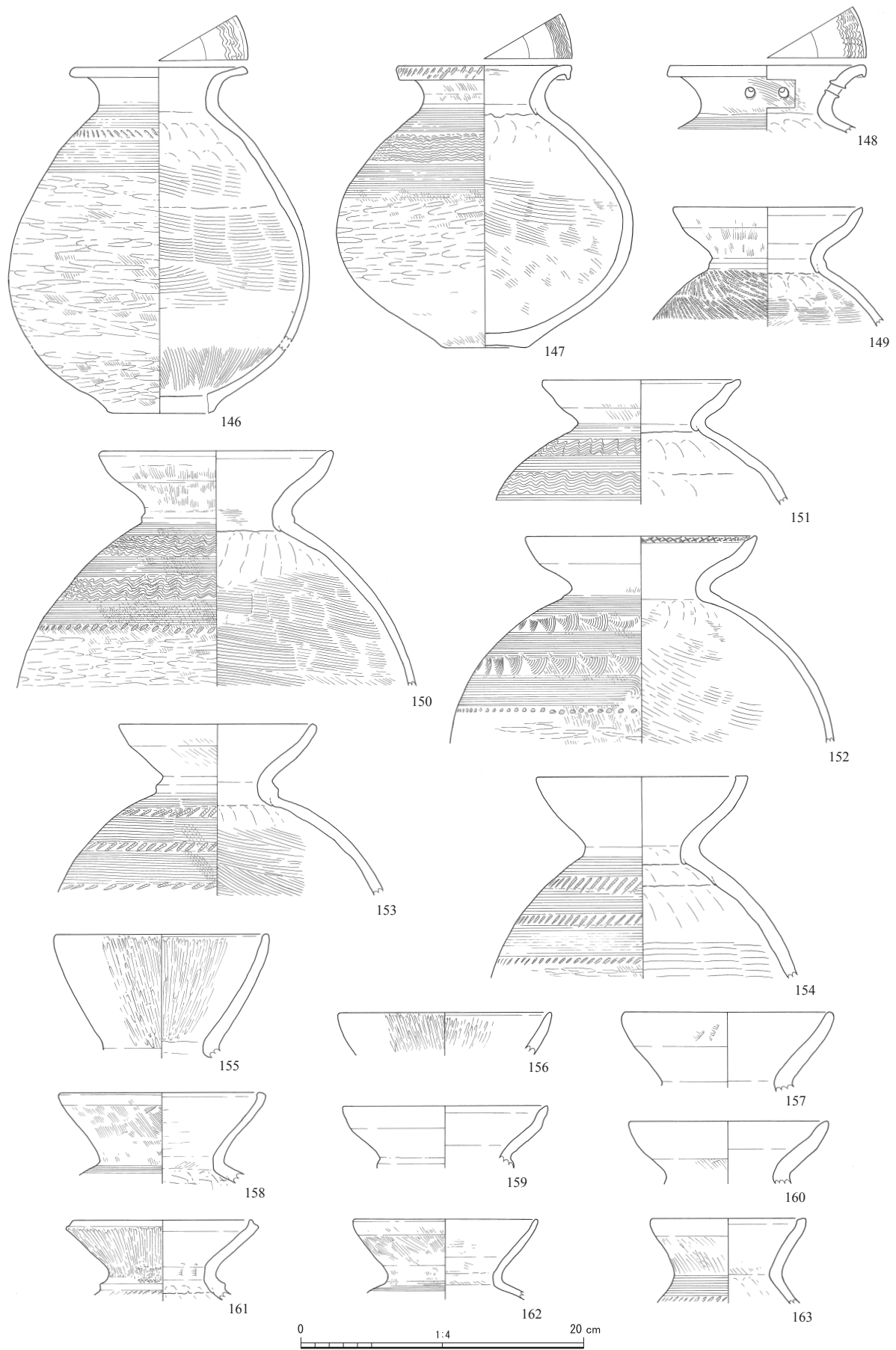


Fig.43 SD104 出土遺物 (1)

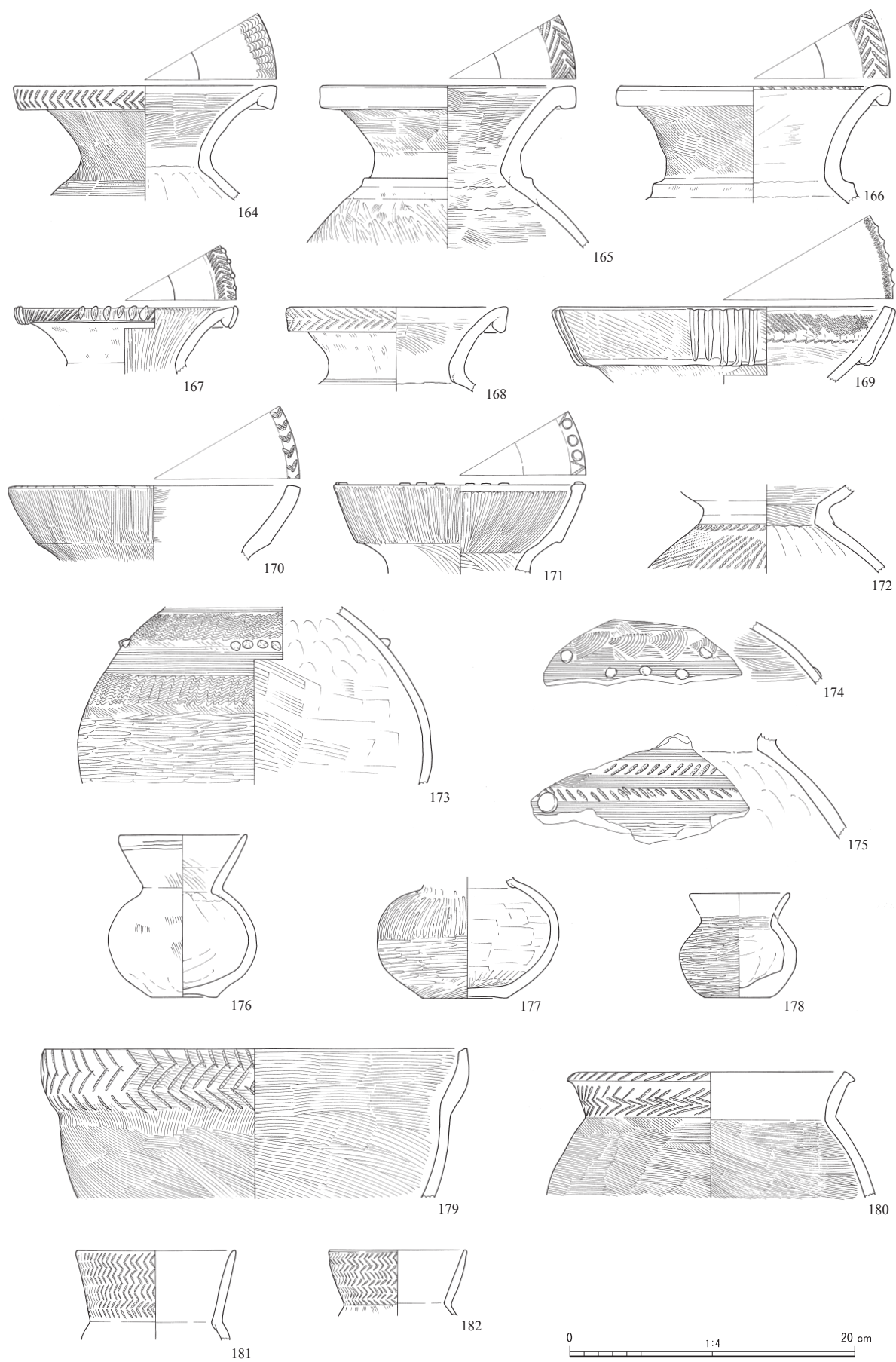


Fig.44 SD104 出土遺物 (2)

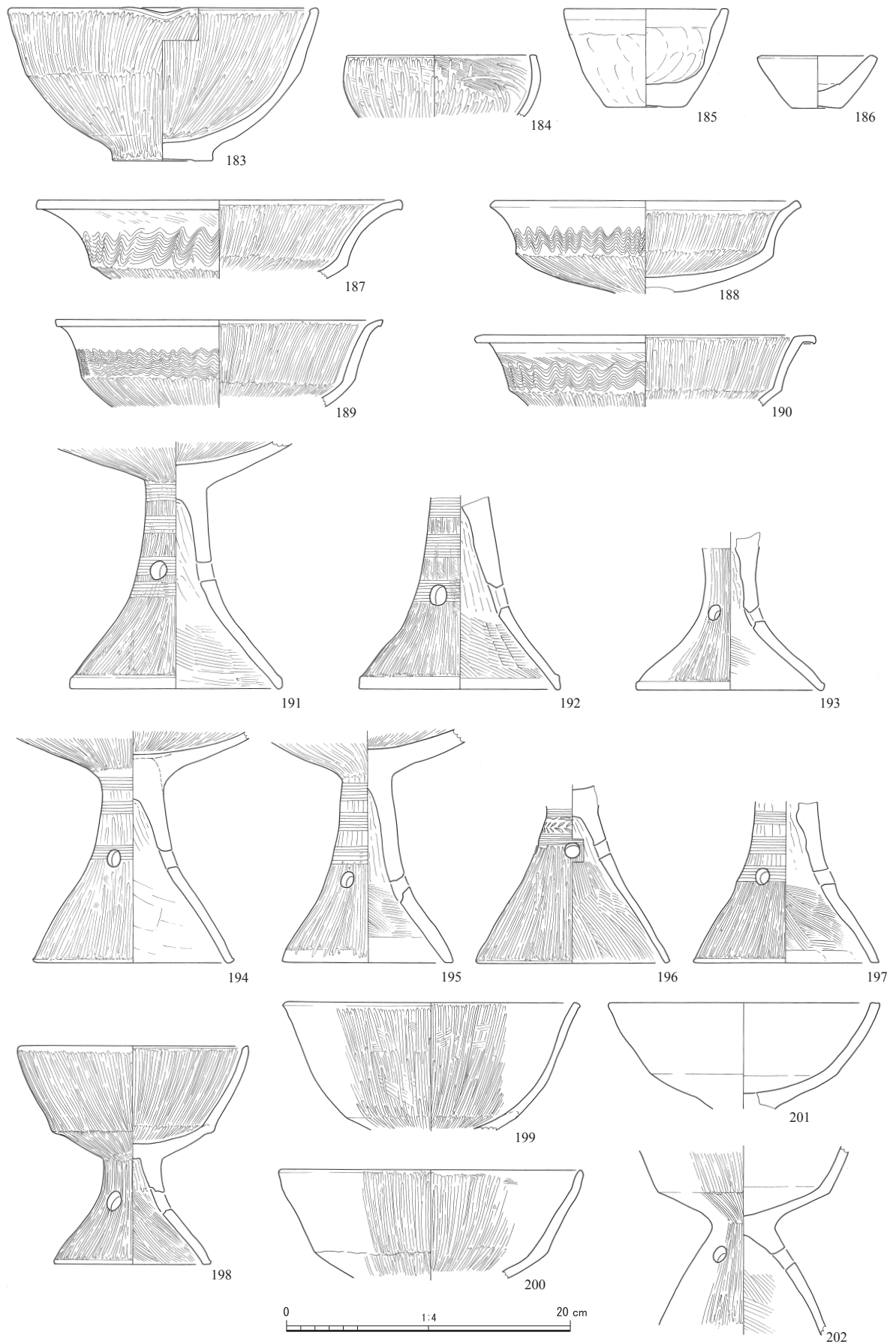


Fig.45 SD104 出土遺物 (3)

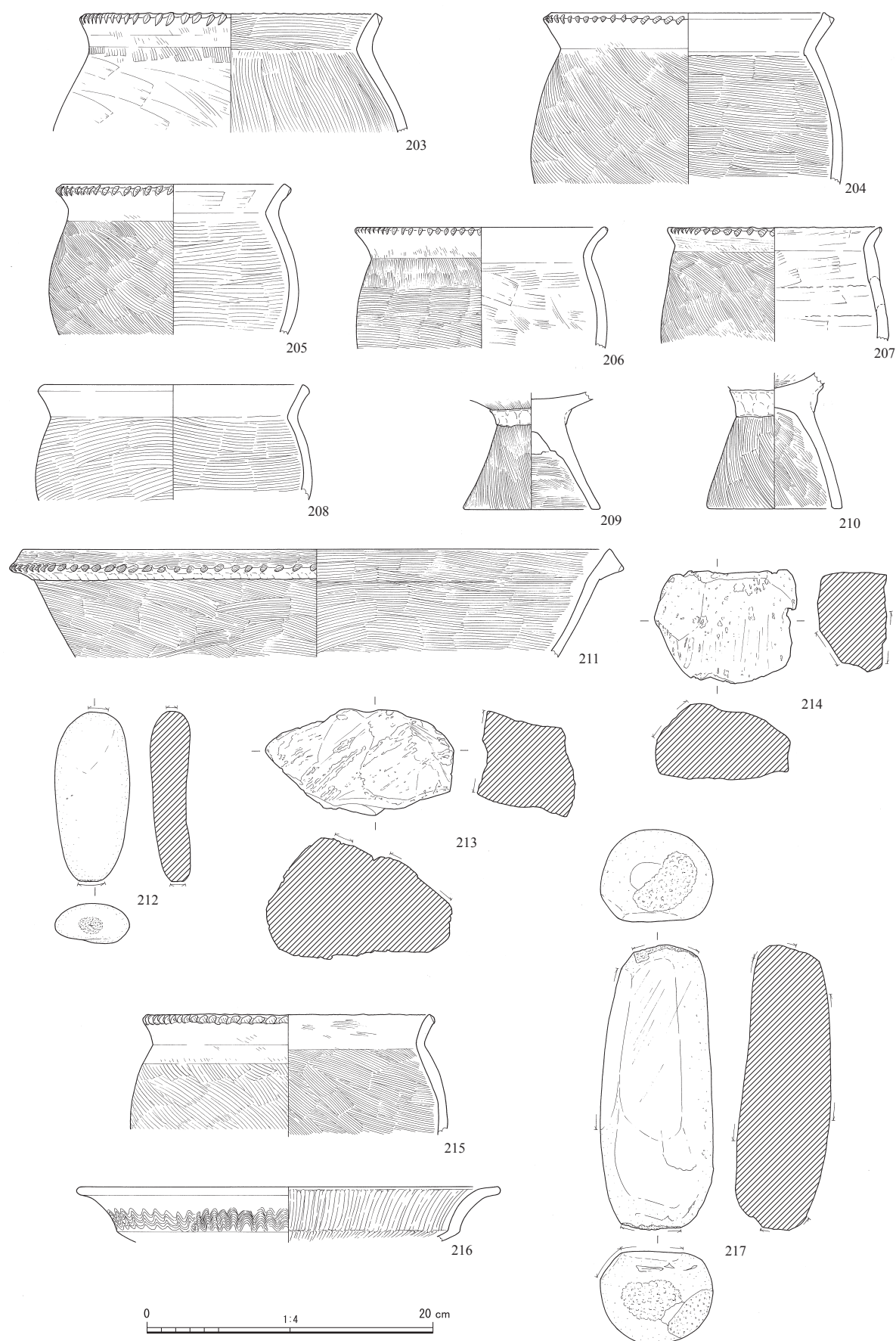


Fig.46 SD104 出土遺物 (4)・その他 SD 出土遺物
203～214：SD104 215：SD105 216：SD107 217：SD109

(3) 上層居住域関連遺構

概要 (Fig.47) B区の上層遺構群は、西側の居住域関連の遺構群と東側の水田域に分けることができる。西側と東側では、弥生時代における基盤層の高さが異なる。竪穴建物を確認した区域の標高は、0.4～0.5mほどである。これに対して、東側の水田面の標高は0m以下である。高位面を居住域に、隣接する低位面を水田域として活用していたことが分かる。高位面と低位面の標高差は鳥居松遺跡1次調査においても確認できており、居住域と水田域の境界と想定できる標高値もほぼ同じである。弥生時代の鳥居松遺跡には、数10cm程度の複雑な高低差があり、僅かな地形の差異によって、居住域と水田域が交錯している景観を復元することができる。

SX103 (Fig.48～50) 居住域として活用されている高位面と水田域として活用されている区域の間には、僅かな窪地があり、土器が集積されていた(SX103)。この土器集積には土坑などの明確な遺構は伴わない。居住域が展開する高位面から、比較的平坦な低位面の窪地に土器が投棄されたとみられる。

土器集積には、いくつかのまとまりがみられた。ここでは便宜的に東群、中央群、西群の3群に分けて取り扱う。SX103東群は、後述する大畦畔SL102および大畦畔上の土器集積SX102に隣接している。出土遺物には218～228がある。なお、SX103東群は、SX102から転落した遺物が含まれる可能性がある。SX103中央群は、遺物がまとまっている。土器が盛り上がるように集まっている部分も認められた。出土遺物には229～266がある。SX103西群はややまばらな出土状態であった。出土遺物には267～288がある。

これらの土器集積にどの程度の一括性を認めてよいか、判断が難しい。ただし、出土遺物の時期的な特徴は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期にまとまる傾向があり、比較的短期間に投棄されたものと判断できるだろう。

SX103東群出土遺物 (Fig.51) 218～228はSX103東群から出土した遺物である。複合口縁壺(221)や、口縁無刺突のく字甕(225)、短小化が顕著な甕脚台部(226・227)などの存在が時期を決める上での材料になる。SX103東群は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺物群と捉えて矛盾はないだろう。

SX103中央群出土遺物 (Fig.51～53) 229～266はSX103中央群から出土した遺物である。まとまりがある出土状態から、ある程度の同時代性を認めてよいだろう。

229～246は壺である。口縁形態には、外反口縁(229～231)、直立口縁(232～234)、内彎口縁(236～238)、折返口縁(239～242)、複合口縁(243)がみられる。なお、241は菊川式の搬入品である。

248～251は鉢である。く字鉢(248・249)のほかに、片口鉢(250)、碗形小型鉢(251)がみられる。

252～261は高坏である。252は山中式系統の高坏であるが、坏部が深く、脚部が短小化しているなど変容が著しい。欠山式期の中で残存している変容形態と捉えられる。欠山式系統の高坏は253～261が主体を占める。内彎傾向が強く深い坏部のもの(253)から、端部が直線的に外に開き坏部が浅くなる形態(255)がみられる。

262～264は甕である。く字甕の口縁には刺突が入れられるものが多数みられる。264は雛形の甕とみられよう。

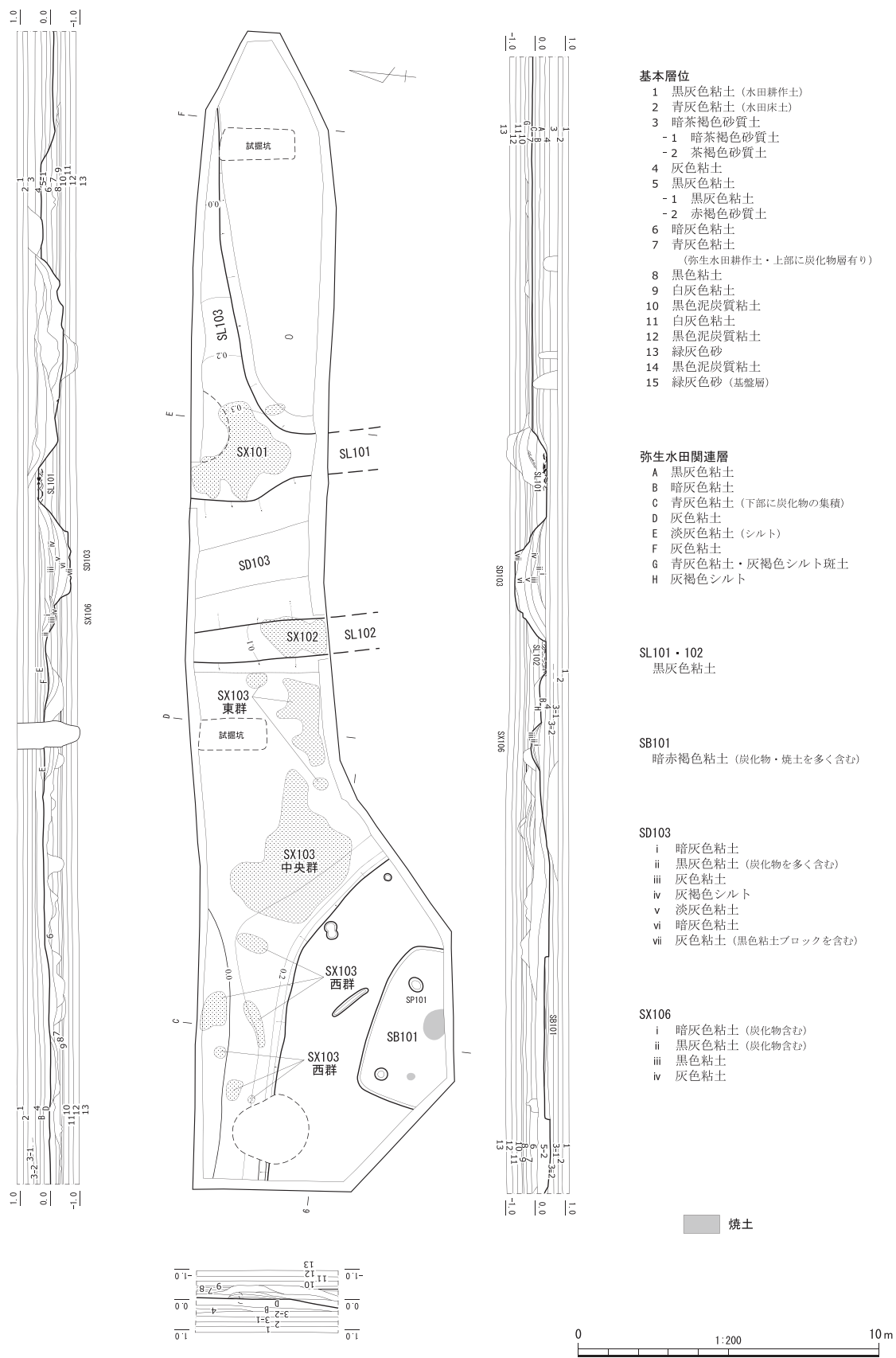


Fig.47 B区上層遺構



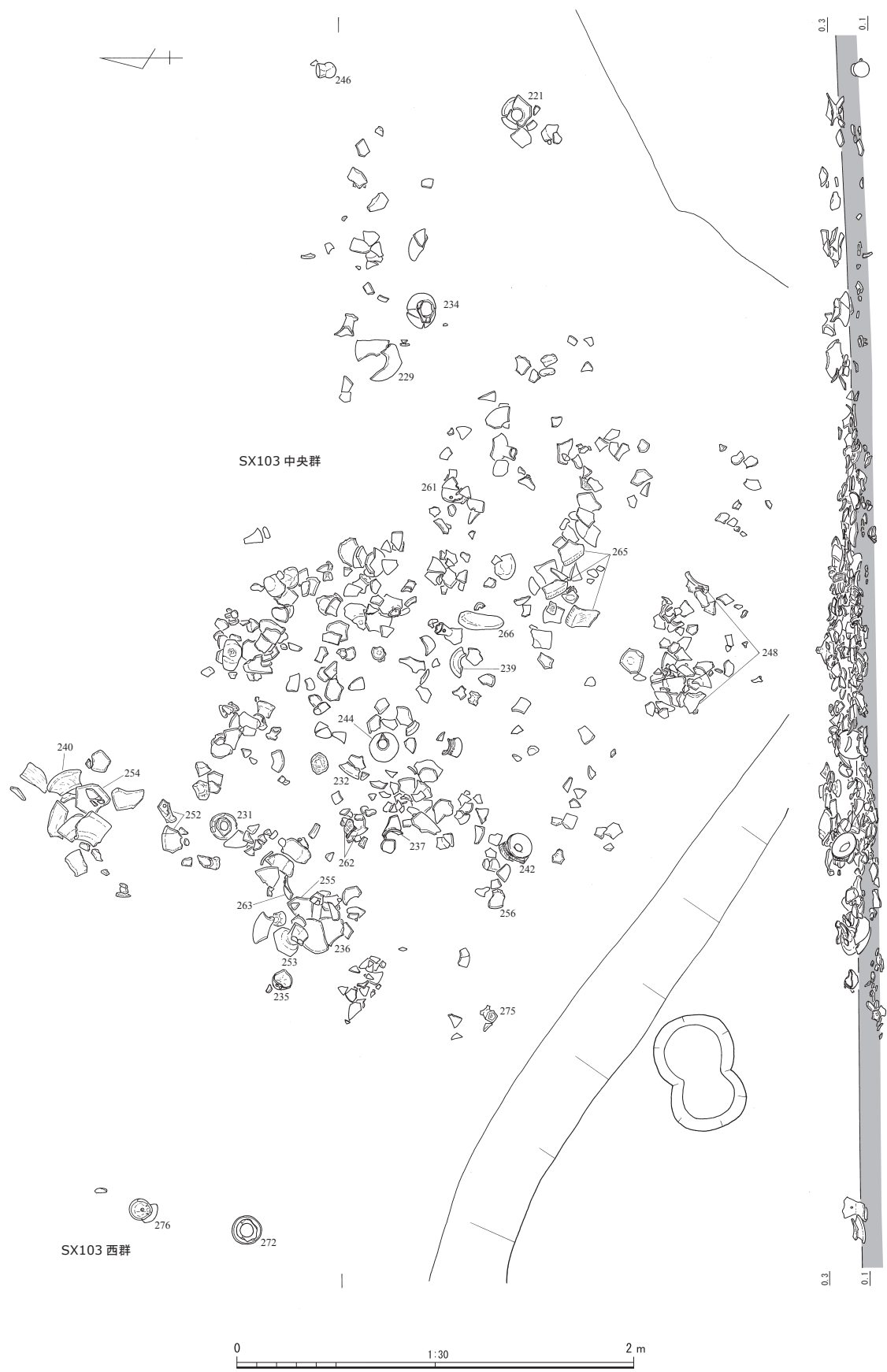


Fig.49 SX103 中央群遺物出土状態

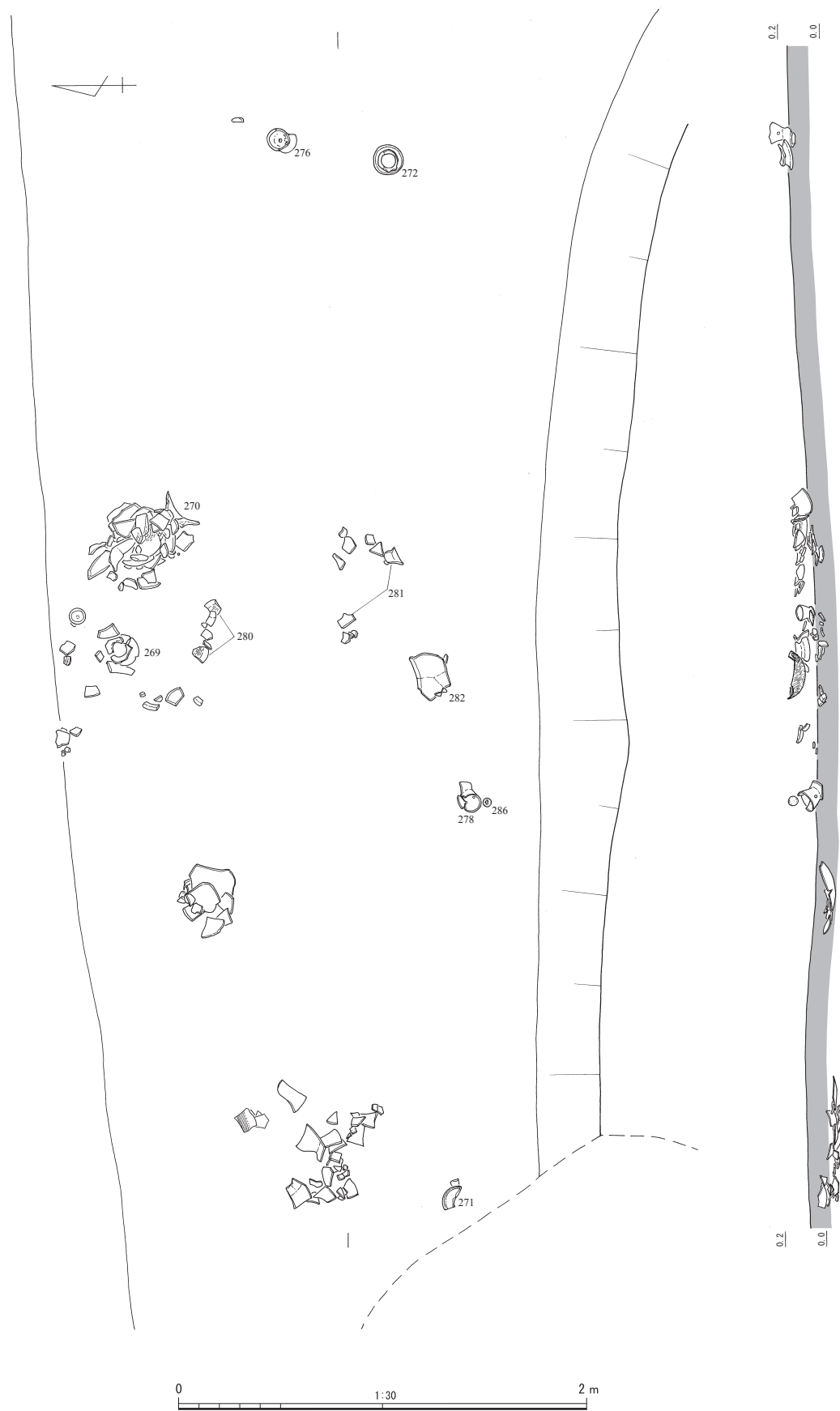


Fig.50 SX103 西群遺物出土状態

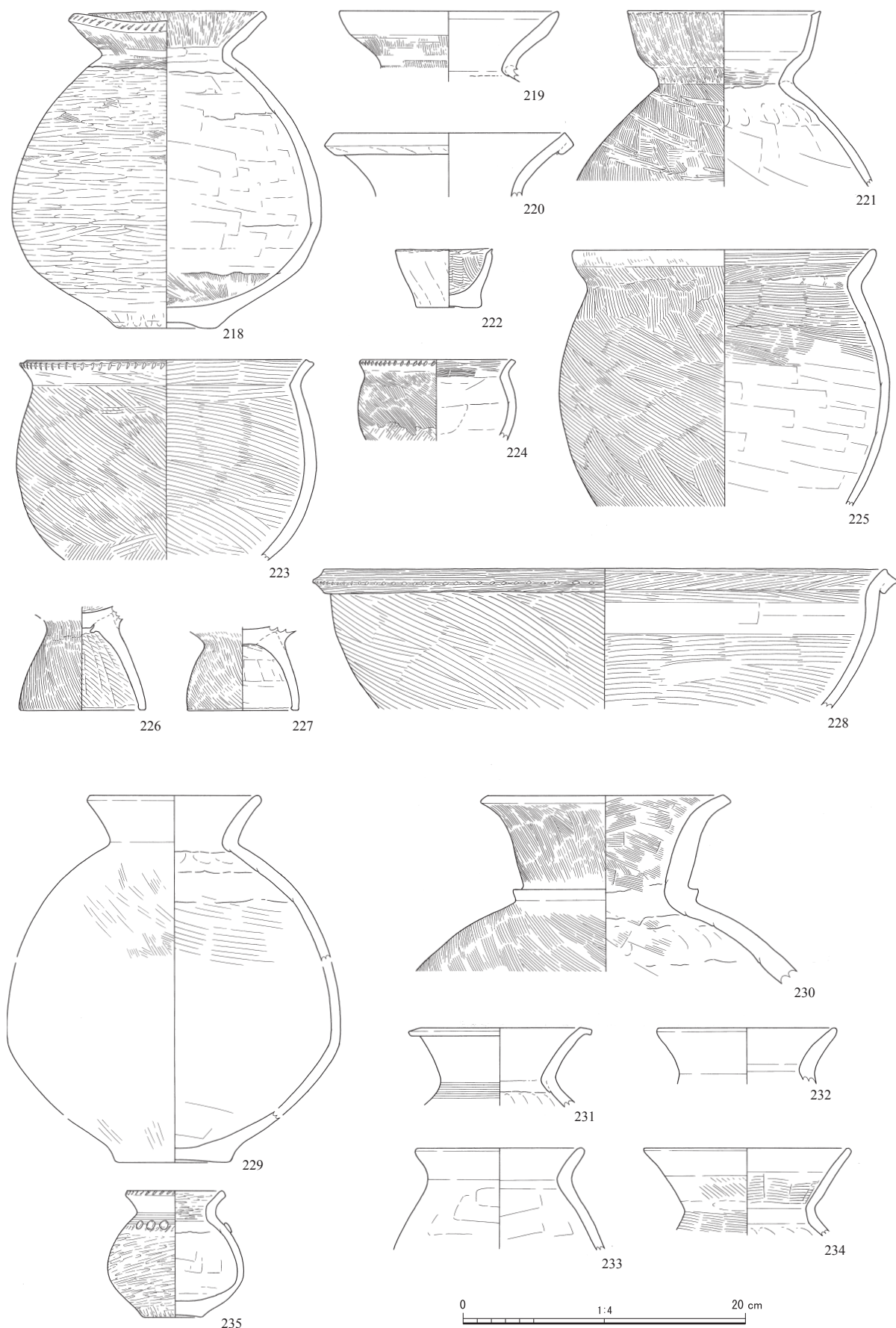


Fig.51 SX103 出土遺物 (1)

218 ~ 228 : SX103 東群 229 ~ 235 : SX103 中央群

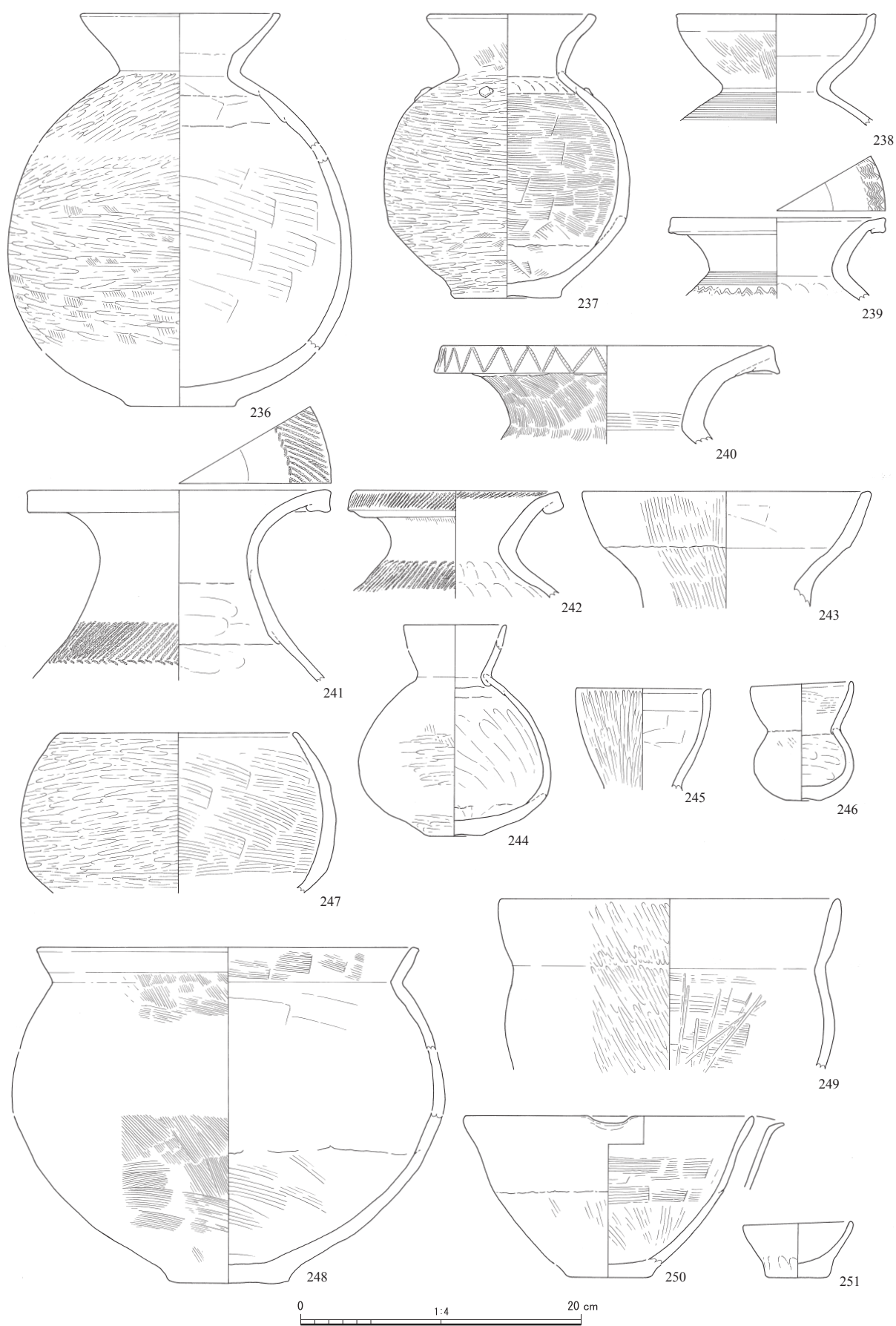


Fig.52 SX103 出土遺物 (2)

236 ~ 251 : SX103 中央群

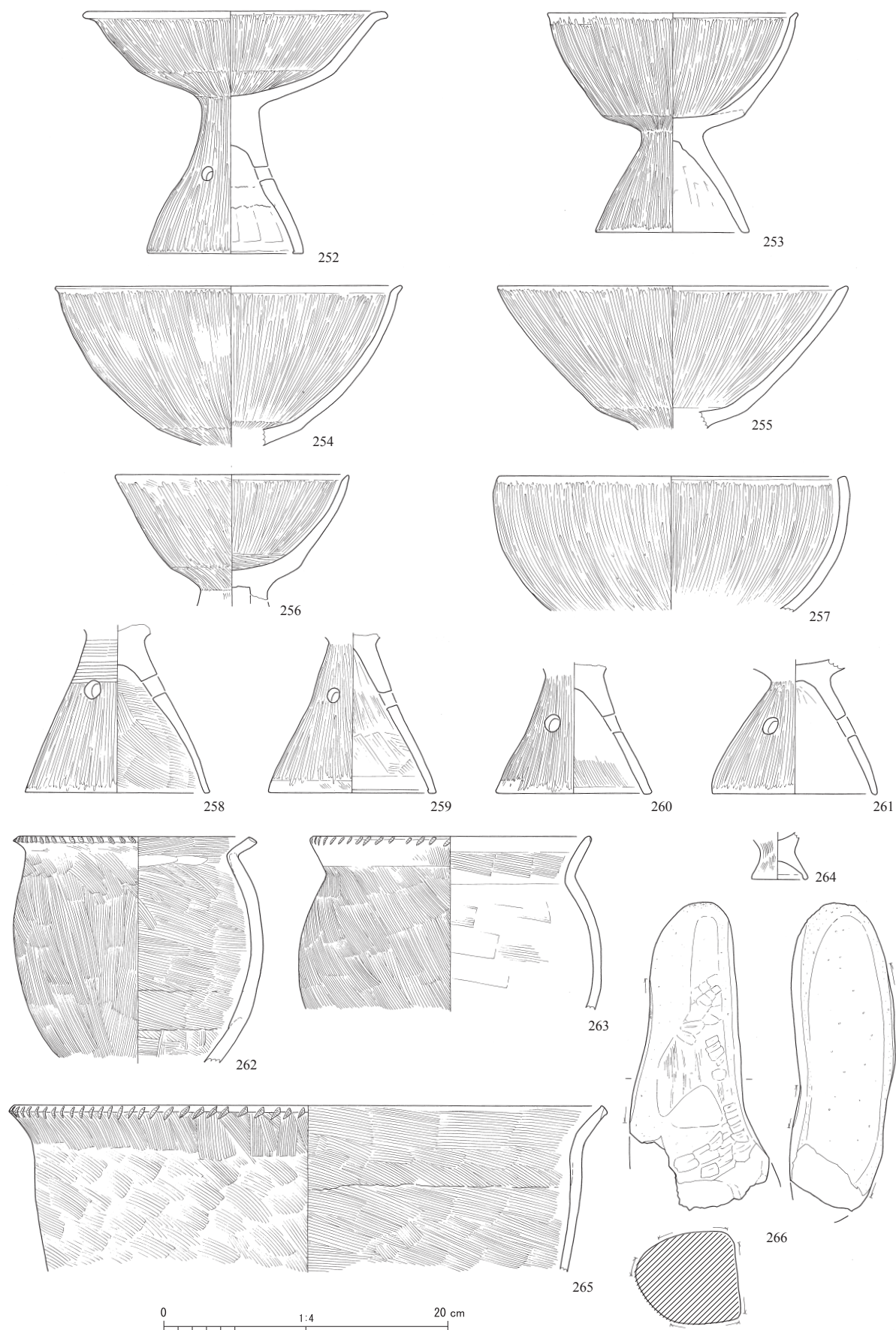


Fig.53 SX103 出土遺物 (3)

252 ~ 266 : SX103 中央群

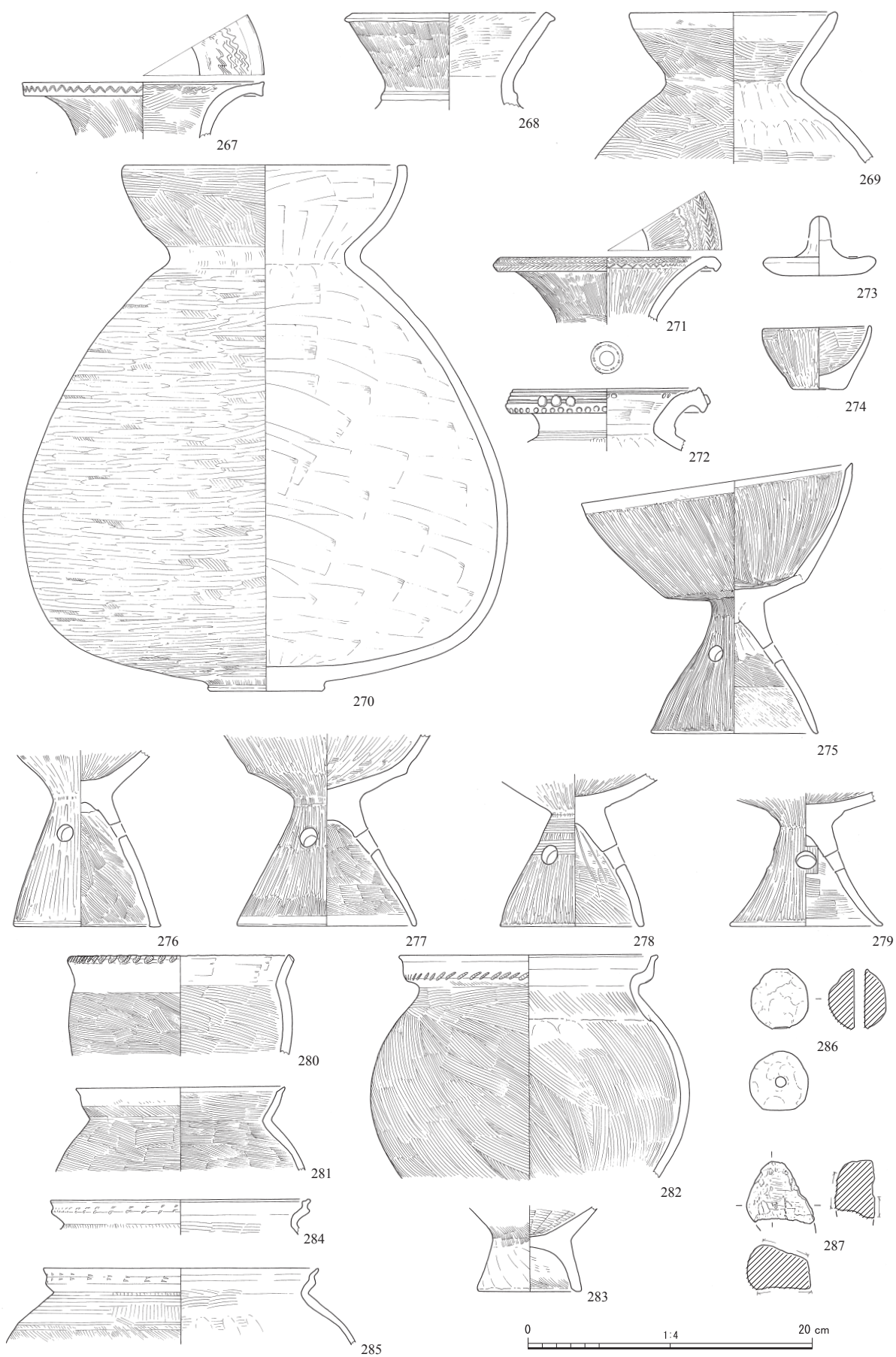


Fig.54 SX103 出土遺物 (4)

267 ~ 287 : SX103 西群

SX103 中央群の出土遺物は、山中式系統の高坏がほとんどみられなくなる段階といえるだろう。ここでは欠山Ⅱ式期（新相）に位置づけておきたい。

SX103 西群出土遺物 (Fig.54・55) 267～288はSX103西群から出土した遺物である。SX103西群はややまとまりに欠けた出土状態を示しており、遺物相互に時期差がある可能性がある。遺物群中にはS字甕A類（284・285）が含まれることから、欠山Ⅲ式期まで降るものがある可能性がある。ただし、高坏（275～279）は、欠山Ⅱ式的な形態をとどめるものが多いことから、SX103西群の出土遺物は、やや幅を持たせて欠山Ⅱ～Ⅲ式期に位置づけておきたい。

SX103西群からはFig.55に示す南関東系の壺が出土している。口縁は欠損するものの、胴部以下は全体形がうかがえる。肩部には、三連の自縄結節で区画された羽状縄文帯と、その下に、沈線で区画した大きめの山形文が配されている。山形文の中には模様の方に沿って羽状に縄文が施されている。

器形や、模様については東京湾西岸から房総半島の久ヶ原式から山田橋式の特徴を有している。いっぽうで、胴部の調整には在来的な技法であるハケが用いられている。焼成や色調、胎土も在来産の土器と同じである。南関東系の技法を熟知した人物が、当地において製作した土器と判断できるだろう。

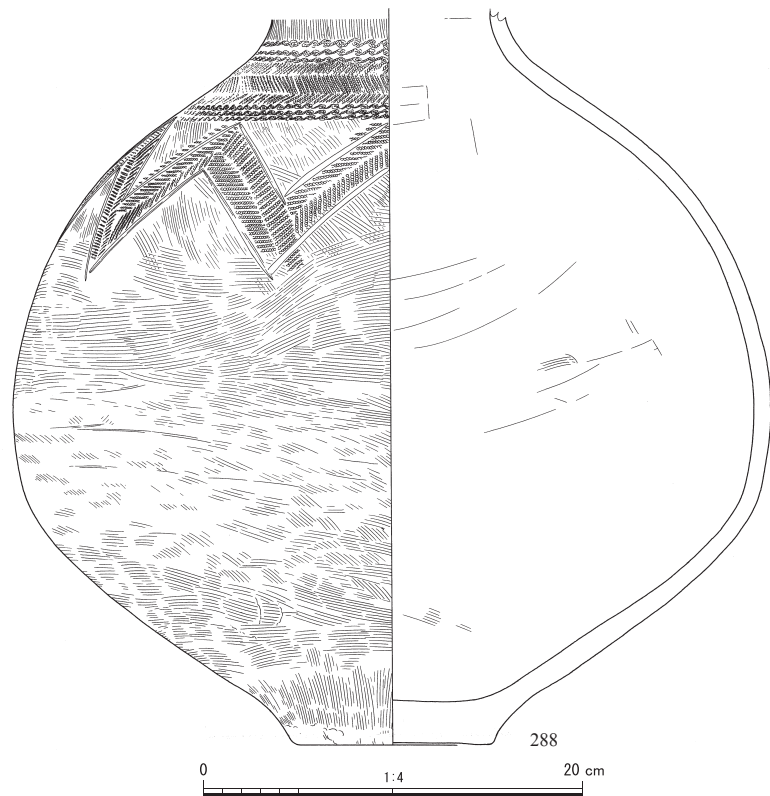


Fig.55 SX103 西群出土 南関東系土器

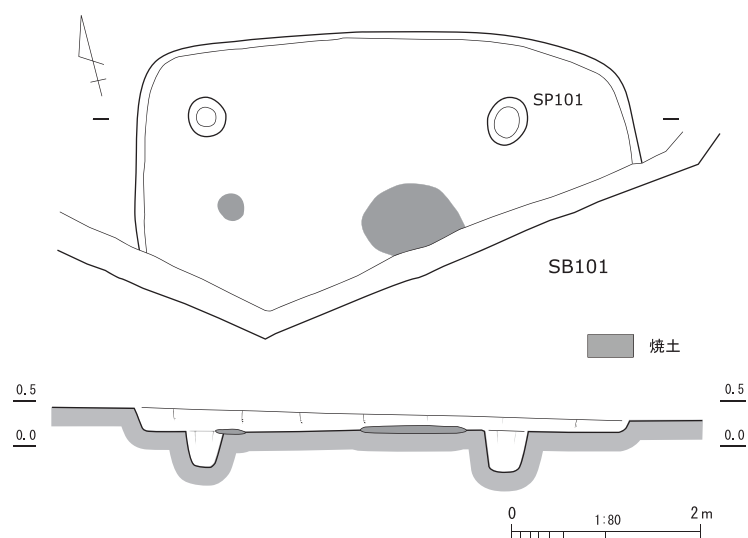


Fig.56 SB101 実測図

SB101 (Fig.56) SB101は、高位面で確認できた竪穴建物である。東西5.3mほどの規模であり、南側は調査区外に至る。柱穴は2箇所認められ、床面の中央には炉跡が確認できた。柱穴はともに明瞭で、床面から0.4mほど掘削されている。

この建物は焼失した可能性が高く、埋土に炭化物や焼土が多く含まれていた。微妙な色調、土質の違いから遺構の形態が認識できる好条件にあったといえる。伊場遺跡群の低地内では、弥生時代の竪穴建物の検出例が極めて少ない。SB101は確実な竪穴建物の検出例として重要である。従来、伊場遺跡群において明確な居住用の建物が検出できないことから、竪穴建物ではなく平地式の建物を住居として使用していたと考えられることがあった。今回、検出したSB101によって、弥生時代の伊場遺跡群が展開する低地に確実な竪穴建物があることが裏付けられたことから、住居としては竪穴建物を用いていたことが明確になったといえよう。

SB101からは289～291の遺物が、また、SB101に伴う柱穴の一つ(SP101)からは292～294の遺物が出土した。出土遺物や隣接する土器集積SX103の帰属時期から判断して、SB101は欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SB101 出土遺物 (Fig.57) 289～294はSB101から出土した遺物である。時期を明確にできるだけの資料とはいえないが、概ね欠山Ⅱ～Ⅲ式期に位置づけて矛盾はないだろう。

包含層出土遺物 (Fig.58) 295～299は上層遺構の確認作業中に包含層から出土した遺物である。297のようなS字甕A類が含まれることから、上層遺構の帰属時期は、欠山Ⅲ式期に接点があることがうかがえる。

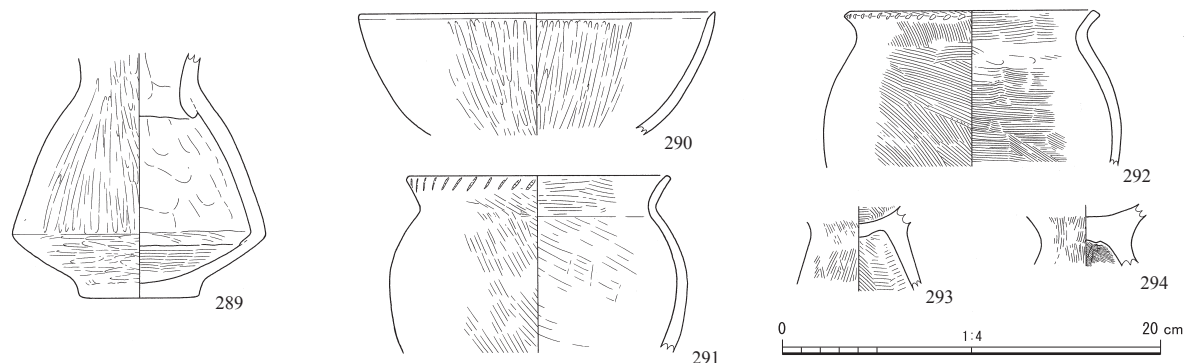


Fig.57 SB101 出土遺物

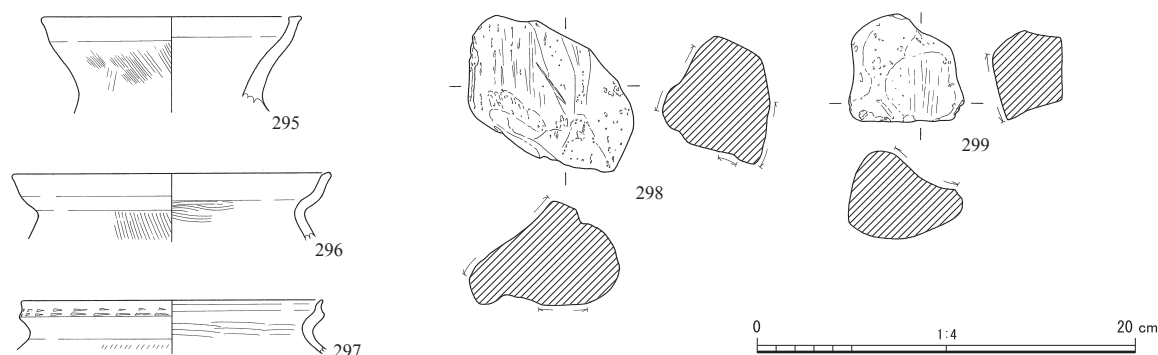


Fig.58 B区包含層出土遺物

(4) 上層水田域関連遺構

概要 (Fig.59) B区の上層遺構群のうち、東側の水田域には、大畦畔(SL101～103)に区画された水田と、大畦畔の間に挟まれた灌漑用水路と考えられる溝(SD103)が検出できた。大畦畔の上には土器集積(SX101・102)がみられ、水稻耕作にかかわる祭祀が執り行われていたものと判断できる。また、水田面には、薄い炭化物の集積がみられ、耕作土を平面的に認識することができた。水田の造営時期は、下層の環濠SD108が埋没した山中Ⅲ-2式期以降とみられ、欠山Ⅲ式期までが最盛期である。なお、水田の経営は、元屋敷Ⅰ式期まで続けられた可能性が考えられる。

SL101～103 SL101およびSL102は南北方向に設けられた大畦畔で、上面の幅はともに1.5m程度である。大畦畔上の標高と水田耕作面との比高は約50cm、灌漑用水路SD103の底面との比高は約1mである。SL103は東西方向に設けられた大畦畔で、南側半分が確認できた。なお、SL103の北側に水田面が展開しているかは不明瞭であり、正確な畦畔の幅は不明である。SL103の上面の高さは東に向かって低くなっているが、これは、遺構検出時に大畦畔部分も合わせて平面的に掘削したためであり、本来、高さの差異はなかったとみられる。これらの大畦畔は、黒灰色粘土を主体に盛り上げられている。盛土中の遺物は少ないが、SL102から出土した遺物(337～343)は山中

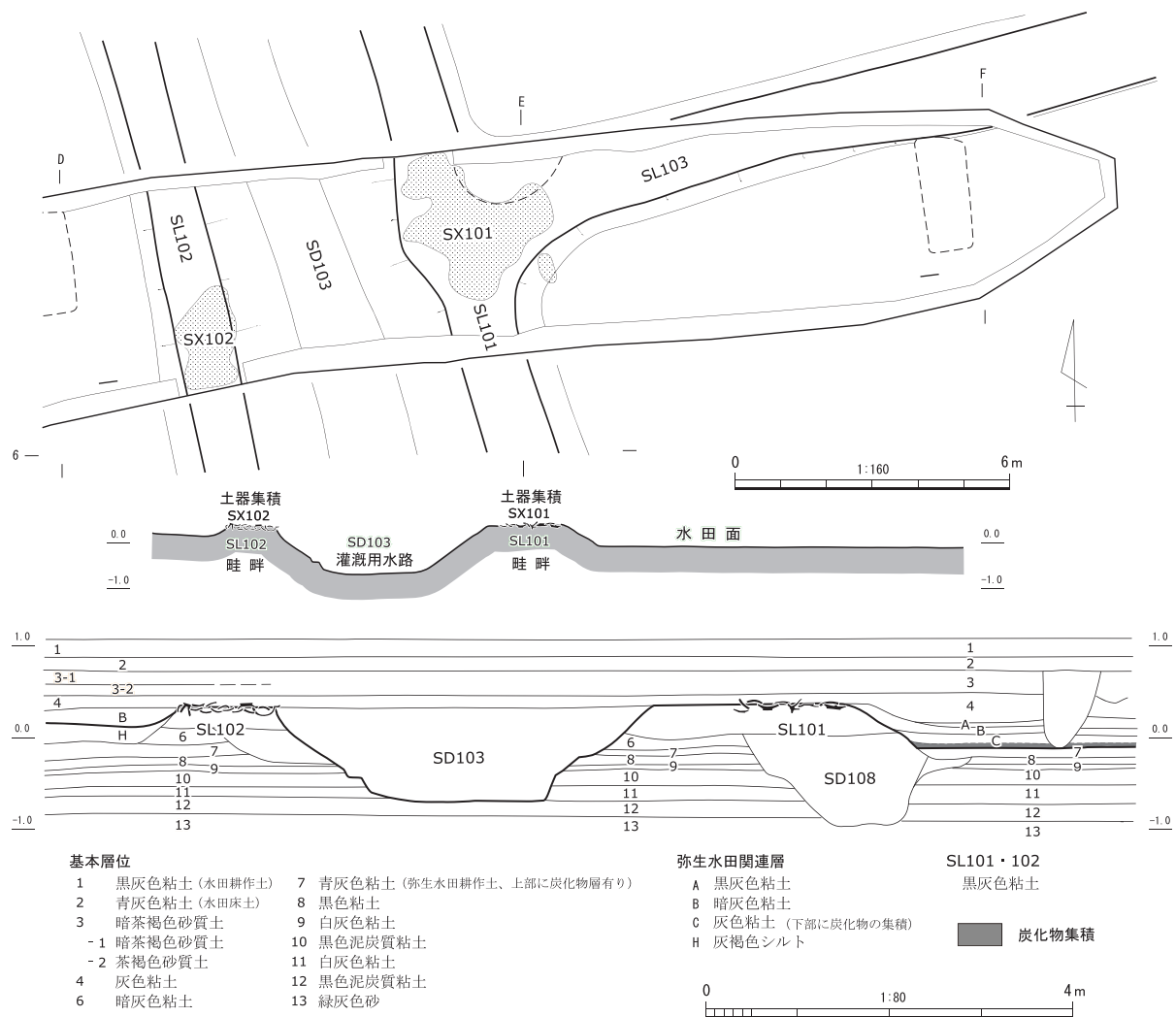


Fig.59 B区水田関連遺構

Ⅲ式期のまとまりがある。大畦畔の形成時期を示す遺物群として捉えておきたい。

SX101 (Fig.60) SX101は大畦畔SL101の上面で検出できた土器集積である。高坏や甕を主体に完形に近い遺存状態で多くの土器(304～336)が出土した。畦畔の上に完形の土器を置き、水稻耕作にかかわる儀礼を行った痕跡と捉えられる。312や315といった山中式系統の高坏の存在から、遺構形成の時期にある程度の時間幅をもたせて捉えることもできようが、出土土器が示す主体的な時期は欠山Ⅲ式期である。

SX102 (Fig.60) SX102は大畦畔SL102の上面で検出できた土器集積である。SX101と比べると、土器の残存率が低いものが目立つ。SX101のように完形の土器を集積したものと想定することは困難であろう。SX102から出土した遺物は、344～355である。これらの出土遺物から、SX102は欠山Ⅲ式期に形成されたものと考えられる。

SL101・103 出土遺物 (Fig.61) 300～303はSL101・103から出土した遺物である。300は鉢、301・302は高坏である。出土遺物の帰属時期は欠山Ⅱ～Ⅲ式期とみられ、大畦畔の造成時期をうかがうことができる。

SX101 出土遺物 (Fig.61～63) 304～336はSX101から出土した遺物である。ある程度の时期的なまとまりが認められ、土器編年上の基準資料として扱うことができる。

304～309は壺である。口縁形態は、直立口縁(304・305)、折返口縁(306・307)、複合口縁(308)の各種が認められる。308の肩部には、幅が広い直線文が広い範囲に施されている。

311～324は高坏である。山中式系統の高坏(311～315)と欠山式系統の高坏(316～323)が混在する。312や315といった山中式系統の高坏は遺存部分が大きく、出土状態も明確である。SX101を欠山Ⅲ式期の一括資料と捉えると、山中式系統の高坏がこの段階まで残存することを示すことになりうる。

325～336は甕である。在来のく字甕には刺突があるもの(325・326・328～330)と刺突をもたないもの(331～335)があり、後者の割合が比較的高い。甕脚台の接合部に粘土帯をめぐらすものも知られず、比較的新しい段階の特徴が看取できる。

327は口縁外面に輪積痕を残す南関東系の甕である。口縁端部には交互押捺を施し、胴部外面は細かい擦痕を残すイタナデ(ヘラナデ)によって仕上げている。形態的に新しい様相の特長をもつが、鳥居松遺跡の存続期間を考えると弥生時代後期末から終末期の初頭頃(廻間Ⅰ式期末頃)の所産と判断せざるをえない。山田橋2式期もしくは後続様式期に併行する東京湾東岸からの搬入品である可能性が高い。

以上、SX101から出土した遺物は欠山Ⅲ式期に位置づけるのが妥当と考えるが、山中式系統の高坏(312・315)や南関東系の甕(327)の取り扱いが問題となろう。

SL102 出土遺物 (Fig.64) 337～343はSL102から出土した遺物である。総数は少ないが山中式Ⅲ式期の遺物群と捉えて矛盾はない。大畦畔の造営時期を示すものと評価できるだろう。

SX102 出土遺物 (Fig.64) 344～355はSX102から出土した遺物である。図示できる資料が少ないため、明確な帰属時期を示すことが難しいが、S字甕A類(353)の存在を重視して欠山Ⅲ式期に位置づけたい。

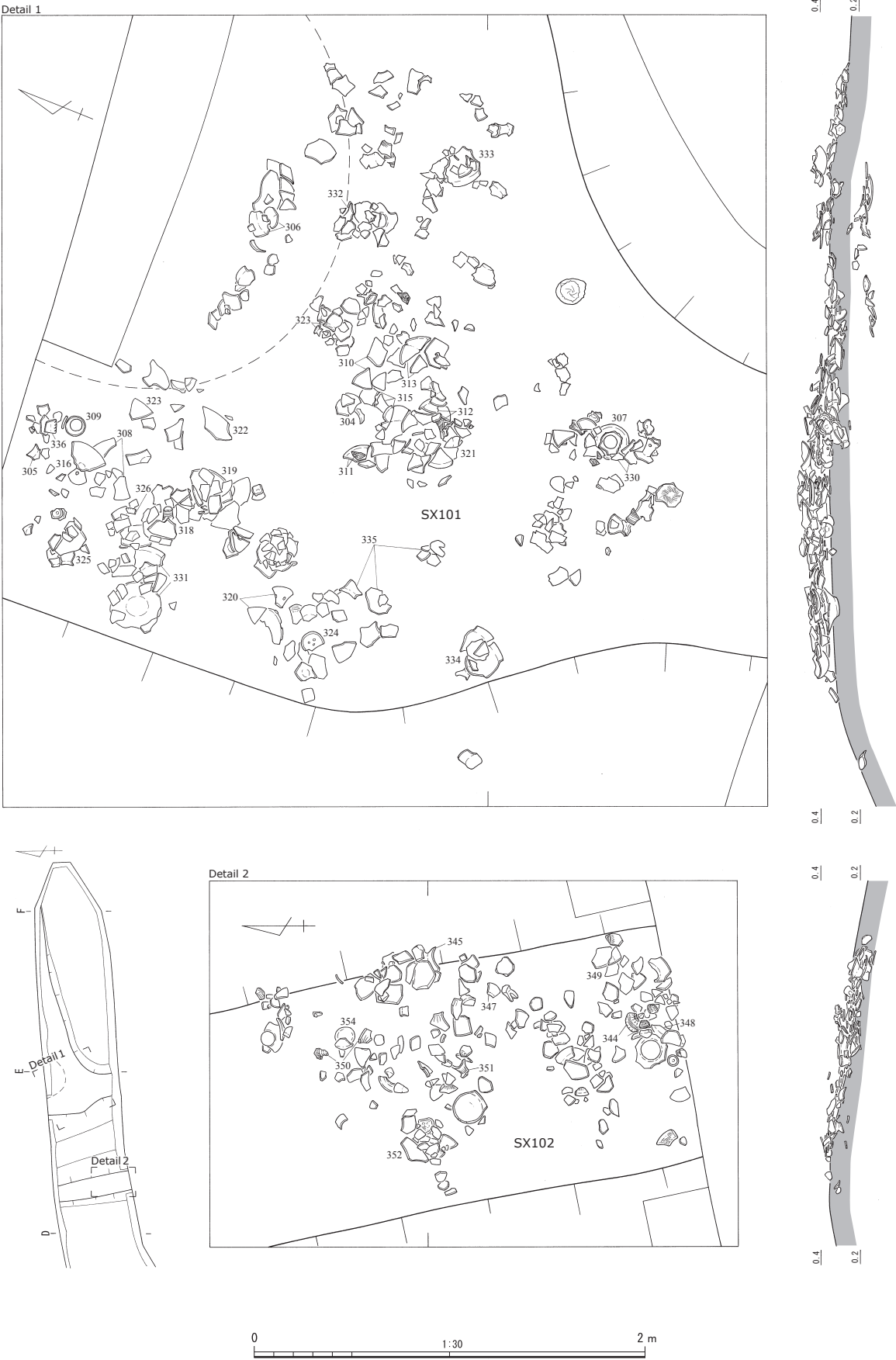


Fig.60 SX101・102 遺物出土状態

3 B区の遺構と遺物

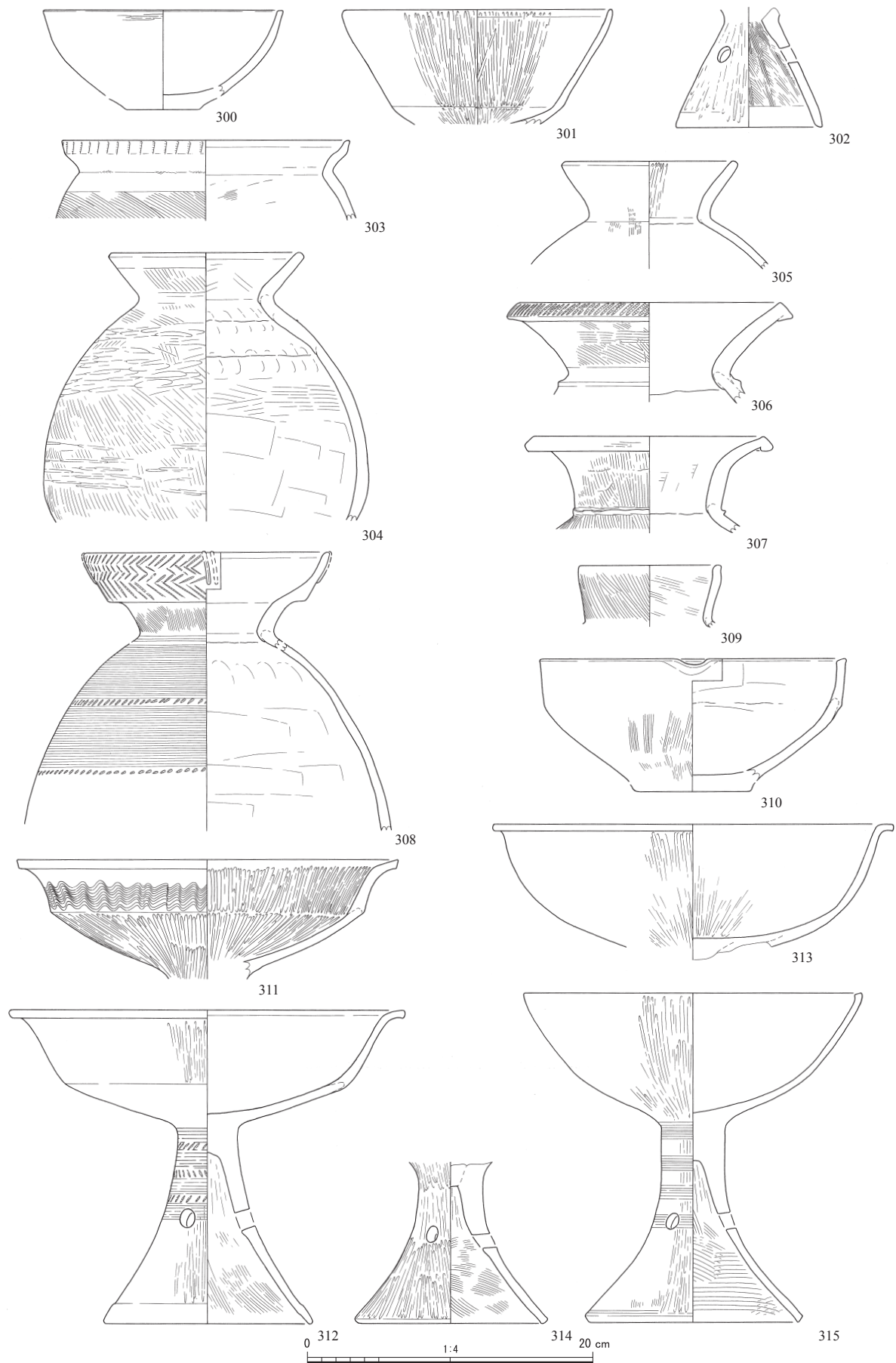


Fig.61 SL101・103 出土遺物・SX101 出土遺物 (1)

300・301 : SL103 302・303 : SL101 304～315 : SX101

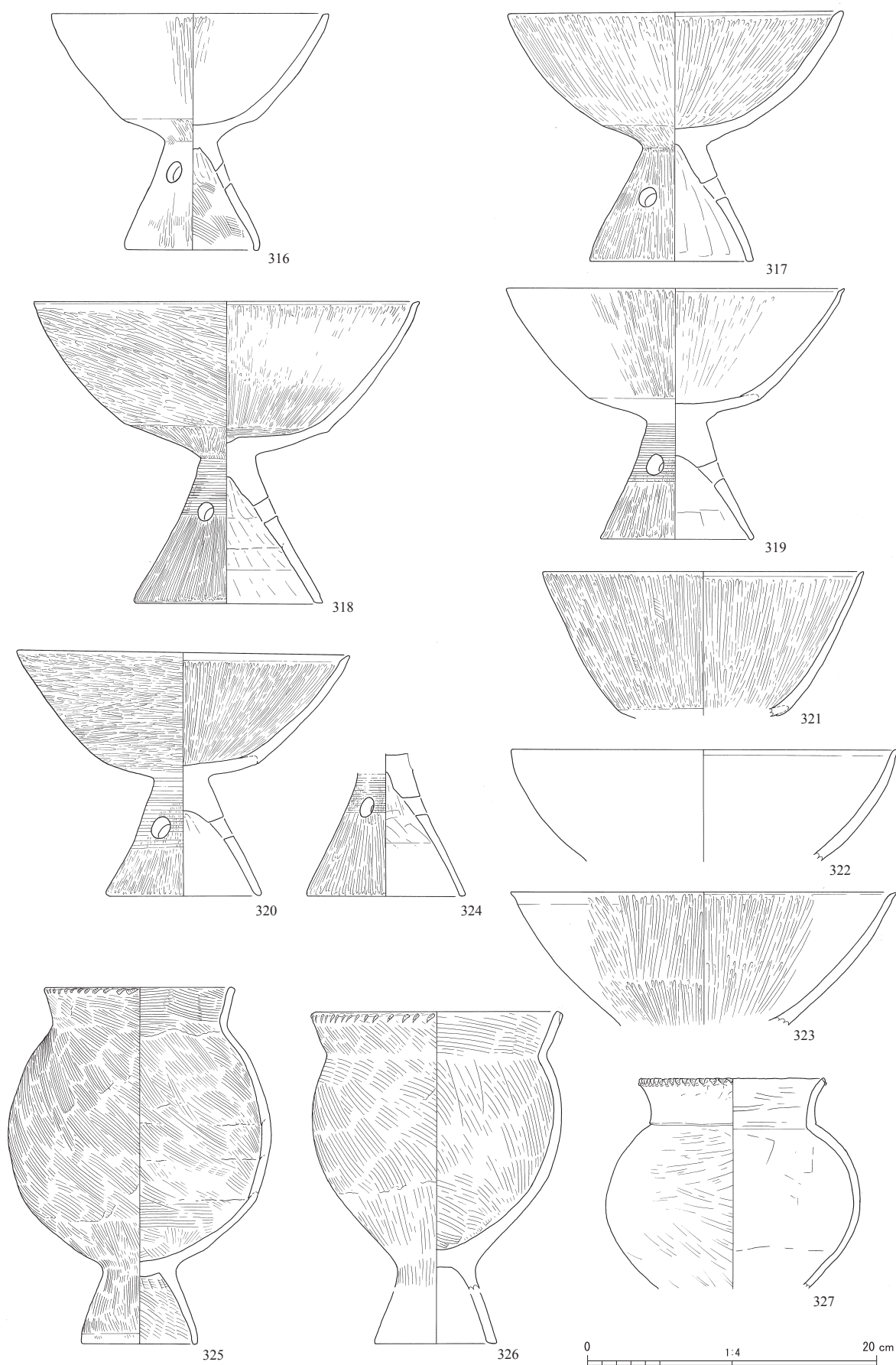


Fig.62 SX101 出土遺物 (2)

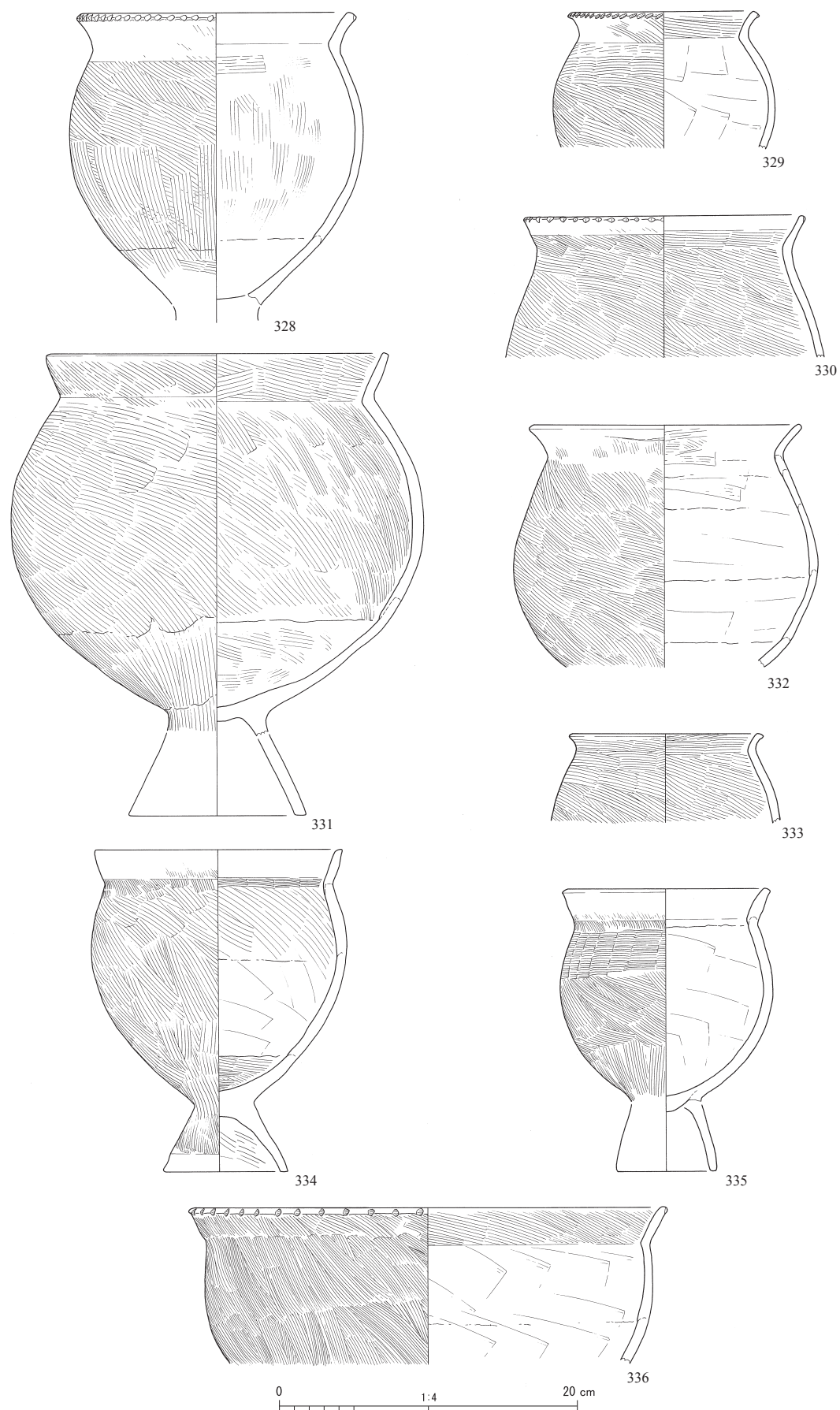


Fig.63 SX101 出土遺物 (3)

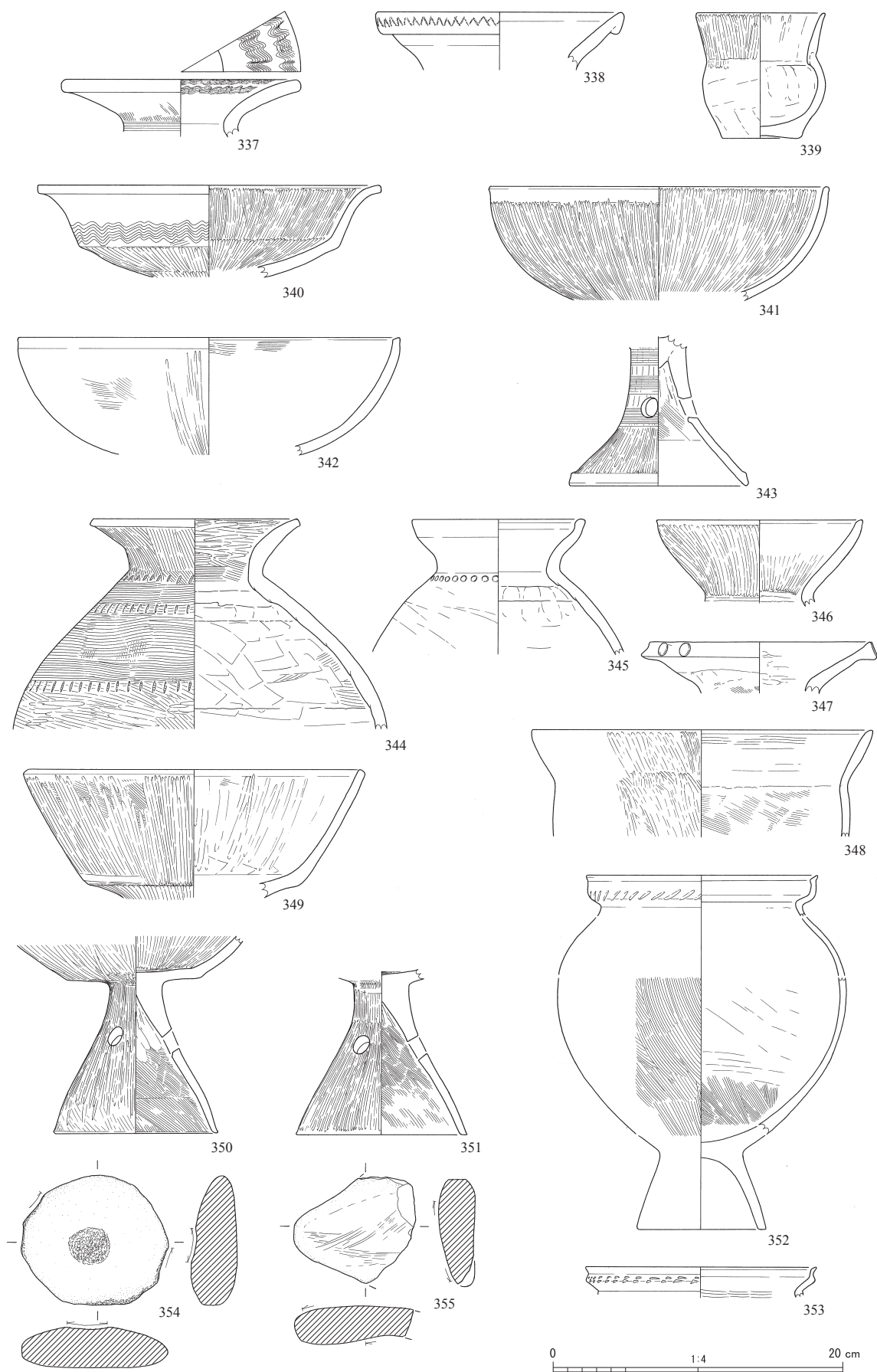


Fig.64 SL102・SX102 出土遺物
337～343：SL102 344～355：SX102

SD103 (Fig.65) 大畦畔 SL101 と SL102 の間には幅 4.0m、深さ 1.0m ほどの大規模な溝 SD103 が掘削されている。大畦畔に挟まれた溝の掘削位置から、SD103 は灌漑用の水路と判断できる。SD103 の埋土上面には、細かな粘土が緩やかに堆積しており、SD103 は水没して埋まっていったものと考えられる。SD103 からは 356 ～ 385 の遺物が出土した。遺物の出土状態は、大畦畔上から転落した様子が看取でき、SX101 や SX102 の遺物が水路内に落ち込んだものとみられよう。出土遺物から、欠山Ⅲ式期の遺構と捉えられるが、水田の造営開始時期を考慮すると、掘削時期はさらに遡る可能性がある。

SD103 出土遺物 (Fig.66・67) 356 ～ 385 は SD103 から出土した遺物である。大畦畔上から転落した状態で出土しており、SX101 出土遺物の内容を補完する資料群といえる。

356 ～ 371 は壺である。口縁形態には、外反口縁 (356)、直立口縁 (357)、屈曲する拡張口縁 (358・359)、内彎口縁 (360・361)、折返口縁 (362 ～ 366)、複合口縁 (367) が認められ、種類が豊富である。368 は菊川式の壺で搬入品である。

370 は瓢壺で口縁部と肩部に二枚貝による刺突がみられる。371 は口縁形態が明確でないが、瓢壺もしくは西遠江独特の口縁外面に刺突を多用する内彎口縁細頸壺の可能性がある。373 は碗形の小型鉢である。

374 ～ 378 は高坏である。完全な形態を示すものはみられないが、374 や 375 のように、坏部の開きがやや大きいものが含まれる。また、378 のように外側に開く脚部をもつ小型高坏がみられる。

379 ～ 382 は甕である。く字甕は、379・380 のように口縁端部に刺突をもたないものが主体である。また、受口状口縁の甕 (381) や S 字甕 (382) もみられる。382 は S 字甕 A 類であり、編年上の指標として捉えることができる。

以上、SD103 からの出土遺物には、瓢壺 (370) や小型高坏 (378)、S 字甕 A 類 (382) などが含まれる。壺の口縁形態や高坏の特徴、く字甕における口縁端部の様相などを加味すると、SD103 出土遺物は欠山Ⅲ式期に位置づけるのが妥当であろう。

SD103 からは僅かながら木製品が出土している。383 ～ 385 の 3 点を図示する。383 は柄穴入りの木製品である。木材は、スギを用いている。木取りが特殊で、柄穴が傾いてあけられている。用途は不明である。

384 も同様に柄穴をもつ棒状の木製品である。片側に自然の面を残し、一方を方形の棒状に加工し、一箇所方形の柄穴がみられる。

385 は加工痕のある棒状品である。外面の片方から抉りが入れている。欠損部分が多く、本来どのような形状であるのかうかがうことが難しい。

水田耕作土層の検出 (Fig.59) 大畦畔 SL101 と SL103 に囲まれた部分を水田面として認識した。Fig.59 に示すとおり、弥生時代の水田は基本層位 7 層 (青灰色粘土／シルト層) もしくは、その直上の基本層位 6 層 (暗灰色粘土層) を耕作土として用いている。7 層の上面には炭化物の層が厚さ 3 ～ 5cm 程度にわたり広がっていた。炭化物の集積は弥生時代の水田耕作土に相当するとみられ、A 区においても同様の特徴が認められた。炭化物の集積がみられる部分の標高は、A 区で 0m、B 区で 0.1m である。水田面にみられる炭化物は、刈り取り前の稲が洪水等によって埋もれたか、も

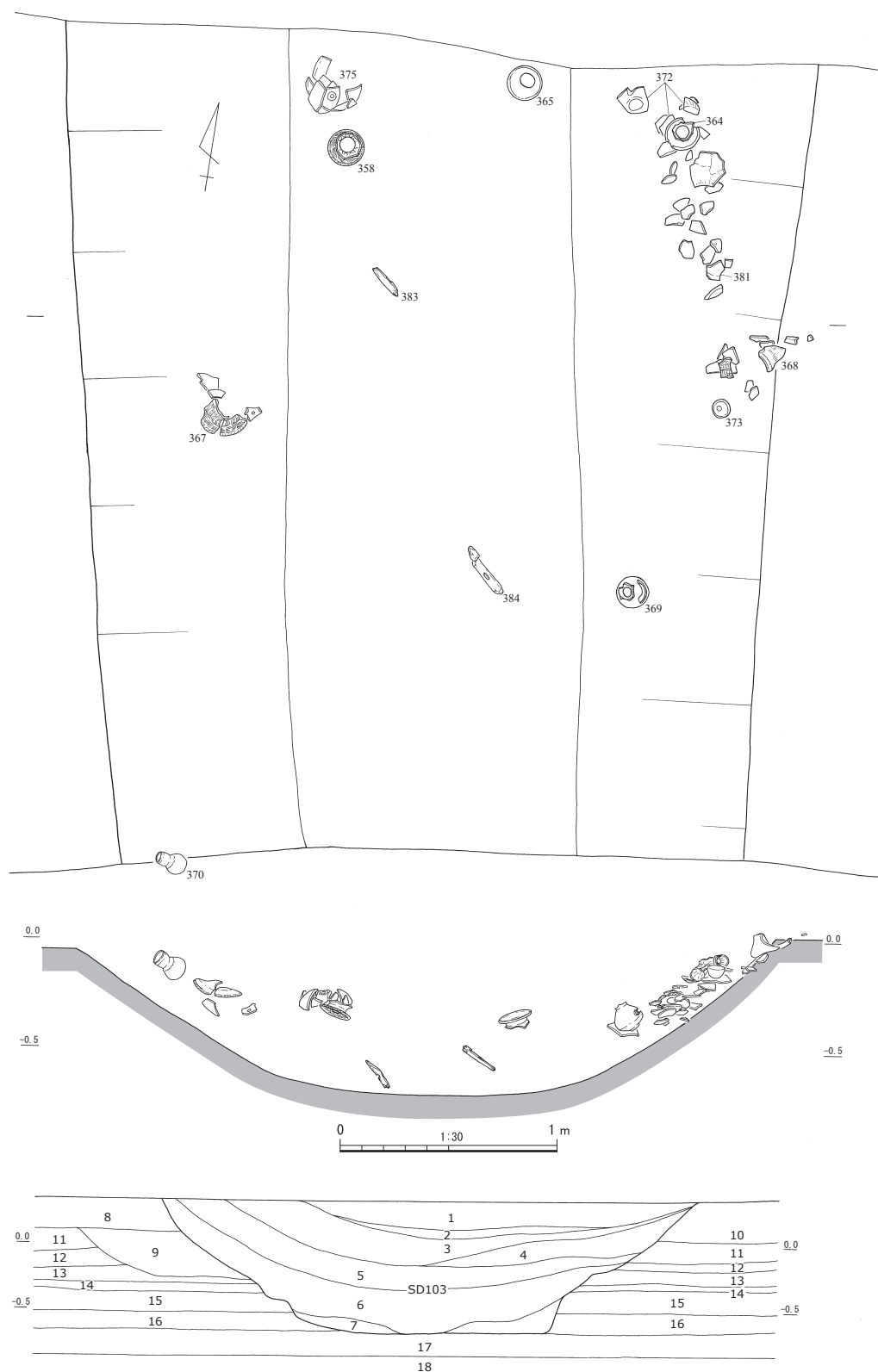


Fig.65 SD103 遺物出土状態

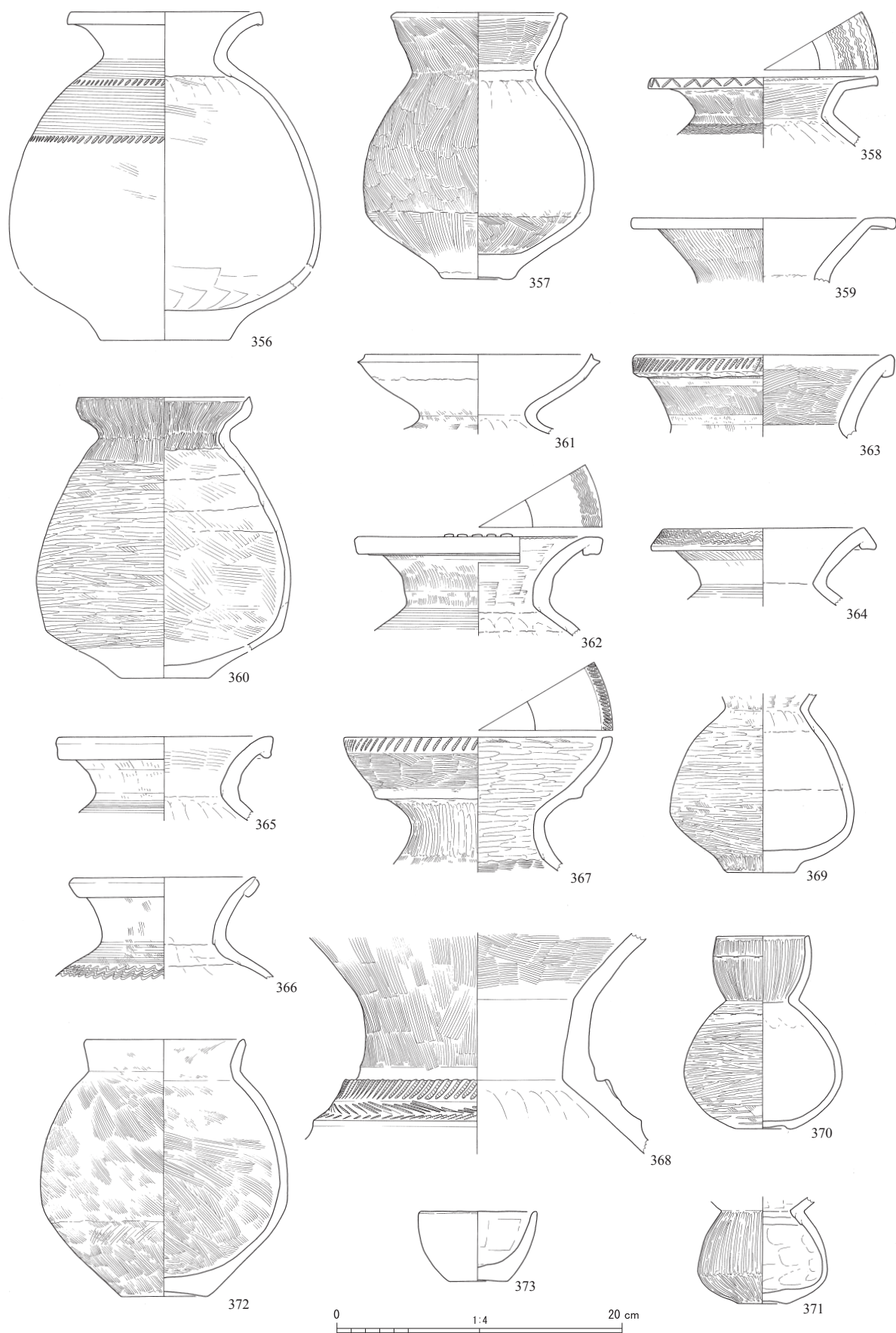


Fig.66 SD103 出土遺物 (1)

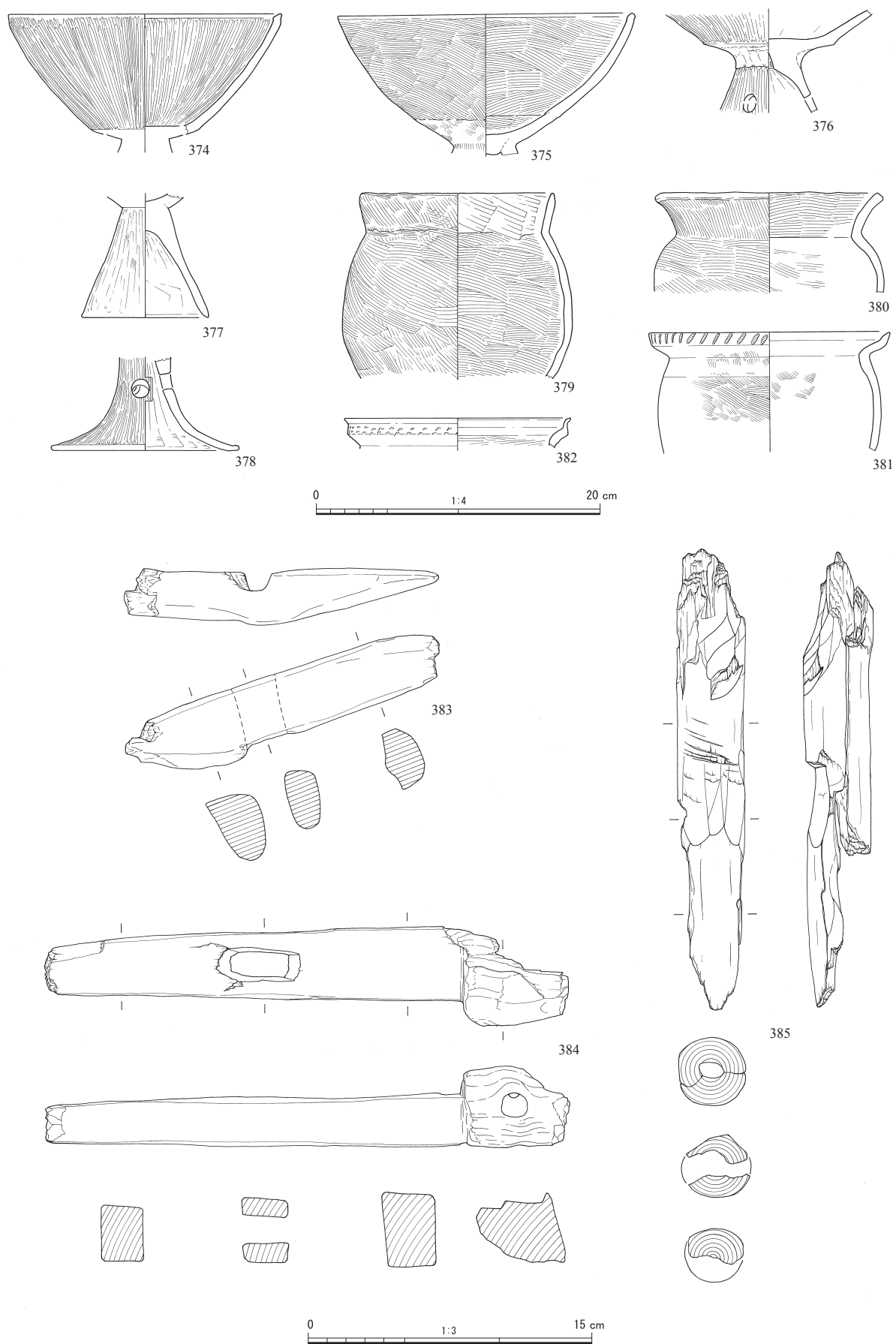


Fig.67 SD103 出土遺物 (2)

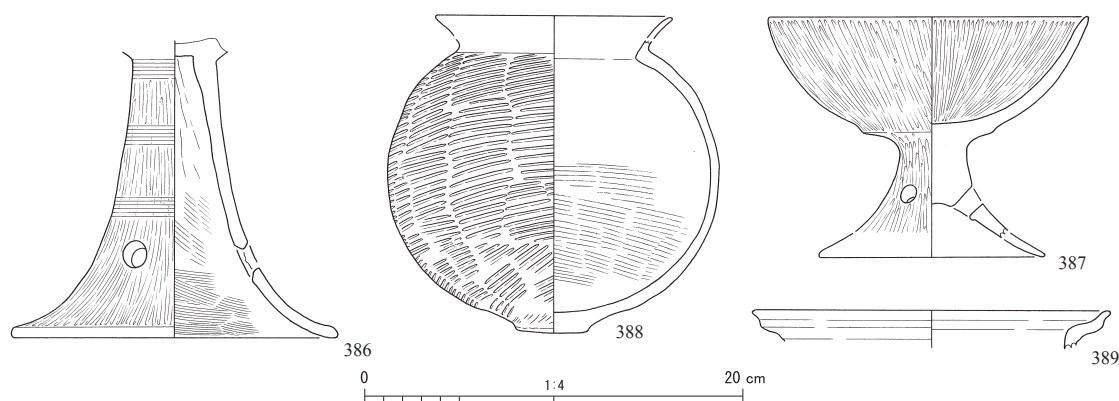


Fig.68 B区水田層関連出土遺物

しくは、収穫後に水田面に稲藁が集積され、次の耕作開始前に水田が埋没したことにより形成された可能性が考えられるだろう。

炭化物層は上位の粘土層から分離しやすいため、鍬を用いて上層の粘土を剥がして水田面を検出した。炭化物層は平面的に認識しやすいが、検出面の標高が僅かに上がり炭化物層が途切れる部分を確認できた。この部分が水田の畦畔にあたると考えられる。伊場遺跡群周辺の低位面では、水田の畦畔が認識しにくい場合が多いが、今回の調査は、炭化物の集積層が鍵層となって、水田の平面検出に成功した事例といえる。

なお、今回の弥生時代の調査においては、プラントオパール分析など、水田耕作にかかわる理化学的な分析は実施していない。

水田層関連出土遺物 (Fig.68) 386～389は、水田造営面にかかわる出土遺物である。386は水田面の最下層から出土しており、山中Ⅱ式期～山中Ⅲ-Ⅰ式期頃に位置づけられる。水田造営の開始時期を示すものといえるだろう。388や387は炭化物の集積層より上面の地層 (Fig.59におけるC層) から出土した遺物である。388は畿内Ⅴ様式系の甕であるが、球胴化が顕著であり、典型的な形態とはいえない。胎土に角閃石や雲母片を多く含み、明らかに搬入品と捉えられるが、その製作地は明確ではない。387は碗形の坏部をもつ小型高坏であり、元屋敷Ⅰ式期に位置づけられる。389は、水田耕作土の上層 (Fig.59におけるB層) から出土した遺物でS字甕C類である。元屋敷Ⅱ式期に位置づけられ、水田の廃絶の時期を示すものと捉えられる。

(5) 小 結

B区の調査によって、鳥居松遺跡における集落の様相が明確になった。集落は低位面と高位面が交錯する境界付近に立地し、低位面を水田域として、高位面を居住域として利用している。居住域には竪穴建物が用いられていたことが明確になった。

山中Ⅱ式期～山中Ⅲ-Ⅰ式期に集落の造営が始まり、その頃に水田も切り開かれたとみられる。環濠も集落の造営開始期に掘削されたとみられよう。その後も集落の施設は拡充し、欠山Ⅱ～Ⅲ式期には、灌漑用水路と大畦畔を備えた水田が造営されたとみられる。大畦畔上には、土器を用いた儀礼が行われ、高位面の周囲に広がる窪地には土器が大量に廃棄されていた状態が確認できた。

4 C区の遺構と遺物

(1) 検出遺構の概観

C区の弥生時代の遺構検出面は、下層と上層、および最上層の3層に分離することができる。下層遺構は欠山Ⅰ～Ⅱ式期に、上層遺構は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に、最上層遺構は欠山Ⅲ式期～元屋敷Ⅰ式期にそれぞれ位置づけられる。C区で検出できた遺構の中心は、自然河川SD201である。SD201の埋没過程の諸段階にわたり土器が大量に投棄され、最終的に浅い窪地になった後も、土器が集積されたものとみられる。

(2) 下層遺構

SH201 (Fig.69) SH201は自然河川SD201の西岸にある掘立柱建物である。3つの小穴が一直線に並び、南側の発掘外に対になる柱穴列があるとみられる。調査範囲が限られるため、正確な規模は不明であるが、SH201は梁間2間、桁行1間もしくは梁間3間、桁行1間の掘立柱建物とみられる。梁間の間隔は、柱穴の中心間で計測して1.5～1.6m程度である。弥生時代後期の掘立柱建物として、一般的な大きさであると評価できる。

柱穴からの出土遺物に恵まれず、遺構の正確な帰属時期は不明である。下層の遺構は、山中Ⅲ式期～欠山Ⅱ式期であることをふまえると、SH201も同時期の遺構と捉えられよう。

SD201 (下層) (Fig.71) SD201はC区の東側半分を北東―南西方向に区切る自然河川である。SD201は、基本層位7層から切り込んでおり、底面の深さは標高-0.6mである。下層検出面における幅は約6m、検出面からの深さは0.6mほどである。西側の岸は直線的で斜面も比較的緩やかであることに對し、東側の岸は入り組んでおり、斜面の傾斜が急な部分がある。また、北東側では流路本体が二股に分かれているような状況を呈しており、単純な河川の形態をなしていない。一定の幅をもった河川を想定するより、入り江状の窪地を想定する方がよいかもしれない。

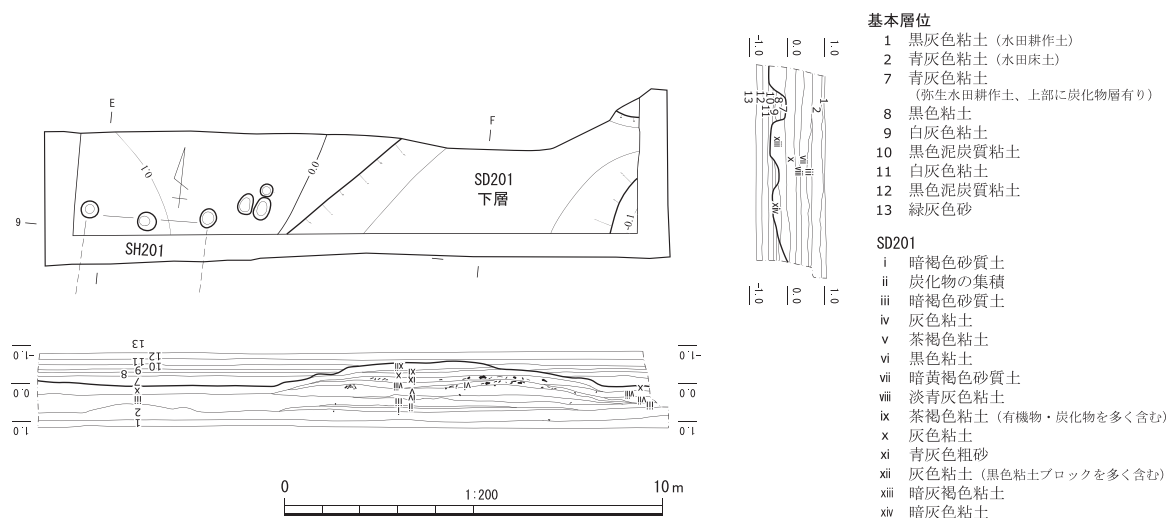


Fig.69 C区下層遺構

SD201は埋没過程において断絶期がみられる。埋土の中間において、暗黄褐色砂質土層（vii層）や淡青灰色粘土層（viii層）といった遺物をほとんど含まない堆積層が認められた。この中間層を境界に、SD201の埋土を大きく上層（i～vi層）と下層（vii～xii層）の2層に分離する。SD201からは極めて大量の遺物が出土しており、これらの遺物も上層と下層の2群に分けることができる。下層の遺物群は欠山Ⅱ式期に、上層の遺物群は、欠山Ⅲ式期にそれぞれ位置づけられる。ただし、下層の遺物群には、若干古相を示す個体が多く、SD201への土器の廃棄は欠山Ⅰ式期に始まっている可能性が高い。上下層で出土遺物の帰属を分離したが、上下各層から出土した遺物が接合する場合が認められた。こうした個体は、すべて下層出土遺物として扱っている。

SD201下層からは390～582の遺物が出土した。土器の密集度が非常に高く、土器片を敷き詰めたような出土状態を示している。遺物の出土状態からは比較的短期間に廃棄された経緯がうかがえるだろう。なお、先述した試掘坑17出土遺物（Fig.18-114～127）は、SD201に含まれる遺物とみられる。

SD201 下層出土遺物（Fig.72～86） 390～582はSD201下層から出土した遺物である。一つの遺構から出土した量としては、今回の調査中で最も多く、時期的にもある程度のまとまりを認めてよい。今後、土器編年上の基準資料として取り扱うことができるだろう。

390～440は壺である。口縁形態には、外反口縁（390～401）、直立口縁（402～404）、内彎口縁（405～418）、受口状口縁（419）、拡張口縁（420～422）、折返口縁（423～434）、複合口縁（436～439）の各種が認められる。なお、427～435は、搬入品もしくは他地域の土器との折衷形態とみられる。壺の肩部には、直線文が多用され、409や420、436・437のように幅が広い個体が含まれる。直線文以外の模様には、波状文をもつもの（390・405）がわずかに含まれるが、圧倒的多数であるのは刺突文である。

搬入品もしくは他地域との折衷形態とみられる壺は比較的多い。427～433は、菊川式、もしくはその影響を受けた土器である。胎土や色調から、浜松南部地域で作られたとみられるもの（427・428）、都田川流域から搬入されたとみられるもの（432）、天竜川以東から搬入されたもの（429～431・433）がある。

434、および435は南関東系の土器である。434は折返口縁の壺である。やや長めの胴部の中ほどに最大径があり、頸部はゆるやかに屈曲して口縁端部に至る。折返口縁の端部外面には、布目状の押捺がみられる。口縁内面および頸部から胴部にかけては、櫛状工具による直線文、波状文がみられるが、条痕や波状文の振幅の状態などは、在来の土器にはない特徴をもつ。櫛描模様帯の下位には、沈線区画による山形文が入れられている。胴部下はタテミガキによって調整されている。色調は赤褐色を呈し、胎土に細かな黒色粒子を多く含む。色調、胎土からも、この土器が他地域から搬入されたことが分かる。胎土の特徴から、この壺は駿河よりも東の地域で製作されたとみられるが、その故地について明確に示すことは難しい。器形は南関東の中期後半の宮ノ台式に近似するが、製作時期はそれより降る。櫛描模様を用いるのは相模までで、それより東ではみられない。口縁端部の布目状の押捺は、相模に少量みられるものの、その分布の中心は東京湾西岸から房総半島にある。この土器にみられる特異な要素をそれぞれ抽出すると、南関東に系譜が求められるものが

多いが、特定の地域にその産地を求めることができない。各地の要素が取り込まれた折衷的な性格が強い土器といえるだろう。

435 は鉢に似た形状をもつ広口壺の肩部である。羽状の縄文帯の下に僅かな突出があり、この部分に刺突文が施されている。南関東の山田橋式の中に典型的にみられるもので、同地域からの搬入品の可能性が高い。

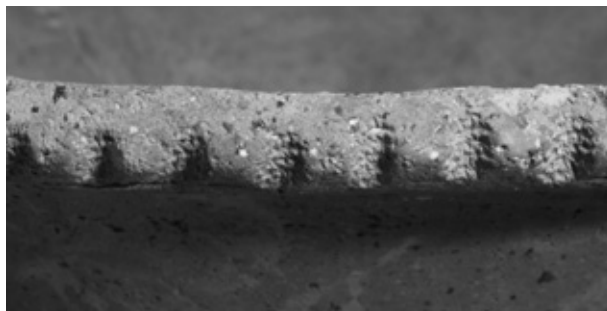


Fig.70 口縁外面の布目状押捺 (434)

441 ～ 444 は無頸壺である。441 の端部には2方向に2箇所穿孔がみられる。443・444 は蓋付の個体で、紐通しの突起部分がみられる。こうした造作は木器に散見できることから、木器の特徴を模倣したものとみられる。443・444 は内外面ともに丁寧なミガキが施されており、精製土器といえる。445 は小型の壺蓋である。

446 ～ 481 は鉢である。446 の折返口縁の鉢は菊川式の搬入品とみられる。製作地は都田川流域の可能性が高い。450 ～ 453、456 ～ 458 は、無文のく字鉢の中・小型品、454・455 は装飾く字鉢である。459 ～ 473 は小型直口鉢である。472・473 のように、口縁外面に刺突文をめぐらすものがみられ、473 は中空にされた脚部が連なる。474 も同様に脚部をもつ小型の鉢とみられよう。475 ～ 480 は片口鉢である。片口部分が遺存しない個体もあるが、形態的特長から片口鉢とみてよいだろう。481 は碗形鉢である。

482 ～ 535 は高坏である。山中式系統の高坏 (482 ～ 505) と欠山式系統の高坏 (506 ～ 531) が混在する。482 は装飾高坏である。脚部には逆水滴形および杏仁形のスカシ穴がそれぞれ、交互に5箇所入れられている。山中式系統の高坏には、外反坏部 (483 ～ 486)、く字碗形坏部 (487 ～ 493)、碗形坏部 (494) の各種が認められる。脚部 495 ～ 505 の外形は、直線化もしくは内彎化が顕著なものが多く、端部の折り返しも痕跡程度に残存しているにすぎない。506 ～ 520 は欠山式の古相を示す長脚の内彎する有稜高坏である。521 ～ 531 は欠山式の典型的形態の有稜高坏である。521 や 522 にみるように坏部は深く、527 ～ 529 のように脚部の内彎傾向が顕著な個体が多い。532 は、碗形低脚高坏である。533 ～ 535 は小型高坏とみられる。

536 ～ 574 は甕である。在来品のく字甕が主体であるが、口縁端部を折り返す 540 は菊川式の搬入品とみられる。く字甕の口縁には刺突があるもの (536 ～ 567) が主体であり、586 ～ 570 に示すように刺突がないものは少ない。脚台接合部に粘土帯を巡らせるものは、536・537 など比較的少ない。572 は甕の脚台部から底部にかけての部位であるが、接合部の擬口縁が明瞭に遺存する個体である。焼成中かもしくは使用している過程で接合部から剥離した後も、何らかの用途に用いたものとみられる。573・574 はく字大型甕である。

575 ～ 582 は砥石である。575・576 は凝灰岩、577 ～ 582 は軽石を用いている。

以上、SD201 下層出土遺物は、山中式系統の高坏が一定量みられるものの、欠山Ⅱ式の典型的な組成をもつ。欠山Ⅰ式的な古相を示す高坏も多くみられることから、欠山Ⅱ式の中でも古い様相をとどめる時期に位置づけたい。山中式系統の高坏も、この段階までは残存していると捉えられる。

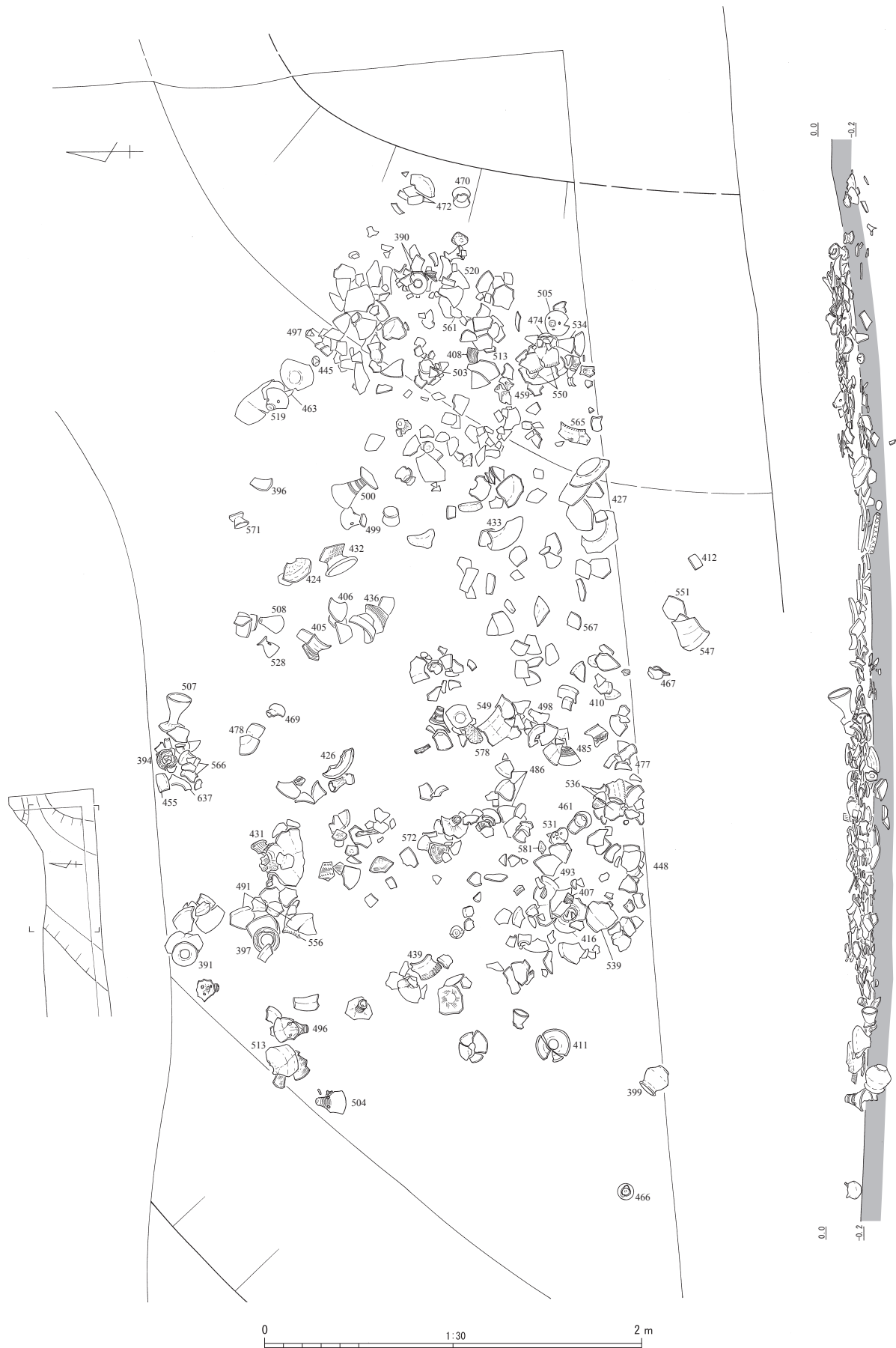


Fig.71 SD201 下層遺物出土状態

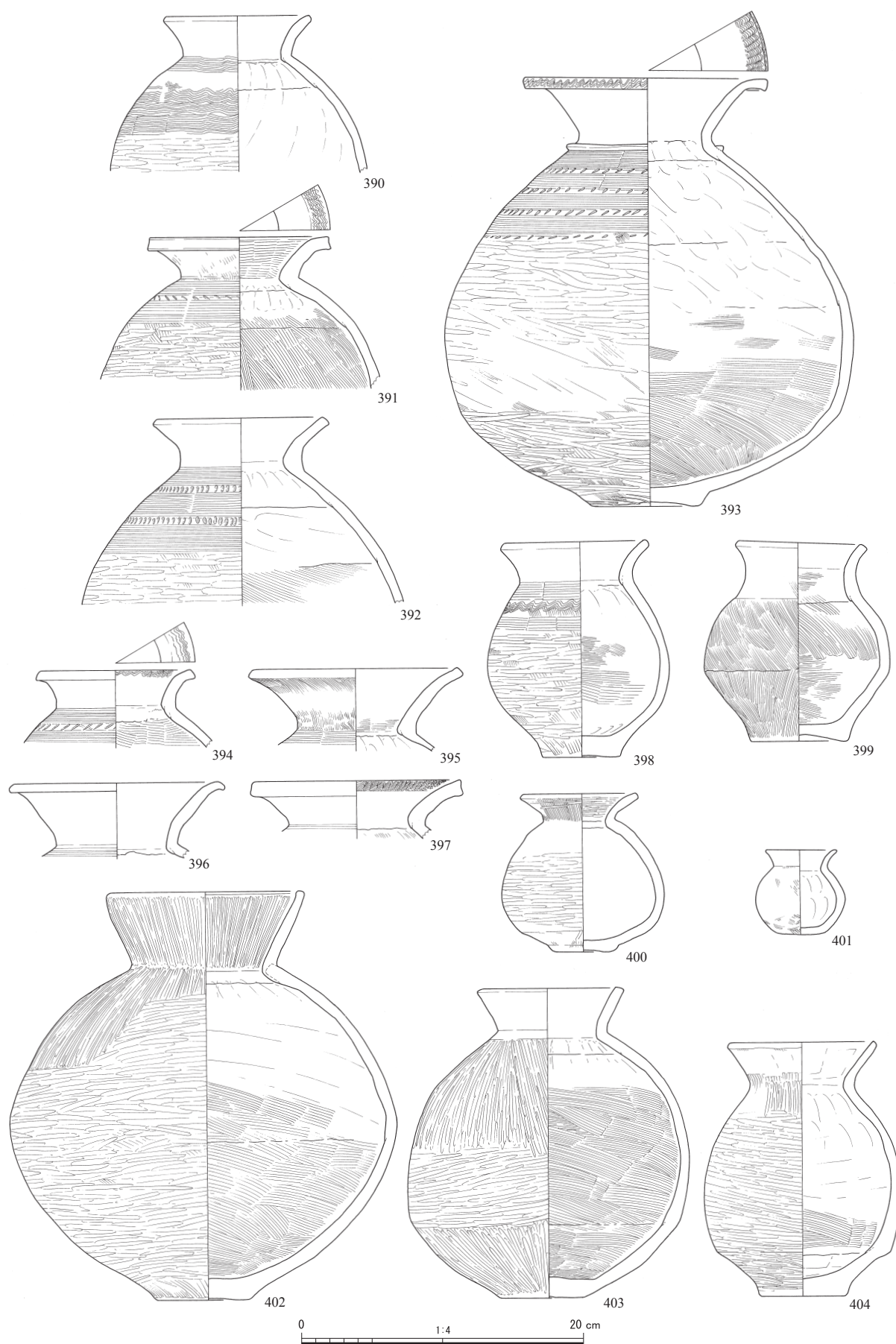


Fig.72 SD201 下層出土遺物 (1)

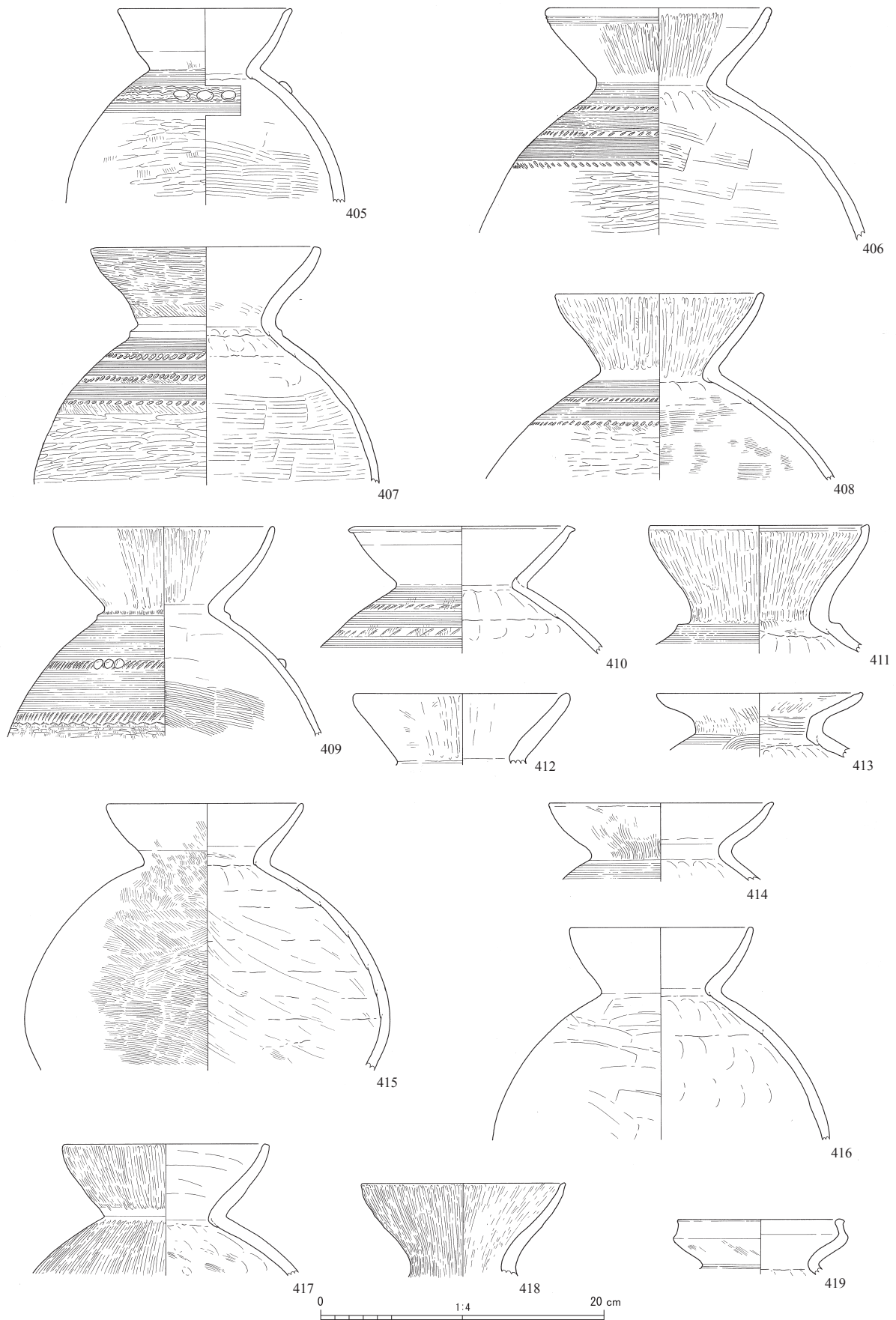


Fig.73 SD201 下層出土遺物 (2)

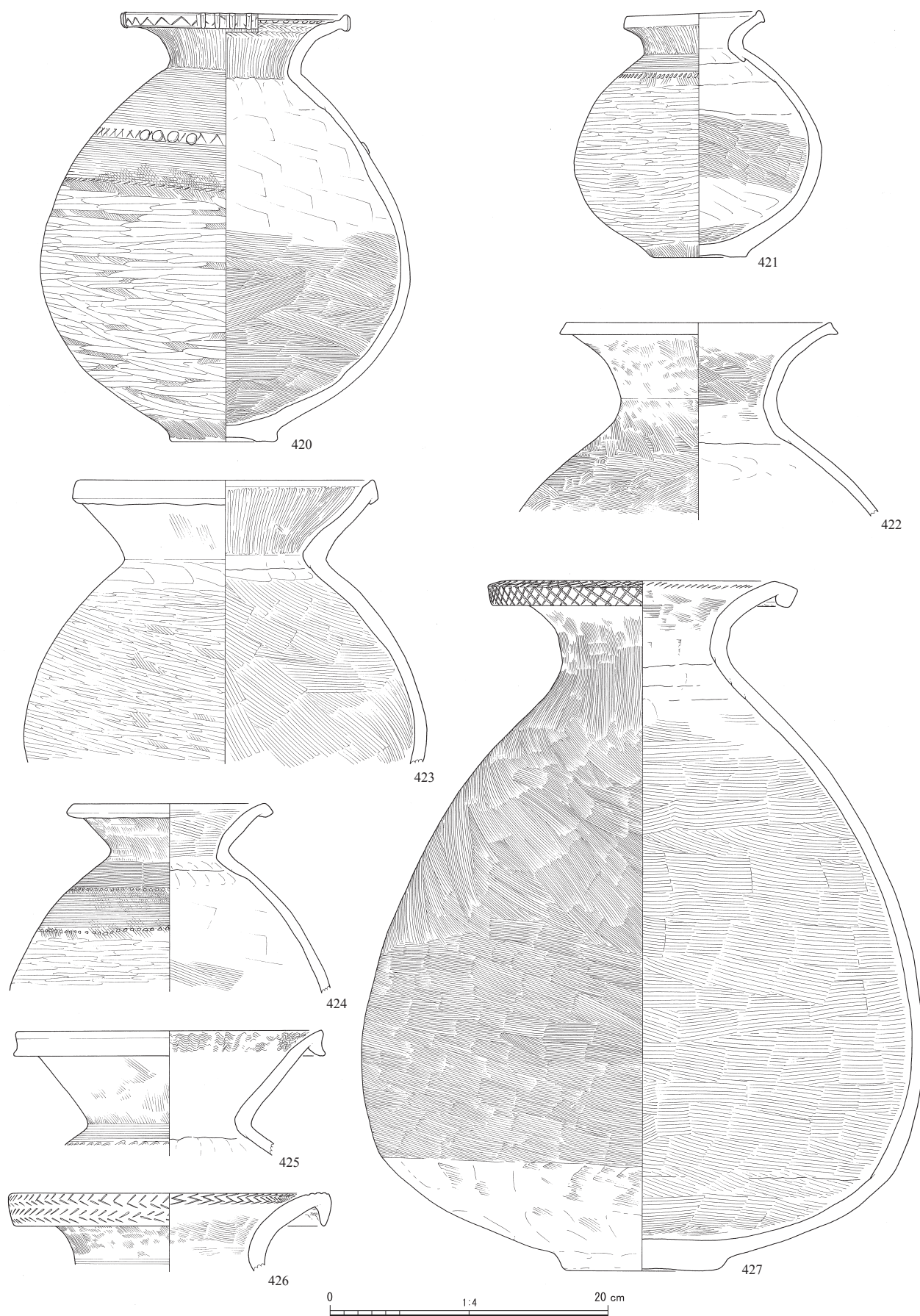


Fig.74 SD201 下層出土遺物 (3)

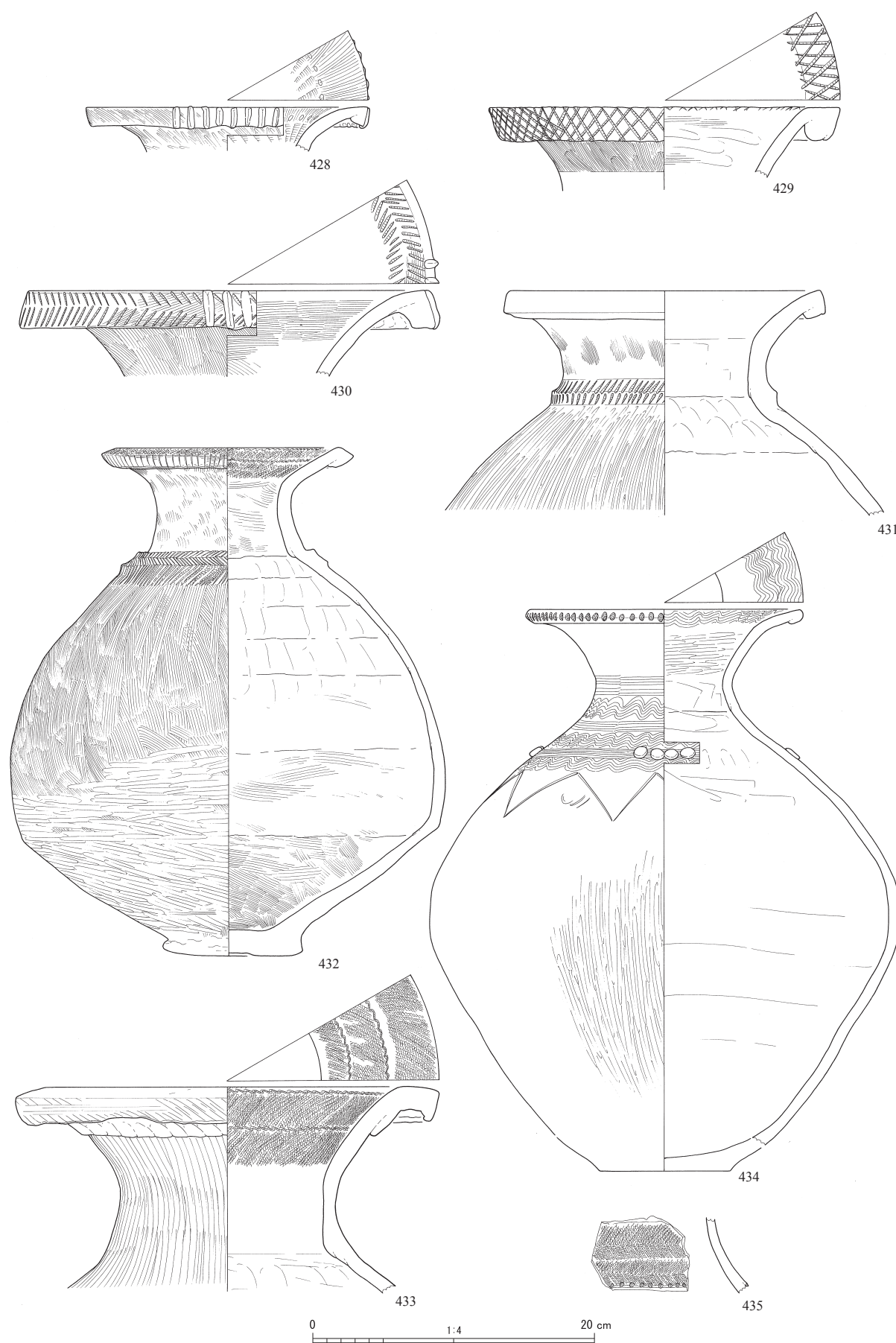


Fig.75 SD201 下層出土遺物 (4)

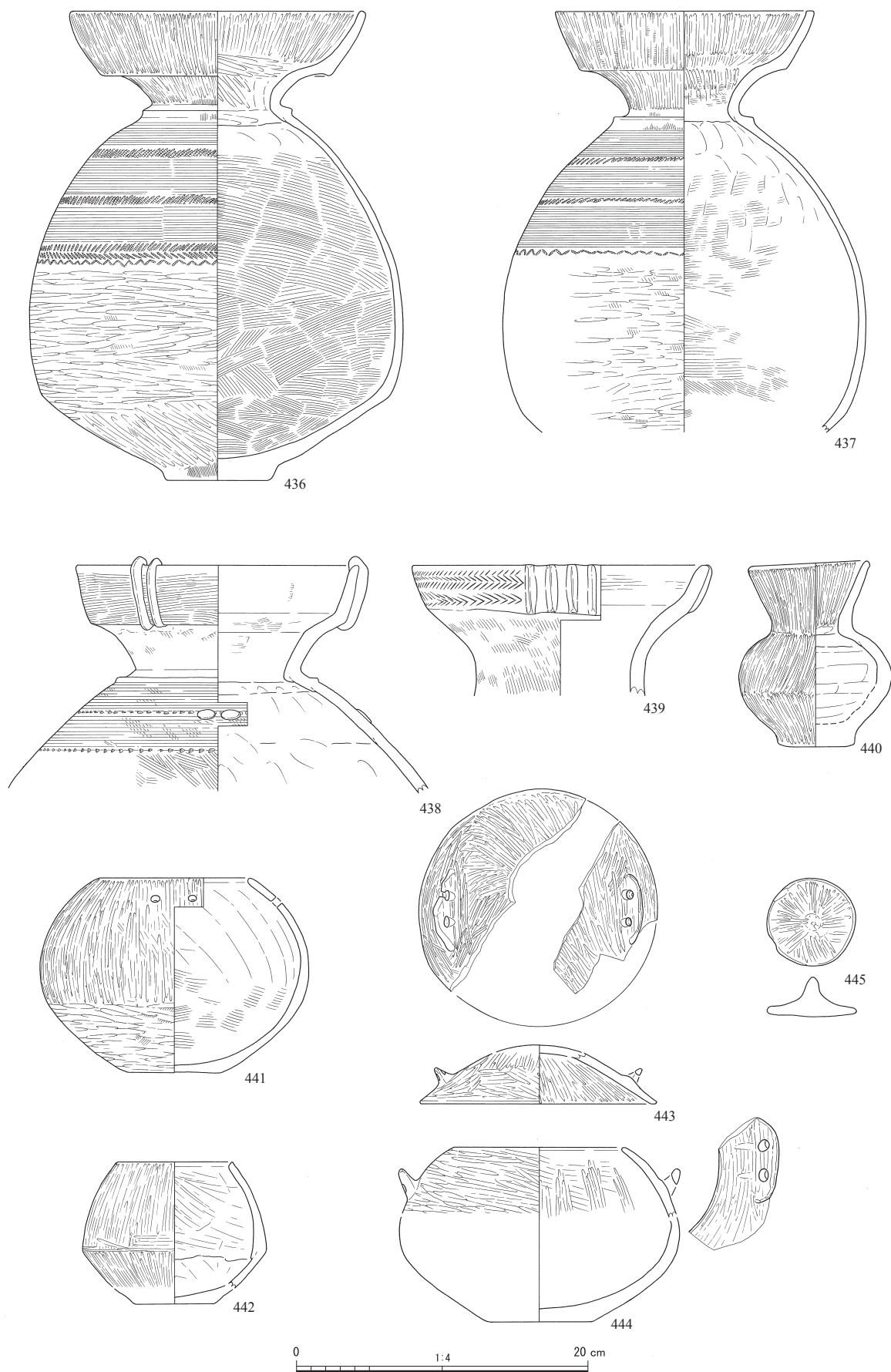


Fig.76 SD201 下層出土遺物 (5)

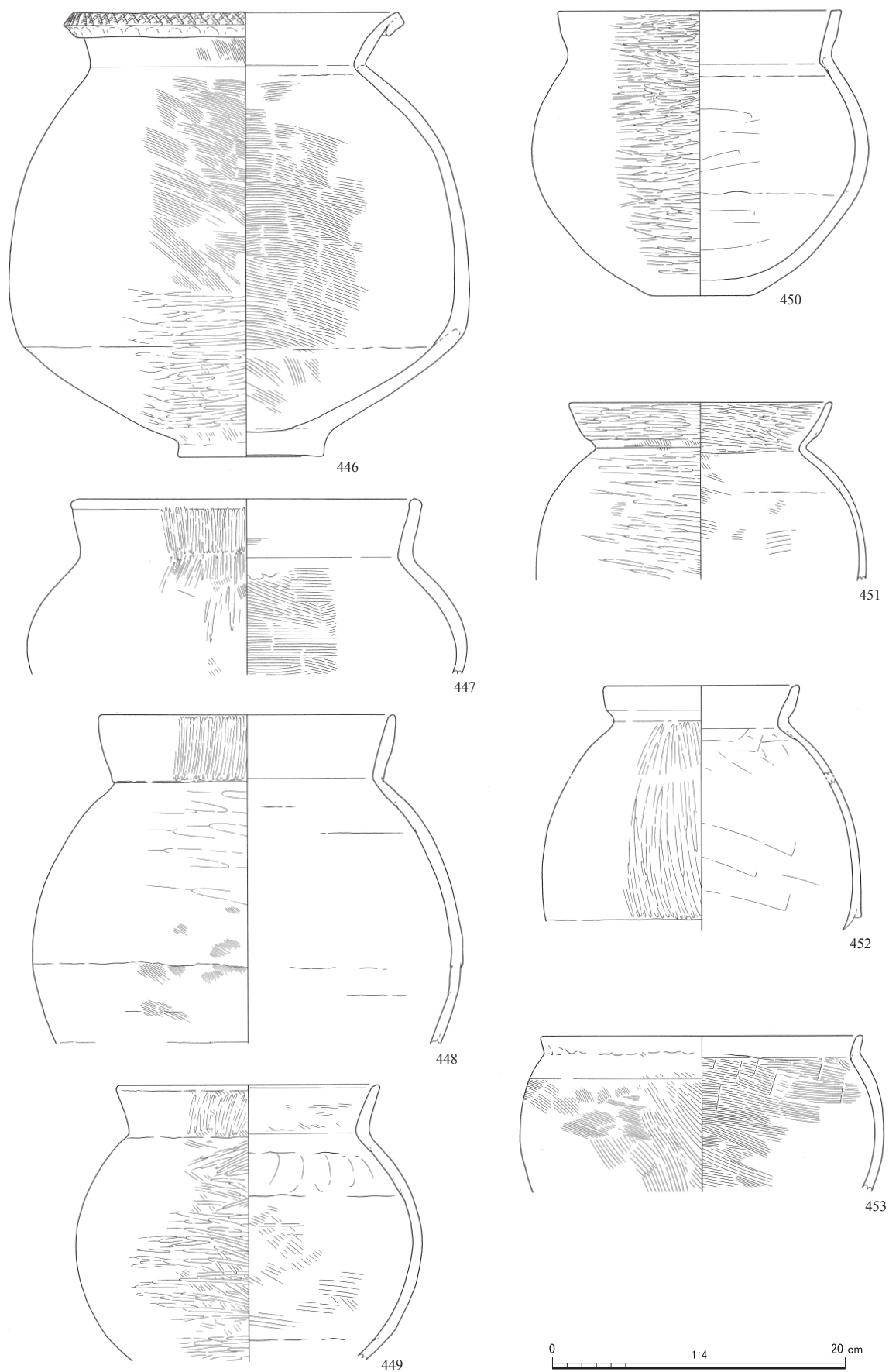


Fig.77 SD201 下層出土遺物 (6)

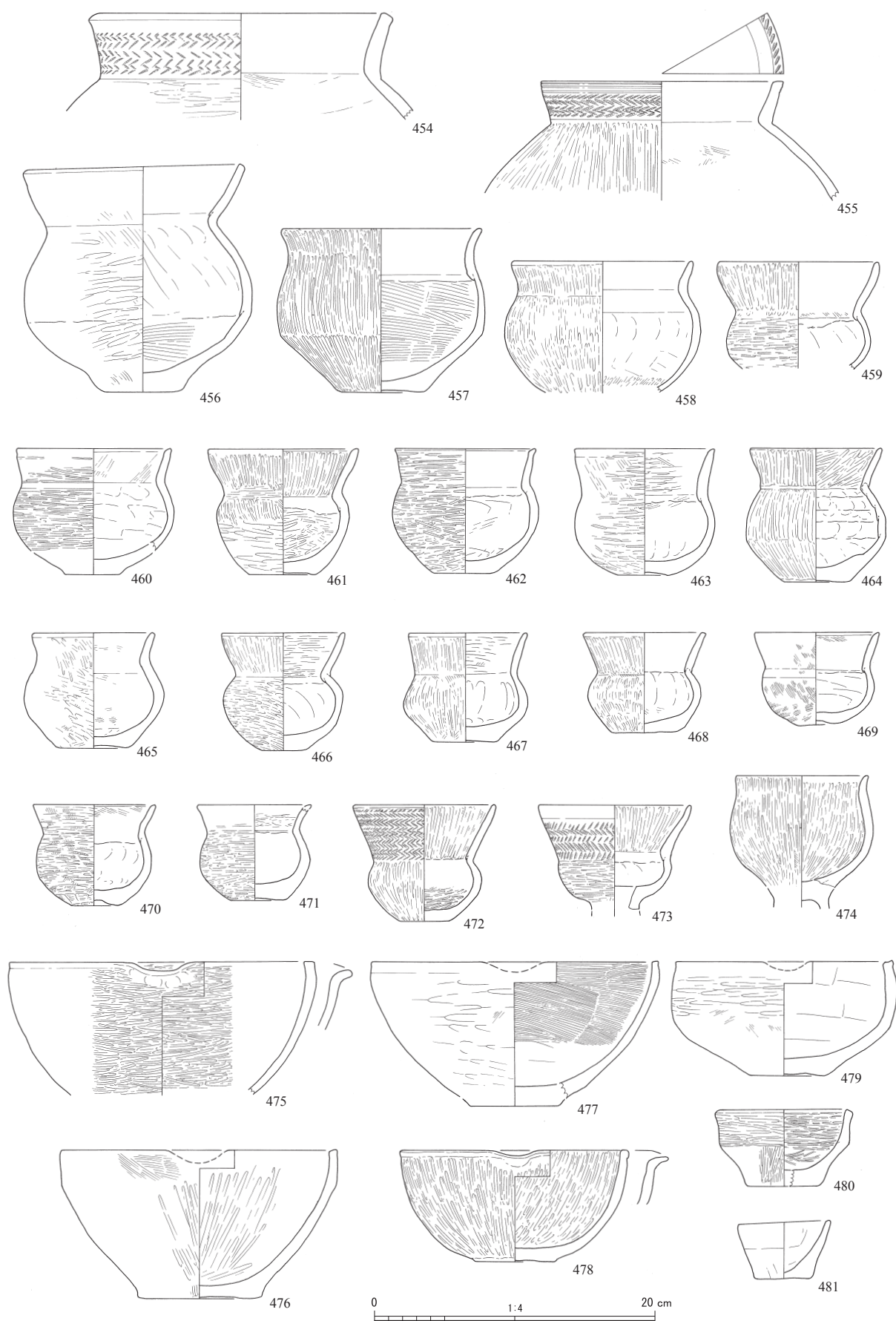


Fig.78 SD201 下層出土遺物 (7)

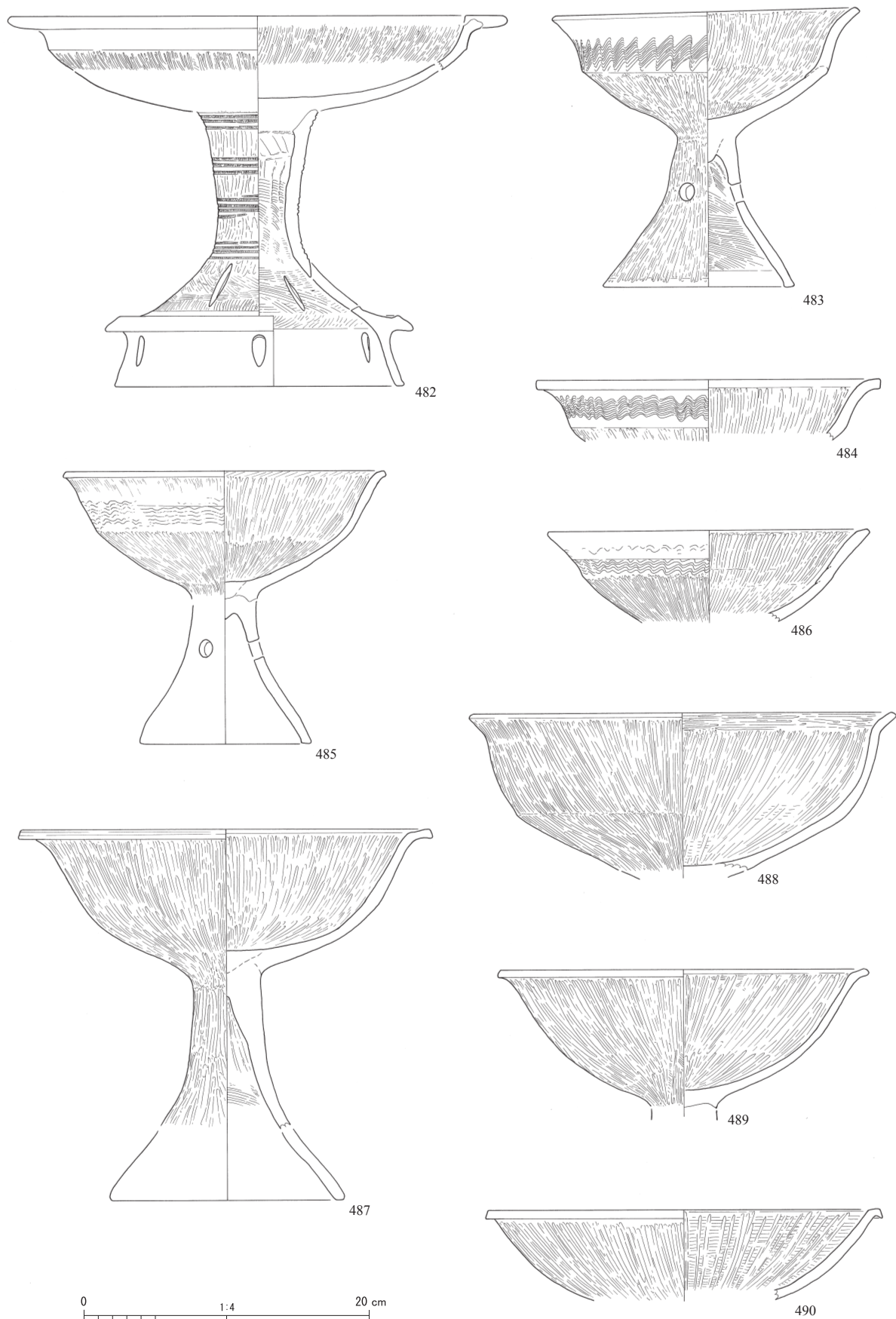


Fig.79 SD201 下層出土遺物 (8)

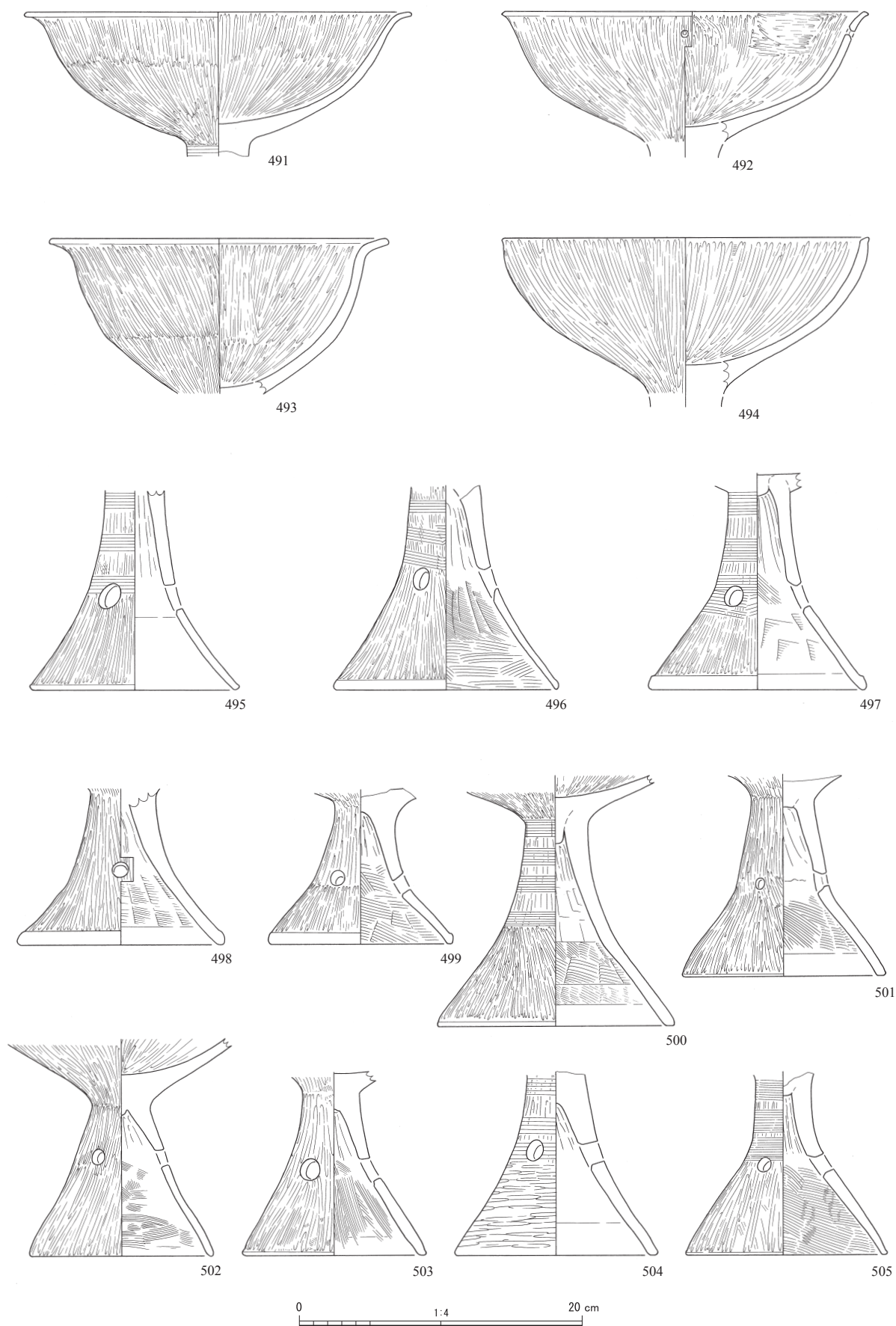


Fig.80 SD201 下層出土遺物 (9)

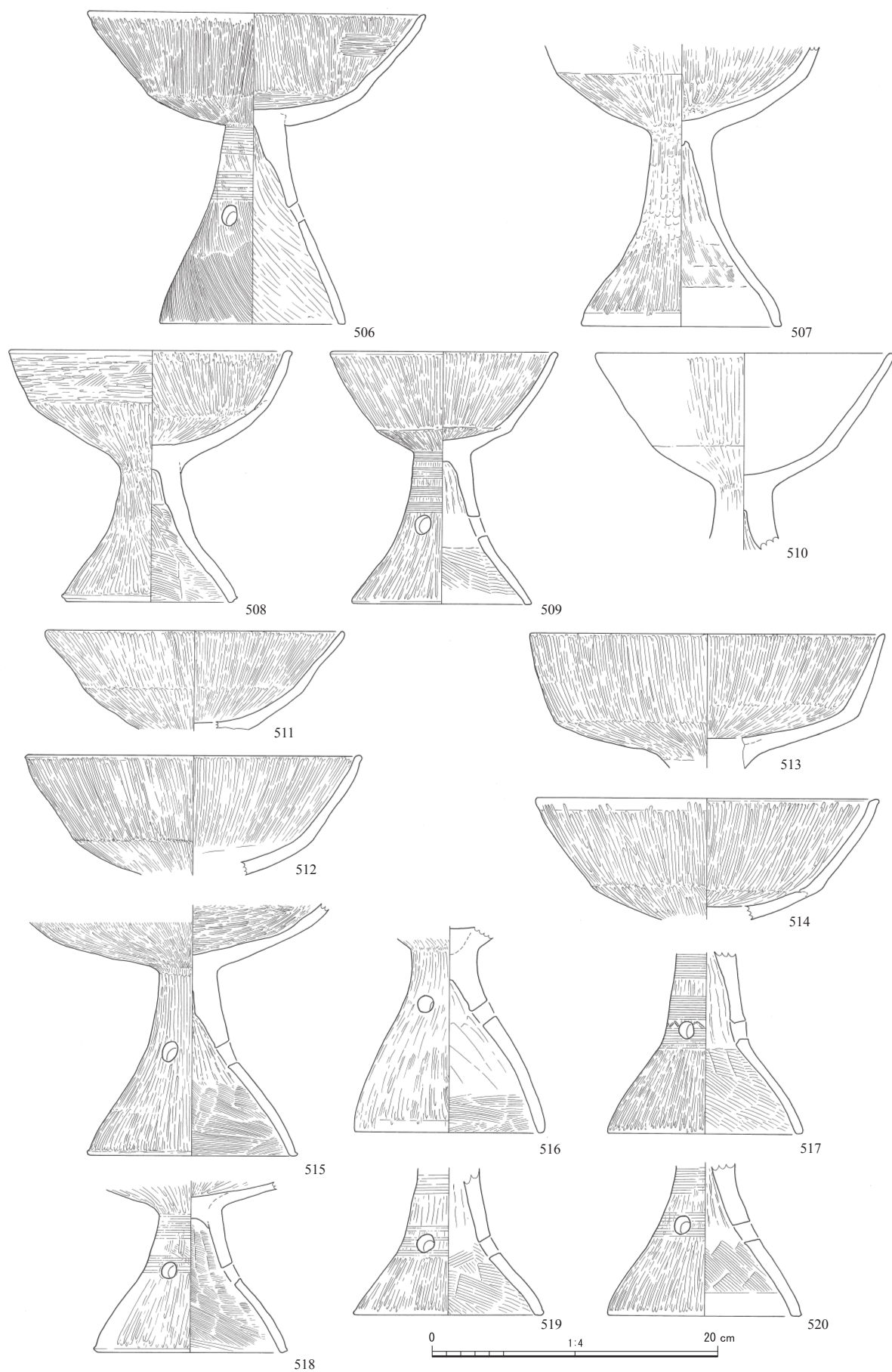


Fig.81 SD201 下層出土遺物 (10)

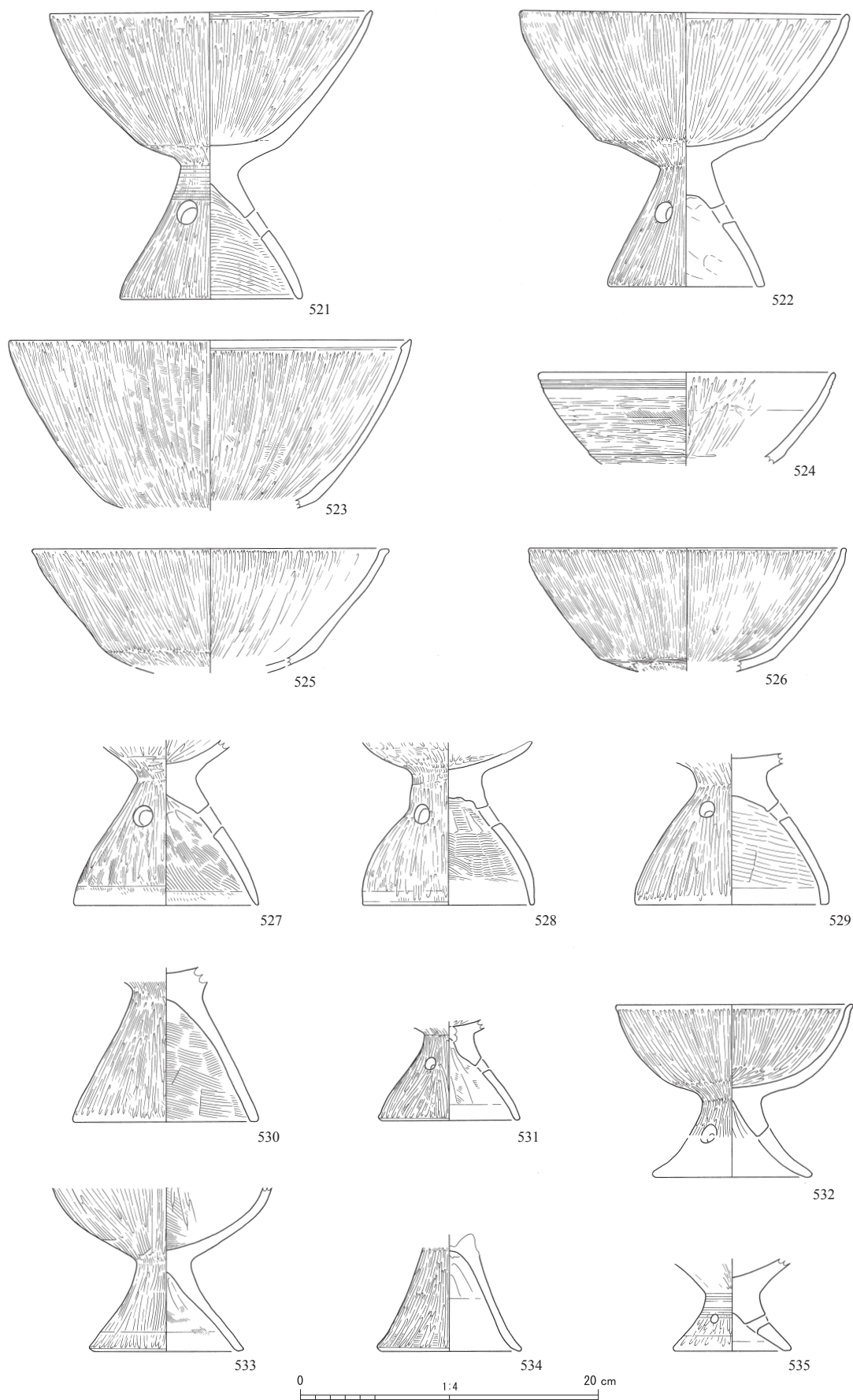


Fig.82 SD201 下層出土遺物 (11)

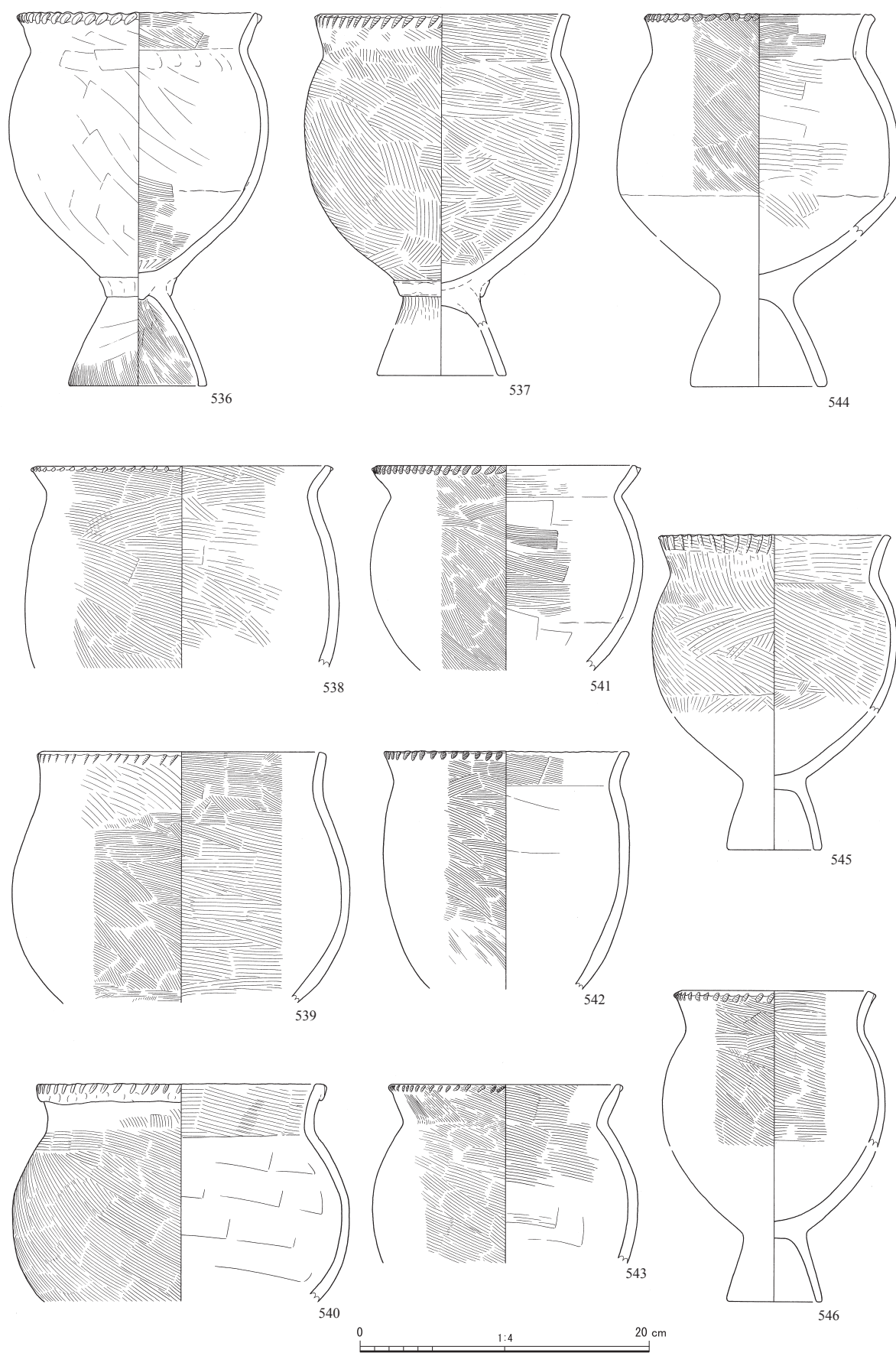


Fig.83 SD201 下層出土遺物 (12)

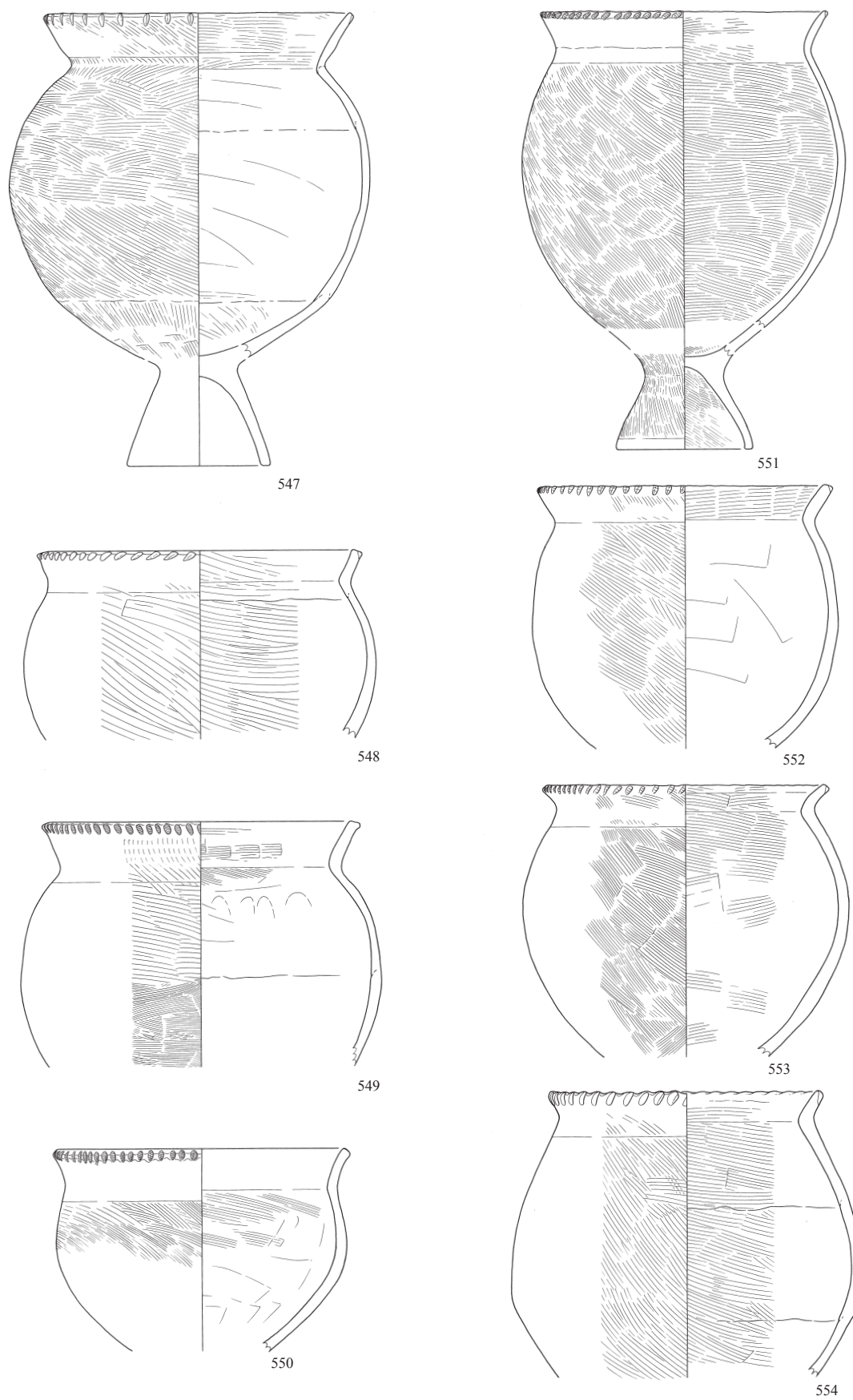


Fig.84 SD201 下層出土遺物 (13)

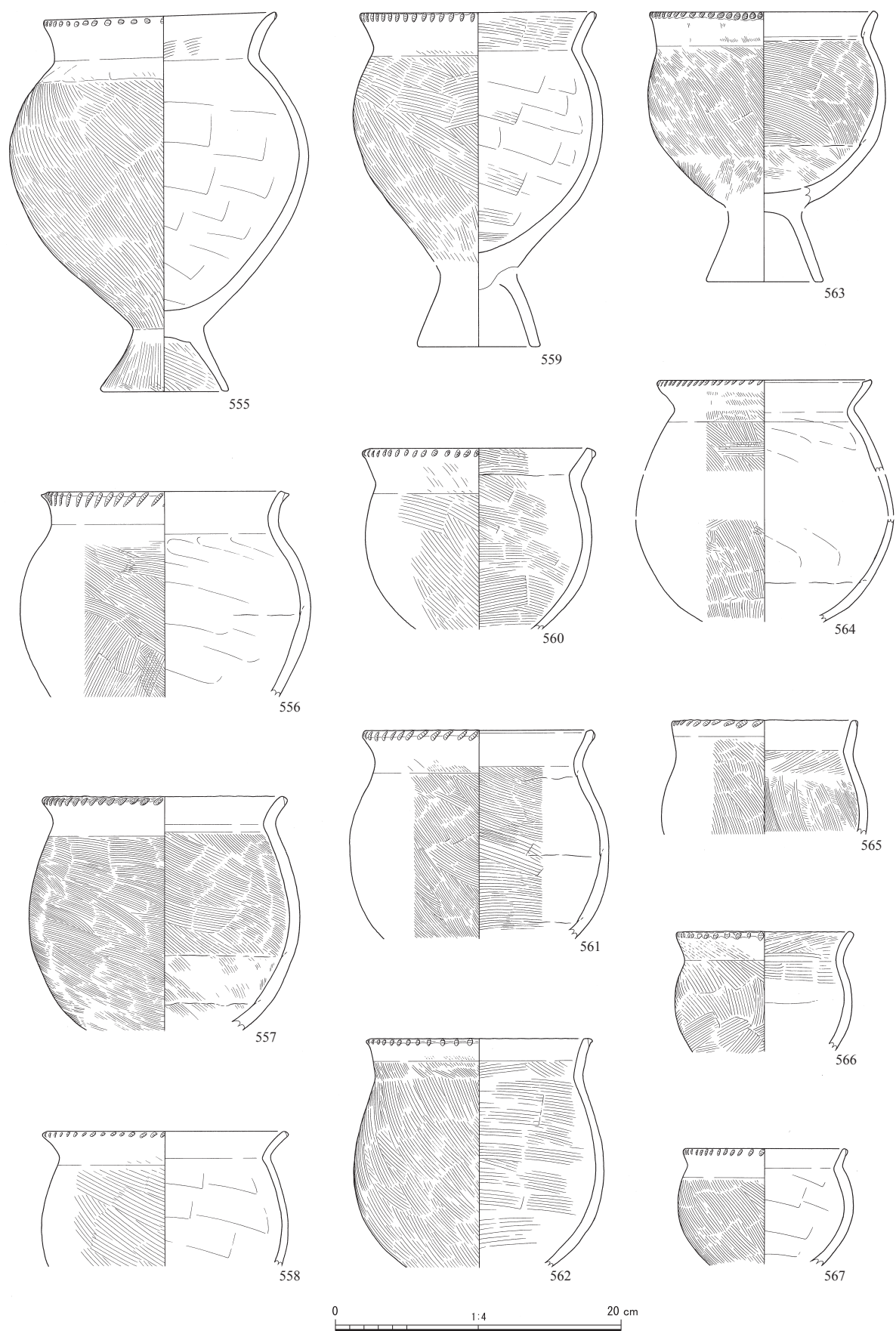


Fig.85 SD201 下層出土遺物 (14)

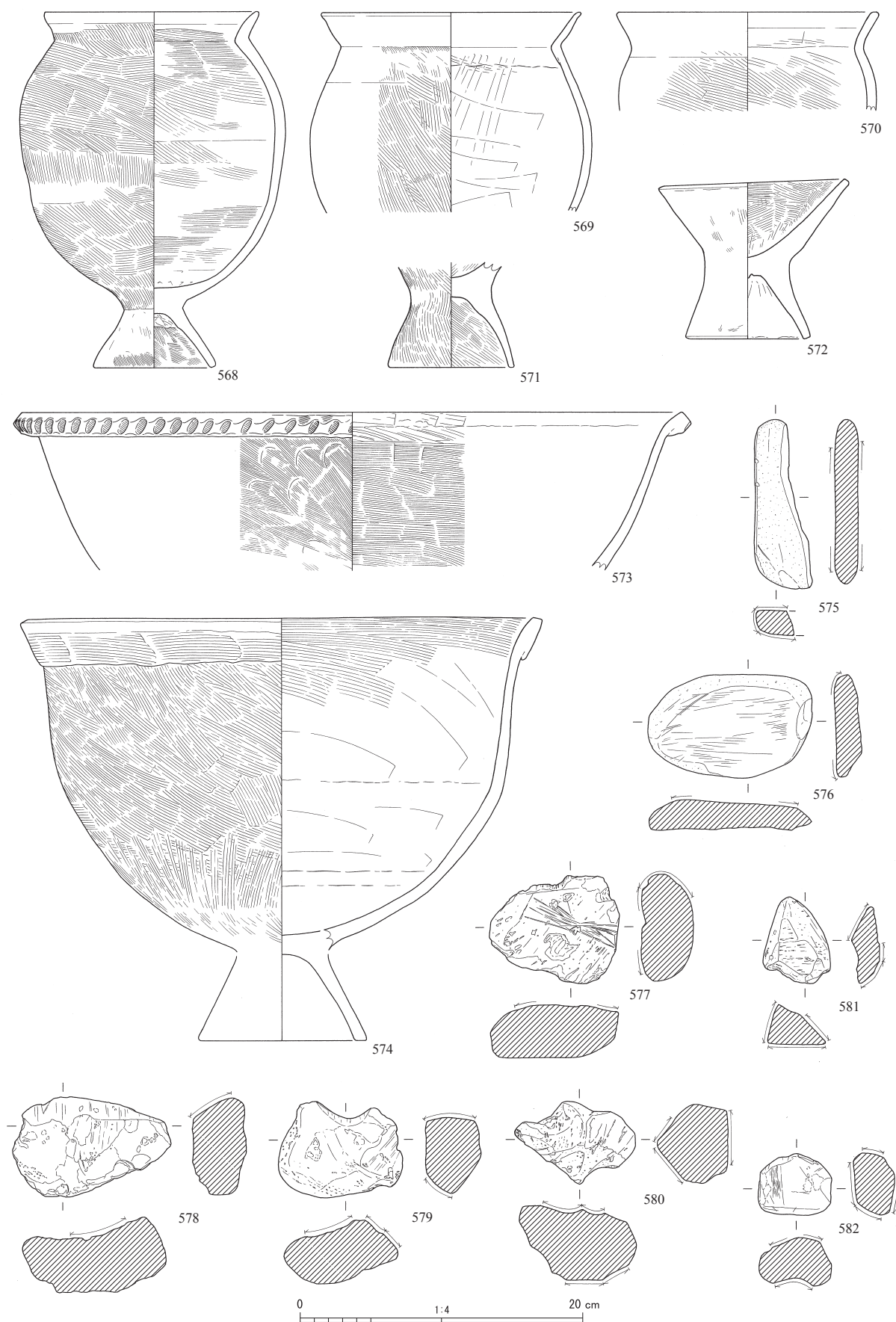


Fig.86 SD201 下層出土遺物 (15)

(3) 上層遺構

SD201 (上層) (Fig.89・92) SD201の上層は、幅10m程度、深さ0.3m程度の緩やかな窪地状の形状に変化している。先述のとおり、SD201は埋没過程において断絶期がみられることから、中間層より上の地層(i～vi層)に含まれる遺物をSD201上層出土遺物として取り扱う。

SD201上層に含まれる土器の量も比較的多い。とくに発掘区の南側に向けて集中する傾向があり、平面的に土器片を敷き詰めたような出土状態であった。また、この遺物集中部分から、若干の空隙地をはさんで、SD201の北西岸でも若干の土器が集中する部分がみられた。以下、SD201上層の中でも北西部で検出した一群を「SD201上層北西群」として、SD201上層出土遺物から分離しておきたい。SD201上層北西群における遺物の出土標高は0.3～0.4m程度である。これに対して、SD201上層に含まれる遺物の多くは、標高0m前後から出土している。土器が出土する標高が異なることも、SD201上層北西群を分離する理由の一つである。

家形土器出土状態 (Fig.89) 家形土器の破片は、合計で4点(583～586)あり、すべて同一個体とみられる。家形土器は碎片化しており、遺存部位も僅かであることから、破片を廃棄したものと捉えられる。家形土器の破片は、SD201上層北西群から2点(584・586)出土しているほか、最上層のSK202からも2点(583・585)が出土している。以下、家形土器の破片はすべて便宜的にSD201上層北西群から出土した遺物の中に含めて取り扱う。

家形土器の破片と共伴するSD201上層北西群の遺物は、587～594である。また、最上層のSK202から出土した遺物は、762～779である。SD201上層北西群の出土遺物は欠山Ⅰ～Ⅱ式期に位置づけられる。家形土器は、破片が混入した状態であることから、共伴する遺物が家形土器の製作時期を直接的に示すとは言いがたい。

SD201上層北西群出土遺物 (Fig.90・91) 587～594はSD201上層北西群から出土した遺物である。これらの遺物群に伴って家形土器の破片2点(584・586)が出土した。

家形土器は4点分が知られる。胎土や色調、模様の特徴がすべて共通し、同一個体の破片と捉えられる。583は屋根の端部と考えられる破片である。この破片から、家形土器は切妻づくりであっ

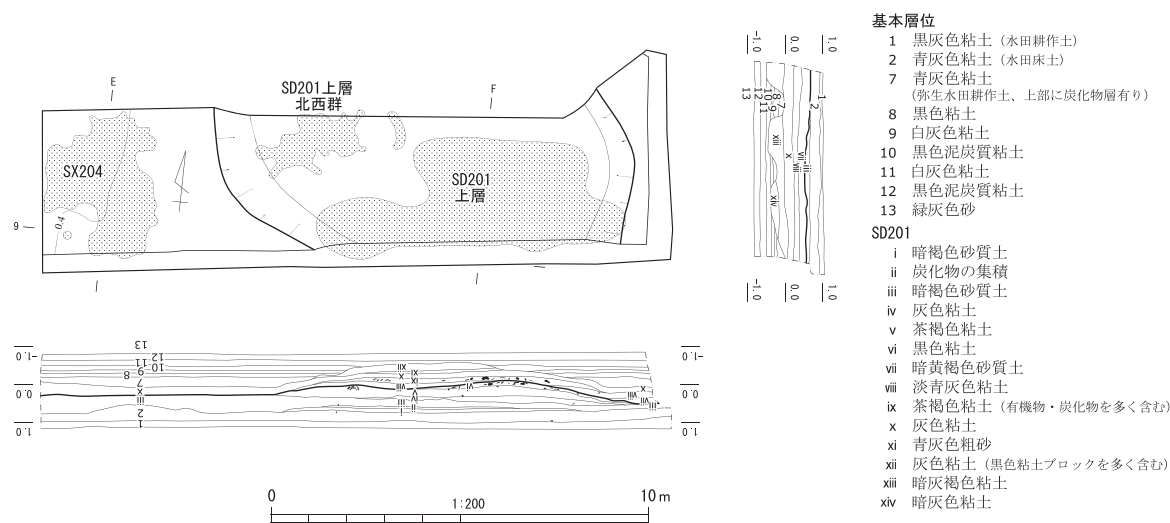
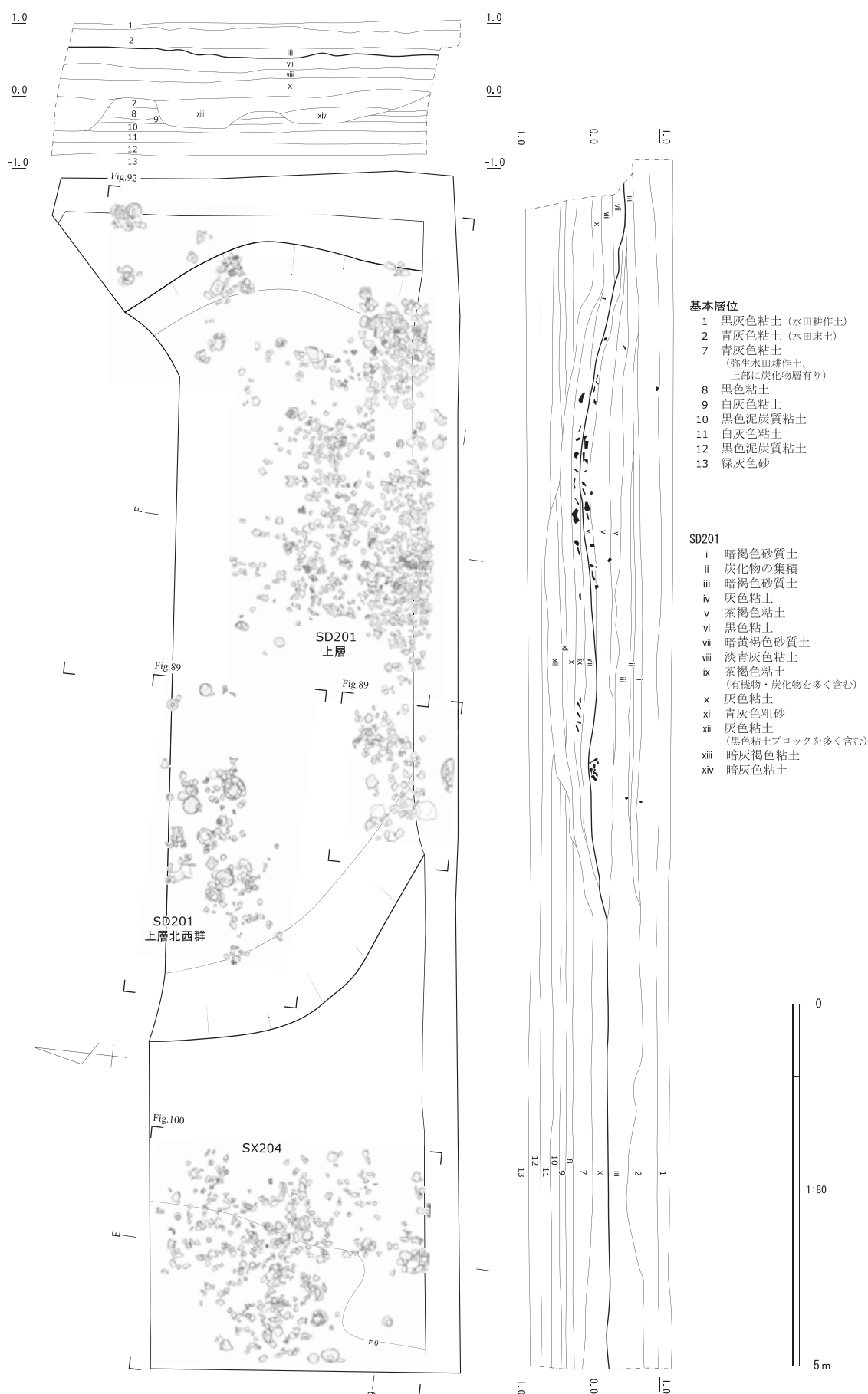


Fig.87 C区上層遺構



4 C区の遺構と遺物

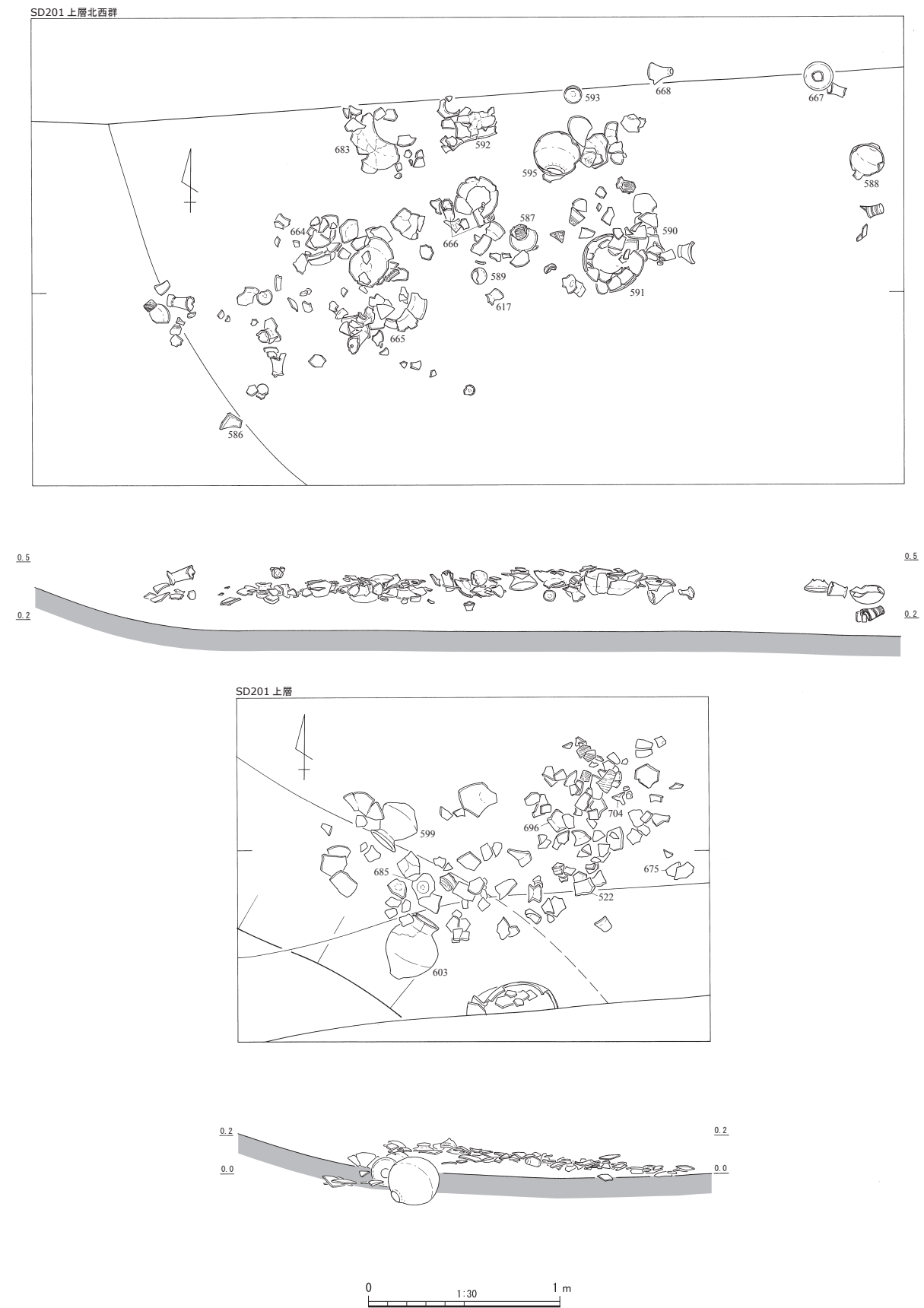
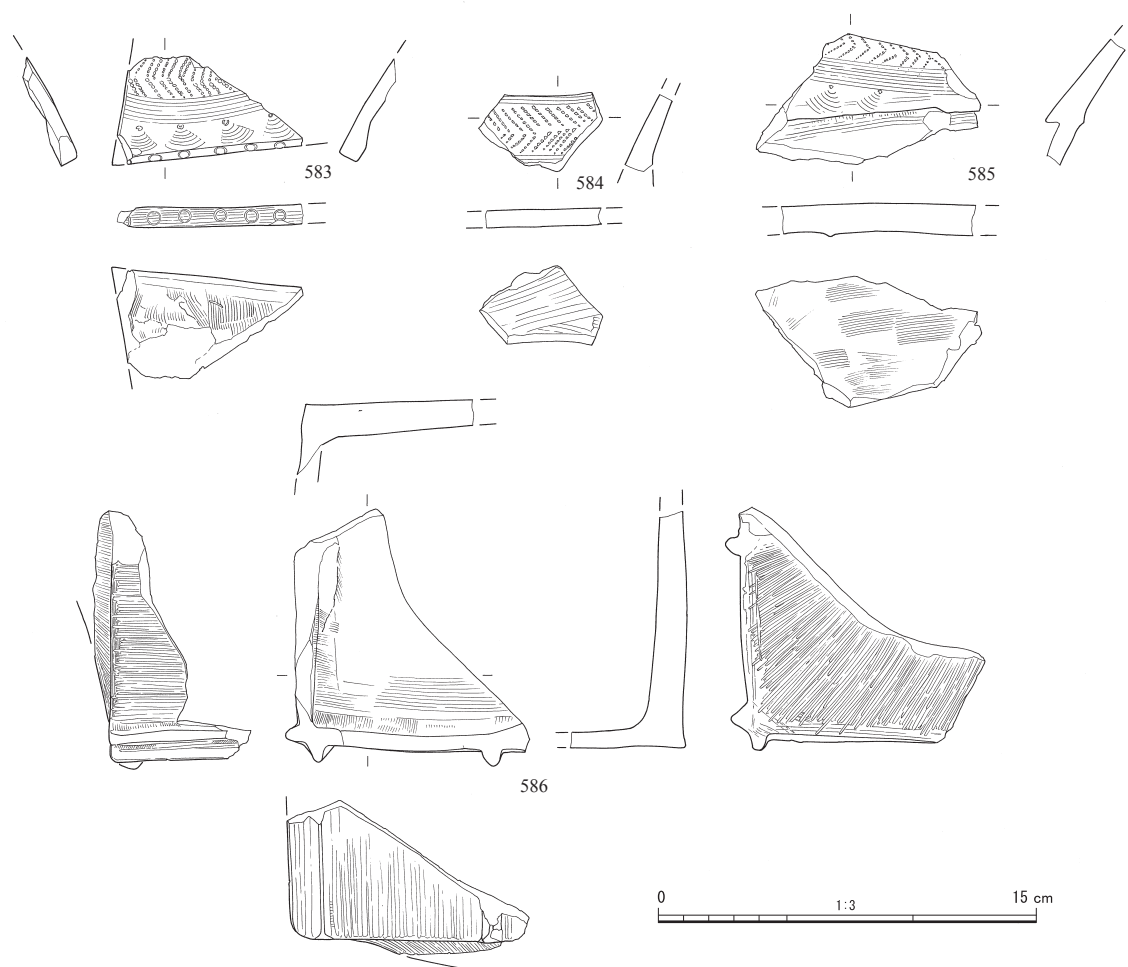


Fig.89 SD201 上層北西群等遺物出土状態



[復元図]

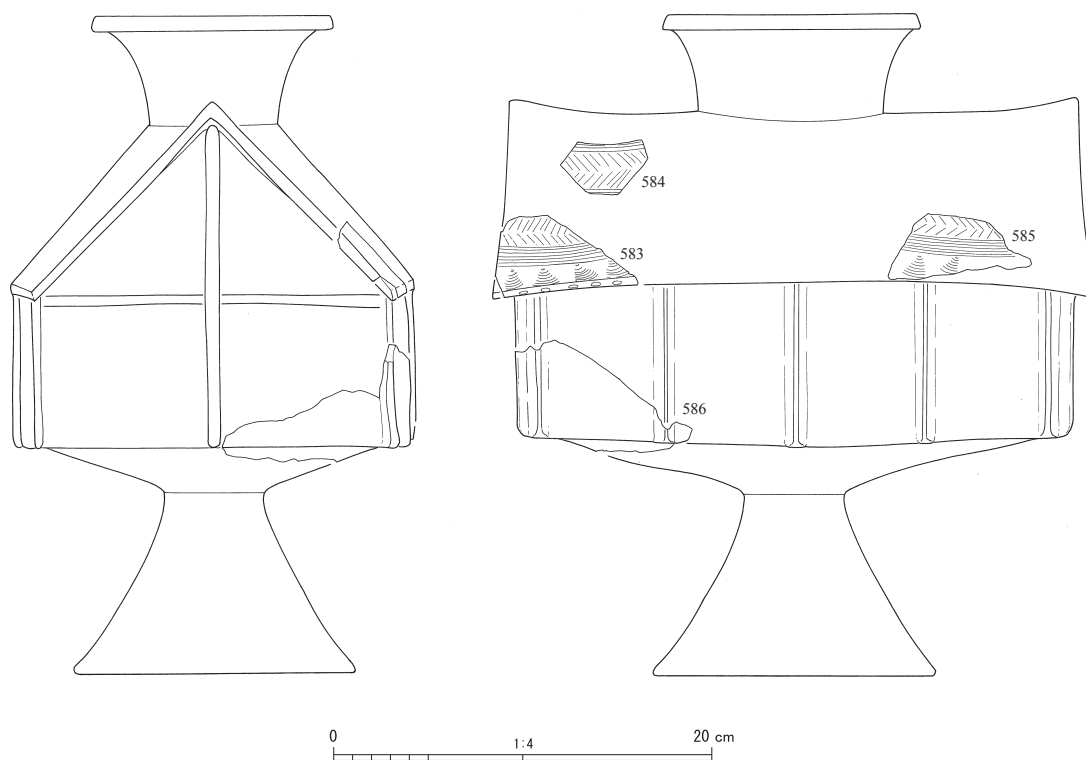


Fig.90 家形土器

583・585：SK202 584・586：SD201 上層北西群

たことが判明する。屋根の端面には竹管文が入れられ、屋根には、羽状刺突文、直線文、扇形文の各種櫛描模様が入れられている。584 も同じく屋根の破片とみられる。外面には直線文と羽状刺突文がみられる。585 も同じく屋根の破片と考えられる。壁の部分が一部残存し、屋根の端部が剥離しているものと捉えられる。外面には、羽状刺突文、直線文、扇形文と 583 と同じ構成の模様が描かれている。ただし、羽状刺突の方向は反対である。586 は壁から底部にかけての破片である。長側辺には 2 本の柱が粘土の添付によって表現されている。586 の存在から、この個体は鳥居松遺跡 3 次調査で出土した家形土器 (Fig.9) とほぼ同様の構造をもつ家形の壺と推定できる。鳥居松遺跡 3 次調査出土品を参考に全体形を想定すると、Fig.90 に示すような形態であったと考えられよう。家の本体は鳥居松遺跡 3 次調査出土品よりも大きく、屋根に精緻な櫛描模様を描くなど、より精製度が高い個体であったとみられる。

家形土器と共伴する遺物は欠山Ⅰ～Ⅱ式期に位置づけられるが、家形土器の屋根にみられる櫛描模様は山中式系統のものであることから、この個体についても、山中式期の所産と推定できる。具体的な帰属時期を明確に示すことができないが、今回の調査で出土した遺物は山中Ⅲ式期以降のものばかりであることから、この家形土器の時期も山中Ⅲ式期とするのが妥当であろう。

587～594 は家形土器と共伴した遺物である。590 の高坏は欠山Ⅰ式期に特徴的な形態をしており、これらの遺物群が欠山Ⅰ式期に接点があることが知られる。下層の SD201 下層が欠山Ⅱ式期に位置づけられることから、これらの遺物群も同時期かそれ以後と見るのが妥当であろう。

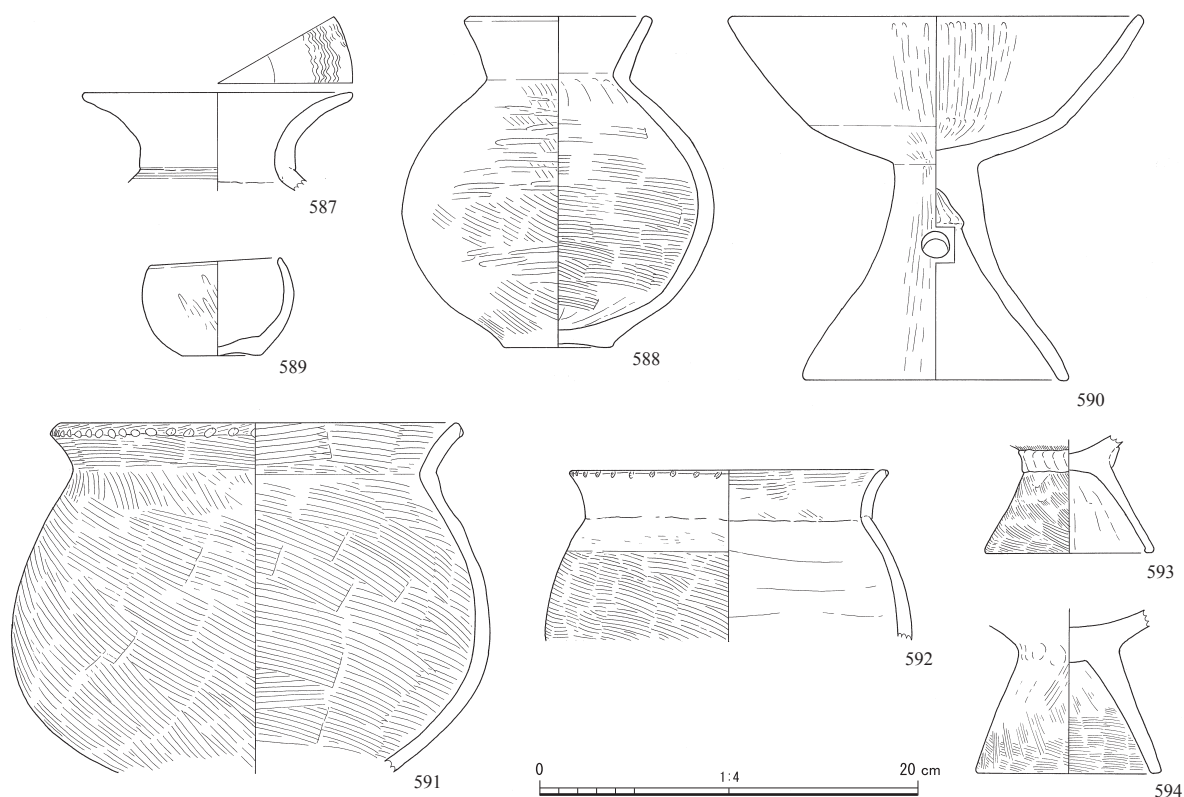


Fig.91 SD201 上層北西群出土遺物

SD201上層出土遺物 (Fig.93～99) 595～715はSD201上層から出土した遺物である。SD201下層出土遺物と比べると新しい様相が看取でき、層位的に分離した出土状態の妥当性がうかがえる。SD201下層出土遺物も種類と数が豊富であり、土器編年上の基準資料として取り扱うことができる。

595～650は壺である。口縁形態には、外反口縁(595～601)、直立口縁(602～607)、内彎口縁(608～618、621)、拡張口縁(623～633)、折返口縁(634～640)、受口状口縁(642)、複合口縁(643～648)の各種が認められる。模様には用いられる直線文も幅が広いものが多く、刺突文が多用される。なお、633は端部を上下に摘みあげた口縁下端に刺突が入れられ、頸部には刺突文をもつ突帯が巡らされている。新しい様相を示す模様構成であり、その始源期を示す資料といえよう。647は、高温の被熱によって変形が著しい。649は脚付の直口壺、650は装飾長頸壺の口縁である。651は無頸壺の蓋である。2箇所一組の穿孔が2方向にみられる。652は無頸壺である。

653～657はく字鉢である。655の口縁は内彎傾向が強く、時代性を示す。658～661は、小型直口鉢である。660の外面には丁寧なヨコミガキが施されている。662は小型の無頸鉢、663は片口鉢である。664の高坏は、坏部が片口にされており、菊川式の特徴を有する。ただし、色調や胎土から、浜松南部地域で製作されたものとみられる。

665～682は高坏である。高坏には山中式系統の個体(665～671)と欠山式系統の個体(672～678)が混在する。665～667にみられる山中式系統の高坏は、比較的古相の形態的特長を留めている点が留意される。SD201下層に含まれていた山中式系統の高坏(483～505)と比べても古式の特徴が多く、型式学的に逆転する。このことから、SD201上層出土遺物中に含まれる山中式系統の高坏のうち、古相を留める665～667のような個体については、別の遺構からの混入品である可能性を考慮してもよいだろう。671は装飾高坏の脚部である。逆水滴形のスカシ穴が多方向にあげられている。欠山式系統の中の高坏は内彎傾向を顕著にみせる個体が多いが、675は大きく外側に開く坏部に直線的な脚部が接続し、形態的に新しい傾向が指摘できる。679～682は外に開く脚部をもつ小型の高坏の脚部である。

683～710は甕である。く字甕の口縁部には刺突をもつ個体(683～690)と、刺突をもたない個体(691～701)がみられるが、後者の割合が比較的多い。いっぽうで、703といった脚台部の接合部に粘土帯を巡らす個体も一定量みられる。702は受口甕、705はく字大型甕である。706～709はS字甕である。すべてS字甕A類であるが、707はS字甕O類的な形態であり、古相を示している。710は南関東系の甕である。肩部の屈曲部に布目状の押捺がみられる。内面には細かなハケ調整が施されている。搬入品の可能性があるが、その故地を具体的に示すことは難しい。

711～714は砥石である。711は凝灰岩、712～714は軽石を用いている。714には細い円柱状の砥面がみられ、矢柄を研磨した痕跡の可能性が考えられる。715は多方向に挟りがある棒状品である。網杵の可能性が考えられるが、正確な用途は不明である。

SD201上層出土遺物は、若干の混入品が含まれるとみられるが、主体となる土器群は時期的なまとまりがあると判断できる。新相をみせる壺や高坏の特徴、く字甕口縁部の無刺突化、S字甕A類の共伴などの様相から、SD201上層出土遺物は欠山Ⅲ式期に位置づけることが妥当であろう。共伴する山中式系統の高坏(665～667など)は古相を示すことから混入品と捉えたい。



Fig.92 SD201 上層遺物出土状態

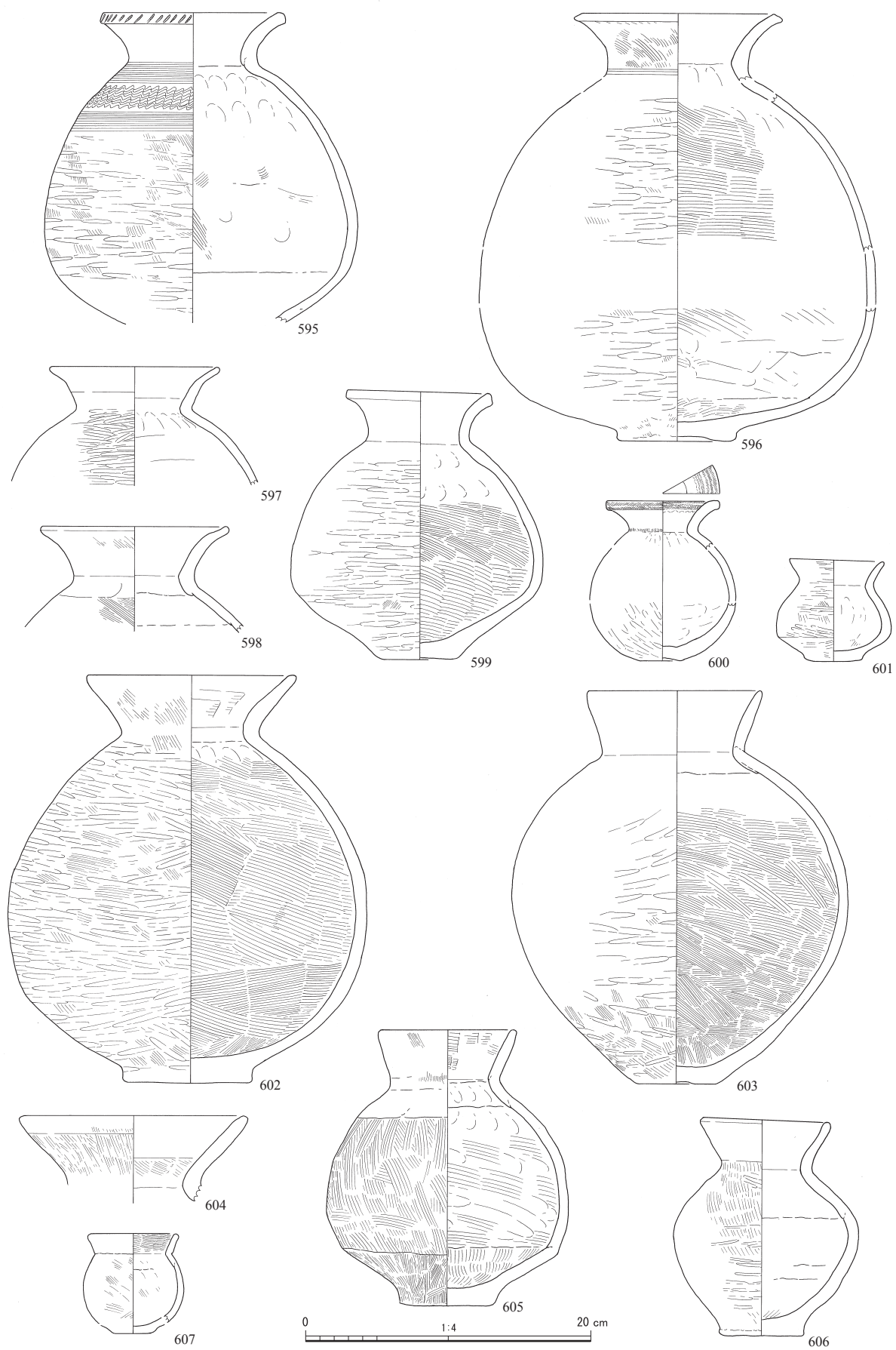


Fig.93 SD201 上層出土遺物 (1)

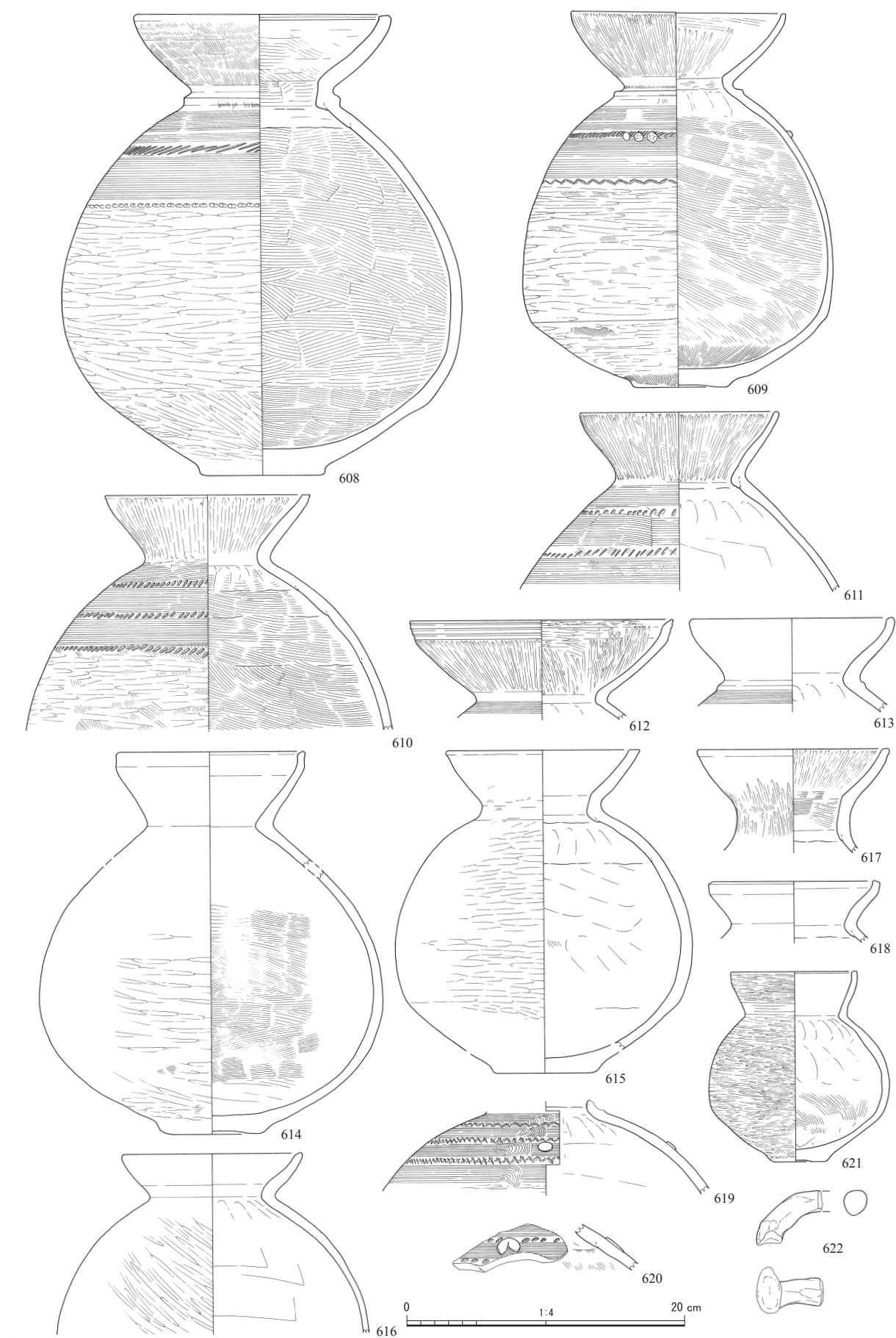


Fig.94 SD201 上層出土遺物 (2)

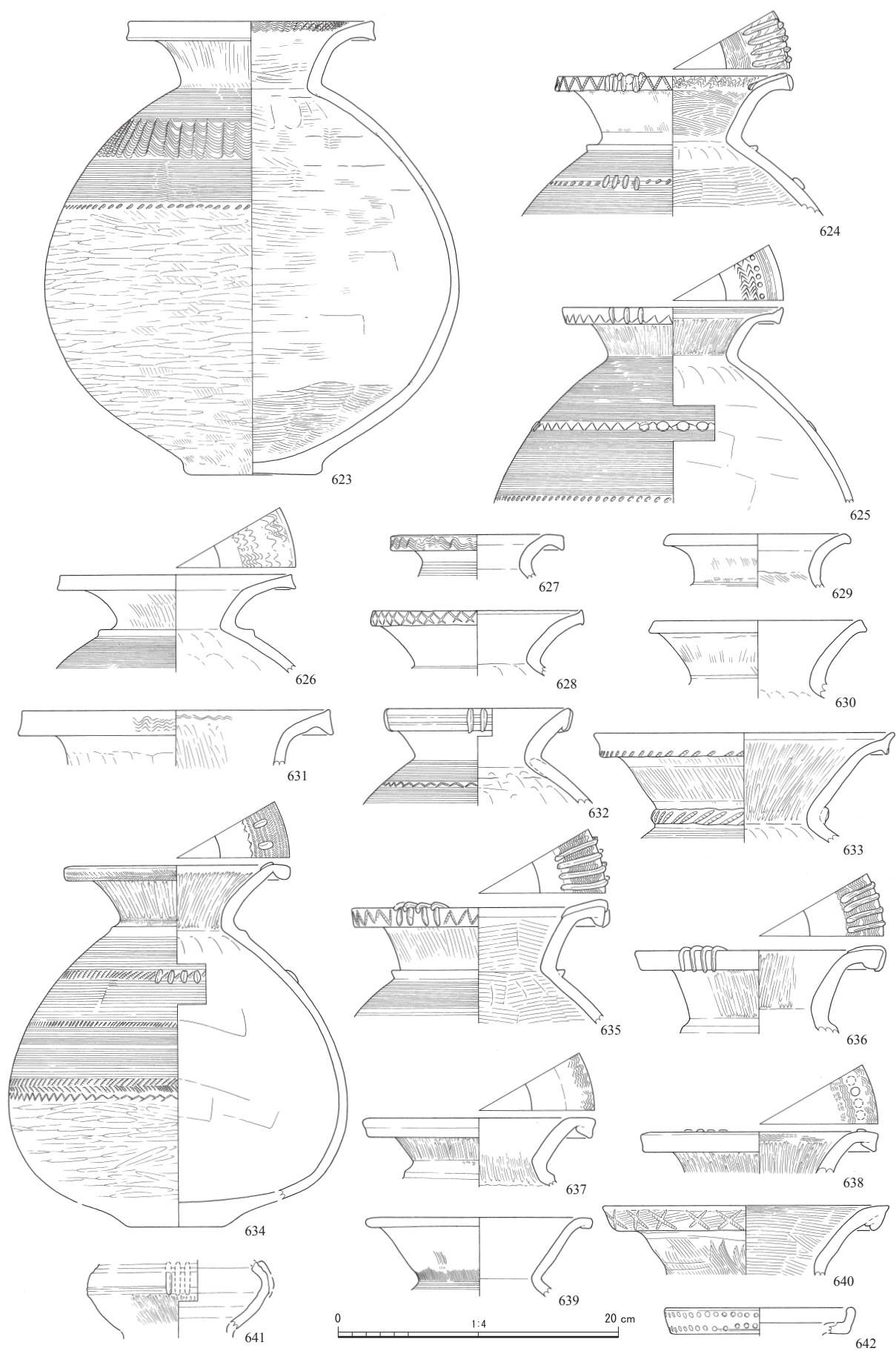


Fig.95 SD201 上層出土遺物 (3)

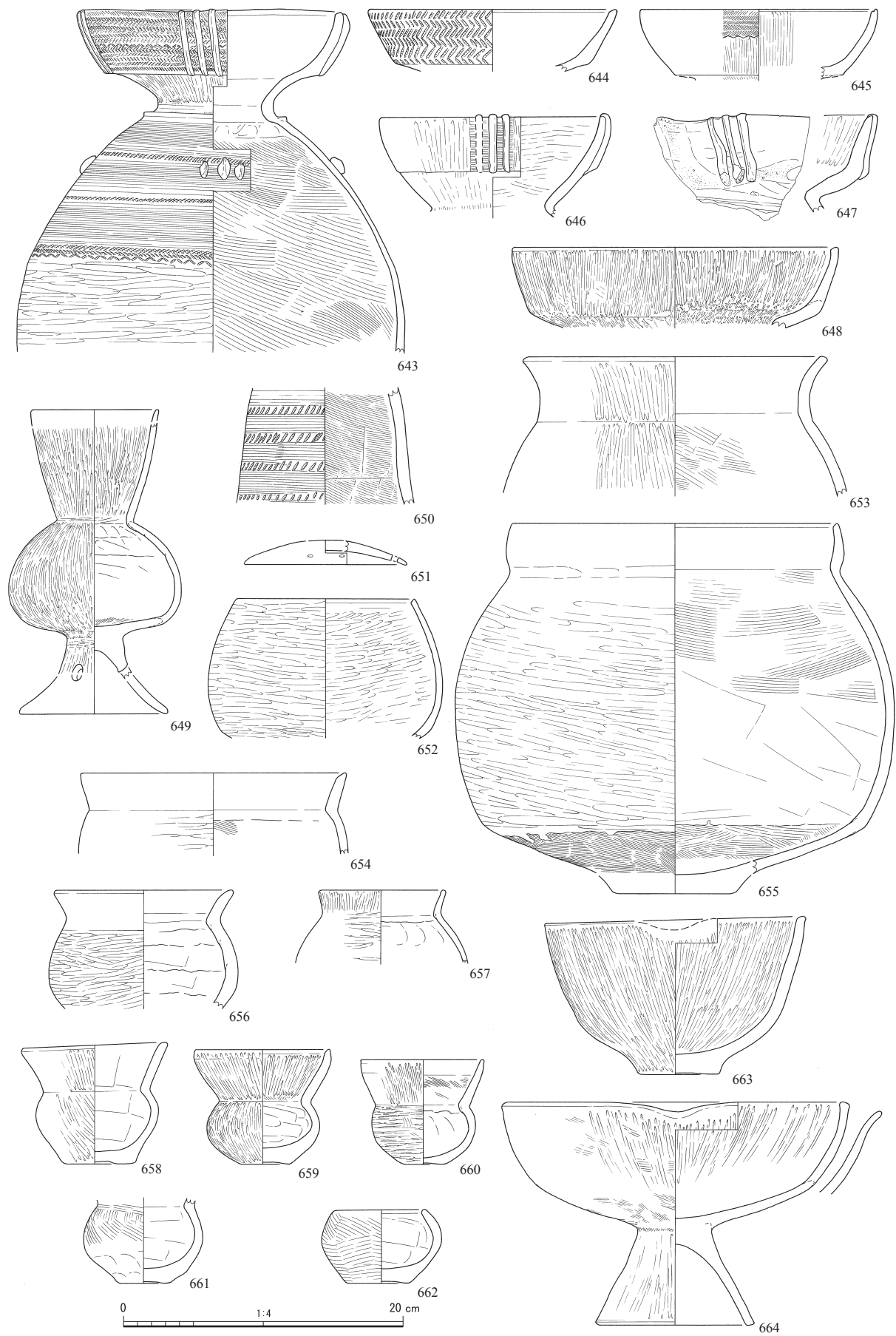


Fig.96 SD201 上層出土遺物 (4)

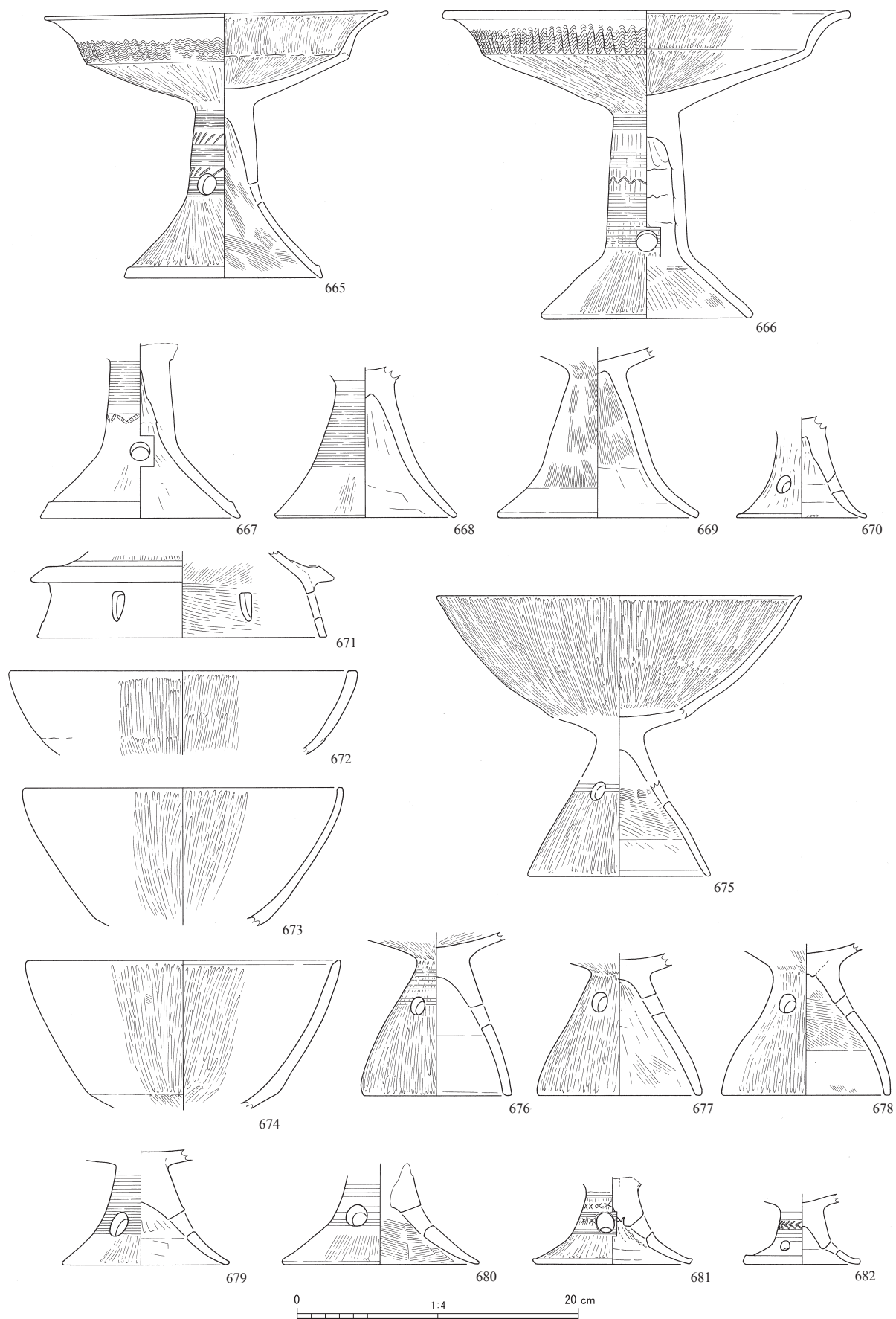


Fig.97 SD201 上層出土遺物 (5)

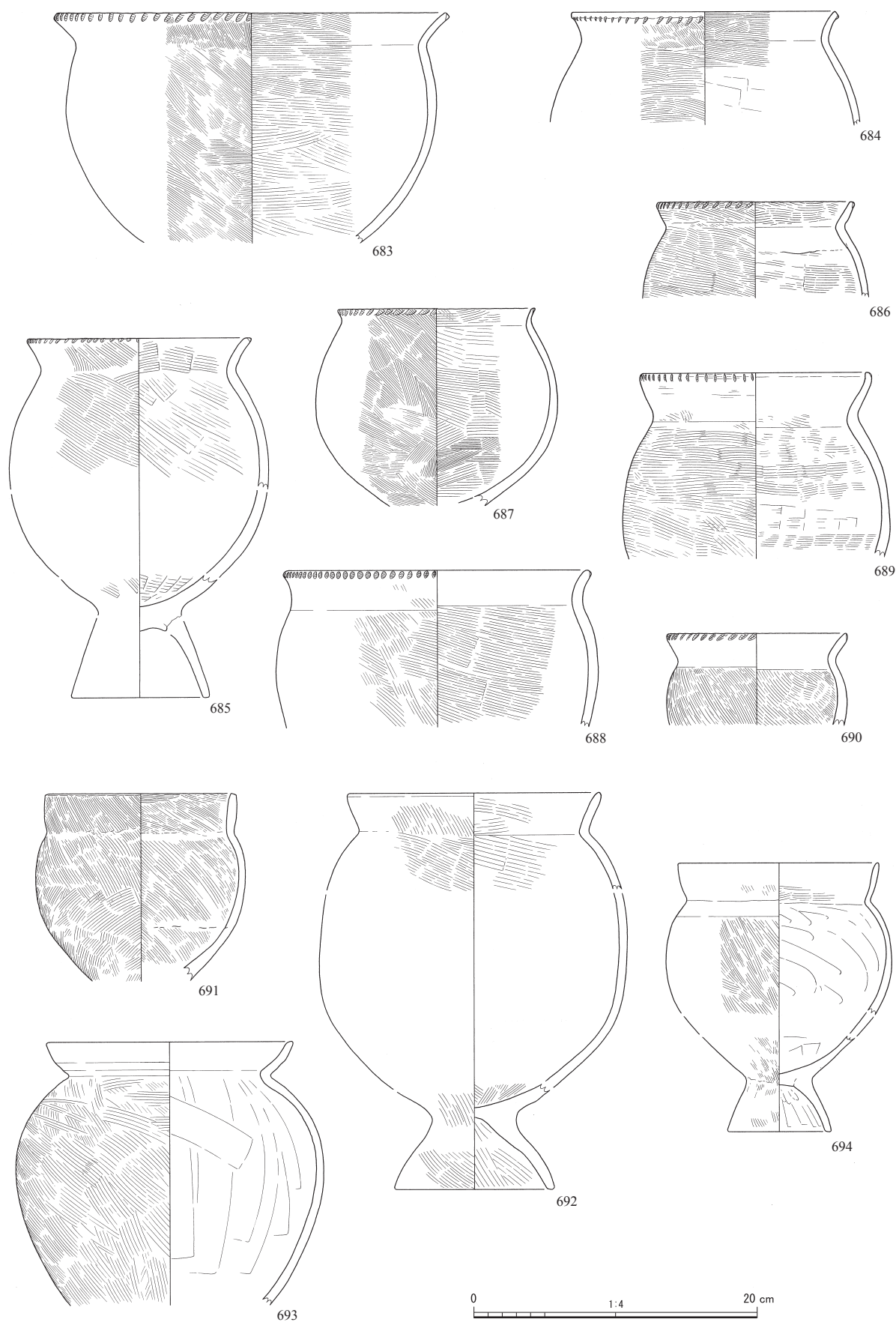


Fig.98 SD201 上層出土遺物 (6)

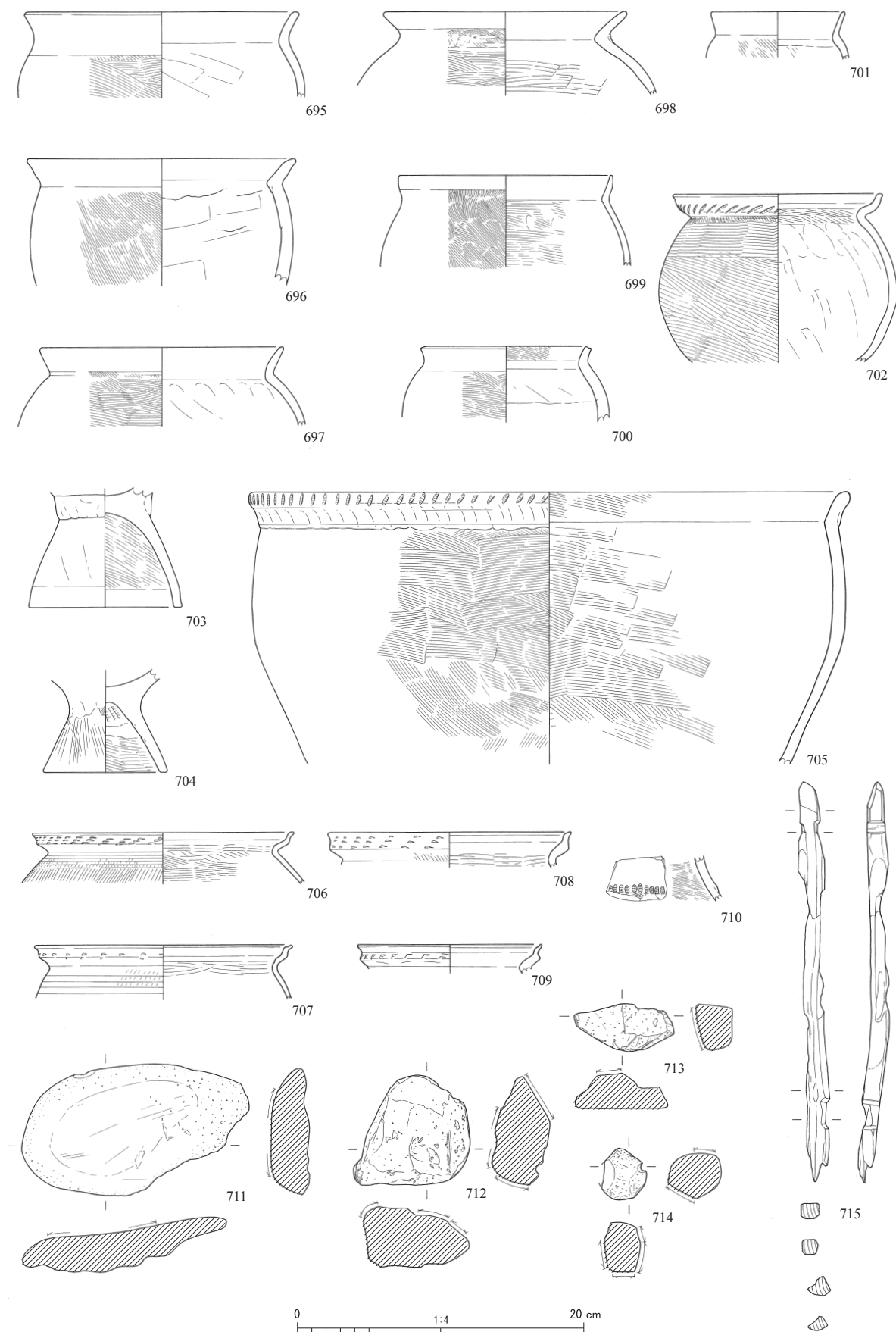


Fig.99 SD201 上層出土遺物 (7)

SX204 (Fig.100) SX204はC区上層で検出した土器集積である。検出した面から上層遺構として扱ったが、層位的にはSD201下層と併行する可能性がある。

SX204 出土遺物 (Fig.101・102) 716～759はSX204から出土した遺物である。遺物量は決して多くないが、遺物群がもつ諸特徴にまとまりがみとめられる。

壺(716～729)の模様帯には、直線文、波状文、扇形文が認められ、直線文は幅が広いものがみられない。鉢には、く字鉢(730・731)、小型直口鉢(732・733)、片口鉢(734)の各種がみられる。高坏には山中式系統の個体(735～739、742・747)と欠山式系統の個体(740)が混在する。740は古相を示す欠山式の高坏である。く字甕(750～753)は口縁端部に刺突をもつものが主体で、無刺突の個体(753)においても脚台接合部に粘土帯を巡らしている。756～759は軽石製の砥石である。756には矢柄を研磨した可能性が考えられる円柱状の凹みがみられる。

SX204出土遺物は、山中式系統の遺物群の中に欠山式系統の古相を留める個体が混在するという特徴がある。遺物の量が少なく不安定なまとまりであるが、SX204出土遺物は欠山Ⅰ式期に位置づけられよう。

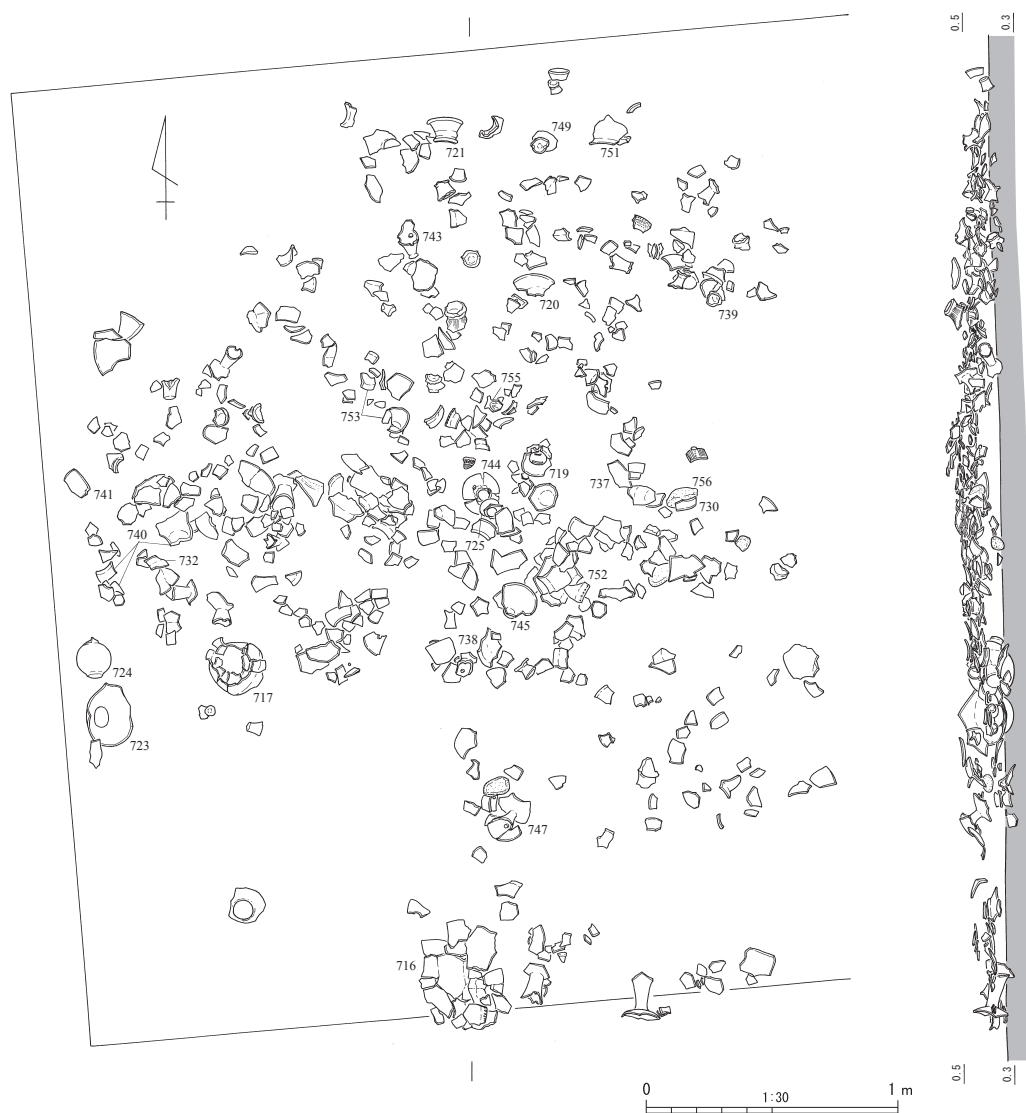


Fig.100 SX204 遺物出土状態

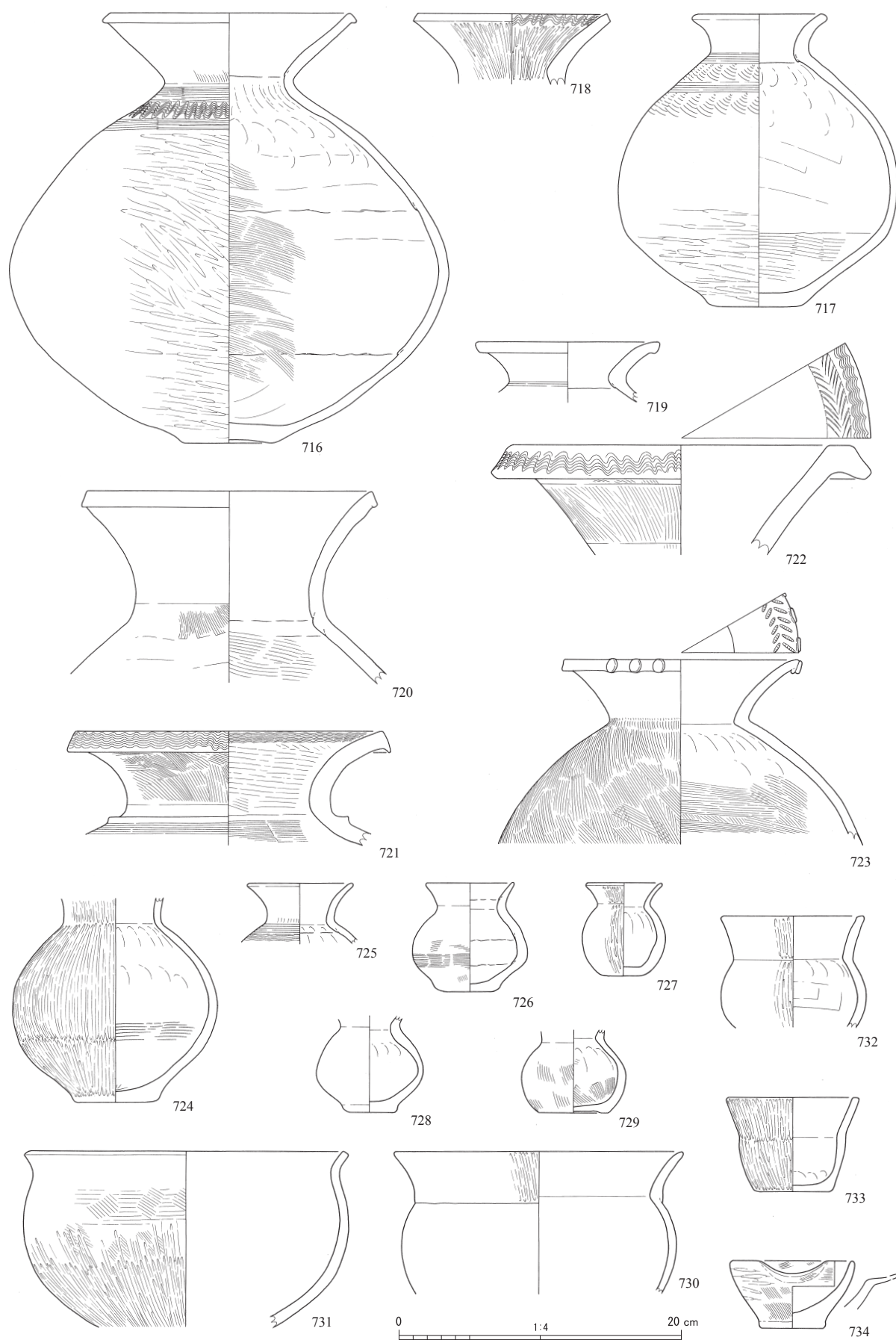


Fig.101 SX204 出土遺物 (1)

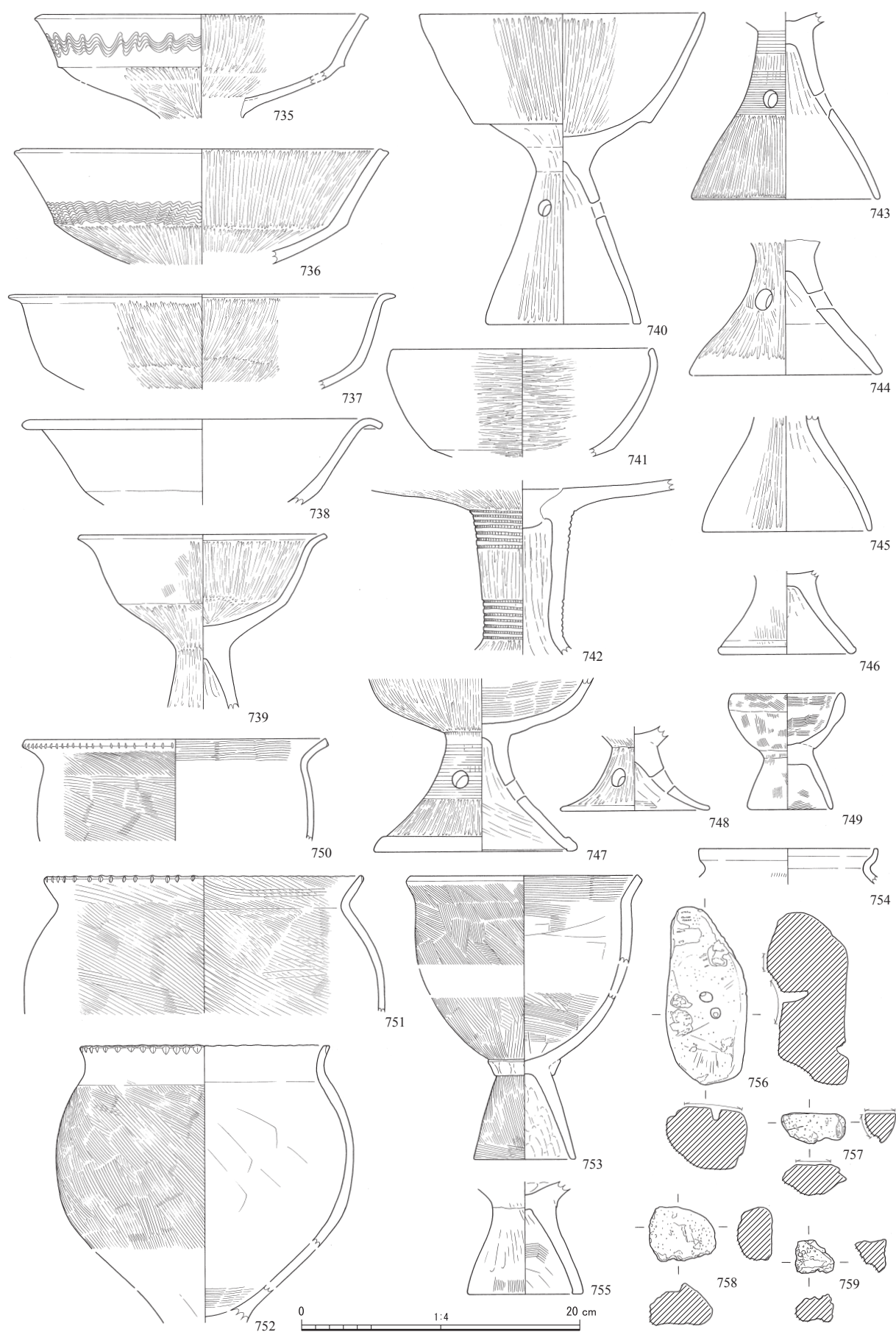


Fig.102 SX204 出土遺物 (2)

(4) 最上層遺構

C区の調査においては他の調査区よりさらに上の標高（0.6～0.9m）において、弥生時代の遺構が確認できた。この標高で検出した遺構群を「最上層遺構」とする。後世の攪乱による遺物の移動は認めてよいが、古墳時代以降の遺物が共存しないことから、弥生時代に形成された遺構群は大きく破壊されていないとみてよいだろう。

土坑・小穴（Fig.104） C区最上層の西側で不定形の土坑を2基（SK202・201）、小穴を数基確認した。なお、SK201は長楕円形の土坑であるが、検出位置や埋土の状況から、SK202と一連の遺構と捉えられる。SK202は不定形の大型土坑であり、東側の土層壁面の状況によると南北3.5m、深さ0.5mほどである。遺物は小破片の状態であったが、比較的多く出土した（762～779）。SK203は不定形の土坑で、長軸1.5m以上、短軸1.0mほどの規模である。土坑中より780が出土した。

C区的最上層で検出した小穴はいずれも規模が小さく、建物の柱穴を形成するものとは捉えられない。遺物の出土量も少ないが、SP202からは781・782が出土した。

土坑・小穴出土遺物（Fig.105） 760・761はSK201から出土した遺物である。先述のとおり、SK201はSK202の一部分とみられ、出土遺物もSK202出土遺物と一連のものとみてよい。760は内彎口縁壺、761は装飾高坏の脚部である。

762～779はSK202から出土した遺物である。装飾く字鉢（765）や山中式系統の高坏（770・771）、欠山式系統でも古相を示す有稜高坏（768）、装飾高坏（772）など、時期的にまとまりがある資料群といえる。層位的には、欠山Ⅲ式期の遺構としてもよいが、出土遺物が示す主体的な時期は欠山Ⅰ～Ⅱ式期である。

780はSK203から出土した拡張口縁の壺である。擬凹線を入れた同系統の壺は、欠山Ⅲ式期に多くみられる。

781・782はSP202から出土した遺物である。781は装飾高坏の脚部に巡らした突帯である。形態的にはSK201から出土した761と近似するが、別個体である。782は小型のく字甕である。

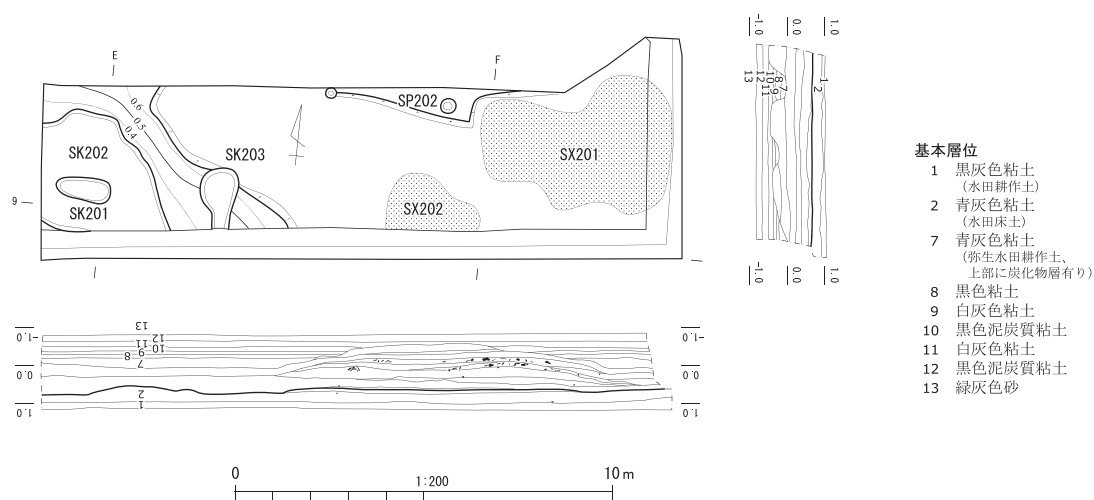


Fig.103 C区最上層遺構

4 C区の遺構と遺物



Fig.104 C区土坑実測図

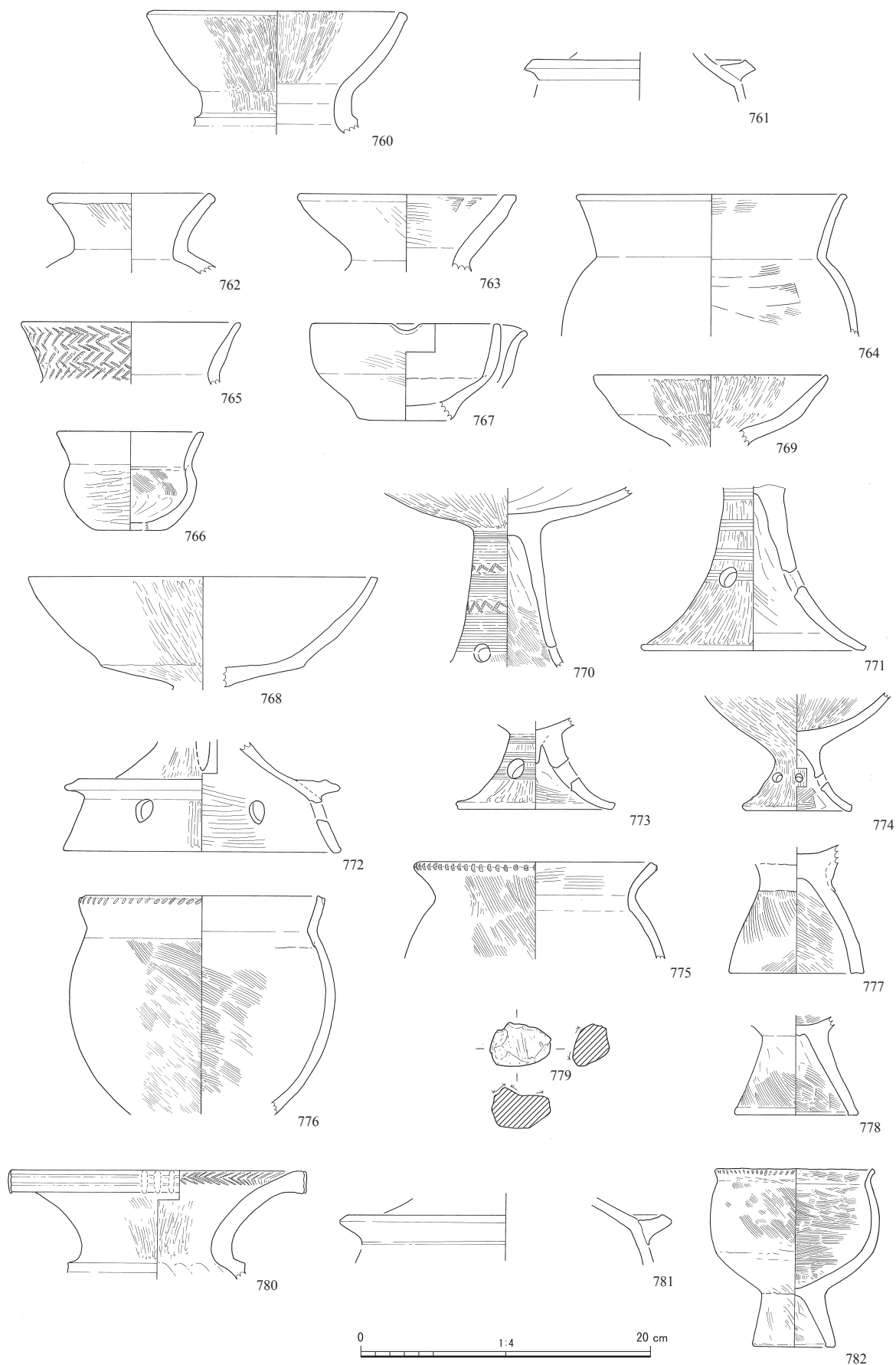


Fig.105 C区土坑等出土遺物

760・761：SK201 762～779：SK202 780：SK203 781・782：SP202

SX201・202 (Fig.106) C区最上層の東側で土器集積を検出した。東端で検出した土器集積をSX201、その西側で検出した土器集積をSX202としたが、両者は本来、一連の遺構であったとも捉えられる。近現代の水田耕作土を重機によって撤去すると、すぐに土器集積があらわれた。後世に攪乱された土器片が一箇所に集中したものともみられたが、土器集積中に新しい時期の土器が含まれないことから、弥生時代の遺構として認定できる。

土器集積が展開する部分は平坦であるが、若干の落ち込みが認められた。下層にあるSD201が埋没した後に残った窪地に土器の小破片が集まったものとみられよう。SX201からは783～801が、SX202からは802～814の遺物が出土した。出土遺物からこれらの土器集積が形成されたのは、欠山Ⅲ式期から元屋敷Ⅰ式期にかけてのことと捉えられる。

SX201 出土遺物 (Fig.107) 783～801はSX201から出土した遺物である。小破片ばかりであるが、特徴的な遺物が含まれる。787は、変形した複合口縁壺である。口縁外面には直線文が、口縁上面には、刺突文、波状文、直線文が施文されている。798・799はS字甕である。798はS字甕A類、799はS字甕B類である。800・801は軽石製の砥石である。

SX201出土遺物の中心的な時期は欠山Ⅲ式期とみられる。ただし、S字甕B類の出現を元屋敷Ⅰ式期の指標とするなら、SX201出土遺物は元屋敷Ⅰ式期まで降る可能性がある。

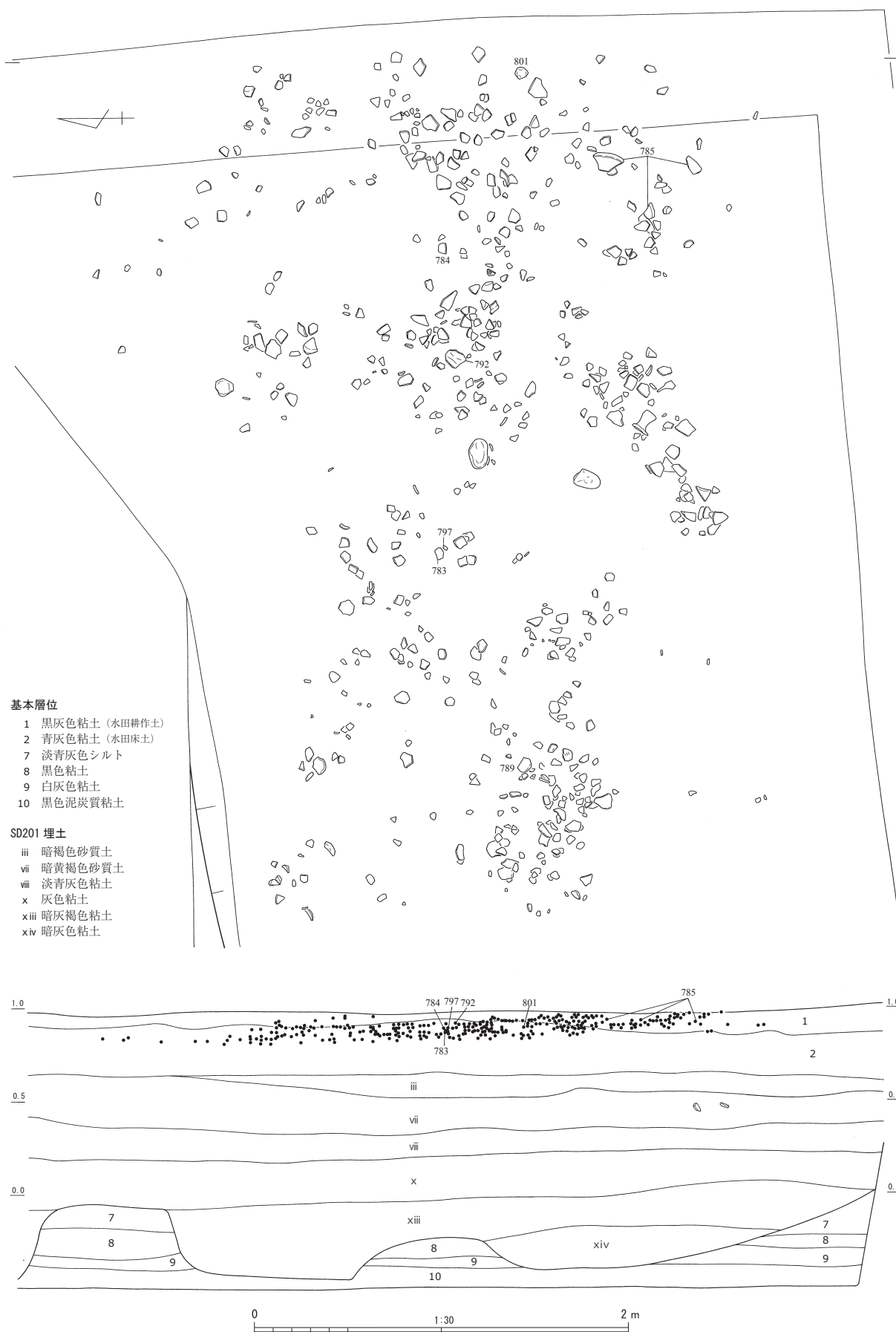
SX202 出土遺物 (Fig.107) 802～814はSX202から出土した遺物である。上述のとおり、これらの遺物は、SX201出土遺物と一連のものとして捉えてもよい。

802～805の壺にみられる口縁形態は、外反口縁、もしくは直立口縁である。807は装飾高坏の脚部に巡らされる突帯である。810・811はS字甕である。ともにS字甕A類に位置づけられ、遺物群の時期を決める指標になりうる。812は畿内V様式系の甕の底部である。搬入品とみられるが、その故地は明確でない。813・814は軽石製の砥石である。多方向に使用面が確認できる。S字甕A類が含まれることから、SX202出土遺物の帰属時期は欠山Ⅲ式期とみられる。

(5) 小 結

C区で検出した遺構は自然河川SD201を中心に展開している。弥生時代の地表面は複雑に入り組んでいたと考えられ、C区のような小さな調査区では層位的に正確な地表面を捉えることができなかったといわざるを得ない。SD201は下層と上層で時期的に分離できることが出土遺物の様相からも裏付けられたが、その他の土器集積は出土遺物の時期と検出面が必ずしも併行関係にあるとは言えない状況である。家形土器の破片が出土したSD201上層北西群や、SX204は、上層検出面で確認したものの、出土遺物が示す時期は下層遺構と併行するとみるほうが妥当であることを示している。

C区の調査においては、欠山Ⅰ式期に土器の廃棄が始まり、その後、欠山Ⅲ式期まで継続的に土器が捨てられ続けたとみられる。その間には、何度かの土層の堆積がみられることから、洪水などで埋もれた可能性が考えられる。廃棄された土器の最上部は後世の攪乱を受けながらも大きく損なわれることなく、SX201にみるように標高80cm程度の高い位置まで遺存している。鳥居松遺跡で検出できる弥生時代の遺構の中では最も高い位置であり、弥生時代の微地形をうかがう点でも重要な調査成果を得ることができた。



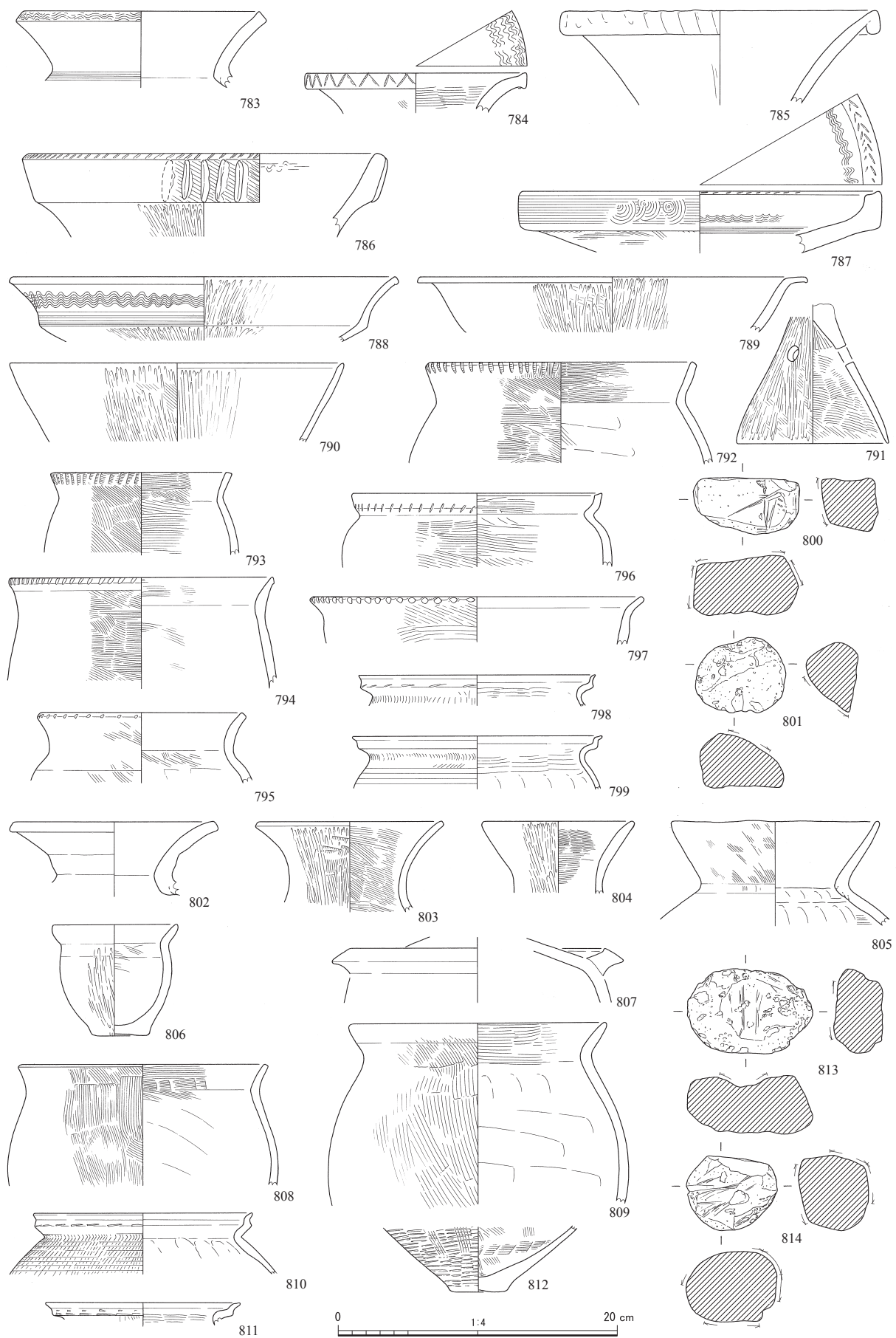


Fig.107 SX201・202 出土遺物

783 ~ 801 : SX201 802 ~ 814 : SX202

第3章 後 論

1 鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年

(1) はじめに

鳥居松遺跡の5次調査では、弥生時代後期前半の山中式（伊場式）期（註1）から後期後半の欠山式期にかけての良好な資料群が出土した。とくに欠山式期の遺物群は出土量が多く、土器編年上の基準資料になりうる遺物群といえる。従来、伊場遺跡群では、伊場・梶子遺跡を中心に山中式期の資料群が充実しており、編年作業も山中式期を中心に検討が進められてきた。いっぽう、欠山式期にかんしては、伊場遺跡群における良好な資料に恵まれず、浜松南部地域以外の出土資料を援用して、変遷の大綱が示されている。今回の調査によって、欠山式期においても伊場遺跡群出土資料を基にした土器編年が可能になった意義は大きい。ここでは、一括資料を示したうえで、各資料群の内容を吟味し、時期的な変遷を明らかにしておきたい。

(2) 資料群の提示と編年的位置

一括資料 鳥居松遺跡から出土した欠山式期を中心とした土器群の器種分類を Fig.108 に示す。この中には山中式系統の特徴を備える土器が含まれるが、後述するように、当地における欠山式期には、前代の山中式系統の形態をもつ土器が数多く残存しているとみられる。

当該地域における弥生後期の土器編年研究は、伊場遺跡群の調査の進展とともに歩んできた。伊場遺跡における大量の土器群を編年的に位置づける基礎的作業に始まり、梶子遺跡出土資料の検討

Tab.4 弥生時代後期を中心とした西遠江の一括資料

編 年	標識資料	鳥居松遺跡
山中Ⅰ式	向山3・23号住居、瓦屋西A3号墓	
山中Ⅱ式	1段階 伊場YT1A・B群、梶子8次B区SD02、梶子8次B区SK02	
	2段階 梶子8次B区SE02中層、梶子6次YT2、梶子10次SD08・10、SK35	3次SX01・02
山中Ⅲ式	1段階 梶子8次A区SX01（主体）、梶子4次YT1、梶子5次YT1、梶子6次YT1（主体）	1次SD03（環濠）、3次SD04
	2段階 梶子8次SK06・07、梶子8次SD01（A・B中層）	1次SK群、5次SD108（環濠）
欠山Ⅰ式	椿野1985SZ01	5次SX204
欠山Ⅱ式	（古相）	5次SD104・SD201下層
	（新相） 椿野1982溝、三和町	5次SX103中群
欠山Ⅲ式	山の神1次SX03	1次SX03・06、5次SX101・SD103・SD201上層
元屋敷Ⅰ式	1段階 大平SB16・27、坊ヶ跡SK13・33、北神宮寺SZ13	
	2段階 大平SB14・39・46、坊ヶ跡SB62・65・118、矢畑SK01	
	3段階 椿野SD24・121、須部ⅡSX06、中平SX12、北神宮寺SB20	
	4段階 椿野1982溝上層、越前B群	

1 鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年

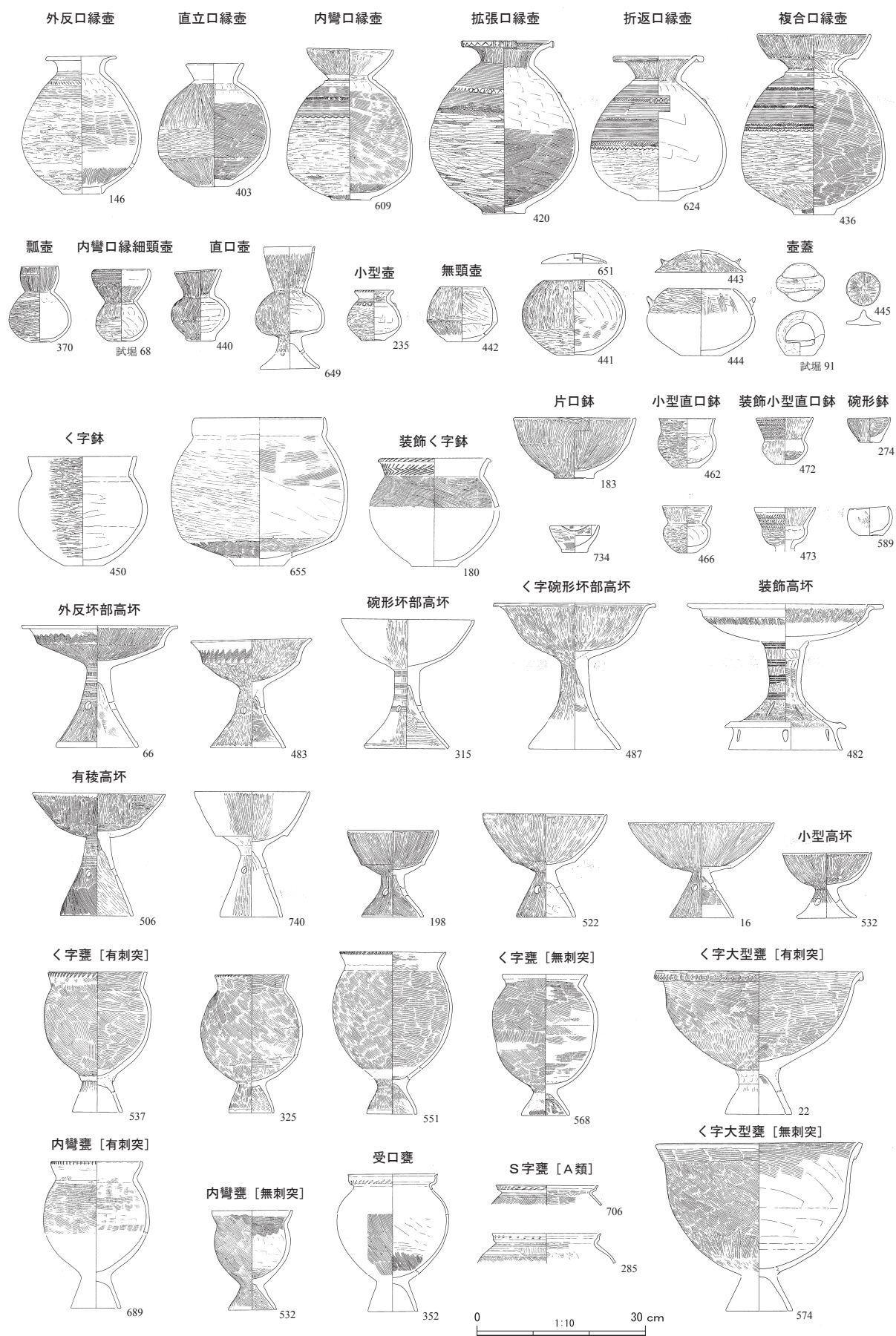


Fig.108 弥生時代後期後半における土器の分類

により、当該地の土器編年の大綱が示された（鈴木敏 1991）。この編年観は、三河地域における検討を加えてより精度を高め、山中式をⅠ～Ⅲ式の3期（5小段階）に、欠山式をⅠ～Ⅲ式の3期に分離するに至っている（鈴木敏 1997・2004）。本稿でも、これらの先行研究を踏襲し、鳥居松遺跡において出土した土器群の編年的位置について検討したい。

各資料の編年的位置 Tab.5 に鳥居松遺跡から出土した遺物群の編年的位置と、土器群の特徴の中で時期差をうかがいやすい属性を整理した。編年的位置を明確にできるものばかりでないが、大まかな変遷の傾向は充分にうかがえるだろう。資料群を位置づける各段階については、従来の見解に即した山中Ⅲ式、欠山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の分離案（鈴木敏 1991・1997）を踏襲する。ただし、山中Ⅲ式については古相と新相の2段階に分離して、山中Ⅲ-1式と山中Ⅲ-2式として取り扱う。また、欠山Ⅱ式についても、古相と新相の2段階に分離できる可能性が考えられるが、今回の調査結果から導きだせる見解であることから、本書では確定的な段階設定を行わず、欠山Ⅱ式（古相）、欠山Ⅱ式（新相）として把握しておきたい。

山中Ⅲ式 山中Ⅲ式は内彎口縁壺の盛行が特徴である。高坏の脚部も内彎傾向が顕著になり、時代を追うごとにその傾向はますます濃厚になる。山中Ⅲ式期のなかで、次段階の欠山式的な土器様式へと変化の度合いを強めていくと考えられるが、欠山式的な有稜高坏へと繋がる中間形態の高坏が出現することを指標とする新相段階が認識できる。今回の調査で確認された SD108 出土資料のなかでは Fig.38-84 が相当し、Fig.38-82 や 85 など欠山式的な傾向を強めた資料として捉えることができるだろう。似たような様相は、梶子 8 次 SK06・07、SD01（A・B 中層）などにも認めることができる。これらの資料群を山中Ⅲ-2式として分離し、山中Ⅲ式の中でも古相を示す資料群を山中Ⅲ-1式として把握しておきたい。

欠山Ⅰ式 欠山Ⅰ式の内容については、伊場遺跡群における資料に恵まれないこともあって、不明瞭であることが指摘されていた。今回の調査によっても、明確に欠山Ⅰ式期に位置づけることができる資料は限られる。欠山Ⅰ式の指標は、欠山様式を代表する有稜高坏の出現である。この段階の有稜高坏は椿野遺跡 1985 年出土資料や SZ01 出土資料にみられるように、脚部の高さが坏部の高さを超える形態を示している。脚部の高さが坏部の高さを超えるものを「長脚」、脚部の高さが坏部の高さと同じ程度か低いものを「短脚」と呼んでおこう。欠山Ⅰ式期の有稜高坏は長脚のもので占められ、短脚のものは次段階の欠山Ⅱ式期になって出現すると捉えられる。

長脚の有稜高坏のみが出土した遺構は、SX204 である。資料数が限られるため、他の形態の高坏が含まれない可能性が考えられるが、暫定的にこの遺構出土遺物を欠山Ⅰ式期に位置づけておきたい。長脚の有稜高坏の出現以外に欠山Ⅰ式の指標を示すとすれば、く字甕における口縁端部の刺突の省略も、数は少ないものの、この段階から出現しているとみられる。

欠山Ⅱ式 欠山Ⅱ式は典型的な欠山式系統の有稜高坏の出現を指標として把握できる。この段階の有稜高坏は短脚で、内彎傾向が強い。SD104 出土の 198 や、SD201 下層出土の 521・522 などが代表例といえる。SD104 や SD201 下層から出土した資料は、短脚の有稜高坏の存在から欠山Ⅱ式期に位置づけられるが、欠山Ⅰ式的な長脚の有稜高坏が伴う。溝内への土器の廃棄が一定期間に及んでいた可能性があるが、ここでは短脚と長脚の共伴を重視して、これらの資料を欠山Ⅱ式の古相

1 鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年

Tab.5 出土資料の組成比較

層位	種別	遺構名	遺物番号	時 期	壺				高 坏						甕						その他
					肩部模様帯				山中系	欠山系				刺突		粘土帯		S 字 甕			
					直線文		櫛描文			脚部		坏部		有	無	有	無				
					狭	広	波	刺		長脚	短脚		深						浅		
											彎脚	直脚									

A区

下層	水田	SD11	1・2	(山中Ⅲ)					●										
		SX11下層	3～9	(欠山Ⅱ)	●			○	●					●			○	B類古	
上層	集積	SX11上層	10～23	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)							○	○	○	●	○		○	B類	
		SX12下層	24～32	(欠山Ⅰ～Ⅱ)	●		●								○				
		SX12上層	33～45	(欠山Ⅰ～Ⅱ)	●		●	○				○		●	○		○		

B区

下層	環濠	SD108	46～101	山中Ⅲ - 2	●		●	○	●						●	○	●	○	
		集積	SX105	102～115	欠山Ⅱ	●			○	●		○		○	●				
	土坑	SK103	116～118	(欠山Ⅰ～Ⅱ)										●		●			
		SK104	119～127	(山中Ⅲ)	●			○	●							●			
		SK105	128～131	(山中Ⅲ～欠山Ⅱ)	●														
		SK106	132	(欠山Ⅱ)											○		○		
		SK107	133・134	(山中Ⅲ)			●		●										
		SK108	135・136	(山中Ⅲ)	●		●												
	溝	下層包含層	137～145	(山中Ⅲ～欠山Ⅱ)					●					●					
		SD104	146～214	欠山Ⅱ(古相)	●	○	●	○	●		○		○	●	○	●			
		SD105	215	(山中Ⅲ～欠山Ⅱ)										●					
		SD107	216	(山中Ⅲ)					●										
		SD109	217	(山中Ⅲ～欠山Ⅱ)															
上層	集積	SX103東群	218～228	(欠山Ⅱ～Ⅲ)										●	○		○		
		SX103中群	229～266	欠山Ⅱ(新相)	●			○	●		○			●					
		SX103西群	267～288	(欠山Ⅱ～Ⅲ)							○	○	○	●	○		○	A類	南関東系壺
	住居	SB101	289～294	(欠山Ⅱ～Ⅲ)								○		●			○		
		上層包含層	295～299	(欠山Ⅱ～Ⅲ)														A類	
	水田	SL101	300～303	(欠山Ⅱ～Ⅲ)								○	○						
		SX101	304～336	欠山Ⅲ		○		○	●		○	○	○	○	●	○		○	南関東系甕
		SL102	337～343	(山中Ⅲ)					●										
		SX102	344～355	欠山Ⅲ		○		○			○	○		●				A類	
		SD103	356～385	欠山Ⅲ		○		○				○						A類	
下層		水田最下層	386	(山中Ⅱ)					●										
上層		水田面	387・388	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)															畿内V様式系甕
		水田覆土	389	元屋敷Ⅱ														C類	

C区

下層	溝	SD201下層	390～582	欠山Ⅱ(古相)	●	○	●	○	●	○	○		○		●	○	●	○	南関東系壺
		SD201上北西	583～594	欠山Ⅰ						○					●		●	○	家形土器
上層		SD201上層	595～715	欠山Ⅲ	●	○	●	○	●		○	○	○	○	●	○	●	○	A類 南関東系甕
下層	集積	SX204	716～759	欠山Ⅰ	●		●		●	○			○		●	○	●	○	
上層	土坑	SK201	760・761	(欠山Ⅰ～Ⅱ)															
		SK202	762～779	(欠山Ⅰ～Ⅱ)					●						●		●	○	
		SK203	780	(欠山Ⅰ～Ⅱ)															
	小穴	SP202	781・782	(欠山Ⅰ～Ⅱ)					●						●				
		SX201	783～801	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)														A類・B類	
	集積	SX202	802～814	欠山Ⅲ					●							○			A類 畿内V様式系甕

アミは基準資料 パーレン内は時期が不確定であることを示す ●：古相を示す特徴 ○：新相を示す特徴

として把握しておきたい。また、SX103 中央群のように、長脚の有稜高坏が伴わない資料群は、欠山Ⅱ式の新相とする。長脚の有稜高坏の有無をもって欠山Ⅱ式を細分できるか、今後の検討課題としておこう。

欠山Ⅱ式期には、瓢壺や碗形の坏部をもった小型高坏といった欠山式を特徴づける新しい器種が加わる。さらに、複合口縁壺や無頸壺、擬凹線を多用する拡張口縁壺などもこの段階から出土例を増している。壺の肩部の模様には幅が広い直線文を用い、刺突文を施すものが圧倒的に多くなる。く字甕の口縁部は無刺突の個体が増加し、脚台部の粘土帯も消失傾向を加速させ、粘土帯を持つものと持たないものの割合がほぼ拮抗する程になる。いっぽう、山中式系統の高坏や、口縁外面に羽状刺突をもつ装飾鉢類はこの段階までは残存するが、その後大きく衰退すると捉えられる。

欠山Ⅲ式 欠山Ⅲ式の指標は、有稜高坏の直線化である。欠山Ⅱ式期においては有稜高坏の内彎傾向が顕著であったが、この段階になると坏部、脚部ともに直線的な形態が増加する。こうした直線化に伴い、有稜高坏は坏部が浅くなる傾向がみられ、脚部も相対的に低くなる。有稜高坏の低脚化と同調するように、く字甕の脚台部も低脚化する。また、く字甕は口縁無刺突の個体が増加し、く字甕全体の 1/5 ～ 1/4 程度を占めるようになる。く字甕脚台部の粘土帯はさらに衰退し、脚台部に粘土帯をもつ個体は、く字甕全体の 1/3 程度まで減少する。

甕の口縁部には、内彎傾向をもつ内彎口縁甕をはじめ、受口状の口縁をもつ甕（受口甕）など、甕口縁の多様性が顕著にみられる。また、東海西部系統の S 字状口縁の甕（S 字甕 A 類）もこの段階には当地方にも波及し、一括資料中に一定量含まれるようになる。

（3）諸属性の傾向と変遷

以上に概観した山中Ⅲ式期～欠山Ⅲ式期にみられる土器様相の変化を器種比率や同一器種・器形における属性分析を通じて検証しておきたい。

器種比率 鳥居松遺跡 5 次調査で出土した資料のうち、定量的な分析に耐えうるものとして、SD108、SX204、SD104、SD201 下層、SX103 中央群、SX101、SD201 上層からの出土遺物がある。これらの遺構群の器種ごとの個体数をまとめたのが Tab.6 である。各器種の識別にあたっては、壺および鉢は底部、高坏・甕は脚台部との接合部を対象とし、それぞれ残存率が 1/3 以上になる個体数を算出した。また、鉢にかんしては、底部から口縁部まで全体形がうかがえる資料のみを鉢として扱っている。このため、壺として数えた中に鉢が含まれる可能性がある。

弥生時代後期前半（山中式期）から、古墳時代前期（元屋敷Ⅱ式期）にいたる器種比率の傾向

Tab.6 出土資料の器種比率

遺 構	段 階	壺		鉢		高 坏		甕		計
		数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	
SD108	山中Ⅲ-2	29	40%	3	4%	24	33%	16	22%	72
SX204	欠山Ⅰ	26	44%	2	3%	21	35%	10	16%	59
SD104	欠山Ⅱ(古相)	13	35%	3	8%	12	32%	9	24%	37
SD201下	欠山Ⅱ(古相)	81	32%	22	9%	65	26%	79	31%	247
SX103中	欠山Ⅱ(新相)	14	41%	2	6%	12	35%	6	17%	34
SX101	欠山Ⅲ	16	37%	2	5%	15	34%	10	23%	43
SD201上	欠山Ⅲ	90	41%	6	3%	50	22%	73	33%	219

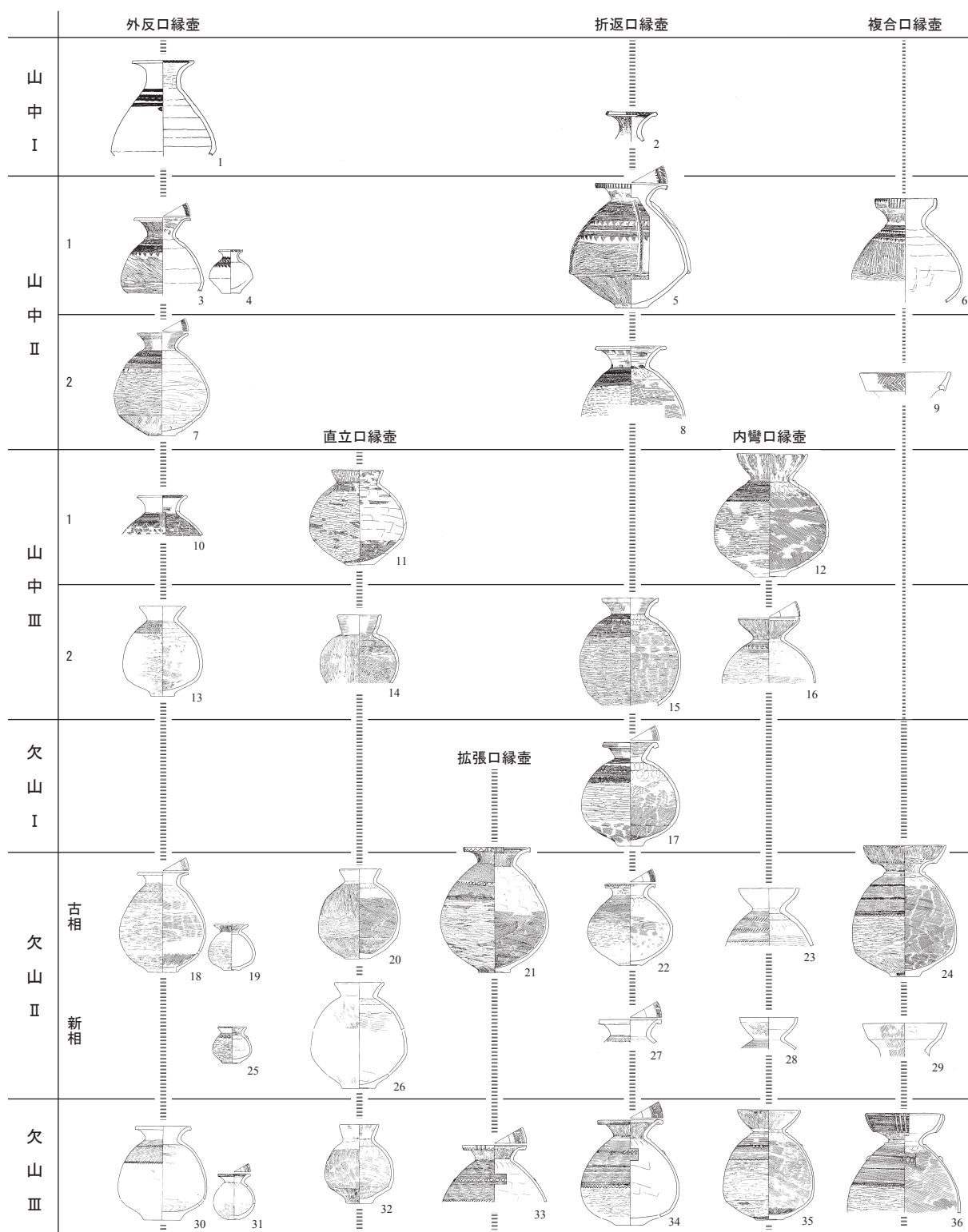


Fig.109 西遠江における弥生時代後期の土器編年 (1)

1: 向山 3 号住居跡 2: 向山 23 号住居跡 3: 伊場 A 群 A10 区 YT1 4: 伊場 YT1 5: 伊場 6: 伊場 B12・13 区 YT7 7: 梶子 8 次 A 地区 SK18 8: 梶子 6 次 YT2 9: 梶子 8 次 A 地区包含層 10 ~ 12: 鳥居松 3 次 SD04 13・16: 鳥居松 5 次 SD108 14・15: 梶子 8 次 B 地区 SD01 17: 梶子 8 次 A 地区包含層 18・22・23: 鳥居松 5 次 SD104 19 ~ 21・24: 鳥居松 5 次 SD201 下層 25 ~ 29: 鳥居松 5 次 SX103 中央 30: 鳥居松 5 次 SD103 31 ~ 36: 鳥居松 5 次 SD201 上層

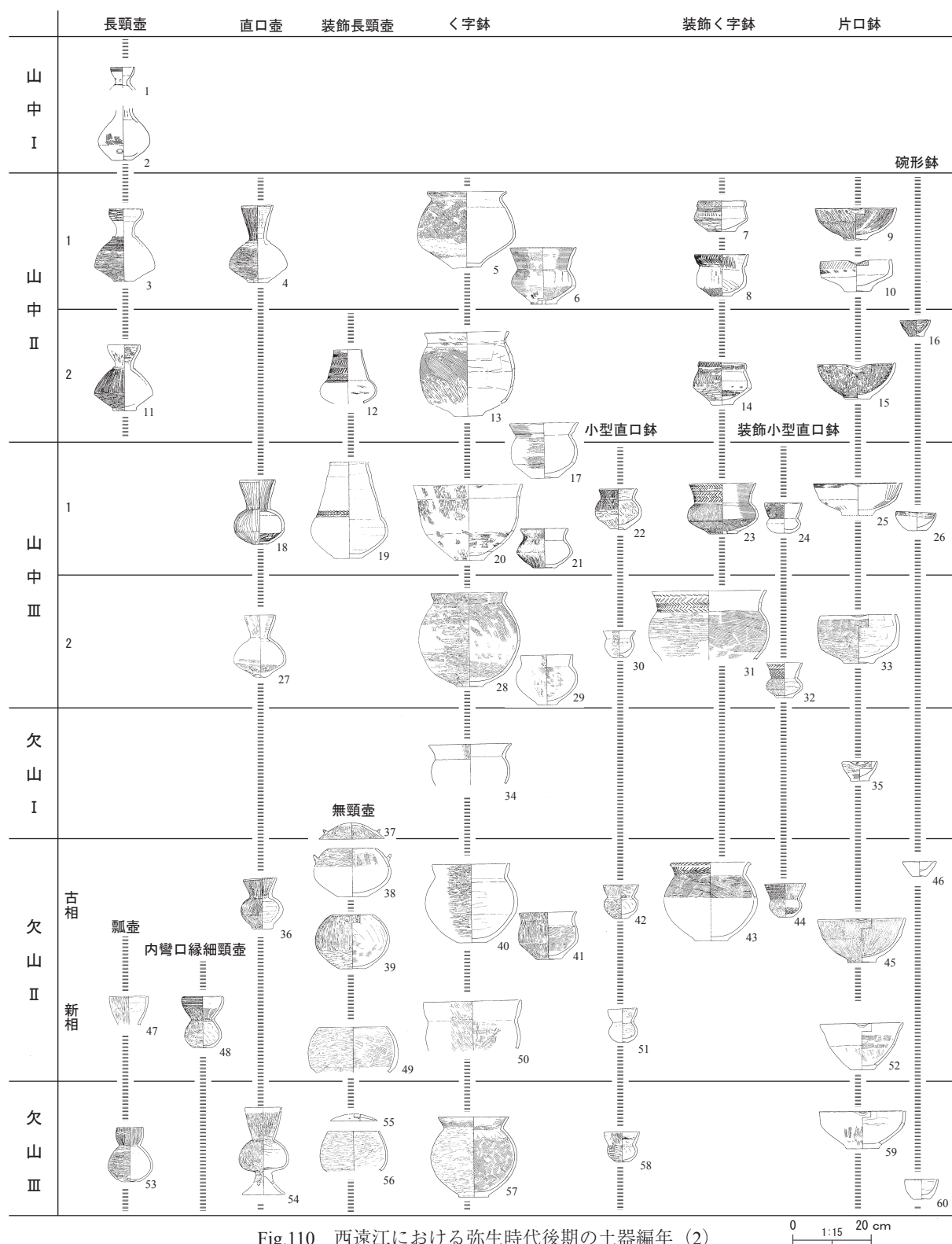


Fig.110 西遠江における弥生時代後期の土器編年 (2)

1・2: 瓦屋西 A3 号住居跡 3: 伊場 B12・13 区 YT7 4: 伊場 C10・11 区 / D11・12 区 YT1 5・7: 伊場 B10・11 区 YT1 6: 梶子 8 次 B 地区 SD02 8: 伊場 D 群 A10 区 YT9 西縁 9: 伊場 A・B10 区 YT2 10: 伊場 X12・13 区 11: 伊場 B12・13 区 YT7 12: 伊場 D 群 A10 区 YT9 西縁 13・15: 梶子 10 次 SD08 14: 伊場 B12・13 区 YT7 16: 伊場 A・B13 区環濠外 17・23: 梶子 8 次 A 地区 SX01 18: 梶子 4 次 YT1 19・22: 梶子 6 次 YT1 20: 鳥居松 3 次 SD04 21・24: 梶子 5 次 YT1 25: 梶子 4 次 YT1 26: 伊場 27・28: 梶子 8 次 B 地区 SD01 29・30・33: 鳥居松 5 次 SD108 31・32: 梶子 8 次 B 地区 SK07 34・35: 鳥居松 5 次 SX204 36~42・44: 鳥居松 5 次 SD201 下層 43・45・46: 鳥居松 5 次 SD104 47・49~52: 鳥居松 5 次 SX103 中央 48: 鳥居松 5 次試掘 53・60: 鳥居松 5 次 SD103 54~56・58: 鳥居松 5 次 SD201 上層 57: 鳥居松 1 次 SX06 59: 鳥居松 5 次 SX101

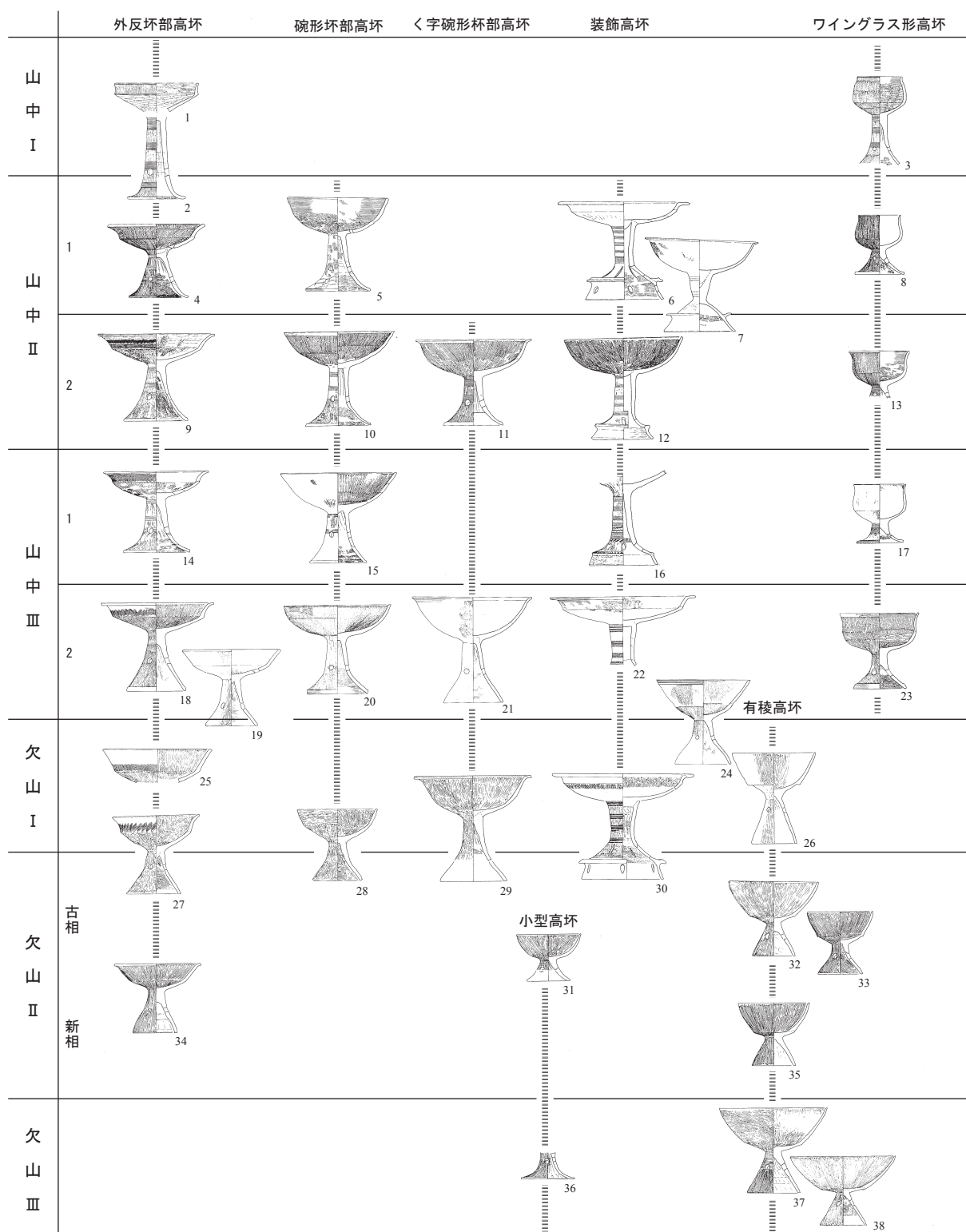


Fig.111 西遠江における弥生時代後期の土器編年 (3)

0 1:15 20 cm

1・2: 梶子 8 次 B 地区 SK02 3: 梶子 8 次 B 地区 SK06 4・5: 梶子 8 次 B 地区 SD02 6・7: 伊場 D 群 A10 区 YT9 西縁 8・10: 伊場 B12・13 区 YT7 9: 梶子 6 次 YT2 11: 梶子 8 次 A 地区 SK30 12: 伊場 A・B13 区環濠外 13: 梶子 8 次 B 地区 SE02 14・15: 鳥居松 3 次 SD04 16・17: 梶子 5 次 YT1 18・19: 鳥居松 5 次 SD108 20・21: 梶子 8 次 B 地区 SK06 22: 梶子 8 次 B 地区 SK07 23・24: 梶子 8 次 B 地区 SD01 25・26: 鳥居松 5 次 SX204 27~32: 鳥居松 5 次 SD201 下層 33: 鳥居松 5 次 SD104 34・35: 鳥居松 5 次 SX103 中央 36: 鳥居松 5 次 SD103 37: 鳥居松 5 次 SX101 38: 鳥居松 5 次 SX11 上層

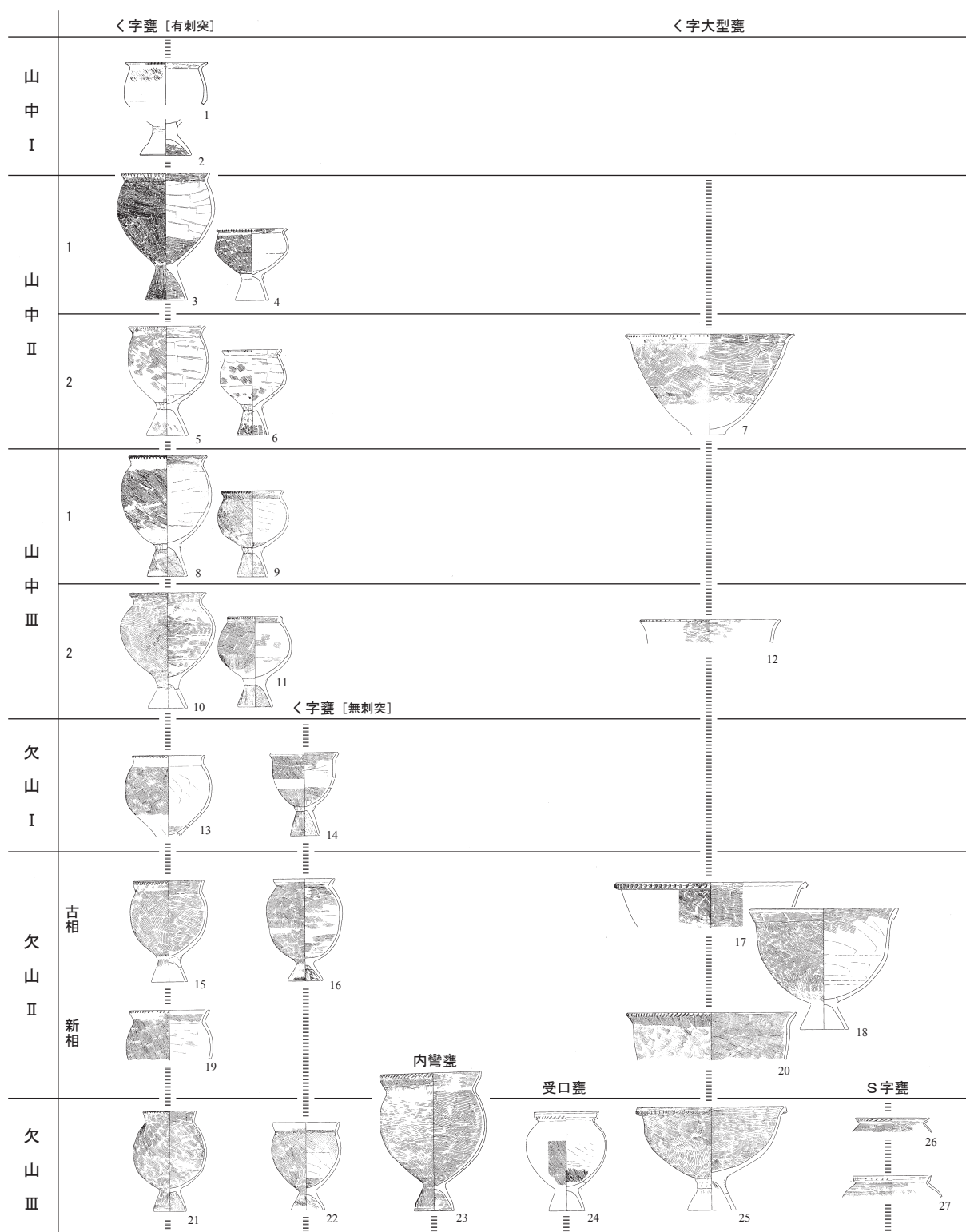


Fig.112 西遠江における弥生時代後期の土器編年 (4)

1：向山3号住居跡 2：向山窯状遺構 3：梶子8次B地区SD02 4：伊場B群B10・11区YT1 5・6：梶子10次SD08 7：梶子10次SD10
 8・9：梶子6次YT1 10・12：鳥居松5次SD108 11：梶子8次B地区SK06 13・14：鳥居松5次SX204 15～18：鳥居松5次SD201下層
 19・20：鳥居松5次SX103中央 21・22：鳥居松5次SX101 23：鳥居松1次SX06 24：鳥居松5次SX102 25：鳥居松5次SX11上層 26：鳥居松5次SD201上層 27：鳥居松5次SX103西群

Tab.7 一括資料における属性の変遷

資料名	時 期	模 様							口縁刺突		粘土帯	
		縦	扇	波	刺				有	無	有	無
					点	羽	山	交				
梶子10次SD08	山中Ⅱ-2	2	5	33					10		13	7
梶子10次SD10	山中Ⅱ-2		7	28	1				7		12	10
梶子8次SX01	山中Ⅲ-1	3	8	26	2				12		10	4
鳥居松3次SD04	山中Ⅲ-1	1	1	1	1				5		3	4
梶子8次SD01A・B	山中Ⅲ-2		2	14	6	1	1		8		8	6
梶子8次SK06・07	山中Ⅲ-2	1	4	10	4				10		10	10
鳥居松5次SD108	山中Ⅲ-2	2	2	12	13				18	1	13	3
鳥居松5次SX204	欠山Ⅰ		1	7	7				16	1	5	5
鳥居松5次SD104	欠山Ⅱ(古相)		4	14	24				8	1	9	1
鳥居松5次SD201下	欠山Ⅱ(古相)		1	4	37	4	5		96	3	34	39
鳥居松5次SX103中	欠山Ⅱ(新相)			2	3				3	1	3	3
椿野1982溝	欠山Ⅱ(新相)			8	13	5			21	5	2	4
鳥居松5次SX101	欠山Ⅲ			2	8		2		11	6	1	9
鳥居松5次SD201上	欠山Ⅲ		3	19	100	3	7	6	111	23	16	27
鳥居松1次SX03・06	欠山Ⅲ			7	21	4	11	1	32	9	5	26
坊ヶ跡1次SB25	元屋敷Ⅰ-1			1	1				5	3	2	8
坊ヶ跡1次SB49	元屋敷Ⅰ-1		2	2	3				3	5	1	3
坊ヶ跡1次SK33	元屋敷Ⅰ-1				2				4	5	1	8
坊ヶ跡全体	元屋敷Ⅰ-1・2		3	5	23	3			19	61	6	59
北神宮寺全体	元屋敷Ⅰ・Ⅱ			21	25		4		95	228	2	78

凡例：138 頁参照

(鈴木敏 2004)と比較すると、今回の出土資料が示す器種比率は時期的な推移と整合性が高い数値を示していることが分かる。とくに、欠山式期に該当する SX204、SD104、SD201 下層、SX103 中央群、SX101、SD201 上層の各資料群の総数を比較した数値は、欠山Ⅲ式の基準資料である鳥居松遺跡 1 次調査 SX03・06 における比率と近似する。今回の調査で判明した欠山式期の器種比率は、伊場遺跡群の実態を示しているものと評価できるだろう。

属性の変化 土器群の編年作業においては、新出もしくは衰退する器種や器形を指標にしていたが、検討資料が増加し定量的な分析が可能になった現在、同一器種や器形における属性分析の重要性が高くなっている。ここでは、壺肩部の模様と、く字甕や内彎甕といった在来系の台付甕の属性について検討を加えておきたい。

壺肩部の模様 山中・欠山式期の壺肩部における模様は、横方向の直線文を主体にし、その間や下端部は波状文や扇形文、竹管文、列点文といった刺突文などで充填されている。また、横方向の直線文は横方向だけでなく、縦方向に施される場合もある。縦方向に施される直線文は T・J 字文とも呼称される。Tab.7 に、今回の調査で出土した主要資料群と前後する時期の一括資料などにみられる壺肩部の模様の確認数を整理した。以下、若干の解説を加えておく。

まず、横方向の直線文について検討しておく。山中式期の横方向の直線文は、櫛状原体を一段のみ施すことから、幅が 2cm 程度と狭い。いっぽう、欠山式期になると直線文の幅が広くなる傾向があり、中には原体を数段分施し、幅が 5cm を超えるような個体もみられる。Tab.5 では、直線文の幅が 3cm を超えるものを「幅広」とし、それ以下のものを「幅狭」として検討を加えた。幅広の直線文は欠山式期の中でも比較的新しい段階になって盛行する特徴とみられよう。その出現時期は欠山Ⅱ式期とみられるが、広範にみられるようになるのは欠山Ⅲ式期と想定できる。

いっぽう、縦方向の直線文は、弥生時代中期から連続する模様構成原理を踏襲することに表れて

いるように、古相を示す模様といえる。その数は少ないものの、山中式期の全時期にわたって施文される模様と捉えられる。縦方向の直線文は欠山式期になるとほぼ消滅したとみてよいだろう。

扇形文は山中式期に好んで用いられる模様である。波状文と比べると採用数は少ないが、山中式期の模様をもつ壺の2～3割程度に採用されている。扇形文の施文は、欠山式期になると著しく衰退するが、元屋敷Ⅰ式期の坊ヶ跡遺跡1次SB49から出土した遺物中にも認められることから、弥生時代後期後半の前半期を通じて僅かながら残存しているといえるだろう。

波状文は山中式期から欠山式期を通じてみられ、とくに山中式期においては最も主体的な櫛描模様といえる。山中式期の前半は、模様を施す壺の圧倒的多数に波状文が採用されている。時期が降るに従い模様の主体は刺突列点文に変化するが、欠山式期から元屋敷Ⅱ式期に至るまで残存している。とくに元屋敷式期になると波状文の施文が再び隆盛化する傾向がある。北神宮寺遺跡の事例は浜名湖北岸域という地域的特性が関連している可能性があるが、波状文の出現頻度が刺突列点文に肉薄している。

刺突文は、単斜方向に1列のみ施される列点文、列点文の向きが交互にされ2～3列程度に重なる羽状文、隣接する列点文の向きが異なる山形文、向きが異なる列点文が交差する交差文などの多様性が認められる。圧倒的多数を占めるのが列点文であり、山中Ⅲ式期頃から一定数を占めるようになる。もう一つの主流模様である波状文との出現頻度は山中Ⅲ-2式期から欠山Ⅰ式期あたりで同程度になり、欠山Ⅱ式期以降は列点文が主体的な模様にかわっていく。山形文、羽状文、交差文なども欠山Ⅱ～Ⅲ式期に多く用いられる。山形模様は尾張地域のパレススタイル土器に好んで用いられており、その影響を考慮した方がよい。また、羽状文は東に広がる菊川式土器に好んで用いられることから、菊川式との関係も配慮すべき模様である。

在来系台付甕の変遷 当地方のく字口縁や内彎口縁の台付甕には、口縁端部の刺突の有無と、脚台接合部における粘土帯の有無といった属性分析箇所がある。口縁端部の刺突は、山中式期にはほぼすべての個体において見られるが、欠山式期になると無刺突の個体がみられるようになり、時代が降るごとに、その比率を増していく。口縁端部における刺突の有無がほぼ同数になるのは、元屋敷Ⅰ-1式期であると想定でき、その後は無刺突の個体が主体的な存在になる。刺突文をもつ台付甕は、元屋敷Ⅱ式期にはほぼ消滅したとみてよいだろう（鈴木—2004、2009）。

西遠江の在来系台付甕の脚台接合部には、補強のための粘土帯を巡らす技法が認められる。山中式期においては、その有無の比率は1:1程度で推移するが、欠山式期になると粘土帯をもたない個体数が増加する。とくに欠山Ⅲ式期になると粘土帯をもたない個体が主体的な存在となる。粘土帯を巡らす技法は、元屋敷Ⅰ-1式期までわずかに残存するが、元屋敷Ⅰ-2式期以降は殆どみられなくなる（鈴木—2004、2009）。

S字甕の共伴状況 西遠江にも欠山式期には、東海西部地域からの影響でS字甕（A類）がみられるようになる。東海西部地域におけるS字甕の出現時期は欠山Ⅰ式期まで遡りうるが、当地方で一般的にS字甕がみられるようになるのは欠山Ⅲ式期と捉えることができる（鈴木敏1991）。今回の調査でもTab.9に示すように比較的多くのS字甕が出土した。その多くは欠山Ⅲ式ないしはそれ以降の時期に位置づけて問題がないことが確認できる。

Tab.8 他地域との併行関係

西 暦	時期区分	西遠江		尾 張		大 和				
		本 稿		赤塚 1990・1997・2002		藤田・豆谷 2003	寺沢 1986	豊岡 1999		
50	弥生時代 後期	+		八王子古宮			大和Ⅴ			
		山中（伊場）Ⅰ		山中Ⅰ	1	大和Ⅵ-1				
		山中（伊場）Ⅱ	1 2		大和Ⅵ-2					
		山中（伊場）Ⅲ	1 2	山中Ⅱ	1 2～3	大和Ⅵ-3				
		欠山（鳥居松）Ⅰ			0		大和Ⅵ-4	庄内0	纏向1類	
		欠山（鳥居松）Ⅱ	古 新	1～3						
		欠山（鳥居松）Ⅲ		3～4						
		200	弥生時代 終末期	元屋敷Ⅰ（坊ヶ跡）	1	廻間Ⅱ	1	庄内1		
					2		2	庄内2		
					3		3～4	庄内3		
4	廻間Ⅲ				1	庄内3				
元屋敷Ⅱ（恒武西宮）				1	2	布留0				
250	古墳時代					布留1				
							纏向5類			

他地域との併行関係 各段階の属性の推移についての検討を通じて、今回の調査で確認できた欠山式期を中心とする資料群は、当地域における土器編年の基準資料として位置づけられることが確認できた。本稿で用いた土器編年と他地域における編年との併行関係は、なお不明瞭な部分を残すが、暫定的ながら Tab.8 のように整理できる。

（４）結 語

以上、鳥居松遺跡から出土した資料群の編年的位置づけを明確にした。この検討によって、今回の調査で検出した各遺構の帰属時期がほぼ明らかにできたものといえる。伊場遺跡群における欠山式期の土器様相は不明瞭な部分が多かったが、本稿による分析によってその変遷の大枠は描けたものといえよう。

〔註〕

註1 本書でいう山中式、欠山式とは西遠江における小様式を示す名称として用いている。正式には西遠江山中様式、西遠江欠山様式と呼ぶべき内容である。また、地域性を重視するなら、標識資料を出土した遺跡名をもとに、山中式を伊場式、欠山式を鳥居松式、元屋敷Ⅰ式を坊ヶ跡式、元屋敷Ⅱ式を恒武西宮式と呼びかえることも可能である（Tab.8）。

〔参考文献〕

- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎 2002「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター
 鈴木敏則 1991「後期弥生土器」『梶子遺跡Ⅶ』（財）浜松市文化協会
 鈴木敏則 1997「三河・遠江から見た相模の後期弥生土器・前編」『西相模考古』第6号
 鈴木敏則 2004「後期弥生土器」『梶子遺跡Ⅹ』（財）浜松市文化協会
 鈴木一有 2004「坊ヶ跡遺跡にみる弥生・古墳移行期の集落像」『坊ヶ跡遺跡』（財）浜松市文化協会
 鈴木一有 2009「北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造」『北神宮寺遺跡』（財）浜松市文化振興財団
 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
 豊岡卓之 1999「『纏向』土器資料の基礎的研究」『纏向』第5版 奈良県立橿原考古学研究所
 藤田三郎・豆谷和之 2003「奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所

2 鳥居松遺跡の集落構造とその特質

(1) はじめに

鳥居松遺跡では、過去の調査において環濠を伴う集落の存在が明らかにされており、集落に隣接する水田の畦畔には、農耕にかかわる儀礼に使用された家形土器が完全な形で出土し注目を集めた。今回の調査においては、環濠のほか、堅穴建物や大規模な灌漑用水路を伴う水田の畦畔、自然河川などの遺構を検出し、集落内の様相をより詳細にうかがう材料を得た。また、山中Ⅲ式期から欠山Ⅲ式期に至る各段階の良好な土器群をはじめ、家形土器、南関東系土器といった稀少な遺物が出土した。ここでは、前節において明らかにした時間軸をもとに、従来の調査成果と今回の調査で得られた新知見をもとに、鳥居松遺跡における集落構造の変遷を素描し、伊場遺跡群におけるこの集落の特質について考えてみたい。

(2) 特殊遺物とその特質

鳥居松遺跡に営まれた集落の性格を捉えるにあたり、特殊な出土遺物について瞥見しておこう。Fig.113 に伊場遺跡群から出土した青銅器、土製品、特殊土器、線刻土器、特殊な木製品といった特徴的な遺物を示した。以下、鳥居松遺跡から出土したものを中心に紹介しておきたい。

青銅器 伊場遺跡群から出土する青銅器の数は決して多いとはいえない。今回の調査では、伊場大溝の最深部から銅鏃 (Fig.113-4) が出土している。茎には鍛造製品のように叩かれた痕跡がある。鏃身部は柳葉形を呈しており、従来まで知られていたもの (Fig.113-5 ~ 8) と比べると大型である。大型の鏃身部の形態から、この個体は弥生時代終末期に近い時期のものとみられる。

家形土器 家形土器は鳥居松遺跡から2個体が出土している。今回の調査で出土した個体は、破片であるが、3次調査 (浜文協 2002) で出土したものと形態的に共通する部分が多く、脚台部が連接する壺形土器であることが分かる。形態的特長から、掘立柱建物を象ったものとみてよいだろう。5次調査出土品は屋根に櫛描模様を多用しており、3次調査出土品より加飾性が高い点も注目できる。5次調査出土品は3次調査出土品より上位の製品か、古い時期の製品である可能性が考えられるだろう。3次調査出土品は共伴遺物から山中Ⅲ-1式期に位置づけられる。5次調査出土品は破片の状態で出土し、出土遺構が分かれるため、その帰属時期を明確にすることが難しい。しかし、3次調査品との形態的類似と櫛描模様の特徵から、山中Ⅲ式期頃に位置づけて矛盾はないだろう。なお、5次調査で出土した家形土器にみられる直線文、刺突文、扇形文といった模様構成は、伊場遺跡から出土した鰭付の壺 (Fig.113-13) と共通する。製作時期や模様に込めた意図が近似しているとみられよう。

弥生時代の家形土器は全国でも10数例しか確認できていない希少品であり (鈴木敏 2004b)、集落遺跡から2個体以上が確認されたのは鳥居松遺跡が初めてのことである。3次調査出土品は水田畦畔に伴って出土しており、家形土器が水田経営の安寧や繁栄を願う農耕祭祀に用いられた祭祀具であったことが分かる。鳥居松遺跡では水田が広範囲に広がっており、今回の調査においても水田

畦畔上に土器を立ち並べた儀礼の痕跡が明確にされている。伊場遺跡群内の集落に居住する膨大な人口を支える生産基盤として、鳥居松遺跡とその周辺の水田は重要視されていたことが2個体の家形土器の出土からうかがえるだろう。

木器模倣土器 伊場遺跡群から出土する遺物の中に、木器を模倣したとみられる土器が知られる。Fig.113 には装飾高坏、脚付鉢、突起付無頸壺などをあげたが、これら形態的に木器の影響がうかがえる土器群を、「木器模倣土器」と総称しておきたい。

装飾高坏は、西遠江の山中式を代表する高坏の一形態である。伊場遺跡群から集中的に出土することは、古くから留意されてきた。儀礼用具として特化した形態と捉えられ、伊場遺跡群の求心性を伝える資料として認識できる。装飾高坏は、明確な屈曲部を有する皿状の坏端部に、高い突帯を伴う脚台部をもつ形態（Fig.113-18・19）が基本形とみられる。脚部は明確な括れを有し、坏部上位に向かって太くなり、櫛刺突の直線文が入れている。また、脚部の突帯の上下には、杏仁形のスカシ穴が多方向に開けられている。こうした形態的な特徴から、装飾高坏は木製高坏を模したも

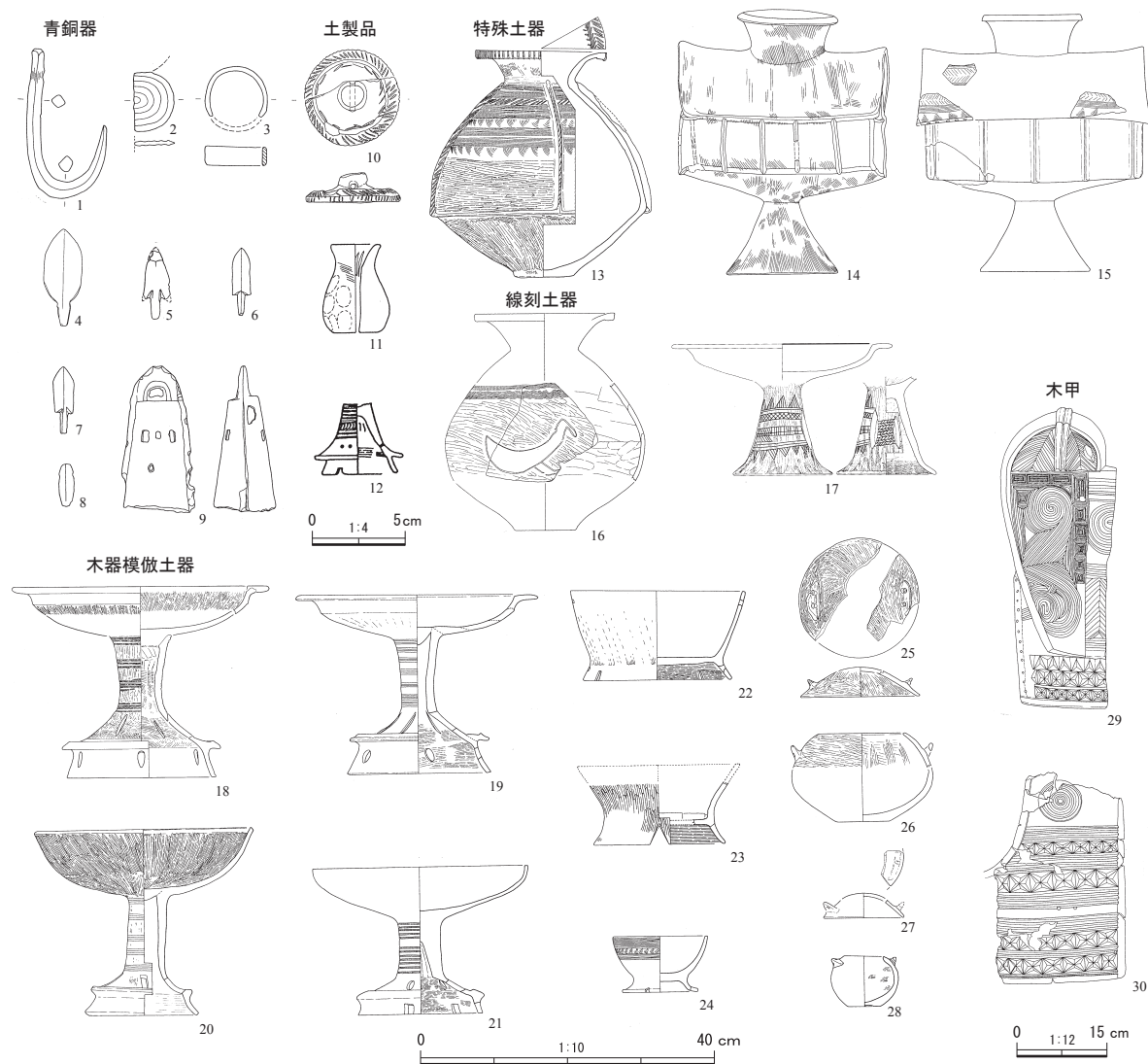


Fig.113 伊場遺跡群出土の弥生時代特殊遺物

1・3・5・8・9・11～13・16・17・19～24・28～30：伊場 2・6・7・10：梶子 4・15・18・25～27：鳥居松5次 14：鳥居松3次

のとみなせるだろう。装飾高坏には形態的な差異が認められるものも多いが、碗形の坏部をもつもの（Fig.113-20・21）などは、脚部の屈曲が少なく、突帯も僅かであったり、スカシ孔が省略されたりするなど、変容形態と捉えられる。

脚台部に切り欠きをもつ脚付鉢（Fig.113-22～24）も木器を模倣した形態とみられる。脚台部の切り欠きは、装飾高坏の脚台部のそれと類似しており、逆台形を呈する鉢本体の形態も土器にみられる鉢の形態とは異なっている。さらに、蓋を取り付けるための紐懸け突起を作り出した無頸壺も、木器模倣土器に加えることができよう。今回の調査では、Fig.113-25～27 といった個体が出土した。とくに Fig.113-25・26 は、内外ともに丁寧なミガキ調整を施し、硬緻に焼きあげており、特別に製作した精製品であることが分かる。こうした木器模倣土器は、愛知県朝日遺跡で一定量の出土が知られている（早野 2009）。

特殊遺物の集中 鳥居松遺跡からは装飾高坏が破片を含めて 8 点出土したが、そのうち 6 点が C 区から出土している。C 区はこの他にも、家形土器や木器模倣の無頸壺といった儀礼用具も出土しており、特殊な土器が集中的に出土する区域といえる。鳥居松遺跡の中でも祭儀を執り行った地点に近いとみられよう。C 区において検出した主要な遺構は、自然河川の SD201 である。この遺構の広がりとは不明確であるが、河川が遺跡の東側を南に向かって流れ、南の潟湖を介して外洋と繋がっていたとみられる。後述するように、今回の調査ではまとまった量の南関東系土器が出土していることから、外洋と繋がる河川を通じて遠隔地との交易がなされていたものとみてよい。鳥居松遺跡は伊場遺跡群の中でも遠隔地交易の機能を担う港湾施設を抱えた河津としての性格が強いとみてよいだろう。今回の調査で出土した豊富な特殊遺物は、この集落の中心地が調査対象地の近辺に存在した可能性を強く示唆している。

（3）外来系土器

今回の調査では数多くの外来系土器が出土した（Tab.9・Fig.114）。これらの外来系土器は、製作地もしくは影響をうけた淵源地から、大きく南関東系、東遠江系（菊川式系）、東海西部系（S 字甕）、畿内系に分けることができる。以下、その詳細について触れておこう。

南関東系土器 鳥居松遺跡では、3 次調査においても南関東系の壺が 1 点確認されていたが（浜文協 2002、SX01・02-65）、今回の調査では 6 点の南関東系土器が出土し、その数の多さが明確になった。従来、遠江の弥生時代後期の遺跡において、南関東系土器が出土することは殆ど認識されていなかったことを考えると、鳥居松遺跡における南関東系土器の集中的な出土が改めて注目できる。鳥居松遺跡が南関東地域と当地域を結ぶ広域交流網の中核的役割を担っていたことを示す資料といえる。その最も顕在化した時期は欠山Ⅲ式期（山田橋 2 式新段階～後続様式期併行、大村 2004）とみてよいだろう。

南関東系土器には、327 といった搬入品の可能性が高いもののほかに、288 といった明らかに当地で製作されたものが含まれる。288 は焼成や胎土、ハケを多用する調整技法などから、当地で製作されたものと考えられるが、自縄結節や山形文といった特徴を有し、南関東における土器製作技法を熟知していた人物が製作したものと捉えられる。南関東から当地への人の移動を物語る資料と

2 鳥居松遺跡の集落構造とその特質

Tab.9 外来系土器

Fig.	番 号	遺 構	遺構等の時期	器 種	区 分	推定製作地
------	-----	-----	--------	-----	-----	-------

南関東系

55	288	SX103西群	(欠山Ⅱ～Ⅲ)	壺	南関東系	浜松南部
62	327	SX101	欠山Ⅲ	甕	南関東系	東京湾東岸
75	434	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	折衷形態	東京湾沿岸 (相模?)
75	435	SD201下層	欠山Ⅲ	広口鉢	南関東系	東京湾沿岸
99	710	SD201上層	欠山Ⅲ	甕	南関東系	浜松南部
大溝編-13	11	伊場大溝	(山中Ⅲ～欠山Ⅲ)	壺	南関東系	東京湾沿岸

東遠江系(菊川式系)

15	65	試掘坑11	欠山Ⅲ	壺	折衷形態	浜松南部
31	29	SX12下層	(欠山Ⅰ～Ⅱ)	壺	菊川式	磐田南部
31	30	SX12下層	(欠山Ⅰ～Ⅱ)	壺	菊川式	天竜川平野
36	57	SD108	山中Ⅲ-2	壺	菊川式	東遠江
43	149	SD104	欠山Ⅱ (古相)	壺	折衷形態	浜松南部
44	169	SD104	欠山Ⅱ (古相)	壺	折衷形態	浜松南部
44	172	SD104	欠山Ⅱ (古相)	壺	折衷形態	浜松南部
52	241	SX103中央群	欠山Ⅱ (新相)	壺	菊川式	東遠江
52	242	SX103中央群	欠山Ⅱ (新相)	壺	折衷形態	浜松南部
66	368	SD103	欠山Ⅲ	壺	菊川式	磐田南部
74	427	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	折衷形態	浜松南部
82	428	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	折衷形態	浜松南部
82	429	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	菊川式	磐田南部
82	430	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	菊川式	東遠江
82	431	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	菊川式	天竜川平野
82	432	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	菊川式	都田川平野
82	433	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	壺	菊川式	磐田南部
77	446	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	鉢	菊川式	都田川平野
83	540	SD201下層	欠山Ⅱ (古相)	甕	菊川式	天竜川平野
95	640	SD201上層	欠山Ⅲ	壺	菊川式	磐田南部
96	664	SD201上層	欠山Ⅲ	高坏	菊川式	浜松南部
大溝編-13	9	伊場大溝	(山中Ⅲ～欠山Ⅲ)	壺	菊川式	浜松南部
大溝編-13	10	伊場大溝	(山中Ⅲ～欠山Ⅲ)	壺	菊川式	磐田南部

東海西部系(S字甕)

29	8	SX11下層	(欠山Ⅱ)	甕	S字甕B類 (古相)	東海西部
30	23	SX11上層	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)	甕	S字甕B類	東海西部
54	284	SX103西群	(欠山Ⅱ～欠山Ⅲ)	甕	S字甕A類	東海西部
54	285	SX103西群	(欠山Ⅱ～欠山Ⅲ)	甕	S字甕A類	東海西部
58	297	B区包含層	(欠山Ⅲ)	甕	S字甕A類	東海西部
67	382	SD103	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類	東海西部
68	389	B区水田覆土	元屋敷Ⅱ	甕	S字甕C類	
99	706	SD201上層	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類	東海西部
99	707	SD201上層	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類 (古相)	東海西部
99	708	SD201上層	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類	東海西部
99	709	SD201上層	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類	東海西部
107	798	SX201	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)	甕	S字甕A類	東海西部
107	799	SX201	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)	甕	S字甕B類	東海西部
107	810	SX202	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類	東海西部
107	811	SX202	欠山Ⅲ	甕	S字甕A類	東海西部
大溝編-14	35	伊場大溝	(欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ)	甕	S字甕A類	東海西部
大溝編-14	36～38	伊場大溝	(元屋敷Ⅰ)	甕	S字甕B類	東海西部
大溝編-14	39～47	伊場大溝	(元屋敷Ⅱ)	甕	S字甕C類	

畿内系

68	388	水田造営面	欠山Ⅲ～元屋敷Ⅰ	甕	畿内V様式系	東海西部～畿内外縁
107	812	SX202	欠山Ⅲ	甕	畿内V様式系	東海西部～畿内外縁

バーレン内は不確実な事象を示す。大溝編：『鳥居松遺跡5次伊場大溝編』

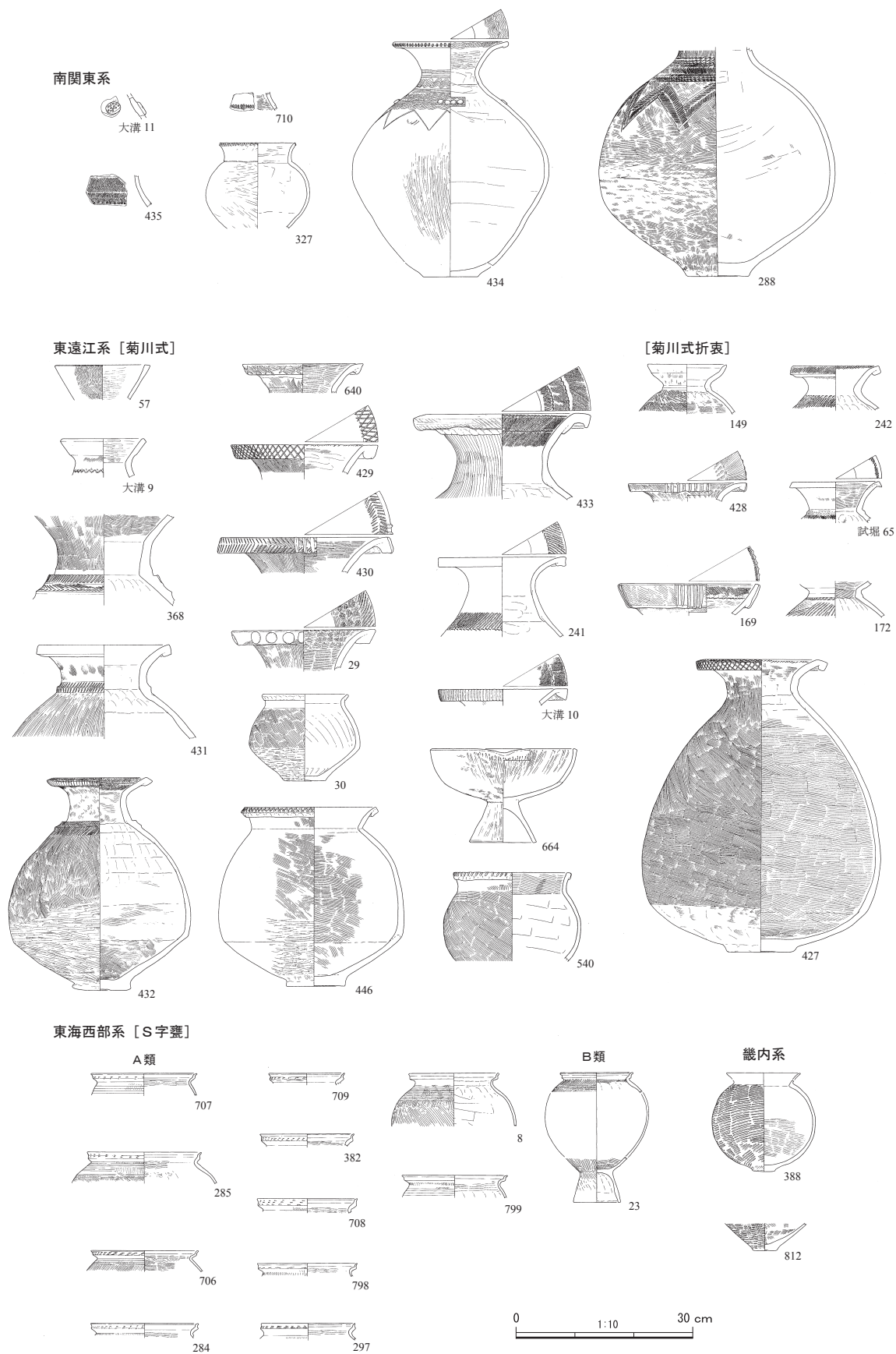


Fig.114 外来系土器

して重要である。

東遠江系土器（菊川式土器） 弥生時代後期の天竜川以東地域は菊川式土器の分布圏で、伊場遺跡群には多くの菊川式系統の土器がもたらされている。今回の調査でも、菊川式系統の土器が数多く出土している。菊川式系統の土器は、明らかな搬入品と当地で製作された折衷形態があり、搬入品の製作地は、形態的特徴や胎土、色調などから、1) 太田川以東の東遠江、2) 磐田南部、3) 天竜川平野、4) 都田川平野といった諸地域に分けることができる。菊川式土器の搬入やその影響は、弥生時代後期を通じてみられ、近隣地域と積極的に交流していたことがうかがえる。

東海西部系土器（S字甕） S字状口縁台付甕（以下、S字甕と呼称する）は尾張地域を中心とした東海西部地域を中心とした外来系の甕であり、当地域では欠山Ⅲ式期を境に、その数を増していく。欠山Ⅲ式期におけるS字甕はA類にはほぼ限定できる。今回の調査では10点を超えるA類のS字甕が出土しており、伊場遺跡群におけるその集中度が際立っている。南関東系土器の影響と同じく欠山Ⅲ式期に画期が見出せる点は、当該期における日本列島規模での流動性の高さを示すものと評価できるだろう。

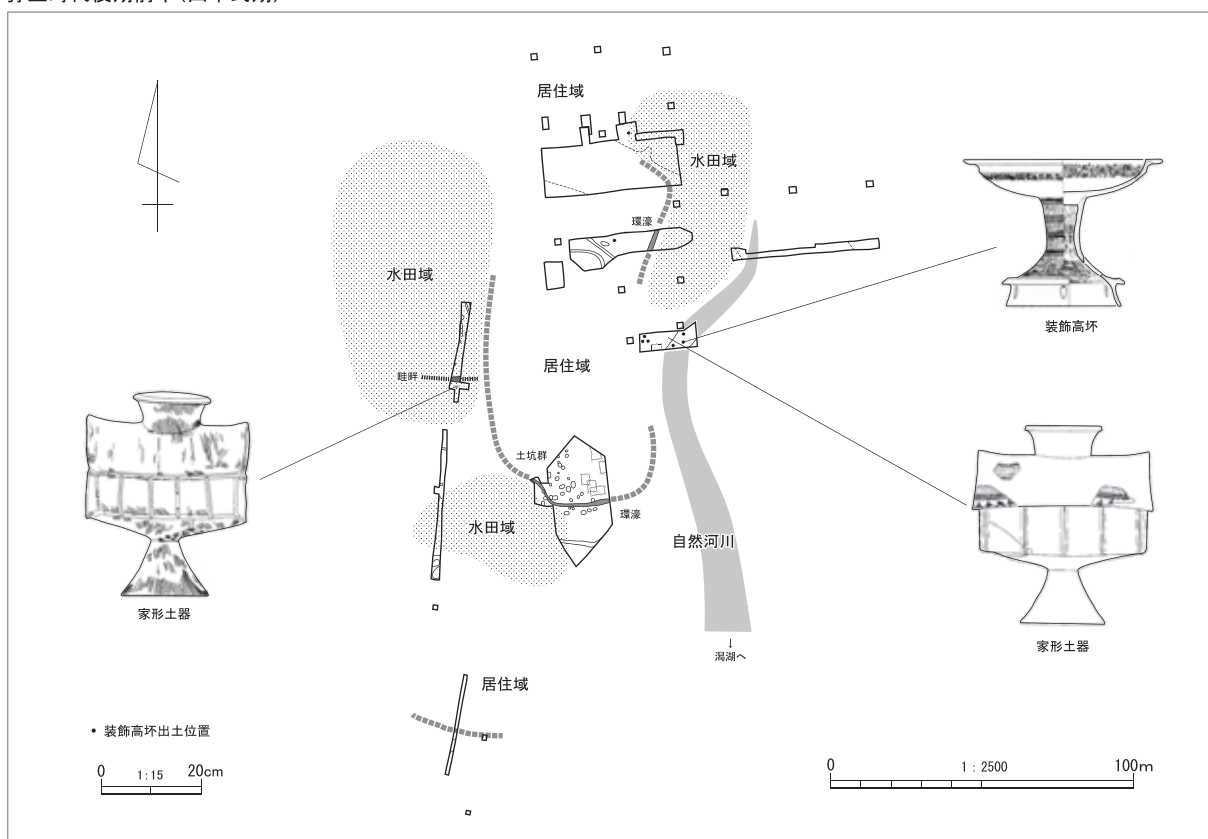
畿内系土器 今回の調査では、畿内V様式系甕と呼ばれるタタキをもつ平底甕が2点出土した。その製作地は明確に畿内地域と限定できないものの、畿内地域の影響のもとに製作され、当地にもたらされたと捉えてよい。その帰属時期は欠山Ⅲ式期を中心としており、南関東系土器やS字甕が当地に移入する時期と重なる。

（4）鳥居松遺跡における集落構造の変遷

伊場遺跡群における鳥居松遺跡の位置 伊場遺跡群における弥生時代後期前半の集落については、三重の環濠を伴う伊場遺跡の集落を中心にして、大規模な集落跡である梶子遺跡が北西部に隣り合い、東に700mほど離れて鳥居松遺跡（畷東遺跡を含む）が広がるという景観が復元できる。伊場・梶子遺跡と鳥居松遺跡の間には低位面があり、居住空間としては若干の空閑地がある。伊場遺跡群に広がる集落は、弥生時代中期中葉に始まる梶子遺跡が地域拠点の役割を果たしていたとみられるが、後期になると梶子遺跡の南東側に三重の環濠を伴う伊場遺跡が出現し、集落の中心的施設として機能し始める。伊場遺跡の造営開始期は山中Ⅱ-1式期であり、梶子遺跡も同時期に集落規模が著しく拡大する。伊場・梶子遺跡の隆盛は山中Ⅲ-2式期まで続くが、この段階において両遺跡に広がる集落は著しく衰退する（鈴木敏2004a）。伊場・梶子遺跡の衰退と入れ替わるように繁栄をみせるのが鳥居松遺跡である。

山中式期の集落 鳥居松遺跡の集落は遅くとも山中Ⅱ-2式期に造営が始まっている。弥生時代後期前半の集落拡大現象の延長上において、当初は伊場・梶子集落の出村的な性格が強かったとみられるが、検出遺構や出土遺物を見る限り、鳥居松遺跡の集落に必ずしも従属的な性格を想定する必要はない。低位面における積極的な進出は、開発が困難であった低湿地を水田として経営できる土木技術力が伴っていたとみられる。大規模な畦畔だけでなく、今回検出した灌漑用水路（SD103）は幅4m、深さ1mと破格の大きさであり、その土木工事が本格的で大規模であったことが知られる。鳥居松遺跡への進出の背景には、低地への開発力の向上に裏づけされた水田経営の拠点づくりに主

弥生時代後期前半(山中式期)



弥生時代後期後半(欠山式期)

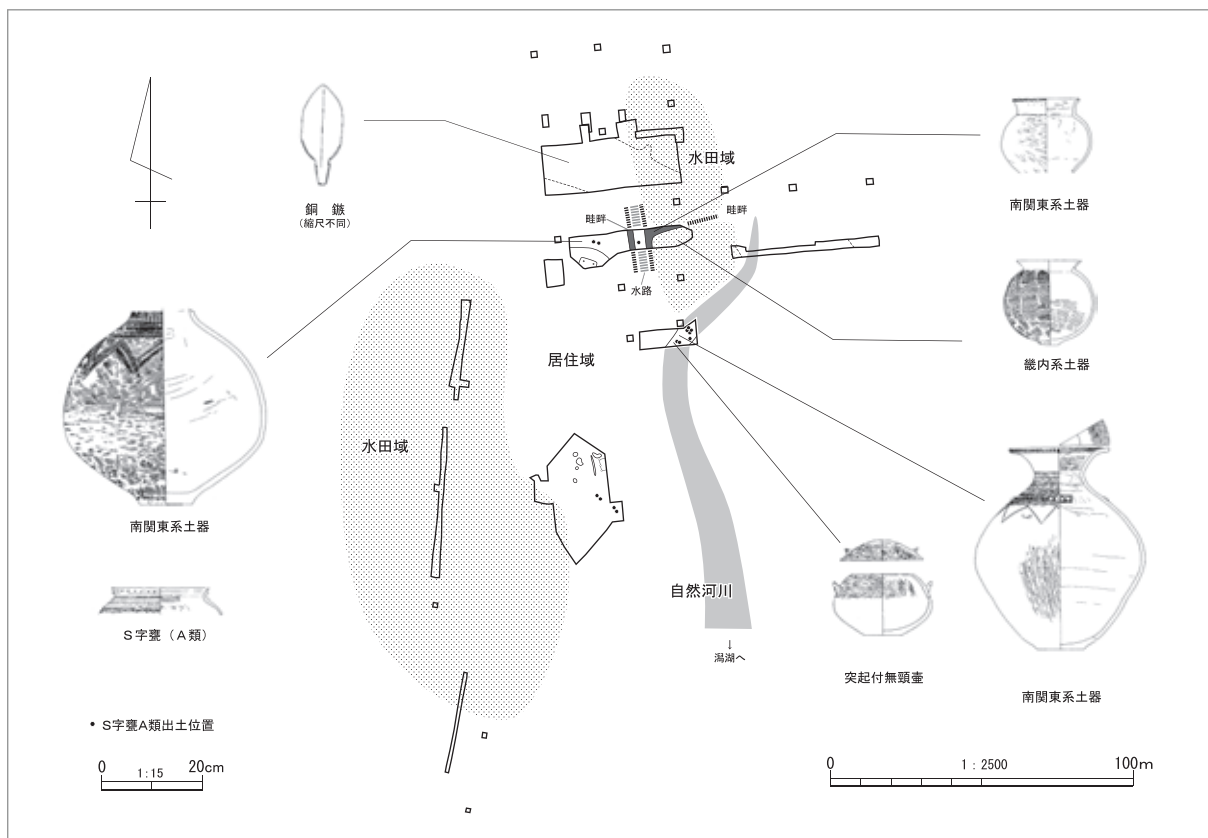


Fig.115 鳥居松遺跡の変遷

眼の一つが置かれていたとみてよいだろう。

欠山式期の集落 欠山式期になると伊場・梶子遺跡の集落が急速に縮小する。この現象の理由として、自然環境の変化により平野部での居住が困難になったと説明されることが多い。しかし、同じく平野部に所在する鳥居松遺跡での集落の継続をみると、自然環境の変化は必ずしも絶対的な要因でなかったとみられる。山中式期から欠山式期に移行する時期、すなわち、2世紀頃の社会構造や交易形態の変動を受け、地域内の集落構造の再編が促された結果とみてよいだろう。鳥居松遺跡では、先に紹介したように、外来系土器が大量に確認でき、水田関連の遺構も大規模であった。遠隔地交易の機能を担う港湾施設を抱えた河津としての性格をもち、安定的な水田経営が可能な鳥居松遺跡が、周囲の中での求心性を高めていたと評価できるだろう。その頂点を示す時期が、欠山Ⅲ式期である。

（５）結 語

以上、鳥居松遺跡において確認された遺構や遺物を通じて、この集落が推移する歴史的性質について触れてきた。家形土器や木器模倣土器をはじめとする豊富な特殊遺物は、伊場遺跡群の中でも鳥居松遺跡が決して従属的な存在でないことを示している。とくに欠山Ⅲ式期を中心とした豊富な外来系土器は、日本列島規模の広域交流網の形成を伝えるものであり、当該期における鳥居松遺跡の求心性は伊場遺跡群の中でも群を抜いている。外来系遺物や特殊遺物の集中現象という点では、愛知県鹿乗川流域遺跡群（神谷編 2005、川崎 2007 など）の様相と類似しており、今回の調査結果をふまえれば伊場遺跡群も東海地方沿岸部における拠点集落の実像を示す好例に加えることができる。南に広がる潟湖へと繋がる鳥居松遺跡の位置は、港湾施設を備えた河津としての性格を物語る。伊場遺跡群における鳥居松遺跡の存在意義は、水田経営の拠点であることに加え、外洋に繋がる立地環境にあることを強調しておきたい。

鳥居松遺跡の集落は、欠山Ⅲ式期を過ぎ、元屋敷Ⅰ式期になると急速に衰えていく。居住地の中心は三方原台地上の大平遺跡、坊ヶ跡・中平遺跡（鈴木—2004）に移り、低地に展開していた弥生時代的な集落景観は次第に姿を消していくといえるだろう。

【参考文献】

- 大村直 2004a「山田橋遺跡群および市原台地周辺地域の後期弥生土器」『市原市山田橋大山台遺跡』（財）市原市文化財センター
 神谷真佐子（編） 2005『鹿乗川流域遺跡群Ⅲ』安城市教育委員会
 川崎みどり 2007「亀塚遺跡の評価」『亀塚遺跡Ⅱ』安城市教育委員会
 鈴木一有 2004「坊ヶ跡遺跡にみる弥生・古墳移行期の集落像」『坊ヶ跡遺跡』（財）浜松市文化協会
 鈴木敏則 2004a「有力集落の変遷」『梶子遺跡Ⅹ』（財）浜松市文化協会
 鈴木敏則 2004b「弥生時代の家形土器—静岡県浜松市鳥居松遺跡出土例を中心に—」『地域と古文化』
 早野浩二 2009「特殊土器・土製品、絵画・線刻文土器」『朝日遺跡Ⅷ 総集編』愛知県埋蔵文化財センター

〔発掘調査報告書〕

- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1984『椿野遺跡Ⅰ』(SD24)
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985『椿野遺跡Ⅱ』(SD121)
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『矢畑遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 1989『山の神遺跡』(1次調査、SK236)
- (財) 浜松市文化協会 1991a『浜松市暇東遺跡発掘調査報告書』
- (財) 浜松市文化協会 1991b『梶子遺跡Ⅷ』(8次調査)
- (財) 浜松市文化協会 1991c『梶子遺跡Ⅸ』(9次調査)
- (財) 浜松市文化協会 1992『佐鳴湖西岸遺跡群』(大平遺跡)
- (財) 浜松市文化協会 1997『鳥居松遺跡』(1次調査)
- (財) 浜松市文化協会 2000a『須部Ⅱ遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 2000b『鳥居松遺跡2』
- (財) 浜松市文化協会 2002『鳥居松遺跡—3次調査—』
- (財) 浜松市文化協会 2003a『鳥居松遺跡—4次調査—』
- (財) 浜松市文化協会 2003b『暇東遺跡—2次調査—』
- (財) 浜松市文化協会 2004a『坊ヶ跡遺跡』
- (財) 浜松市文化協会 2004b『梶子遺跡Ⅹ』(10次調査)
- (財) 浜松市文化協会 2005『梶子北(三永)・中村遺跡—弥生時代編—』
- (財) 浜松市文化振興財団 2008『梶子遺跡12次』
- (財) 浜松市文化振興財団 2009a『鳥居松遺跡5次』(本書)
- (財) 浜松市文化振興財団 2009b『鳥居松遺跡6次』
- (財) 浜松市文化振興財団 2009c『北神宮寺遺跡』
- 浜松市遺跡調査会 1985『椿野遺跡』
- 浜松市遺跡調査会 1980『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』(梶子遺跡5次調査)
- 浜松市遺跡調査会 1983a『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』(梶子遺跡6次調査)
- 浜松市遺跡調査会 1983b『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』(梶子遺跡7次調査)
- 浜松市教育委員会 1976『伊場木簡 伊場遺跡発掘調査報告書 第1冊』
- 浜松市教育委員会 1976『国鉄浜松工場内発掘調査略報』(梶子遺跡1次調査、非公式刊行物)
- 浜松市教育委員会 1977a『伊場遺跡 遺構編』伊場遺跡発掘調査報告書 第2冊
- 浜松市教育委員会 1977b『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅱ』(梶子遺跡2次調査)
- 浜松市教育委員会 1978a『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ』(梶子遺跡3次調査)
- 浜松市教育委員会 1978b『伊場遺跡遺物編1』伊場遺跡発掘調査報告書 第3冊
- 浜松市教育委員会 1979『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ』(梶子遺跡4次調査)
- 浜松市教育委員会 1980『伊場遺跡遺物編2』伊場遺跡発掘調査報告書 第4冊
- 浜松市教育委員会 1982a『伊場遺跡遺物編3』伊場遺跡発掘調査報告書 第5冊
- 浜松市教育委員会 1982b『西鴨江 中平遺跡』
- 浜松市教育委員会 1982c『椿野遺跡』(椿野1982溝上層)
- 浜松市教育委員会 1982d『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』
- 浜松市教育委員会 1982e『越前遺跡発掘調査報告書』
- 浜松市教育委員会 1987『伊場遺跡遺物編4』伊場遺跡発掘調査報告書 第6冊
- 浜松市教育委員会 1990『伊場遺跡遺物編5』伊場遺跡発掘調査報告書 第7冊
- 浜松市教育委員会 1991『瓦屋西古墳群』
- 浜松市教育委員会 1994『伊場遺跡遺物編6』伊場遺跡発掘調査報告書 第8冊
- 浜松市教育委員会 1997『伊場遺跡遺物編7』伊場遺跡発掘調査報告書 第9冊
- 浜松市教育委員会 2002『伊場遺跡遺物編8』伊場遺跡発掘調査報告書 第10冊
- 浜松市教育委員会 2007『伊場遺跡補遺編』伊場遺跡発掘調査報告書 第11冊
- 浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』伊場遺跡発掘調査報告書 第12冊

[図出典等]

Tab.4、Fig.109 ～ 113

向山 3・23 号住居：浜松市教委 1982d、瓦屋西 A3 号墓：浜松市教委 1991、伊場：浜松市教委 1982a・1997b・2007・2008、梶子 4 次：浜松市教委 1979、梶子 5 次：浜松市調査会 1980、梶子 6 次：浜松市調査会 1983b、梶子 8 次：浜文協 1991b、梶子 10 次：浜文協 2004b、鳥居松 1 次：浜文協 1997、鳥居松 3 次：浜文協 2002、鳥居松 5 次：浜文振 2009a、椿野 1982：浜松市教委 1982c、椿野 1985：静文研 1985、椿野 SD24：静文研 1984、山の神 1 次：浜文協 1989、大平：浜文協 1992、中平：浜市博 1982、坊ヶ跡：浜文協 2004a、北神宮寺：浜文協 2009c、矢畑：静文研 2008、越前：浜松市教委 1982e

Tab.7 凡例

縦：縦方向直線文（T・J 字文） 扇：扇形文 波：波状文

刺：刺突文 点：列点文 羽：羽状文 山：山形文 交：交差文

アミ：濃いアミは主体の様相であること、薄いアミは新旧の様相が拮抗することを示す。

個体数：鳥居松遺跡 5 次調査における個体数のカウントは、非抽出遺物を含む全体を対象とした。梶子 10 次調査分は、報告書中に記載がある個体数を部分的に引用、上記以外の資料は、報告書に掲載されている個体数をカウントした。

第4章 総括

本書で報告した弥生時代集落の調査結果は、西遠江の弥生時代後期にかかわる豊富な情報をもたらした。発掘調査と検出遺構や出土遺物の分析を通じて得られた成果は多岐にわたるが、さいごに報告の内容を要約するとともに、考察で明らかにされた内容を総合し、今後の展望を示したい。

1 発掘調査の成果

検出遺構 発掘調査で検出した主な遺構は、竪穴建物 1 (SB101)、掘立柱建物 1 (SH201)、水田畦畔 3 (SL101～103)、灌漑用水路 1 (SD103)、環濠 1 (SD108)、自然河川 1 (SD201)、土器集積多数 (SX11・12、101～103、201～202・204) である。なお、SD105・109 も溝の形態的特長から、環濠もしくは居住域を区画する溝の可能性が高い。

微高地上において竪穴建物 (SB101、欠山Ⅱ～Ⅲ式期) が検出できた意義は大きい。SB101 は埋土中に炭化物が大量に含まれていることから、かろうじて平面形が確認できた。埋土に炭化物が詰まるという識別しやすい条件であったにもかかわらず、その検出作業は困難を極めた。伊場遺跡群では弥生時代後期の竪穴建物の検出は極めて少ないが、これは遺構検出の難しさに起因するものであることを示している。

居住域を圍繞する環濠 (SD108) は B 区の東側において検出できた。断面は、V 字もしくは U 字形を呈し、幅は 2m、深さは 1m である。SD108 の上層からは、山中Ⅲ -2 式期の土器群がまとまって出土した。掘削時期は、山中Ⅲ -1 式期もしくは山中Ⅱ -2 式期まで遡る可能性がある。

水田関連の遺構は、B 区の東半分で良好に確認できた。大規模な畦畔 (SL101・102) に挟まれた位置には灌漑用水路 (SD103) が掘削されていた。大畦畔上には水田農耕にかかわる儀礼の痕跡とみられる土器集積 (SX101・102) が展開している。

水田耕作土の上面は、炭化物の集積層によって明確に認識できた。大畦畔で区画された内側の小畦畔は認められない。炭化物層の形成は、水田廃絶時に稲藁などが大量に水田面に残されていた可能性を示している。なお、B 区で確認できた炭化物の集積層は A 区にも認められ、比較的広範囲に広がっている。水田の造営時期は A 区の状況から、山中Ⅲ式期まで遡る可能性があるが、SL101～103 の構築は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に降るとみてよい。

自然河川 SD201 は幅 10m を越える。その埋土中には上下 2 層に分かれて欠山Ⅱ～Ⅲ式期の土器が大量に出土した。この自然河川は南に広がる潟湖に繋がっていたとみられ、外洋と鳥居松遺跡を結ぶ水路として使用されていた可能性がある。

集落の造営期間 今回検出できた遺構は、山中Ⅲ -2 式期から欠山Ⅲ式期に限定できる。集落の造営開始期は、3 次調査の調査結果から山中Ⅱ -2 式期まで遡るとみられるが、廃絶時期は欠山Ⅲ式期と捉えて矛盾はない。

2 特筆すべきことから

土器編年 遺構に伴って、山中Ⅲ-2式期から欠山Ⅲ式期に至る大量の土器が出土した。出土遺物の多くは当該期の土器編年上の標識的な資料として位置づけることができる。これらの資料群をもとに、西遠江における弥生時代後期（山中式期～欠山式期）の土器編年を再検討した。また、土器編年の作業に伴い、壺の肩部模様帯や、台付甕の口縁刺突・脚台接合部粘土帯の有無といった属性分析を行い、その変遷の傾向を整理した〔第3章1〕。

特殊遺物 特殊遺物として、家形土器が特筆できる。鳥居松遺跡では3次調査において完形品が出土しているが、今回の出土品も同様の形態であったとみられる。弥生時代の集落遺跡から2個体の家形土器が出土することは極めて珍しく、装飾高坏や突起付無頸壺といった木器模倣の土器の存在と合わせ、鳥居松遺跡の優位性を物語る資料といえる。

外来系土器 6点にのぼる南関東系土器の出土が注目できる。また、東海西部系のS字甕や畿内系のタタキ甕（畿内V様式系甕）なども確認できた。外来系土器の影響が強く認められるのは欠山Ⅲ式期であり、この時期における社会の流動性を示すものと評価できる。

鳥居松遺跡の特質 豊富な特殊遺物や外来系土器、大規模な水田施設の存在などから、鳥居松遺跡の集落は伊場遺跡群の中でも重要な役割を担っていたとみられる。とくに欠山Ⅲ式期を中心とした豊富な外来系土器は、日本列島規模での広域交流網の形成を伝えるものであり、当該期における鳥居松遺跡の求心性は頂点に達したとみなせる。南に広がる潟湖へと繋がる鳥居松遺跡の位置は、伊場遺跡群と外洋を結ぶ玄関口であることを示している。伊場遺跡群におけるこの集落の役割は、水田経営の拠点と河津としての機能が重要であったと結論づけられる〔第3章2〕。

3 今後の展望

鳥居松遺跡では、居住域と生産域（水田）の境界が複雑に入り組んでいる。今後の調査によって居住域の範囲を正確に捉えていくことが求められる。また、鳥居松遺跡では、居住域の様相が未だ不明確である。竪穴建物の検出は困難を伴うと予想されるが、綿密な調査によって、検出例をさらに増やすことが望まれる。居住域の中心を示すような大型建物の検出も期待したい。さらに、潟湖に繋がる自然河川の実態把握も、鳥居松遺跡の特質を探る上で欠かせない課題といえよう。

〔謝 辞〕

本書の作成にあたり、以下の方々のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい。

大村直、篠原和大、相場さやか、立花実、田村隆太郎、早野浩二、松宮昌樹、向坂銅二

出土遺物観察表

凡 例

残存率：％表示、10％単位での切り上げ

反転：「反」は反転して図化したもの

大きさの単位はcm

回転体以外の大きさ表示 器径：長さ 器高：幅 口径：厚み

色調：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

出土遺物観察表（試掘調査）

Fig.	番号	取上番号	遺構	層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
12	1	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	裝飾鉢	10	反			15.0	灰白	
12	2	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	小型直口鉢	20	反			6.8	橙	
12	3	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	外反坏部高坏	10	反	25.0			灰白	内面コケ
12	4	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	高坏	20	反				灰白	脚径 14.0
12	5	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	く字壺	10	反				灰	頸径 18.4、口縁刺突
12	6	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	壺	10	反				赤橙	底径 8.2
12	7	5	試掘坑 1	最下層	弥生土器	壺	30	反				灰白	底径 7.8
12	8	4	試掘坑 1	下層	土師器	直口壺	90		16.0	16.2	9.1	明赤茶	5C、籠目、黒斑
12	9		試掘坑 2	D 層	弥生土器	外反口縁壺	40	反			13.9	橙	底径 8.6、波状文方向不明
12	10		試掘坑 2	D 層	弥生土器	外反口縁壺	10				14.2	浅黄橙	頸径 8.8
12	11	8	試掘坑 2	D 層	弥生土器	外反口縁壺	10				14.6	浅黄橙	頸径 9.1
12	12	8	試掘坑 2	D 層	弥生土器	内彎口縁壺	10				17.0	浅黄橙	頸径 8.4
12	13	7	試掘坑 2	D 層	弥生土器	く字碗形坏部高坏	30	反	28.2			橙	口縁内面疑凹線 3 本
12	14		試掘坑 2	D 層	弥生土器	外反坏部高坏	30	反				浅黄橙	脚頸径 5.8、14.2、スカ 3 方向
12	15	7・8	試掘坑 2	D 層	弥生土器	外反坏部高坏	70		22.0	18.6		浅黄橙	脚頸径 5.0、脚径 12.1
12	16		試掘坑 2	D 層	弥生土器	有稜高坏	30		22.0			にぶい橙	脚頸径 5.0
12	17		試掘坑 2	D 層	弥生土器	く字壺	5	反			17.0	にぶい黄橙	頸径 15.3、口縁刺突
12	18	8	試掘坑 2	D 層	弥生土器	く字壺	20				17.0	黒褐	頸径 15.6、口縁刺突
12	19		試掘坑 2	D 層	弥生土器	壺	20					にぶい黄橙	脚頸 4.0、底径 7.2、黒斑
12	20		試掘坑 2	D 層	須恵器	坏蓋	40	反	14.2		13.8	灰	ケリ左
12	21		試掘坑 2	D 層	須恵器	長頸壺	10				8.1	灰	頸径 4.3、自然釉
13	22	21	試掘坑 3	IV 層	須恵器	坏蓋	20	反	15.0			青灰	口縁内面沈線状
13	23	20	試掘坑 3	IV 層	須恵器	坏身	10	反	13.6		11.6	灰赤	
13	24	21	試掘坑 3	IV 層	須恵器	坏身	10	反	15.6		13.2	灰	
13	25	20	試掘坑 3	IV 層	須恵器	坏蓋	40	反	15.4		15.2	灰	ケリ右、つまみ径 2.2
13	26	20	試掘坑 3	IV 層	須恵器	坏蓋	10	反	14.0			灰	ケリ左、8C 後半
13	27	21	試掘坑 3	IV 層	土師器	壺	20	反			17.0	薄茶	頸径 13.2
13	28	20	試掘坑 3	IV 層	土師器	碗	100		7.1	2.7		薄茶	8C
13	29	22	試掘坑 4	C 層	弥生土器	小型壺	40		10.0			橙	円形丸窓風のスカ
13	30	23	試掘坑 4	C 層	弥生土器	小型直口鉢	40		12.8			浅黄橙	
13	31	22	試掘坑 4	C 層	弥生土器	碗形坏部高坏	5	反	27.0			橙	
13	32	22	試掘坑 4	C 層	弥生土器	有稜高坏	30	反	20.8			にぶい橙	
13	33	23	試掘坑 4	C 層	弥生土器	く字壺	40	反	19.6		17.4	橙	頸径 15.6、脚頸径 5.3、口縁刺突
13	34	23	試掘坑 4	C 層	弥生土器	く字壺	30				18.9	にぶい橙	頸径 16.9、口縁刺突
13	35	23	試掘坑 4	C 層	弥生土器	く字壺	10	反			18.0	にぶい黄橙	頸径 15.4、口縁無刺突・ヨコナデ
13	36	22	試掘坑 4	C 層	石製品	砥石			4.9	4.5	4.4		14.4g、軽石、矢柄研痕 3 方向
13	37	28	試掘坑 5	弥生溝他	弥生土器	壺	30				12.7	にぶい黄橙	頸径 8.7
13	38	26	試掘坑 5	C 層	弥生土器	高坏	5	反	23.8			にぶい橙	
13	39	28	試掘坑 5	弥生溝他	弥生土器	有稜高坏	60		19.6		19.5	にぶい黄橙	脚頸径 4.9、スカ 3 方向
13	40	28	試掘坑 5	弥生溝他	弥生土器	鉢	5	反	34.0			にぶい黄橙	煤付着
13	41	28	試掘坑 5	弥生溝他	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
13	42	29	試掘坑 5	8C	土製品	土製支脚	85		14	8.7	8.2	にぶい黄橙	植物含有、上部凹
14	43	30	試掘坑 6		須恵器	坏蓋	80		12.1	4.6		灰	ケリ右
14	44	36	試掘坑 6	廃土	須恵器	坏身	50		10.2	2.5	8.3	灰	ケリ左、外面沈線
14	45	32	試掘坑 6	上層褐色土層	土師器	壺	5	反			24.9	にぶい黄橙	6C、頸径 19.9
14	46	33	試掘坑 6	溝	石製品	砥石			10.4	9.6	6.5		126.9g、軽石、矢柄研痕？、穴貫通
14	47	63	試掘坑 7	IV・V 層	弥生土器	直立口縁壺	20	反			11.0	灰白	
14	48	63	試掘坑 7	IV・V 層	弥生土器	く字碗形坏部高坏	10	反	22.0			淡黄	
14	49	63	試掘坑 7	IV・V 層	弥生土器	高坏	20	反				淡黄	脚径 13.0、スカ方向不明
14	50	66	試掘坑 7	暗灰色粘土層	中世陶器	山茶碗	10	反	16.0			灰白	13C、内面自然釉
14	51	75	試掘坑 8	暗灰色粘土層	須恵器	坏蓋	10	反	13.2			灰	
14	52	68	試掘坑 8	V 層	須恵器	無台坏身	100		12.0	4.4		灰	外面細いタタ状
14	53	74	試掘坑 8	下層青灰色粘土層	土師器	高坏	30	反				にぶい橙	脚径 9.6
14	54	75	試掘坑 8	暗灰色粘土層	土師器	甗	10	反	22.0			にぶい橙	
14	55	71-①	試掘坑 8	V 層下	木製品	田下駄踏板			11.1	25.5	1.0		保存処理済
14	56	71-②	試掘坑 8	V 層下	木製品	田下駄横木			6.0	29.9	1.8		保存処理済
14	57	71-③	試掘坑 8	V 層下	木製品	曲物底板			8.8	50.4	1.3		保存処理済、楕円形
15	58	79	試掘坑 9	D 層	弥生土器	壺蓋	100		7.8	4.9		にぶい黄橙	小黒斑
15	59	78	試掘坑 9	D 層	弥生土器	壺蓋	10	反	11.0			浅黄橙	木器模倣、紐通し突起付
15	60	77	試掘坑 9	C 層	弥生土器	く字壺	5	反			14.4	灰黄褐	口縁刺突・ヨコナデ
15	61	77	試掘坑 9	C 層	弥生土器	壺	10					にぶい黄橙	脚頸径 4.4、底径 6.4
15	62	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	外反口縁壺	80	反			11.3	薄茶	頸径 7.4
15	63	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	内彎口縁壺	20	反			16.0	薄茶	弥生後期、口縁内傾面
15	64	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	内彎口縁壺	10	反			12.0	薄茶	口縁内傾面
15	65	89	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	拡張口縁壺	20				15.7	薄茶	頸径 9.0、頸部 J 端刺突
15	66	87	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	小型壺	60		9.5	9.4	6.8	薄茶	頸径 5.5、器径 9.5、外面黒斑
15	67	92	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	小型壺	80		8.9			白灰	頸径 4.8、
15	68	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	内彎口縁細頸壺	80		10.0	12.8		薄茶	頸径 5.6、底径 4.2、二枚貝刺突
15	69	89	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	外反坏部高坏	20		25.0			薄茶	一部コケ
15	70	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	有稜高坏	10	反	24.0			薄茶	口縁内傾面
15	71	90	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	有稜高坏	10	反	22.0			淡黄橙	
15	72	88	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	高坏	30					薄茶	脚頸径 4.9
15	73	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	高坏	20	反				薄茶	脚径 14.0、外面薄い赤斑
15	74	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	高坏	20	反				薄茶	脚径 15.6、外面底部凸帯状
15	75	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	高坏	20	反				薄茶	脚径 12.0、スカ 3 方向
15	76	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	高坏	10	反				薄茶	脚径 12.2
15	77	88	試掘坑 11	試弥生小穴	弥生土器	く字壺	10	反			18.0	薄茶	頸径 16.2、口縁刺突
15	78	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	壺	10	反			15.8	薄茶	頸径 13.3、口縁刺突・ヨコナデ

出土遺物観察表（試掘調査）

Fig.	番号	取上番号	遺構	層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
15	79	86	試掘坑 11	C・D 層	弥生土器	鉢	10	反			15.0	薄茶	
15	80	88	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	甕	10	反				薄茶	底径 8.1
15	81	89	試掘坑 11	弥生小穴	弥生土器	受口甕	20	反			14.0	薄茶	近江系?
15	82	82	試掘坑 11	C 層	土師器	甌	5					にぶい橙	
15	83	84	試掘坑 11	C・D 層	中世陶器	山茶碗	5	反				灰白	底径 6.5、内面自然釉、粉痕
16	84	39	試掘坑 12	下層	弥生土器	拡張口縁壺	40				17.9	橙	頸径 12.2、内面黒斑
16	85	46	試掘坑 12	下層	弥生土器	拡張口縁壺	30				18.6	浅黄橙	頸径 10.2、黒斑、内外赤彩
16	86	49・40	試掘坑 12	下層	弥生土器	折返口縁壺	20				17.3	橙	頸径 9.6
16	87	42・40	試掘坑 12	下層	弥生土器	複合口縁壺	70		24.2	30.8	17.4	にぶい黄橙	浮文 2×3 方向?、黒斑
16	88	45・38	試掘坑 12	下層	弥生土器	複合口縁壺	40		23.4	29.5	15.0	にぶい橙	頸径 7.8、底径 8.0
16	89	43	試掘坑 12	下層	弥生土器	片口鉢	30		20.2			にぶい橙	片口不明
16	90	40・39	試掘坑 12	下層	弥生土器	小型直口鉢	90		12.2	10.8		橙	頸径 8.6、底径 6.4、黒斑
16	91	35・37	試掘坑 12	下層	弥生土器	壺蓋	90		8.6	8.0		にぶい橙	
16	92	44	試掘坑 12	下層	弥生土器	鉢	30	反	26.0		16.0	にぶい黄橙	内面黒斑
16	93	49・38	試掘坑 12	下層	弥生土器	有稜高坏	40		24.0			にぶい黄橙	脚径 11.2、ｽｽ3 方向
16	94	39	試掘坑 12	下層	弥生土器	有稜高坏	10	反	22.2			橙	
16	95	49・40	試掘坑 12	下層	弥生土器	有稜高坏	30	反	20.8			にぶい橙	脚頸径 4.0、黒斑
16	96	38・40	試掘坑 12	下層	弥生土器	く字甕	80		20.6	28.5	18.8	にぶい黄橙	脚径 8.6、口縁刺突・ｺﾓﾅﾃ
17	97	53	試掘坑 13	D 層	弥生土器	直立口縁壺	30				11.4	橙	頸径 7.4
17	98	52	試掘坑 13	C 層	弥生土器	外反坏部高坏	5	反	22.8			にぶい黄橙	
17	99	52	試掘坑 13		弥生土器	高坏	20	反				浅黄橙	脚径 4.4、ｽｽ3 方向?
17	100	53	試掘坑 13	D 層	弥生土器	甕	30		28.1		27.6	灰黄褐	口縁刺突、外面煤付着
17	101	55	試掘坑 14	上層	弥生土器	折返口縁壺	90		15.3	14.2	9.2	薄茶	浮文 1×方向不明、外面黒斑
17	102	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	外反坏部高坏	20	反				にぶい橙	
17	103	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	高坏	20	反				灰白	ｽｽ3 方向?
17	104	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	く字甕	10	反			15.0	灰白	外面煤付着、口縁部歪み
17	105	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	く字甕	70		17.2	23.4	16.1	にぶい黄橙	口縁刺突、内面下半ｺﾓ
17	106	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	く字甕	20	反			15.2	灰白	口縁刺突・ｺﾓﾅﾃ、外面煤付着
17	107	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	く字甕	10	反			20.0	灰白	頸径 17.6、口縁刺突・ｺﾓﾅﾃ
17	108	56・57	試掘坑 14	C・D 層	弥生土器	甕	60		19.2			にぶい黄橙	外面煤付着
17	109	57	試掘坑 14	D 層	弥生土器	甕	20					明赤褐	脚頸径 5.6
17	110	57	試掘坑 14	D 層	石製品	砥石			7.7	6.1	4.1		44.4 g、軽石、使用不明
17	111	98	試掘坑 15	Ⅲ層上層	須恵器	有台坏身	10	反				灰白	8C 前、底径 10.2
17	112	103	試掘坑 15	暗灰色粘土下	中世陶器	山茶碗	50	反				灰白	内面生焼痕、高台ｽｽ痕
17	113	94	試掘坑 15	大溝上層	石製品	砥石			5.5	3.8	1.5		44.0 g、白色凝灰岩
18	114	114・112	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	外反口縁壺	50				13.2	橙	頸径 8.6
18	115	110	試掘坑 17	C 層	弥生土器	外反口縁壺	30	反			15.6	橙	
18	116	120・115	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	外反口縁壺	10	反			14.0	橙	
18	117	119・111	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	く字碗形坏部高坏	70		31.3			浅黄橙	ｽｽ3 方向、口縁部擬凹線 4 本
18	118	119・114	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	有稜高坏	60	反	24.0			浅黄橙	
18	119	109	試掘坑 17	C 層上	弥生土器	有稜高坏	10	反	24.0			浅黄	口縁部内傾面
18	120	119	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	高坏	40					橙	脚頸径 3.7、脚径 10.6、ｽｽ3 方向
18	121	112	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	高坏	30					浅黄橙	脚径 14.0、ｽｽ3 方向
18	122	113	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	高坏	20	反				にぶい黄橙	脚径 12.2、ｽｽ3 方向
18	123	109	試掘坑 17	C 層上	弥生土器	高坏	10	反				浅黄橙	弥生後期、脚径 14.0
18	124	114・111	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	く字甕	30	反	22.0		20.0	灰黄	頸径 18.0、口縁刺突、外面煤付着
18	125	111・112	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	く字甕	40		17.8		17.0	にぶい橙	頸径 15.0、口縁刺突・ｺﾓﾅﾃ
18	126	116・117	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	大型甕	30		34.0			にぶい黄橙	頸径 32.6、外面煤付着
18	127	118	試掘坑 17	C・D 層	弥生土器	大型甕	30	反	32.0			にぶい黄橙	外面煤付着
19	128	123	撤去坑 1	大溝肩部	弥生土器	高坏	10	反				淡黄	ｽｽ3 方向
19	129	122	撤去坑 1	貝塚周辺	須恵器	坏身	80					暗青灰	底径 5.2
19	130	122	撤去坑 1	貝塚周辺	須恵器	坏蓋	70					灰白	つまみ径 2.6、つまみ高 0.8
19	131	122	撤去坑 1	貝塚周辺	須恵器	箱坏	20	反	12.2			灰白	
19	132	122	撤去坑 1	貝塚周辺	土師器	皿	10	反				明褐灰	8C 前、全面赤彩、放射状暗文
19	133	124	撤去坑 1	Ⅳ層	土師器	小碗	70		7.0	3.7		淡橙	8C、底径 2.3
19	134	122	撤去坑 1	貝塚周辺	土師器	小碗	10	反	7.6			灰白	8C
19	135	122	撤去坑 1	貝塚周辺	土師器	小碗	20	反	6.1			褐灰	8C
19	136	122	撤去坑 1	貝塚周辺	土師器	甕	10	反			25.2	灰白	8C、頸径 19.6
19	137	127・131	撤去坑 2		弥生土器	内彎口縁壺	40	反	21.4	25.2	12.0	灰白	外面黒斑
19	138	129	撤去坑 2		弥生土器	外反口縁壺	30	反			14.2	薄茶	
19	139	127	撤去坑 2		弥生土器	壺	40	反			12.0	淡橙	
19	140	128	撤去坑 2		弥生土器	小型壺	10	反			9.8	灰白	
19	141	131	撤去坑 2		弥生土器	折返口縁壺	30				16.2	薄茶	
19	142	127・128	撤去坑 2		弥生土器	壺	30	反				橙	頸径 9.5
19	143	128・129	撤去坑 2		弥生土器	壺	40	反				薄茶	底径 8.5、木葉痕
19	144	129	撤去坑 2		弥生土器	鉢	10	反	22.4			薄茶	内面煤付着
19	145	130	撤去坑 2		弥生土器	片口鉢	10	反	19.0			薄茶	片口不明
19	146	128	撤去坑 2		弥生土器	小型鉢	40	反				灰白	底径 5.8、内面黒斑
19	147	131	撤去坑 2		弥生土器	外反坏部高坏	20	反	20.4			薄茶	
19	148	128	撤去坑 2		弥生土器	外反坏部高坏	10	反	23.0			淡橙	外面煤付着、内面ｺﾓ痕
19	149	129	撤去坑 2		弥生土器	碗形坏部高坏	5	反	24.0			薄茶	
19	150	128・129	撤去坑 2		弥生土器	碗形坏部高坏	50	反	21.2			明薄茶	脚頸径 5.6
19	151	131	撤去坑 2		弥生土器	高坏	80					灰白	脚頸径 4.4、ｽｽ3 方向不明
19	152	128	撤去坑 2		弥生土器	高坏	60					灰白	脚頸径 4.0
19	153	128	撤去坑 2		弥生土器	高坏	20	反				淡橙	脚径 12.4
19	154	129	撤去坑 2		弥生土器	大型甕	5	反	30.0			薄茶	口縁部刻目
19	155	128	撤去坑 2		弥生土器	鉢	10	反			23.2	淡橙	

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
29	1	1055	SD11	壺	5					にぶい橙	竹管文
29	2	1054	SD11	裝飾高坏	10	反	33.0			浅黄橙	内面煤付着
29	3	864	SX11 下層	拡張口縁壺	20	反			14.7	淡黄	刺突 4 × 4?、口縁内面擬凹線
29	4	900	SX11 下層	高坏	90		19.9	16.7		にぶい橙	脚径 10.5、ｽｶｯ3 方向
29	5	863・902	SX11 下層	く字甕	40	反	22.0		20.9	灰黄褐	口縁刺突
29	6	903	SX11 下層	く字甕	50	反	18.7	23.8	16.9	褐灰	口縁刺突・ｺｯﾅﾂ、外面煤付着
29	7	904・905	SX11 下層	く字甕	20	反	20.0		17.2	にぶい黄褐	口縁刺突・ｺｯﾅﾂ、外面煤付着
29	8	847	SX11 下層	S 字甕	30	反	21.2		15.3	灰黄褐	S 字甕 B 類古相
29	9	884	SX11 下層	砥石			15.3	6.9	4.7		962g、砂岩
29	10	840・841	SX11 上層	直立口縁壺	70		27.4	29.4	16.2	淡黄	頸径 10.0
29	11	872	SX11 上層	直立口縁壺	90		13.4	13.4	8.6	にぶい橙	頸径 6.6、底径 5.2
29	12	842	SX11 上層	瓢壺	90		10.9			にぶい橙	脚頸径 4.7、脚径 4.4
29	13	824	SX11 上層	小型直口鉢	90		9.7	6.9		浅黄橙	底径 4.6
30	14	866・874	SX11 上層	有稜高坏	30	反	24.0			浅黄橙	
30	15	875	SX11 上層	有稜高坏	60	反	19.7	19.4		にぶい橙	脚頸径 4.8、脚径 11.5
30	16	843	SX11 上層	有稜高坏	70	反	25.9	16.9		にぶい橙	脚径 11.4、ｽｶｯ3 方向
30	17	845	SX11 上層	小型高坏	60	反	16.4	10.4		にぶい橙	脚頸径 3.7、脚径 7.2
30	18	853	SX11 上層	く字甕	40	反	22.0		16.0	淡赤橙	頸径 14.4、口縁刺突
30	19	873	SX11 上層	く字甕	50	反	14.0		13.6	にぶい黄橙	頸径 11.6、口縁刺突
30	20	849	SX11 上層	く字甕	60		20.0		17.0	にぶい黄橙	頸径 16.0、口縁刺突・ｺｯﾅﾂ
30	21	888・889	SX11 上層	く字甕	70		19.0		16.0	にぶい黄橙	口縁無刺突・ｺｯﾅﾂ、外面煤付着
30	22	871-1・871-2	SX11 上層	大型甕	70		37.5			にぶい橙	脚頸径 7.0、口縁刺突
30	23	894・896	SX11 上層	S 字甕	10	反			12.4	にぶい黄橙	底径 8.0、S 字甕 B 類
31	24	1137・1138	SX12 下層	外反口縁壺	80		21.4	25.6	12.0	にぶい橙	頸径 7.9、底径 6.8
31	25	1600	SX12 下層	外反口縁壺	30				15.4	にぶい橙	頸径 8.0
31	26	1597	SX12 下層	直立口縁壺	100		21.3	26.3	12.9	橙	頸径 7.5、底径 6.2
31	27	1135・1137	SX12 下層	直立口縁壺	20				17.6	淡橙	頸径 10.5
31	28	1595	SX12 下層	小型壺	20	反	12.0		7.6	にぶい黄橙	頸径 5.6
31	29	913	SX12 下層	折返口縁壺	10	反			24.4	浅黄橙	浮紋（単位方向不明）、無節縄文、菊川式
31	30	1598・1608	SX12 下層	く字鉢	50	反	18.8	14.7	14.8	淡黄	頸径 13.4、底径 7.0、菊川式
31	31	1608	SX12 下層	小型直口鉢	20		13.0			にぶい黄橙	
31	32	1132・1134	SX12 下層	く字甕	70		19.7		16.8	橙	口縁無刺突・ｺｯﾅﾂ、外面煤付着
32	33	1162・1011	SX12 上層	外反口縁壺	80		21.7			淡黄	頸径 8.2、底径 6.0
32	34	1103	SX12 上層	外反口縁壺	30				12.6	浅黄橙	頸径 7.8
32	35	1105・1106	SX12 上層	折返口縁壺	30		23.6		14.0	浅黄橙	頸径 9.4
32	36	1119	SX12 上層	折返口縁壺	20				15.8	橙	円形浮文 8 × 3、棒状浮文 3 × 3
32	37	1110・1107	SX12 上層	折返口縁壺	80		25.7	28.9	15.5	にぶい黄橙	底径 8.0、棒状浮文 3 × 3
32	38	1140	SX12 上層	小型直口鉢	80		9.9	9.8		にぶい橙	頸径 7.4、底径 4.2
32	39	1603・1607	SX12 上層	小型鉢	80		12.4		12.0	橙	
32	40	1106	SX12 上層	碗形鉢	90		12.3	6.0		浅黄橙	底径 5.3
32	41	1101	SX12 上層	有稜高坏	50		20.8			にぶい橙	
32	42	1965	SX12 上層	く字甕	30	反	21.3		19.2	にぶい黄橙	口縁刺突、外面煤付着
32	43	1122	SX12 上層	く字甕	40	反	16.2		15.2	黄橙	口縁刺突、外面煤付着
32	44	1606・1609	SX12 上層	く字甕	80		13.0	14.4		浅黄	脚頸径 4.7、口縁刺突
32	45	1105・1106	SX12 上下層	く字甕	80		15.7	19.7	14.2	橙	脚頸径 4.4、口縁無刺突・ｺｯﾅﾂ
36	46	3151	SD108	外反口縁壺	20				15.0	にぶい黄橙	頸径 8.6
36	47	3361・3151	SD108	外反口縁壺	20	反			14.5	橙	頸径 9.0
36	48	3344・3237	SD108	外反口縁壺	50		23.7		14.1	橙	頸径 9.2
36	49	3149	SD108	外反口縁壺	10	反			12.2	灰黄	頸径 8.6
36	50	3335	SD108	外反口縁壺	10	反			9.2	浅黄橙	頸径 5.2
36	51	3148	SD108	外反口縁壺	70		19.6	22.1	11.3	橙	頸径 7.5、底径 5.8
36	52	2038	SD108	外反口縁壺	30	反			12.5	浅黄橙	頸径 7.3
36	53	3326・3146	SD108	外反口縁壺	30	反			11.9	灰黄	浮文 2 か 3 × 方向不明
36	54	3151・3150	SD108	内彎口縁壺	30				15.2	橙	頸径 7.7
36	55	3146・3237	SD108	内彎口縁壺	10	反			13.2	にぶい黄橙	頸径 8.3
36	56	3354	SD108	内彎口縁壺	10	反			17.2	にぶい橙	頸径 7.6
36	57	3149	SD108	内彎口縁壺	5	反			16.2	灰白	菊川式
36	58	3372	SD108	折返口縁壺	10	反			14.3	浅黄橙	頸径 8.4
36	59	3149	SD108	折返口縁壺	10	反			17.0	浅黄橙	頸径 9.8
36	60	3333	SD108	折返口縁壺	10	反			15.6	にぶい黄橙	頸径 8.7、浮文 7? × 3
36	61	3339	SD108	折返口縁壺	10	反			13.6	浅黄橙	頸径 8.6
36	62	3359・3149	SD108	壺	80		18.6			浅黄橙	底径 6.4、煤付着
36	63	2038	SD108	く字鉢	10	反			16.0	にぶい黄橙	
36	64	3355・3337	SD108	く字鉢	30				18.5	淡黄	頸径 17.2
36	65	3149	SD108	片口鉢	40	反	20.3	12.0	19.0	橙	底径 7.6、木葉痕
37	66	3150	SD108	外反坏部高坏	70		27.6	21.7		にぶい黄橙	脚径 14.6、ｽｶｯ3 方向
37	67	2038・2035	SD108	外反坏部高坏	30		25.4			浅黄橙	脚頸径 3.7、3 方向ｽｶｯ?
37	68	3377	SD108	外反坏部高坏	20	反	29.2			橙	
37	69	3151	SD108	外反坏部高坏	40	反	25.0			にぶい黄橙	
37	70	3360	SD108	外反坏部高坏	10	反	27.6			浅黄橙	
37	71	3340	SD108	く字碗形坏部高坏	10	反	30.0			浅黄橙	
37	72	3349	SD108	く字碗形坏部高坏	20	反	31.0			橙	
37	73	3149	SD108	く字碗形坏部高坏	20	反	29.0			浅黄橙	坏部一箇所穿孔あり
37	74	3337	SD108	高坏	50					浅黄橙	脚径 17.0、ｽｶｯ3 方向

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
37	75	3349	SD108	高坏	40					浅黄橙	脚径 16.0、ｽｽ3 方向
37	76	3148	SD108	高坏	40	反				浅黄橙	脚径 15.8、ｽｽ3 方向
37	77	3376	SD108	高坏	40					浅黄橙	脚径 15.4、ｽｽ3 方向
37	78	3360	SD108	高坏	30					浅黄橙	脚径 14.4、ｽｽ3 方向
37	79	3151・3148	SD108	高坏	50					にぶい黄橙	脚径 14.0、ｽｽ3 方向
37	80	3149	SD108	高坏	40					浅黄橙	脚径 14.0、ｽｽ3 方向
37	81	3376	SD108	高坏	50					浅黄	脚径 13.6、ｽｽ3 方向
38	82	3345・3149	SD108	有稜高坏	30	反	25.8			にぶい黄橙	脚径 13.0、ｽｽ3 方向
38	83	3342	SD108	有稜高坏	20	反	23.0			浅黄橙	
38	84	3151・3362	SD108	有稜高坏	40	反	24.0			浅黄橙	
38	85	3363・3356	SD108	高坏	40					橙	脚径 11.4、ｽｽ3 方向
38	86	2173・2171	SD108	く字鉢	80	反	15.2	12.4	13.0	にぶい黄橙	底径 4.8、外面煤付着
38	87	3151	SD108	く字鉢	50	反	13.5	11.1	12.3	にぶい黄橙	頸径 10.6、底径 4.8
38	88	3151	SD108	小型直口鉢	70		10.6	9.2		橙	頸径 9.0、底径 5.0
38	89	3331	SD108	小型直口鉢	80		10.5	8.8	9.7	黄灰	頸径 8.0、底径 5.0
38	90	3148	SD108	小型直口鉢	40	反	11.5		10.1	浅黄橙	頸径 9.4
38	91	3149	SD108	小型直口鉢	50	反	8.0	6.7		浅黄橙	頸径 6.4、底径 3.4
38	92	2170・2173	SD108	く字甕	70	反	23.3		19.1	浅黄	外面煤付着、口縁刺突
38	93	3151	SD108	く字甕	10		21.7		20.1	浅黄橙	口縁刺突、煤付着
38	94	3149	SD108	く字甕	10	反			18.6	にぶい黄橙	口縁刺突・ｺﾏﾅ'
38	95	3373	SD108	く字甕	10	反			19.2	灰白	口縁刺突・ｺﾏﾅ'、外面煤付着
38	96	3352	SD108	く字甕	10	反			20.2	橙	口縁刺突・ｺﾏﾅ'、外面煤付着
38	97	3149	SD108	く字甕	20	反	18.2		16.0	浅黄	口縁無刺突・ｺﾏﾅ'、煤付着
38	98	3358	SD108	く字甕	5					にぶい黄橙	脚頸径 5.0、底径 8.0
38	99	3332	SD108	く字甕	5					灰黄	脚頸径 4.2、底径 6.4
38	100	3364	SD108	く字甕	5					にぶい橙	脚頸径 4.6、底径 6.8
38	101	3150	SD108	大型甕	5	反			34.8	灰黄	口縁刺突、煤付着
39	102	3022	SX105	拡張口縁壺	5	反			16.4	浅黄橙	頸径 10.0
39	103	3022	SX105	直立口縁壺	20	反			11.2	浅黄橙	頸径 7.8
39	104	3288・3014	SX105	内甕口縁壺	30				15.8	浅黄橙	頸径 9.0
39	105	3023	SX105	複合口縁壺	5	反			15.4	浅黄橙	
39	106	3232	SX105	小型壺	80		10.4			にぶい橙	頸径 6.0、底径 5.3、木葉痕
39	107	3098	SX105	小型壺	80		9.0			にぶい橙	底径 5.0、黒斑
39	108	3023	SX105	無頸壺	40	反	18.4		14.2	橙	
39	109	3023	SX105	外反坏部高坏	20	反	25.4			にぶい橙	
39	110	3022	SX105	外反坏部高坏	10	反	24.2			浅黄橙	
39	111	3233・2724	SX105	有稜高坏	50		18.6	18.0		浅黄橙	脚頸径 4.8、ｽｽ1 方向
39	112	3022	SX105	有稜高坏	20		20.0			にぶい橙	
39	113	3023	SX105	く字甕	20	反	20.6		19.4	にぶい橙	頸径 18.0、口縁刺突
39	114	3022	SX105	く字甕	20	反	17.2		15.3	灰褐	口縁刺突・ｺﾏﾅ'、全面煤付着
39	115	3022	SX105	砥石			3.1	2.3	2.0		2.8g、軽石
39	116	3024・3301	SK103	く字甕	10	反	16.2			明褐灰	頸径 14.4、口縁刺突
39	117	3234	SK103	甕	20					にぶい橙	脚頸径 6.6、底径 9.2
39	118	3024	SK103	砥石			6.8	3.4	2.8		8.0g、軽石
39	119	3320・3084	SK104	直立口縁壺	40	反	19.4	21.0	12.0	淡黄	頸径 8.0、底径 6.0
39	120	3084	SK104	内甕口縁壺	10	反			12.2	浅黄橙	頸径 7.7、内外赤彩?
39	121	3084	SK104	内甕口縁壺	10	反			17.2	にぶい橙	頸径 10.1
39	122	3321	SK104	小型壺	100		10.2	11.0	7.5	橙	頸径 5.5、底径 4.2
40	123	3084	SK104	外反坏部高坏	10	反	29.0			浅黄橙	
40	124	3084	SK104	く字碗形坏部高坏	5	反	27.8			にぶい黄橙	
40	125	3084	SK104	高坏	30					橙	黒斑、ｽｽ3 方向
40	126	3320	SK104	高坏	40					浅黄橙	脚径 16.0、ｽｽ3 方向
40	127	3084	SK104	甕	20					黄褐	脚頸径 5.5、底径 10.4
40	128	3085	SK105	外反口縁壺	10				12.3	にぶい橙	頸径 8.0
40	129	3085	SK105	直立口縁壺	20				12.8	にぶい黄橙	頸径 7.3
40	130	3085	SK105	内甕口縁壺	20				13.8	浅黄橙	頸径 8.8
40	131	3085	SK105	砥石			4.0	4.3	1.8		5.5g、軽石
40	132	3236	SK108	内甕甕	40	反	14.4	17.7		にぶい黄橙	口縁無刺突・ｺﾏﾅ'、黒斑
40	133	3327	SK107	外反口縁壺	30				12.0	浅黄橙	頸径 7.8
40	134	3327	SK107	高坏	30					淡黄	脚頸径 4.4、脚径 14.0
40	135	3378	SK108	壺	20	反	25.3			にぶい黄橙	
40	136	3378	SK108	小型く字鉢	80		10.0	7.6	8.5	にぶい橙	底径 4.6
40	137	2722・2721	包含層	内甕口縁壺	20				18.0	にぶい橙	頸径 9.6
40	138	2753	包含層	小型直口鉢	100		8.2	7.5		赤褐	底径 4.0
40	139	2192	包含層	裝飾高坏	20					浅黄橙	脚頸径 5.2、外面赤彩
40	140	2725	包含層	高坏	20	反				浅黄橙	脚径 11.0、ｽｽ3 方向
40	141	2728・2727	包含層	高坏	20					橙	脚頸径 3.6、脚径 8.4
40	142	1993	包含層	く字甕	20	反	18.4		17.0	浅黄橙	口縁刺突・ｺﾏﾅ'、煤付着
40	143	2414・2723	包含層	大型甕	10	反	35.0			浅黄橙	口縁刺突
40	144	2574	包含層	砥石			4.0	4.4	2.7		9.7g、軽石
40	145	2725	包含層	叩石			8.7	2.9	2.6		96.6g
43	146	3285・3280	SD104	外反口縁壺	40		21.2		13.6	浅黄橙	頸径 8.4
43	147	3362・2724	SD104	拡張口縁壺	70		21.0	20.0	12.4	にぶい橙	頸径 8.5
43	148	2727・3024	SD104	拡張口縁壺	30				14.0	浅黄橙	頸径 9.4、ｽｽ2 × 1

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
43	149	3260・3273	SD104	内甕口縁壺	20	反			13.3	浅黄橙	頸径 7.8、菊川式折衷形態
43	150	3298・3300	SD104	内甕口縁壺	60				16.6	浅黄橙	頸径 10.3
43	151	3303・3307	SD104	内甕口縁壺	40	反			14.0	浅黄橙	頸径 9.0
43	152	3303・3313	SD104	内甕口縁壺	30	反			16.4	にぶい黄橙	頸径 9.7
43	153	3313・3314	SD104	内甕口縁壺	30				14.0	浅黄橙	頸径 8.0
43	154	3246・3257	SD104	内甕口縁壺	40	反			15.0	にぶい橙	頸径 8.0
43	155	3300	SD104	内甕口縁壺	20	反			15.2	浅黄橙	頸径 8.2
43	156	3300	SD104	内甕口縁壺	10	反			15.0	浅黄橙	
43	157	3328	SD104	内甕口縁壺	10	反			15.0	淡黄	頸径 9.2
43	158	3281	SD104	内甕口縁壺	10	反			14.6	にぶい黄橙	頸径 8.8
43	159	3095	SD104	内甕口縁壺	10	反			14.5	淡橙	頸径 9.3、内面黒変
43	160	3303・3013	SD104	内甕口縁壺	10	反			14.0	浅黄橙	頸径 8.8
43	161	3260・3294	SD104	内甕口縁壺	10	反			13.6	浅黄橙	頸径 7.6
43	162	3316・2721	SD104	内甕口縁壺	10	反			13.0	にぶい橙	頸径 8.0
43	163	3274	SD104	内甕口縁壺	10	反			11.0	浅黄橙	頸径 7.6
44	164	3305・3301	SD104	折返口縁壺	30	反			18.2	浅黄橙	頸径 9.0、上面羽状刺突
44	165	3095	SD104	折返口縁壺	10	反			19.2	にぶい黄橙	頸径 10.0
44	166	3262・2723	SD104	折返口縁壺	20				18.0	浅黄橙	頸径 10.2
44	167	3280	SD104	折返口縁壺	20				15.7	浅黄橙	浮文 6 × 4、上面羽状刺突
44	168	3302	SD104	折返口縁壺	20				15.5	淡橙	頸径 9.5
44	169	3014	SD104	複合口縁壺	10	反			23.6	淡黄橙	浮文 5 × 4、菊川式折衷形態
44	170	3013	SD104	複合口縁壺	5	反			20.4	黄橙	上面羽状刺突
44	171	3242	SD104	複合口縁壺	20				17.6	浅黄	上面羽状刺突、浮文 3 × 5?
44	172	3018	SD104	壺	20	反				浅黄橙	頸径 8.8、縄文、菊川式折衷形態
44	173	3305・3315	SD104	壺	20	反	24.7			淡黄	浮文 4 × 4?
44	174	3012・3013	SD104	壺	5					淡橙	浮文個数・方向不明
44	175	3296	SD104	壺	5					淡黄	浮文個数・方向不明
44	176	3316・3307	SD104	小型壺	70		10.3	11.4	9.0	浅黄橙	頸径 5.6、底径 4.6
44	177	3250	SD104	小型壺	70		12.8			橙	底径 6.0
44	178	3262・3264	SD104	小型壺	50		8.0			浅黄橙	頸径 5.4、底径 5.4
44	179	3303・2381	SD104	裝飾く字鉢	20	反				にぶい橙	
44	180	3014・2569	SD104	裝飾く字鉢	20	反			20.0	浅黄橙	頸径 17.4
44	181	3012・3015	SD104	裝飾く字鉢	10	反			11.0	浅黄橙	頸径 9.3
44	182	3012・2235	SD104	裝飾く字鉢	10	反			9.7	浅黄橙	頸径 7.5
45	183	3244・2922	SD104	片口鉢	90	反	21.8	10.9		淡赤橙	底径 7.0
45	184	3278	SD104	鉢	10	反	14.4			淡黄	内面黒変
45	185	3012・3013	SD104	碗形鉢	20	反	11.6	6.9		明褐灰	底径 5.6
45	186	3012	SD104	碗形鉢	90	反	8.4	3.7		浅黄橙	底径 3.5
45	187	3328	SD104	外反坏部高坏	10	反	25.3			淡橙	
45	188	3014	SD104	外反坏部高坏	30	反	21.8			浅黄橙	
45	189	3012	SD104	外反坏部高坏	10	反	23.0			浅黄橙	
45	190	3315	SD104	外反坏部高坏	50	反	24.0			浅黄橙	
45	191	3248・3017	SD104	高坏	50					浅黄橙	脚径 15.0、ｽｶｼ3 方向
45	192	3319	SD104	高坏	20	反				浅黄橙	脚径 14.0、ｽｶｼ3 方向
45	193	3252	SD104	高坏	30	反				浅黄橙	脚径 13.0、ｽｶｼ3 方向
45	194	3013	SD104	高坏	30	反				浅黄橙	脚径 14.1、ｽｶｼ3 方向
45	195	3079・2921	SD104	高坏	40					浅黄橙	脚径 12.0、ｽｶｼ3 方向
45	196	3302	SD104	高坏	20	反				橙	脚径 13.7、ｽｶｼ4 方向
45	197	3011・3023	SD104	高坏	20	反				淡黄	脚径 13.0、ｽｶｼ3 方向?
45	198	3312・3291	SD104	有稜高坏	60		16.2	15.4		にぶい橙	脚径 11.0、ｽｶｼ3 方向
45	199	3309・3312	SD104	有稜高坏	20	反	20.9			橙	
45	200	3012	SD104	有稜高坏	5	反	21.2			橙	
45	201	3102・2723	SD104	有稜高坏	30		19.0			にぶい橙	
45	202	3299・2721	SD104	有稜高坏	40	反				にぶい橙	脚頸径 4.4、ｽｶｼ3 方向
46	203	3326・3282	SD104	く字甕	10	反			21.2	橙	口縁刺突・ｺﾅﾅ ⁺
46	204	3309・3307	SD104	く字甕	20	反	21.6		20.4	にぶい橙	口縁刺突・ｺﾅﾅ ⁺
46	205	3015	SD104	く字甕	10	反	17.3		16.6	にぶい黄橙	口縁刺突・ｺﾅﾅ ⁺
46	206	3011	SD104	く字甕	10	反	17.8			浅黄橙	口縁刺突・ｺﾅﾅ ⁺ 、外面煤付着
46	207	3257	SD104	く字甕	10	反	15.9		15.0	にぶい黄橙	口縁刺突・ｺﾅﾅ ⁺
46	208	3243	SD104	く字甕	20	反	19.2		18.0	浅黄橙	口縁無刺突・ｺﾅﾅ ⁺ 、外面煤付着
46	209	3011	SD104	く字甕	15	反				浅黄橙	脚頸径 4.8、底径 9.6
46	210	3298	SD104	く字甕	20					灰黄	脚頸径 5.4、底径 9.4
46	211	3017・3356	SD104	大型甕	5	反	42.8			にぶい橙	口縁刺突、内面煤付着
46	212	3018	SD104	叩石			11.9	5.2	2.8		236g
46	213	3012	SD104	砥石			13.2	7.5	8.5		147.1g、軽石
46	214	3013	SD104	砥石			10.0	7.8	5.3		71.2g、軽石
46	215	3020	SD105	く字甕	10	反	20.4			灰黄	口縁刺突・ｺﾅﾅ ⁺ 、外面煤付着
46	216	3102	SD107	外反坏部高坏	10	反	29.6			浅黄橙	
46	217	3318	SD109	砥石			19.9	7.9	6.9		1510g、凝灰岩、叩石としても使用
51	218	2476	SX103 東群	直立口縁壺	60		21.9	22.6	14.1	橙	頸径 9.2、底部黒斑
51	219	2486	SX103 東群	直立口縁壺	5	反		15.6		浅黄橙	
51	220	2486	SX103 東群	折返口縁壺	5	反			16.4	にぶい橙	
51	221	2475	SX103 東群	複合口縁壺	20	反			13.8	浅黄橙	頸径 9.6
51	222	2194	SX103 東群	碗形鉢	90		6.9	4.2		にぶい橙	底径 4.7、内面煤付着

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
51	223	2473	SX103 東群	く字甕	10	反	21.3		20.8	にぶい褐	口縁刺突・ヨナナ、外面煤付着
51	224	2487	SX103 東群	小型く字甕	10	反	11.2			橙	口縁刺突・ヨナナ、外面煤付着
51	225	2194	SX103 東群	く字甕	40	反	23.5		21.6	にぶい橙	口縁無刺突・ヨナナ、外面煤付着
51	226	2471	SX103 東群	甕	20					にぶい黄橙	底径 9.0
51	227	2515	SX103 東群	甕	20					にぶい黄橙	脚頭径 5.7、底径 7.9
51	228	2194	SX103 東群	大型甕	10		40.0			にぶい黄橙	口縁刺突、外面煤付着
51	229	2768・2806	SX103 中央	外反口縁壺	20	反	23.6		12.4	黄橙	頭径 9.1、底径 8.5
51	230	2506・1970	SX103 中央	外反口縁壺	50	反			17.8	うすい黄橙	頭径 11.8
51	231	2756	SX103 中央	外反口縁壺	20				13.0	浅黄橙	頭径 8.2
51	232	2776	SX103 中央	直立口縁壺	10	反			12.8	黄橙	頭径 9.6
51	233	2772	SX103 中央	直立口縁壺	10	反			12.0	淡黄	頭径 10.2
51	234	2808	SX103 中央	直立口縁壺	20	反			14.7	橙	頭径 9.2
51	235	2760・2785	SX103 中央	小型壺	70		9.6	9.0	7.1	橙	頭径 5.6、浮文 3×3
52	236	2763	SX103 中央	内鬚口縁壺	40	反	25.1		14.2	黄橙	頭径 8.6
52	237	2768・2767	SX103 中央	内鬚口縁壺	80		17.5	20.2	12.1	浅色橙	木葉痕、浮文 1×方向不明
52	238	2775・2783	SX103 中央	内鬚口縁壺	20	反			14.3	うすい橙	頭径 7.6
52	239	2786・2446	SX103 中央	折返口縁壺	20				15.5	浅黄橙	
52	240	2508・1994	SX103 中央	折返口縁壺	20	反			24.5	淡橙	頭径 13.8
52	241	2429・2213	SX103 中央	折返口縁壺	30				21.4	にぶい黄橙	頭径 10.4、菊川式
52	242	2766	SX103 中央	折返口縁壺	30				15.4	橙	頭径 7.7、菊川式折衷形態
52	243	2381	SX103 中央	複合口縁壺	10	反			20.5	淡黄	頭径 12.0
52	244	2782	SX103 中央	瓢壺	90		13.7			にぶい橙	頭径 5.3
52	245	2784・2766	SX103 中央	瓢壺	40				9.6	うすい黄橙	
52	246	2810	SX103 中央	瓢壺	100		7.3	8.3		にぶい橙	頭径 5.1、底径 2.2
52	247	2793	SX103 中央	無頭壺	20	反	22.4		17.0	淡橙	
52	248	2800・2468	SX103 中央	く字鉢	40	反		24.0	27.1	淡橙	頭径 24.9、底径 8.7
52	249	2396	SX103 中央	く字鉢	10		24.3			橙	頭径 22.1
52	250	2808・2809	SX103 中央	片口鉢	30	反	20.6			淡黄橙	
52	251	2777	SX103 中央	碗形鉢	60		7.9	4.0		うすい黄橙	頭径 4.5
53	252	2754・2757	SX103 中央	外反坏部高坏	60		21.3	17.0		浅黄橙	脚径 11.0、スリ 3 方向
53	253	2761・2763	SX103 中央	有稜高坏	50	反	17.6	15.5		にぶい橙	脚径 10.8
53	254	2507・2395	SX103 中央	有稜高坏	30		24.3			淡黄橙	
53	255	2443・2429	SX103 中央	有稜高坏	30	反	24.6			橙	
53	256	2766・2784	SX103 中央	有稜高坏	50		16.5			橙	脚頭径 4.7
53	257	2787	SX103 中央	碗形坏部高坏	30	反	25.0			うすい黄橙	
53	258	2511	SX103 中央	高坏	40					淡黄橙	スリ 3 方向、黒斑
53	259	2381	SX103 中央	高坏	40					淡黄橙	脚径 11.8、スリ 3 方向
53	260	2426	SX103 中央	高坏	10	反				にぶい橙	脚径 11.0、スリ 3 方向
53	261	2804	SX103 中央	高坏	40					にぶい黄橙	脚径 11.7、スリ 3 方向
53	262	2774・2783	SX103 中央	く字甕	50		17.5		17.0	にぶい黄橙	頭径 14.9、口縁刺突
53	263	2759	SX103 中央	く字甕	60	反	21.2		19.8	橙	口縁刺突・ヨナナ
53	264	2426	SX103 中央	小型甕	40					淡黄	脚頭径 2.4、ミニチュア?
53	265	2797・2798	SX103 中央	大型甕	20	反	42.0			にぶい橙	口縁刺突
53	266	2795	SX103 中央	砥石			21.7	9.9	6.5		1555g、凝灰岩
54	267	1995	SX103 西群	外反口縁壺	10				17.0	淡黄橙	
54	268	2393	SX103 西群	直立口縁壺	10	反			14.8	橙	頭径 9.0
54	269	2491	SX103 西群	直立口縁壺	30				14.6	橙	頭径 9.5
54	270	2494	SX103 西群	内鬚口縁壺	40	反	33.4	37.0	21.1	浅黄橙	底径 8.0、木葉痕
54	271	2501	SX103 西群	折返口縁壺	10				16.0	にぶい黄橙	口縁上面羽状刺突
54	272	2496	SX103 西群	折返口縁壺	20				14.2	淡黄橙	浮文 3×3、竹管文 2×6+3×1
54	273	2573	SX103 西群	壺蓋	50	反	8.0			浅黄橙	
54	274	2246	SX103 西群	碗形鉢	90		7.7	4.5		にぶい橙	底径 3.9
54	275	2194・2519	SX103 西群	有稜高坏	60		19.3	12.7		橙	脚径 11.8、スリ 3 方向
54	276	2495	SX103 西群	有稜高坏	30					黄橙	脚径 11.3、スリ 3 方向
54	277	2212	SX103 西群	有稜高坏	50					浅黄橙	脚径 11.6、スリ 3 方向
54	278	2503	SX103 西群	高坏	20					淡橙	脚径 10.2、スリ 3 方向
54	279	2213	SX103 西群	高坏	20					浅黄橙	脚径 10.7、スリ 4 方向
54	280	2493	SX103 西群	く字甕	10	反	16.0			灰黄	口縁刺突・ヨナナ
54	281	2497	SX103 西群	く字甕	10	反			14.7	黄橙	口縁無刺突・ヨナナ
54	282	2504・2417	SX103 西群	受口甕	30	反	22.4		18.0	浅黄橙	口縁刺突・ヨナナ、外面煤付着
54	283	2498	SX103 西群	甕	20					黄橙	脚頭径 5.5、底径 7.4
54	284	2210	SX103 西群	S 字甕	10				18.2	灰黄	S 字甕 A 類、口縁押引、外面煤付着
54	285	2573	SX103 西群	S 字甕	10	反			19.2	灰白	S 字甕 A 類、口縁押引
54	286	2503	SX103 西群	土玉			4.2	4.0	4.2	灰白	68.0g
54	287	2573	SX103 西群	砥石			4.7	4.4	3.1		8.5g、軽石
55	288	2417・2430	SX103 西群	壺	40	反	40.0			にぶい黄橙	底径 15.6、南関東系
57	289	2011	SB101	壺	70	反	13.4			灰黄	頭径 6.2、底径 6.4
57	290	2373	SB101	有稜高坏	10	反	18.9			にぶい黄橙	
57	291	2208	SB101	く字甕	40	反	15.8		14.0	にぶい黄橙	頭径 12.5、口縁刺突
57	292	2378	SP101	く字甕	10	反	15.8		13.5	にぶい黄橙	口縁刺突、外面煤付着
57	293	2378	SP101	甕	5	反				灰黄	脚頭径 5.1
57	294	2378	SP101	甕	5	反				にぶい橙	脚頭径 4.8
58	295	2395・2413	包含層	内鬚口縁壺	10				15.8	浅黄橙	頭径 9.7
58	296	2191	包含層	内鬚甕	10	反			17.0	橙	頭径 14.0

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
58	297	2395	包含層	S字甕	10	反			16.0	にぶい橙	S字甕A類、口縁押引、外面煤付着
58	298	2191	包含層	砥石			8.3	7.3	5.7		52.4g、軽石
58	299	2728	包含層	砥石			6.1	5.7	4.7		25.7g、軽石
61	300	3139	SL103	鉢	20	反	16.8			橙	
61	301	3337	SL103	有稜高坏	20	反	19.0			にぶい橙	内外面一部煤付着
61	302	3138	SL101	高坏	40					浅黄橙	脚径10.3、スリ3方向
61	303	3138	SL101	く字甕	5	反			20.2	にぶい赤褐	口縁刺突・ヨナテ
61	304	3081・3082	SX101	直立口縁壺	30	反	22.8		13.7	にぶい黄橙	頸径9.4
61	305	2977	SX101	直立口縁壺	20	反			12.4	にぶい橙	頸径8.4
61	306	3007	SX101	折返口縁壺	10	反			20.1	にぶい黄橙	頸径11.3
61	307	2954	SX101	折返口縁壺	20				17.5	にぶい橙	頸径10.3
61	308	2980	SX101	複合口縁壺	20	反			17.2	浅黄橙	浮文2×方向不明
61	309	2979	SX101	直口壺	10	反			10.0	にぶい橙	
61	310	2933	SX101	片口鉢	10	反	21.4			浅黄橙	
61	311	2925	SX101	外反坏部高坏	20	反	26.6			淡黄	
61	312	2930	SX101	外反坏部高坏	50		27.7	22.0		浅黄橙	脚径14.5、スリ3方向
61	313	2932・2936	SX101	く字碗形坏部高坏	60		28.0			淡黄	
61	314	2950	SX101	高坏	30	反				淡黄	脚径13.5、スリ3方向
61	315	2931	SX101	碗形坏部高坏	50	反	23.7	23.0		にぶい橙	脚径15.2、スリ3方向
62	316	2981	SX101	有稜高坏	70		19.1	16.3		にぶい橙	脚径9.3、スリ3方向
62	317	2968・2966	SX101	有稜高坏	80		23.1	17.3		橙	脚径11.4、スリ3方向
62	318	2969	SX101	有稜高坏	70		26.6	20.9		にぶい橙	脚径13.1、スリ3方向
62	319	2968	SX101	有稜高坏	100		23.3	17.3		にぶい橙	脚径10.4、スリ3方向
62	320	2964・2962	SX101	有稜高坏	90		23.0	16.8		にぶい黄橙	脚径10.8、スリ3方向
62	321	2930・3137	SX101	有稜高坏	20	反	22.1			橙	
62	322	2985	SX101	有稜高坏	20	反	26.6			にぶい橙	
62	323	2983・2984	SX101	有稜高坏	40	反	26.8			にぶい黄橙	黒斑
62	324	2960	SX101	高坏	40					にぶい黄橙	脚径11.0、スリ3方向
62	325	2973・2983	SX101	く字甕	40	反	18.2	24.7	13.2	にぶい黄橙	口縁刺突、内面底部コゲ
62	326	2969	SX101	く字甕	70	反	17.5			にぶい黄橙	口縁刺突
62	327	3150	SX101	く字甕	80		17.6		13.0	にぶい黄橙	口縁刺突・ヨナテ、煤付着、南関東系
63	328	2927・2928	SX101	く字甕	30	反	19.7		18.7	にぶい褐	口縁刺突・ヨナテ
63	329	2935	SX101	く字甕	40	反	15.0		12.8	にぶい褐	口縁刺突・ヨナテ、外面煤付着
63	330	2954	SX101	く字甕	10	反	19.0			にぶい黄橙	口縁刺突・ヨナテ、外面煤付着
63	331	2971・2972	SX101	く字甕	70		27.6	31.0	23.0	橙	口縁無刺突、外面煤付着
63	332	2939	SX101	く字甕	30	反	20.4		18.2	にぶい橙	口縁無刺突、外面煤付着
63	333	2943	SX101	く字甕	20	反		13.0		にぶい橙	口縁無刺突
63	334	2959	SX101	く字甕	70		17.1	21.6	16.6	にぶい橙	口縁無刺突・ヨナテ
63	335	2959・2923	SX101	く字甕	30	反	14.3		14.0	浅黄	口縁無刺突・ヨナテ、外面煤付着
63	336	2034・2978	SX101	大型甕	30	反	32.2			にぶい橙	口縁刺突
64	337	3143	SL102	外反口縁壺	5	反			16.6	浅黄橙	
64	338	3143	SL102	折返口縁壺	5	反			17.2	浅黄橙	
64	339	3144	SL102	小型直口鉢	70		9.0	8.7		にぶい橙	底径2.7
64	340	3143	SL102	外反坏部高坏	20	反	23.8			浅黄橙	
64	341	3144	SL102	碗形坏部高坏	20	反	23.6			にぶい黄橙	煤付着
64	342	3143	SL102	碗形坏部高坏	20	反	26.4			にぶい黄橙	
64	343	3144	SL102	高坏	40					橙	脚径12.4、スリ3方向
64	344	2988・2027	SX102	外反口縁壺	30				14.5	にぶい黄橙	頸径9.2
64	345	3001	SX102	内嚢口縁壺	10	反			12.0	にぶい黄橙	頸径8.4、竹管文
64	346	2999	SX102	内嚢口縁壺	10	反			14.2	にぶい黄橙	頸径7.5
64	347	2037・2525	SX102	拡張口縁壺	10				16.3	にぶい黄橙	浮文2×3
64	348	2988・2027	SX102	く字鉢	10	反	23.6			橙	頸径20.0
64	349	2990	SX102	有稜高坏	20	反	23.6			にぶい黄橙	
64	350	3022・2037	SX102	有稜高坏	40					橙	スリ3方向、内面黒斑
64	351	2995	SX102	高坏	40					橙	脚径11.8、スリ3方向、黒斑
64	352	2416・2999	SX102	受口甕	30	反	20.0		16.0	暗褐	口縁刺突・ヨナテ
64	353	2416	SX102	S字甕	10	反			16.0	にぶい褐	S字甕A類、口縁押引
64	354	3003	SX102	叩石			10.2	9.0	3.2		372g、くぼみ痕、両用、砂岩？緑色片岩？
64	355	2444	SX102	砥石			8.3	7.4	2.6		155g、凝灰岩
66	356	2565	SD103	外反口縁壺	50	反	21.8	24.0	13.6	浅黄橙	底径9.0、底部木葉痕
66	357	2523	SD103	直立口縁壺	40	反	16.2	19.7	12.5	浅黄橙	頸径9.2、底径4.8
66	358	3030	SD103	拡張口縁壺	30				16.1	浅黄橙	頸径9.7
66	359	2523	SD103	拡張口縁壺	10				18.6	淡黄橙	
66	360	2523・2524	SD103	内嚢口縁壺	50	反	17.8		12.0	浅黄橙	頸径9.2
66	361	2565	SD103	内嚢口縁壺	10	反			16.4	浅黄橙	頸径8.2
66	362	2523・2526	SD103	折返口縁壺	30	反			17.4	黄橙	円形浮文5×2
66	363	2526・2987	SD103	折返口縁壺	10	反			18.4	にぶい赤橙	
66	364	3034	SD103	折返口縁壺	25				14.9	淡橙	頸径9.2
66	365	3032	SD103	折返口縁壺	25	反			15.2	橙	頸径10.0
66	366	2565	SD103	折返口縁壺	10				12.8	にぶい橙	頸径8.6
66	367	3027	SD103	複合口縁壺	20	反			18.4	淡黄橙	頸径9.3
66	368	3029・2944	SD103	壺	10	反				淡黄	頸径15.6、菊川式
66	369	3025	SD103	小型壺	90		12.9			橙	頸径5.8、底径5.0
66	370	2522	SD103	瓢壺	100		11.1	13.6	6.5	浅黄橙	頸径5.0、底径4.0、貝殻刺突

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
66	371	2526・2524	SD103	小型壺	40	反	9.1			浅黄橙	頸径 5.8、底径 3.4
66	372	2567・3033	SD103	く字鉢	60	反	17.2	18.0	11.2	淡黄橙	底径 6.0、木葉痕
66	373	3026	SD103	碗形鉢	100		8.3	4.9		橙	底径 4.1、外面黒斑
67	374	2524・2567	SD103	有稜高坏	10		19.2			橙	
67	375	3031	SD103	有稜高坏	70		21.0			黄橙	脚頸径 4.3
67	376	2567	SD103	有稜高坏	50					灰白	脚頸径 4.6、ｽｶｼ 3 方向
67	377	2526	SD103	高坏	30	反				黄橙	脚頸径 3.2、脚径 9.0
67	378	2524	SD103	小型高坏	20	反				淡黄橙	脚径 13.2、ｽｶｼ 3 方向
67	379	2525・2385	SD103	く字甕	20	反	16.2		13.8	淡橙	頸径 13.8、口縁無刺突
67	380	2566・2565	SD103	く字甕	10	反			16.0	橙	頸径 13.0、口縁無刺突
67	381	3038・3039	SD103	受口甕	10	反	17.0			赤褐	口縁刺突・ｺﾅﾅ
67	382	2035	SD103	S 字甕	10	反			16.0	にぶい橙	S 字甕 A 類、口縁押引
67	383	3039	SD103	木製品			17.4	3.7	2.7		不明品、鳥形?
67	384	3040	SD103	木製品			27.5	2.9	3.9		建築部材
67	385	2561	SD103	木製品			24.0	3.6	4.0		加工棒
68	386	3329	水田層（最下層）	高坏	30	反				浅黄橙	脚径 17.0、ｽｶｼ 3 方向
68	387	2950・2451	水田造営面	小型高坏	60		17.0			橙	脚頸径 4.6、ｽｶｼ 3 方向
68	388	2470・3325	水田造営面	タタキ甕	40	反	17.4			にぶい黄橙	頸径 10.0、底径 3.8、畿内 V 様式系
68	389	2188	水田埋土（上層）	S 字甕	10	反			19.0	にぶい黄橙	S 字甕 C 類
72	390	3198・3121	SD201 下層	外反口縁壺	30				10.4	浅黄橙	頸径 7.6
72	391	3156	SD201 下層	外反口縁壺	30				12.7	灰黄	頸径 6.9
72	392	3128	SD201 下層	外反口縁壺	30	反			12.5	にぶい橙	頸径 8.6
72	393	3117・3108	SD201 下層	外反口縁壺	80		29.0	30.5	17.3	にぶい黄橙	頸径 9.4、底径 7.9
72	394	3153	SD201 下層	外反口縁壺	20				11.3	浅黄橙	頸径 8.4
72	395	3072	SD201 下層	外反口縁壺	10				15.2	にぶい橙	頸径 7.2
72	396	2904	SD201 下層	外反口縁壺	20				15.3	にぶい黄橙	頸径 8.6
72	397	3159	SD201 下層	外反口縁壺	10				14.9	にぶい黄橙	頸径 9.6
72	398	2900	SD201 下層	外反口縁壺	80		12.9	15.4	9.7	にぶい橙	頸径 8.1、底径 5.5
72	399	3182	SD201 下層	外反口縁壺	90		13.2	14.1	9.4	橙	頸径 7.8、底径 7.0
72	400	2520	SD201 下層	外反口縁壺	90		11.5	11.3	8.3	灰黄	頸径 5.0、底径 4.8
72	401	2918	SD201 下層	外反口縁壺	100		6.3	6.0	5.0	にぶい橙	頸径 3.8
72	402	3126	SD201 下層	直立口縁壺	70		27.5	29.0	14.0	にぶい黄橙	頸径 10.2、底径 6.7
72	403	2878	SD201 下層	直立口縁壺	70		20.0	22.0	10.4	浅黄橙	底径 6.0、木葉痕
72	404	3044・3055	SD201 下層	直立口縁壺	80	反	14.0	18.0	10.6	浅黄橙	頸径 14.0、底径 6.2
73	405	2877・2747	SD201 下層	内甕口縁壺	50	反			12.0	橙	頸径 7.6、浮文 3 × 2
73	406	2747・2908	SD201 下層	内甕口縁壺	30				16.0	橙	頸径 9.1、口縁内面擬凹線
73	407	3177・3180	SD201 下層	内甕口縁壺	30				16.2	浅黄橙	頸径 9.7
73	408	3219・3229	SD201 下層	内甕口縁壺	30	反			14.8	にぶい橙	頸径 8.2
73	409	2739・2876	SD201 下層	内甕口縁壺	40	反			15.6	橙	頸径 8.4、浮文 3 × 3
73	410	3161・3164	SD201 下層	内甕口縁壺	30	反			16.0	にぶい黄橙	頸径 9.2
73	411	3183・3178	SD201 下層	内甕口縁壺	30				15.6	にぶい黄橙	頸径 9.7
73	412	2914	SD201 下層	内甕口縁壺	20				15.4	浅黄橙	頸径 9.0
73	413	2218	SD201 下層	内甕口縁壺	10	反			14.6	浅黄橙	頸径 9.0
73	414	2670・2879	SD201 下層	内甕口縁壺	15				15.7	浅黄橙	頸径 9.8
73	415	2881	SD201 下層	内甕口縁壺	60		25.8		13.9	にぶい黄橙	頸径 8.8
73	416	3177	SD201 下層	内甕口縁壺	40	反			13.0	にぶい黄橙	頸径 8.4
73	417	2635・2439	SD201 下層	内甕口縁壺	20	反			14.6	にぶい橙	頸径 8.6
73	418	2531・2623	SD201 下層	内甕口縁壺	10	反			14.4	浅黄橙	頸径 7.4
73	419	3111・3114	SD201 下層	受口状口縁壺	10				11.8	にぶい黄橙	頸径 8.2
74	420	2599・2597	SD201 下層	拡張口縁壺	80		26.3	31.0	16.5	にぶい橙	棒状浮文 4 × 4、擬凹線 3 本、円形浮文 4 × 4
74	421	2899	SD201 下層	拡張口縁壺	90		17.7	17.6	9.5	にぶい橙	頸径 7.1、底径 6.8
74	422	2878	SD201 下層	拡張口縁壺	10	反			20.0	にぶい黄橙	頸径 11.2
74	423	2632・2434	SD201 下層	折返口縁壺	40	反			21.9	淡橙	頸径 14.5
74	424	2906・2881	SD201 下層	折返口縁壺	30	反			14.8	浅黄橙	頸径 8.5
74	425	3108・3109	SD201 下層	折返口縁壺	20	反			22.2	にぶい黄橙	頸径 11.8
74	426	3154	SD201 下層	折返口縁壺	10	反			23.2	にぶい橙	口縁上面擬凹線 3 本
74	427	2743・2885	SD201 下層	折返口縁壺	100		40.4	49.8	22.2	橙	頸径 11.8、底径 11.2、菊川式折衷形態
75	428	2875・2241	SD201 下層	折返口縁壺	30	反			20.0	にぶい橙	棒状浮文 8 × 方向不明、菊川式折衷形態
75	429	3067・2895	SD201 下層	折返口縁壺	50				25.0	浅黄橙	菊川式
75	430	2445・2881	SD201 下層	折返口縁壺	5	反			28.2	浅黄	棒状浮文 3? × 方向不明、菊川式
75	431	3155	SD201 下層	折返口縁壺	20	反			22.0	浅黄橙	頸径 14.4、菊川式
75	432	2752・3049	SD201 下層	折返口縁壺	100		30.8	36.0	17.8	にぶい橙	頸径 8.5、結節縄文、菊川式
75	433	2902・2892	SD201 下層	折返口縁壺	30				30.0	にぶい褐灰	頸径 15.2、菊川式
75	434	2220・3230	SD201 下層	折返口縁壺	50		33.4		19.6	にぶい黄橙	布目状押捺、円形浮文 2 × 2 + 4 × 2?、南関東系
75	435	3060	SD201 下層	広口鉢	5					にぶい橙	南関東系
76	436	2746・2747	SD201 下層	複合口縁壺	80		25.5	32.0	20.1	橙	頸径 8.8、底径 7.3、木葉痕
76	437	2609・2884	SD201 下層	複合口縁壺	60		20.0		17.8	橙	頸径 7.6
76	438	3052・3051	SD201 下層	複合口縁壺	30	反			19.4	浅黄橙	棒状浮文 2 × 3、円形浮文 2 × 3
76	439	3186	SD201 下層	複合口縁壺	10	反			20.4	にぶい黄橙	棒状浮文 4 × 方向不明
76	440	2909	SD201 下層	小型直口壺	90		10.5	12.8	8.4	橙	頸径 5.5、底径 5.3
76	441	2730・2538	SD201 下層	無頸壺	60	反	18.4	13.5	10.4	にぶい橙	底径 6.2、穿孔 2 × 2
76	442	3053	SD201 下層	無頸壺	30	反	12.6		8.0	浅黄橙	
76	443	2440・2231	SD201 下層	壺蓋	30	反			17.4	灰褐	紐通し突起 2 × 穿孔 2
76	444	3055	SD201 下層	無頸壺	10	反			11.9	灰褐	紐通し突起 2? × 穿孔 2

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
76	445	3202	SD201 下層	壺蓋	100		6.1	6.1	2.8	淡橙	
77	446	3068・3066	SD201 下層	折返口縁鉢	90		31.5	30.4	23.3	浅黄橙	頸径 18.8、底径 10.0、外面黒斑、菊川式
77	447	3104	SD201 下層	く字鉢	20	反			24.0	橙	頸径 22.8、内面煤付着
77	448	3175・2875	SD201 下層	く字鉢	50		29.4		20.3	浅黄橙	頸径 18.4
77	449	2374・2888	SD201 下層	く字鉢	80		23.6		18.0	にぶい黄橙	頸径 16.4
77	450	2881・2882	SD201 下層	く字鉢	80		23.0	19.5	19.4	淡黄	頸径 17.9、底径 7.0、木葉痕
77	451	3053	SD201 下層	く字鉢	30	反			18.0	橙	頸径 14.3、内外面煤付着
77	452	3107・3053	SD201 下層	く字鉢	20				13.2	浅黄橙	頸径 11.8
77	453	2879	SD201 下層	く字鉢	20	反	24.8		22.1	にぶい橙	頸径 21.6
78	454	2894	SD201 下層	裝飾く字鉢	10	反			21.7	橙	頸径 19.8
78	455	3153・3238	SD201 下層	裝飾く字鉢	10				17.3	にぶい黄橙	頸径 15.8
78	456	3073・2893	SD201 下層	く字鉢	70		16.2	16.1	15.8	浅黄橙	頸径 12.0、底径 5.8
78	457	3045・3058	SD201 下層	く字鉢	70	反	14.8	11.7	14.2	浅黄橙	底径 6.0
78	458	2881・2878	SD201 下層	く字鉢	40	反	14.0		13.0	にぶい橙	頸径 12.0
78	459	3215・3214	SD201 下層	小型直口鉢	40	反	11.5			にぶい黄橙	頸径 9.0
78	460	2881	SD201 下層	小型直口鉢	30	反	11.4		11.0	橙	頸径 10.0
78	461	3163・2879	SD201 下層	小型直口鉢	80		10.8	9.0		にぶい橙	頸径 9.4、底径 4.7
78	462	2746・2877	SD201 下層	小型直口鉢	70		10.4	8.9	10.0	にぶい橙	頸径 9.0、外面黒斑
78	463	2878・3207	SD201 下層	小型直口鉢	50	反	10.0	9.0	10.0	にぶい橙	頸径 8.9、底径 3.0
78	464	2894	SD201 下層	小型直口鉢	80		10.0	9.5	9.4	浅黄橙	頸径 7.7、底径 4.5
78	465	3105・2893	SD201 下層	小型直口鉢	50	反	10.0	8.2	8.8	橙	頸径 8.0、底径 5.0
78	466	3181・3126	SD201 下層	小型直口鉢	80		8.8	8.4		にぶい橙	頸径 6.7、底径 3.0
78	467	2197	SD201 下層	小型直口鉢	80		8.8	7.8	8.5	にぶい橙	頸径 7.2、底径 4.6
78	468	2911・2893	SD201 下層	小型直口鉢	80		8.8	7.1		灰黄	頸径 6.7、底径 4.6
78	469	3043・3117	SD201 下層	小型直口鉢	80		8.9	6.6		灰白	頸径 7.4、底径 3.0、外面黒斑
78	470	3192	SD201 下層	小型直口鉢	90		8.7	7.2		にぶい黄橙	頸径 7.2、底径 3.4
78	471	2521	SD201 下層	小型直口鉢	80		7.8	6.9		灰	頸径 6.6、底径 4.1、黒斑
78	472	3194	SD201 下層	裝飾小型直口鉢	100		10.2	8.3		淡黄橙	頸径 7.2、底径 3.6
78	473	3107	SD201 下層	裝飾小型直口鉢	60		10.9			にぶい黄橙	頸径 8.0、脚付
78	474	3215・3110	SD201 下層	小型鉢	30	反	10.2		9.4	にぶい橙	脚付
78	475	3223・2878	SD201 下層	片口鉢	50		22.0		21.8	浅黄橙	
78	476	2895・3051	SD201 下層	片口鉢	60		19.8	10.6		薄黄橙	底径 8.9、片口不明
78	477	3164・2893	SD201 下層	片口鉢	30	反	20.6		20.5	にぶい橙	片口不明
78	478	3044・3056	SD201 下層	片口鉢	50		16.4	8.0		灰黄	底径 5.6、木葉痕
78	479	3112・3113	SD201 下層	片口鉢	20		16.1	8.3	15.5	淡橙	頸径 5.5、片口不明
78	480	3072・3126	SD201 下層	片口鉢	50	反	9.8	5.5		橙	底径 5.4、片口不明
78	481	2879	SD201 下層	碗形鉢	90		6.6	4.2		黄橙	底径 4.2
79	482	2407・2183	SD201 下層	裝飾高坏	40					にぶい橙	脚径 20.2、スリ二段
79	483	2893・3105	SD201 下層	外反坏部高坏	90		21.6	19.3		浅黄橙	口縁内面煤付着、スリ3方向
79	484	2855・2148	SD201 下層	外反坏部高坏	5	反	24.2			にぶい橙	
79	485	3228	SD201 下層	外反坏部高坏	20	反	22.6			にぶい黄橙	
79	486	3118・3112	SD201 下層	外反坏部高坏	40		22.6			にぶい橙	
79	487	2531・2620	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	90		29.0			にぶい橙	脚径 4.7、内面煤付着
79	488	3128	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	30	反	30.0			にぶい黄橙	
79	489	2881	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	60		26.0			浅黄橙	口縁内面煤付着
79	490	2880・3110	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	30	反	27.8			橙	
80	491	3160	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	50		27.4			浅黄橙	脚径 4.4
80	492	3117	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	30	反	26.0			浅黄橙	焼成後穿孔1×方向不明
80	493	3107・3106	SD201 下層	く字碗形坏部高坏	50		24.0			にぶい橙	口縁内面煤付着
80	494	3205・3112	SD201 下層	碗形坏部高坏	20	反	26.0			にぶい黄橙	口縁内面煤付着
80	495	3070・2219	SD201 下層	高坏	40					浅黄橙	底径 14.8、スリ3方向
80	496	3190・3191	SD201 下層	高坏	30					浅黄橙	脚径 4.8、脚径 16.0、スリ3方向
80	497	3201	SD201 下層	高坏	40					にぶい橙	脚径 4.4、脚径 15.4、スリ3方向
80	498	3227	SD201 下層	高坏	40					橙	脚径 4.6、脚径 14.7、スリ2方向
80	499	2903	SD201 下層	高坏	50					淡橙	脚径 4.3、脚径 13.1、スリ3方向
80	500	2893・2666	SD201 下層	高坏	40					灰黄	脚径 4.4、脚径 16.8、外面黒斑
80	501	3205・3206	SD201 下層	高坏	30					にぶい黄橙	脚径 4.4、脚径 14.4、スリ3方向
80	502	2876	SD201 下層	高坏	50					橙	脚径 4.1、脚径 13.0、スリ3方向
80	503	3209・3197	SD201 下層	高坏	40					にぶい黄橙	脚径 4.0、脚径 3.0、スリ3方向
80	504	3118	SD201 下層	高坏	40					淡橙	脚径 4.1、脚径 14.4、スリ3方向
80	505	3213	SD201 下層	高坏	50					淡橙	脚径 4.0、脚径 14.4、スリ3方向
81	506	2883・2879	SD201 下層	有稜高坏	60		23.7	21.8		にぶい黄橙	脚径 4.2、脚径 13.0、スリ3方向
81	507	3152	SD201 下層	有稜高坏	60					橙	脚径 4.2、脚径 14.0
81	508	2912	SD201 下層	有稜高坏	70		19.8	17.6		浅黄橙	脚径 4.2、脚径 12.2
81	509	3205・3063	SD201 下層	有稜高坏	30	反	16.0	17.6		淡橙	脚径 4.0、脚径 12.6、スリ3方向
81	510	2531・2877	SD201 下層	有稜高坏	40	反	21.0			橙	脚径 4.0
81	511	2879・2895	SD201 下層	有稜高坏	30	反	21.0			にぶい黄橙	
81	512	2881・3058	SD201 下層	有稜高坏	20	反	23.6			橙	
81	513	3189・3212	SD201 下層	有稜高坏	40		24.8			にぶい橙	
81	514	3115	SD201 下層	有稜高坏	20	反	24.0			橙	
81	515	3185・3106	SD201 下層	高坏	60	反				にぶい黄橙	脚径 4.0、脚径 14.8、スリ3方向
81	516	2876・2877	SD201 下層	高坏	40					にぶい橙	脚径 4.5、脚径 13.3、スリ3方向
81	517	3226	SD201 下層	高坏	30					浅黄橙	脚径 4.2、脚径 13.6、スリ3方向
81	518	2880・2881	SD201 下層	高坏	30					浅黄橙	脚径 4.4、脚径 13.6、スリ3方向

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
81	519	3203	SD201 下層	高坏	30					薄黄橙	脚径 13.3、ｽｽ3 方向
81	520	3196	SD201 下層	高坏	50					薄黄橙	脚径 13.5、ｽｽ3 方向
82	521	2897	SD201 下層	有稜高坏	90		21.8	19.4		橙	脚頭径 3.8、脚径 12.3、ｽｽ3 方向
82	522	2649・2229	SD201 下層	有稜高坏	60	反	22.2	18.5		明黄褐	脚頭径 3.5、脚径 10.6、ｽｽ3 方向
82	523	2876	SD201 下層	有稜高坏	30	反	27.0			橙	
82	524	2877	SD201 下層	有稜高坏	40		20.0			にぶい橙	外面擬凹縁 3 本、内外面煤付着
82	525	3119	SD201 下層	有稜高坏	20	反	24.0			淡黄	
82	526	2883・3062	SD201 下層	有稜高坏	30	反	21.4			浅黄橙	
82	527	2882	SD201 下層	有稜高坏	20					橙	脚頭径 4.0、脚径 12.4、ｽｽ3 方向
82	528	2749・2877	SD201 下層	有稜高坏	40					にぶい黄橙	脚頭径 4.5、脚径 11.6、ｽｽ3 方向
82	529	2883	SD201 下層	有稜高坏	50					淡橙	脚頭径 4.7、脚径 13.0、ｽｽ3 方向
82	530	2879	SD201 下層	有稜高坏	50					淡黄橙	脚頭径 4.7、脚径 12.5
82	531	3173	SD201 下層	有稜高坏	40					にぶい黄橙	脚頭径 3.3、脚径 9.5、ｽｽ3 方向
82	532	3105	SD201 下層	小型高坏	30		16.0			にぶい黄橙	脚頭径 4.0、ｽｽ3 方向
82	533	2876・2877	SD201 下層	小型高坏	60					にぶい橙	脚頭径 3.6、脚径 10.4
82	534	3215	SD201 下層	小型高坏	40					浅黄	脚頭径 3.7、脚径 9.7
82	535	3128	SD201 下層	小型高坏	60					薄黄橙	脚頭径 3.6、脚径 8.0、ｽｽ3 方向
83	536	3165	SD201 下層	く字甕	50		18.0	25.7	17.0	にぶい橙	脚頭径 4.6、底径 9.4、口縁刺突
83	537	2215・2228	SD201 下層	く字甕	50	反	19.0		17.7	にぶい橙	頭径 16.4、脚頭径 5.4、口縁刺突
83	538	2878	SD201 下層	く字甕	40	反	20.9			淡橙	口縁刺突、外面煤付着
83	539	3176・3128	SD201 下層	く字甕	30	反	23.4		20.0	にぶい黄	口縁刺突、外面煤付着
83	540	2875	SD201 下層	く字甕	20	反	23.3		20.0	黄橙	口縁刺突、外面煤付着、菊川式
83	541	3073	SD201 下層	く字甕	40	反	18.8		18.6	灰黄褐	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
83	542	2881・3058	SD201 下層	く字甕	60	反	17.0		17.0	黄橙	頭径 15.8、口縁刺突
83	543	2879	SD201 下層	く字甕	40	反	18.3		16.2	黄橙	口縁刺突、外面煤付着
83	544	3067	SD201 下層	く字甕	40		19.6		16.0	にぶい黄橙	口縁刺突、内外面煤付着
83	545	2881	SD201 下層	く字甕	30	反	16.9		16.0	にぶい黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
83	546	2879	SD201 下層	く字甕	20		15.4		14.0	にぶい橙	口縁刺突、外面煤付着
84	547	2879・2873	SD201 下層	く字甕	70		23.8		20.0	灰褐	頭径 16.7、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
84	548	2881・2880	SD201 下層	く字甕	20	反	23.2		21.4	灰黄	頭径 20.0、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
84	549	3225	SD201 下層	く字甕	30	反	23.8		21.0	浅黄	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
84	550	3214	SD201 下層	く字甕	60	反	19.6			にぶい黄橙	頭径 18.0、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
84	551	2531・2913	SD201 下層	く字甕	80		21.4		19.0	にぶい黄橙	底径 9.0、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
84	552	3118	SD201 下層	く字甕	30	反	20.2		19.5	淡橙	頭径 17.1、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
84	553	2879	SD201 下層	く字甕	40	反	21.5		18.9	淡黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
84	554	3060	SD201 下層	く字甕	30	反	23.0		18.0	灰黄	頭径 16.7、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
85	555	2624・2623	SD201 下層	く字甕	60		20.9	26.6	16.3	橙	頭径 14.2、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
85	556	3109・3160	SD201 下層	く字甕	40		20.4		17.4	にぶい橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
85	557	2879・2883	SD201 下層	く字甕	70	反	19.0		17.2	にぶい黄橙	頭径 15.6、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
85	558	2887	SD201 下層	く字甕	20	反	17.3		17.2	薄黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
85	559	2882	SD201 下層	く字甕	70		17.5		16.6	黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
85	560	2895	SD201 下層	く字甕	30	反	16.4			浅黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
85	561	3196・3211	SD201 下層	く字甕	20	反	18.1		16.2	灰黄	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
85	562	2885	SD201 下層	く字甕	50	反	17.5		15.9	橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
85	563	2894・3073	SD201 下層	く字甕	80		16.6		16.0	浅黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
85	564	2881	SD201 下層	く字甕	40	反			15.0	にぶい黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、内外面煤付着
85	565	3216・2896	SD201 下層	く字甕	20	反			13.0	にぶい橙	頭径 12.4、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
85	566	3166・3128	SD201 下層	小型く字甕	70		12.4		12.4	にぶい黄橙	頭径 11.1、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ
85	567	2910	SD201 下層	小型く字甕	80		12.3		11.5	薄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ、内面煤付着
86	568	2286・2285	SD201 下層	く字甕	70		18.9	26.3	15.3	橙	底径 8.8、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾅ
86	569	2879・2883	SD201 下層	く字甕	40	反	20.0		18.4	浅黄橙	頭径 15.6、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾅ
86	570	2883	SD201 下層	く字甕	20	反			18.6	淡黄橙	口縁無刺突・ｺﾓﾅﾅ、外面煤付着
86	571	2905	SD201 下層	甕	10					淡橙	底径 9.0、内面煤付着
86	572	3170	SD201 下層	甕	100		13.5	11.0		明褐	擬口縁、甕の底部再利用
86	573	3103・3124	SD201 下層	大型甕	10	反	48.0			淡黄	外面煤付着
86	574	2752・2881	SD201 下層	大型甕	80		37.0			にぶい黄橙	
86	575	3229	SD201 下層	砥石			12.0	3.9	1.8		118.0g、凝灰岩
86	576	3105	SD201 下層	砥石			11.7	7.4	2.2		225.0g、凝灰岩
86	577	3106	SD201 下層	砥石			9.2	7.7	3.8		55.5g、軽石
86	578	3223	SD201 下層	砥石			11.3	7.2	4.6		65.0g、軽石
86	579	3112	SD201 下層	砥石			8.9	6.8	4.5		37.4g、軽石
86	580	2248	SD201 下層	砥石			8.7	5.9	5.3		34.6g、軽石
86	581	3173	SD201 下層	砥石			6.0	4.8	2.8		11.1g、軽石
86	582	2878	SD201 下層	砥石			5.3	4.4	4.0		160g、軽石
90	583	2298	SK202	家形土器	5					橙	屋根部、軒先に竹管文
90	584	2387	SD201 上北西	家形土器	5					にぶい橙	屋根部
90	585	2294	SK202	家形土器	5					にぶい橙	屋根部、壁部との接合痕
90	586	2812	SD201 上北西	家形土器	10					にぶい橙	基底部、柱の表現
91	587	2821	SD201 上北西	外反口縁壺	5	反			14.2	浅黄橙	頭径 8.0
91	588	2835	SD201 上北西	直立口縁壺	40	反	16.5	17.5	10.0	淡黄	頭径 7.6、底径 5.9
91	589	2821	SD201 上北西	碗形鉢	90		8.0	5.0	7.0	浅黄橙	底径 4.1
91	590	2823	SD201 上北西	有稜高坏	70		22.0	19.3		にぶい橙	脚径 14.1、ｽｽ2 方向
91	591	2824・2653	SD201 上北西	く字甕	60		25.2		21.7	浅黄橙	頭径 19.1、口縁刺突
91	592	2829	SD201 上北西	く字甕	50	反			17.0	にぶい黄橙	頭径 15.2、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
91	593	2827	SD201 上北西	甕	10					明褐灰	脚頭径 4.7、底径 9.0
91	594	2824	SD201 上北西	甕	10	反				にぶい橙	脚頭径 5.4、底径 9.8
93	595	2828	SD201 上層	外反口縁壺	50		22.0		13.0	明黄褐	頸径 9.0
93	596	2630・2632	SD201 上層	外反口縁壺	40	反			14.6	にぶい黄橙	頸径 9.8、底径 8.3
93	597	2531・2613	SD201 上層	外反口縁壺	20	反			11.9	浅黄橙	頸径 8.0
93	598	2408	SD201 上層	外反口縁壺	20				13.2	浅黄橙	頸径 8.3
93	599	2652	SD201 上層	外反口縁壺	90		17.8	18.8	9.9	橙	頸径 7.0、底径 5.0
93	600	2273・2269	SD201 上層	外反口縁壺	50				8.0	橙	頸径 4.9、底径 3.0、木葉痕?
93	601	2579	SD201 上層	外反口縁壺	90		8.0	7.1	6.7	灰白	頸径 5.2、底径 4.0
93	602	2622・2626	SD201 上層	直立口縁壺	60		25.2	28.6	14.6	薄黄橙	頸径 9.6、底径 9.1
93	603	2667	SD201 上層	直立口縁壺	95		23.6	27.7	12.3	にぶい橙	頸径 10.0、底径 5.6
93	604	3047	SD201 上層	直立口縁壺	20				16.0	にぶい黄橙	
93	605	2621	SD201 上層	直立口縁壺	90		17.0	19.4	8.7	浅黄橙	頸径 7.7、底径 6.7
93	606	2606	SD201 上層	直立口縁壺	90		13.0	15.1	9.2	浅黄橙	頸径 6.4、底径 6.0
93	607	2405・2437	SD201 上層	直立口縁壺	20	反	7.0		6.4	浅黄橙	頸径 5.3
94	608	2592・2593	SD201 上層	内鬲口縁壺	80		28.8	33.2	18.5	橙	底径 9.0、底部木葉痕
94	609	2218・2197	SD201 上層	内鬲口縁壺	80		22.4	27.2	15.5	橙	円形浮文 3×3、木葉痕
94	610	2599・2603	SD201 上層	内鬲口縁壺	30	反			14.8	灰黄	頸径 9.0
94	611	2736	SD201 上層	内鬲口縁壺	30				14.4	にぶい黄橙	頸径 9.3
94	612	2624・2200	SD201 上層	内鬲口縁壺	20	反			19.0	にぶい橙	頸径 9.4、外面擬凹線 3本
94	613	2642	SD201 上層	内鬲口縁壺	10	反			14.8	浅黄橙	頸径 9.8
94	614	2828・2825	SD201 上層	内鬲口縁壺	50		24.7		13.6	にぶい黄橙	頸径 9.0、底径 7.6
94	615	2587	SD201 上層	内鬲口縁壺	70		21.4		14.0	浅黄橙	頸径 8.5
94	616	2580	SD201 上層	内鬲口縁壺	20	反			13.1	浅黄橙	頸径 9.0
94	617	2821	SD201 上層	内鬲口縁壺	20				13.8	浅黄橙	頸径 8.4
94	618	2422	SD201 上層	内鬲口縁壺	5	反			12.4	浅黄橙	頸径 9.0
94	619	2648	SD201 上層	壺	20	反				浅黄橙	円形浮文単位方向不明
94	620	2419	SD201 上層	壺						にぶい黄橙	浮文単位方向不明
94	621	2220	SD201 上層	内鬲口縁壺	70		13.0	13.7	9.2	にぶい橙	底径 4.4、木葉痕
94	622	2353	SD201 上層	壺蓋	5					にぶい橙	壺蓋のつまみ
95	623	2583・2375	SD201 上層	拡張口縁壺	80		29.5	32.5	17.6	灰黄	頸径 10.0、底径 9.8、木葉痕
95	624	2617・2593	SD201 上層	拡張口縁壺	30	反			16.8	褐灰	棒状浮文 4×3+4×3?、棒状浮文 4×3?
95	625	2610	SD201 上層	拡張口縁壺	30	反			15.8	にぶい橙	棒状浮文 3×4、円形浮文 4×4
95	626	2596・2609	SD201 上層	拡張口縁壺	10	反			16.5	灰白	頸径 8.4
95	627	2669	SD201 上層	拡張口縁壺	5	反			12.4	浅黄橙	頸径 7.6
95	628	2641	SD201 上層	拡張口縁壺	20				15.4	浅黄橙	頸径 8.8
95	629	2750	SD201 上層	拡張口縁壺	10				13.4	浅黄橙	頸径 9.0
95	630	2638・2200	SD201 上層	拡張口縁壺	10	反			15.6	黄灰	頸径 9.6
95	631	2425	SD201 上層	拡張口縁壺	5				22.0	橙	
95	632	2635・2843	SD201 上層	拡張口縁壺	20	反			13.2	にぶい黄橙	棒状浮文 2×4?、黒斑
95	633	2586	SD201 上層	拡張口縁壺	30				21.5	淡橙	頸径 12.0
95	634	2533・2586	SD201 上層	折返口縁壺	70		24.2		16.2	橙	頸径 8.1、浮文 2×1、浮文 4×2?
95	635	2744・2225	SD201 上層	折返口縁壺	20	反			18.1	薄黄橙	頸径 11.2、棒状浮文 4×3+4×3
95	636	2598・2603	SD201 上層	折返口縁壺	20	反			17.8	灰白	頸径 9.9、棒状浮文 4×3
95	637	2536	SD201 上層	折返口縁壺	20				16.6	にぶい黄橙	頸径 9.5、外面黒斑
95	638	2436・2456	SD201 上層	折返口縁壺	10	反			17.0	にぶい黄橙	円形浮文 4×方向不明
95	639	2363	SD201 上層	折返口縁壺	30				16.2	浅黄橙	頸径 8.8
95	640	2229	SD201 上層	折返口縁壺	5				20.5	にぶい黄橙	菊川式
95	641	2454	SD201 上層	受口状口縁壺	5	反	13.4			浅黄橙	浮文単位方向不明
95	642	2862	SD201 上層	受口状口縁壺	5	反			13.6	浅黄橙	竹管文
96	643	2741・2747	SD201 上層	複合口縁壺	50		27.8		18.8	橙	棒状浮文 3×4、浮文 3?×方向不明
96	644	2388・2201	SD201 上層	複合口縁壺	10	反			17.9	薄黄橙	
96	645	2262	SD201 上層	複合口縁壺	5	反			17.0	浅黄橙	
96	646	2601・2232	SD201 上層	複合口縁壺	10	反			16.1	浅黄橙	棒状浮文 3×3?
96	647	2318	SD201 上層	複合口縁壺	10					橙	棒状浮文 3×方向不明
96	648	2611・2618	SD201 上層	複合口縁壺	20	反			23.4	灰黄	
96	649	2737・2421	SD201 上層	直口壺	70		12.3			にぶい橙	頸径 5.5、脚頭径 3.9、ｽｶｼ3方向
96	650	2353	SD201 上層	裝飾長頸壺	10	反				橙	
96	651	2389	SD201 上層	壺蓋	20				11.6	浅黄橙	穿孔 2×2
96	652	2527・2730	SD201 上層	無頸壺	40	反	16.8		12.8	橙	
96	653	3049	SD201 上層	く字鉢	10	反			21.8	薄黄橙	頸径 19.3
96	654	2439	SD201 上層	く字鉢	10	反			19.0	薄黄橙	頸径 17.8
96	655	2596・2602	SD201 上層	く字鉢	50	反	31.4		23.4	浅黄橙	頸径 23.6
96	656	2738	SD201 上層	く字鉢	20	反	13.6		12.9	薄黄橙	頸径 11.0
96	657	3044	SD201 上層	く字鉢	20				9.1	黄灰	頸径 8.5
96	658	2751	SD201 上層	小型直口鉢	90	反	10.5	8.7		淡黄橙	頸径 7.7、底径 5.2
96	659	2745	SD201 上層	小型直口鉢	70		9.8	8.2		橙	頸径 6.6、底径 3.5
96	660	2666	SD201 上層	小型直口鉢	90		8.8	7.5		橙	頸径 7.4、底径 3.1
96	661	2735・2670	SD201 上層	小型直口鉢	80		8.5			橙	頸径 3.8、外面煤付着
96	662	2869	SD201 上層	小型鉢	100		8.6	5.3	6.7	淡橙	頸径 4.6
96	663	2591	SD201 上層	片口鉢	80		18.7	11.3		黄橙	底径 6.0
96	664	2816	SD201 上層	高坏	60		25.0	16.0		浅黄橙	脚頭径 5.3、底径 11.4、菊川式
97	665	2815	SD201 上層	外反坏部高坏	70		24.5	18.8		にぶい黄橙	脚頭径 14.0、ｽｶｼ3方向、外面黒斑
97	666	2820	SD201 上層	外反坏部高坏	30		29.0	21.9		淡黄橙	脚頭径 4.7、脚径 15.0、ｽｶｼ2方向

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
97	667	2834	SD201 上層	高坏	20					浅黄橙	脚頭径 4.2、脚径 14.2、ｽｶｼ 2 方向
97	668	2826	SD201 上層	高坏	40					黄橙	脚頭径 4.2、脚径 13.0
97	669	2418	SD201 上層	高坏	20	反				橙	脚頭径 4.0、脚径 14.4
97	670	2387	SD201 上層	高坏	20					灰白	脚径 9.2、ｽｶｼ 3 方向
97	671	2419	SD201 上層	裝飾高坏	10	反				にぶい橙	脚径 20.6、ｽｶｼ 6 方向 ?
97	672	2646・2859	SD201 上層	有稜高坏	10	反	24.8			にぶい黄橙	
97	673	2648・2670	SD201 上層	有稜高坏	10	反	22.8			淡橙	
97	674	2608・2612	SD201 上層	有稜高坏	10	反	22.4			淡橙	
97	675	2656・2654	SD201 上層	有稜高坏	70		26.0			にぶい黄橙	脚径 13.0、ｽｶｼ 3 方向
97	676	2640	SD201 上層	有稜高坏	50					薄橙	脚頭径 3.8、脚径 10.8、ｽｶｼ 3 方向
97	677	2607・2425	SD201 上層	有稜高坏	50					橙	脚頭径 4.2、脚径 11.8、ｽｶｼ 3 方向
97	678	2624	SD201 上層	有稜高坏	30					淡黄橙	脚頭径 4.7、脚径 12.0、ｽｶｼ 3 方向
97	679	2422	SD201 上層	小型高坏	20					灰白	脚頭径 3.8、脚径 11.9、ｽｶｼ 3 方向
97	680	2586	SD201 上層	小型高坏	40	反				淡橙	脚径 14.0、ｽｶｼ 3 方向
97	681	2227	SD201 上層	小型高坏	40					橙	脚頭径 3.5、脚径 11.4、ｽｶｼ 3 方向
97	682	2419	SD201 上層	小型高坏	30					黄橙	脚頭径 3.0、脚径 8.4、ｽｶｼ 3 方向
98	683	2832	SD201 上層	く字甕	30	反	28.0			にぶい黄橙	口縁刺突、外面煤付着
98	684	2748	SD201 上層	く字甕	10	反	18.8			にぶい橙	頸径 17.4、口縁刺突
98	685	2664	SD201 上層	く字甕	30		18.2		15.8	黄橙	頸径 13.8、口縁刺突
98	686	2225・2619	SD201 上層	く字甕	50	反			14.0	にぶい橙	口縁刺突、口縁焼け歪み顕著
98	687	2618	SD201 上層	く字甕	60	反	17.0		14.0	にぶい黄橙	頸径 13.4、口縁刺突
98	688	2639	SD201 上層	く字甕	10	反	22.8		21.7	橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ、外面煤付着
98	689	2593・2597	SD201 上層	内甕甕	40	反	18.9		16.4	灰黄	口縁刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ、煤付着
98	690	2588	SD201 上層	小型く字甕	40	反			12.8	橙	頸径 11.0、口縁刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
98	691	2590・2670	SD201 上層	く字甕	80		14.8		13.6	浅黄橙	頸径 13.2、口縁無刺突
98	692	3048	SD201 上層	く字甕	20	反			17.9	黄橙	底径 11.3、口縁無刺突
98	693	2579	SD201 上層	内甕甕	30	反	21.6		17.4	明褐灰	頸径 14.2、口縁無刺突
98	694	2615・2616	SD201 上層	く字甕	40	反	16.0		14.2	暗灰黄	底径 7.4、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	695	2531	SD201 上層	く字甕	5	反			19.2	灰褐	頸径 17.8、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	696	2656・2659	SD201 上層	く字甕	20	反			18.8	薄黄橙	頸径 16.8、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	697	2411・2422	SD201 上層	く字甕	10	反			17.0	浅黄橙	頸径 15.6、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	698	2425	SD201 上層	く字甕	10	反			17.0	褐灰	頸径 14.7、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	699	2527・2457	SD201 上層	く字甕	5	反			15.0	褐灰	頸径 14.4、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	700	2859・2863	SD201 上層	く字甕	20	反			12.0	にぶい黄橙	頸径 11.4、口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ
99	701	2456	SD201 上層	く字甕	20	反			9.4	灰黄	口縁無刺突・ｺﾓﾅﾎﾞ、内面黒斑
99	702	2233・2234	SD201 上層	受口甕	20	反	16.6		14.7	暗褐	口縁刺突、外面煤付着
99	703	2731	SD201 上層	甕	80					黄橙	底径 10.7、内面煤付着
99	704	2653	SD201 上層	甕	10					にぶい橙	脚頭径 5.0、底径 8.6
99	705	2581	SD201 上層	大型甕	10	反	42.1			淡橙	外面煤付着
99	706	2403	SD201 上層	S字甕	5	反			18.2	灰白	S字甕 A 類、口縁押引
99	707	2389・2424	SD201 上層	S字甕	5	反			18.0	にぶい橙	S字甕 A 類古粗、口縁押引
99	708	2441	SD201 上層	S字甕	5	反			17.0	灰白	S字甕 A 類、口縁押引
99	709	2160	SD201 上層	S字甕	5	反			12.8	にぶい橙	S字甕 A 類、口縁押引、外面煤付着
99	710	2410	SD201 上層	甕	5					黄灰	布目状押捺、南関東系
99	711	2883	SD201 上層	砥石			15.1	9.1	2.7		433.6g、凝灰岩
99	712	2354	SD201 上層	砥石			7.7	7.5	4.2		440g、軽石
99	713	2356	SD201 上層	砥石			7.0	3.4	2.6		7.8g、軽石
99	714	2420	SD201 上層	砥石			3.7	3.1	3.7		7.5g、軽石、矢柄の砥痕 ?
99	715	2838	SD201 上層	木製品			27.9	1.8	1.3		不明品、挟り入り
101	716	2717・2716	SX204	外反口縁壺	70	反	31.0	30.5	18.0	浅黄橙	頸径 9.0、底径 6.4
101	717	2682	SX204	外反口縁壺	70		19.8	20.8	9.6	浅黄橙	頸径 7.2、底径 6.8
101	718	3130	SX204	外反口縁壺	20	反			14.0	にぶい橙	頸径 7.6
101	719	2702	SX204	外反口縁壺	10	反			13.2	浅黄橙	頸径 8.3
101	720	2551・2550	SX204	外反口縁壺	20	反			21.0	にぶい橙	頸径 13.2
101	721	2544・2363	SX204	拡張口縁壺	40	反			23.0	淡赤橙	頸径 14.4
101	722	3074	SX204	拡張口縁壺	10	反			27.0	浅黄橙	
101	723	2678	SX204	折返口縁壺	30				17.0	橙	頸径 9.8、口縁円形浮文 3×3
101	724	2679	SX204	小型壺	80		14.4			にぶい黄橙	頸径 6.8、底径 6.0
101	725	2700	SX204	外反口縁壺	20				7.6	浅黄橙	頸径 4.2
101	726	3076	SX204	外反口縁壺	90		8.2	7.7	6.2	にぶい橙	頸径 4.9、底径 4.4
101	727	3076	SX204	外反口縁壺	80	反	6.0	6.6	5.4	橙	頸径 3.8、底径 3.2
101	728	3042	SX204	小型壺	90		7.6			浅黄橙	頸径 4.2、底径 3.2
101	729	3075	SX204	小型壺	50	反	7.4			浅黄橙	頸径 3.7、底径 5.0
101	730	2694	SX204	く字鉢	10	反	20.6			浅黄橙	頸径 17.6
101	731	3074	SX204	く字鉢	30	反	23.3		23.0	にぶい橙	頸径 21.8
101	732	2684・2364	SX204	小型直口鉢	30	反	10.4		10.2	浅黄橙	頸径 8.4
101	733	2460	SX204	小型直口鉢	80		9.4	6.7		橙	頸径 7.5、底径 5.6
101	734	2460・2356	SX204	片口鉢	40	反	8.8			橙	底径 4.8
102	735	2228・2139	SX204	外反坏部高坏	20	反	24.0			浅黄橙	
102	736	2431	SX204	外反坏部高坏	5	反	27.0			灰黄	
102	737	2694・2364	SX204	外反坏部高坏	20	反	27.8			浅黄橙	
102	738	2691	SX204	外反坏部高坏	10	反	26.0			浅黄橙	
102	739	2553・2555	SX204	外反坏部高坏	30	反	17.8			浅黄橙	脚頭径 3.8
102	740	2685・2711	SX204	有稜高坏	60		20.6	22.4		浅黄橙	脚頭径 3.8、脚径 11.2、ｽｶｼ 3 方向

出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	遺構・層位	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
102	741	2709	SX204	有稜高坏	20	反	19.6			橙	
102	742	2715	SX204	装飾高坏	10	反				浅黄橙	脚頭径 7.2
102	743	2545	SX204	高坏	10	反				橙	脚頭径 4.0、脚径 13.6、ｽｶｼ3 方向
102	744	2700	SX204	高坏	30					浅黄橙	脚頭径 4.2、脚径 14.0、ｽｶｼ3 方向
102	745	2699	SX204	高坏	30	反				橙	脚径 12.4
102	746	2697・2699	SX204	高坏	20	反				浅黄橙	脚頭径 4.3、脚径 10.0
102	747	2676・2321	SX204	高坏	50					浅黄橙	脚頭径 4.5、脚径 14.7、ｽｶｼ3 方向
102	748	2431	SX204	高坏	20	反				黄橙	脚頭径 3.2、脚径 10.0、ｽｶｼ3 方向
102	749	2547	SX204	小型高坏	80		8.4	8.4	7.8	にぶい橙	脚頭径 3.6、脚径 6.4
102	750	3074	SX204	く字壺	10	反	22.0			にぶい橙	口縁刺突、外面煤付着
102	751	2549	SX204	く字壺	10	反	23.0			にぶい橙	頭径 21.0、口縁刺突
102	752	2698・2692	SX204	く字壺	60	反	21.4		18.0	にぶい橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ´、外面煤付着
102	753	3074・2366	SX204	く字壺	30	反			17.0	橙	底径 7.5、口縁無刺突、外面煤付着
102	754	2147	SX204	内鬚壺	5	反			13.0	浅黄橙	頭径 11.8
102	755	2696	SX204	壺	20	反				にぶい橙	脚頭径 4.6、底径 8.4
102	756	2694	SX204	砥石			12.8	5.8	5.8		80.3g、軽石、矢柄砥痕？
102	757	2713	SX204	砥石			4.6	2.3	2.2		3.4g、軽石
102	758	2366	SX204	砥石			4.9	3.9	3.0		9.9g、軽石、被熱
102	759	2460	SX204	砥石			2.5	2.4	2.2		4.4g、軽石、被熱
105	760	2150	SK201	内鬚口縁壺	10	反			18.0	浅黄橙	頭径 10.4
105	761	2155	SK201	装飾高坏	10	反				橙	
105	762	2290	SK202	外反口縁壺	10	反			11.6	浅黄橙	頭径 7.8
105	763	2288	SK202	内鬚口縁壺	20				15.0	浅黄橙	頭径 8.8
105	764	2283	SK202	く字鉢	10				18.8	浅黄橙	頭径 12.8
105	765	2278・2156	SK202	装飾く字鉢	10	反			15.0	橙	頭径 12.2
105	766	2284	SK202	小型直口鉢	40		10.0			黄橙	頭径 8.4
105	767	2294	SK202	片口鉢	10	反	13.0			黄橙	
105	768	2292	SK202	有稜高坏	20	反	24.0			にぶい橙	
105	769	2182	SK202	高坏	10	反	16.0			にぶい橙	
105	770	2280・2281	SK202	高坏	60					にぶい橙	脚頭径 4.8、ｽｶｼ3 方向
105	771	2296	SK202	高坏	20	反				浅黄橙	脚頭径 4.0、脚径 15.0、ｽｶｼ3 方向
105	772	2289	SK202	装飾高坏	10	反				黄橙	脚径 19.0、ｽｶｼ方向不明
105	773	2299	SK202	小型高坏	30					にぶい橙	脚頭径 3.6、脚径 11.0、ｽｶｼ3 方向
105	774	2276	SK202	小型高坏	60					浅黄橙	脚頭径 3.1、脚径 7.5、ｽｶｼ5 方向
105	775	2156	SK202	く字壺	10	反			17.0	浅黄橙	頭径 13.8、口縁刺突、外面煤付着
105	776	2300	SK202	く字壺	30	反	18.4		17.0	浅黄橙	口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ´、外面煤付着
105	777	2292	SK202	壺	30					浅黄橙	脚頭径 5.0、底径 9.4、外面煤付着
105	778	2301	SK202	壺	40					灰黄	脚頭径 4.6、底径 8.6
105	779	2156	SK202	砥石			4.1	3.0	2.8		7.4g、軽石
105	780	2334	SK203	拡張口縁壺	10	反			20.0	浅黄橙	頭径 10.4、棒状浮文 3 × 4
105	781	2305	SP202	装飾高坏	5	反				浅黄橙	
105	782	2304	SP202	小型く字壺	70		11.7	12.3	11.0	橙	脚頭径 4.4、底径 5.8、口縁刺突
107	783	2075	SX201	外反口縁壺	5	反			18.0	浅黄橙	頭径 12.6
107	784	2109	SX201	拡張口縁壺	5	反			16.0	浅黄橙	
107	785	2136・2115	SX201	折返口縁壺	20	反			23.0	にぶい橙	
107	786	2169	SX201	複合口縁壺	5	反			26.0	浅黄橙	棒状浮文 5 × 方向不明
107	787	2274・2198	SX201	複合口縁壺	5	反			26.0	橙	
107	788	2168	SX201	外反坏部高坏	5	反			28.0	橙	
107	789	2061	SX201	く字碗形坏部高坏	5	反			28.0	橙	
107	790	2328	SX201	有稜高坏	20	反			24.0	にぶい橙	
107	791	2326	SX201	高坏	30					浅黄橙	脚径 11.0、ｽｶｼ3 方向
107	792	2108	SX201	く字壺	10	反			19.5	灰黄	頭径 17.9、口縁刺突
107	793	2169	SX201	く字壺	5	反			13.0	橙	頭径 11.8、口縁刺突
107	794	2325	SX201	く字壺	5	反			19.0	橙	頭径 17.6、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ´
107	795	2327	SX201	く字壺	5	反			15.0	にぶい黄橙	頭径 13.2、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ´
107	796	2326	SX201	内鬚壺	5	反			18.0	浅黄橙	頭径 16.8、口縁刺突・ｺﾓﾅﾅ´
107	797	2075	SX201	く字壺	5	反			24.0	灰黄	頭径 22.0、口縁刺突
107	798	2046	SX201	S 字壺	5	反			17.0	にぶい黄橙	S 字壺 A 類、口縁押引
107	799	2328	SX201	S 字壺	5	反			18.0	灰黄	頭径 15.4、S 字壺 B 類
107	800	2054	SX201	砥石			7.6	4.0	4.3		28.7g、軽石
107	801	2134	SX201	砥石			6.5	5.4	3.9		21.0g、軽石
107	802	2243	SX202	外反口縁壺	10	反			15.0	橙	頭径 8.2
107	803	2252	SX202	外反口縁壺	20	反			13.5	にぶい黄橙	頭径 8.4
107	804	2252・2253	SX202	外反口縁壺	10				11.0	橙	頭径 6.3
107	805	2252	SX202	直立口縁壺	20	反			15.0	橙	頭径 10.6
107	806	2253	SX202	小型く字鉢	50		9.1	8.0		橙	頭径 7.6、底径 4.1
107	807	2251	SX202	装飾高坏	5	反				にぶい黄橙	
107	808	2252・2253	SX202	く字壺	30	反			18.0	にぶい黄橙	口縁無刺突・ｺﾓﾅﾅ´
107	809	2252・2253	SX202	く字壺	50	反	21.4		18.6	橙	口縁無刺突・ｺﾓﾅﾅ´
107	810	2039	SX202	S 字壺	5	反			15.7	褐灰	S 字壺 A 類、口縁押引
107	811	2252	SX202	S 字壺	5	反			14.0	灰黄褐	S 字壺 A 類、口縁押引
107	812	2253	SX202	タタキ壺	10					にぶい黄橙	底径 4.2、畿内 V 様式系
107	813	2253	SX202	砥石			9.0	6.1	4.2		43.2g、軽石
107	814	2196	SX202	砥石			6.5	5.4	5.1		35.8g、軽石

図 版

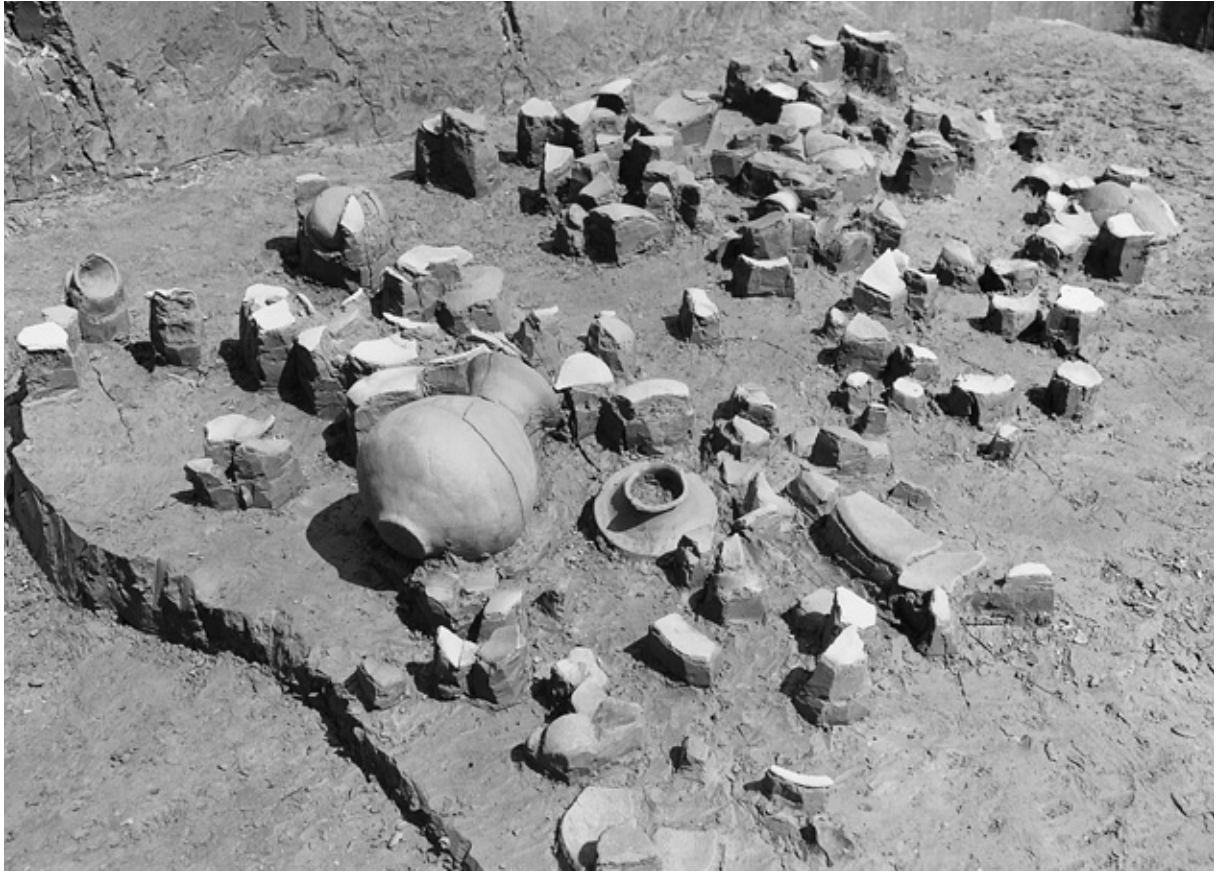
PLATE



C区調査風景



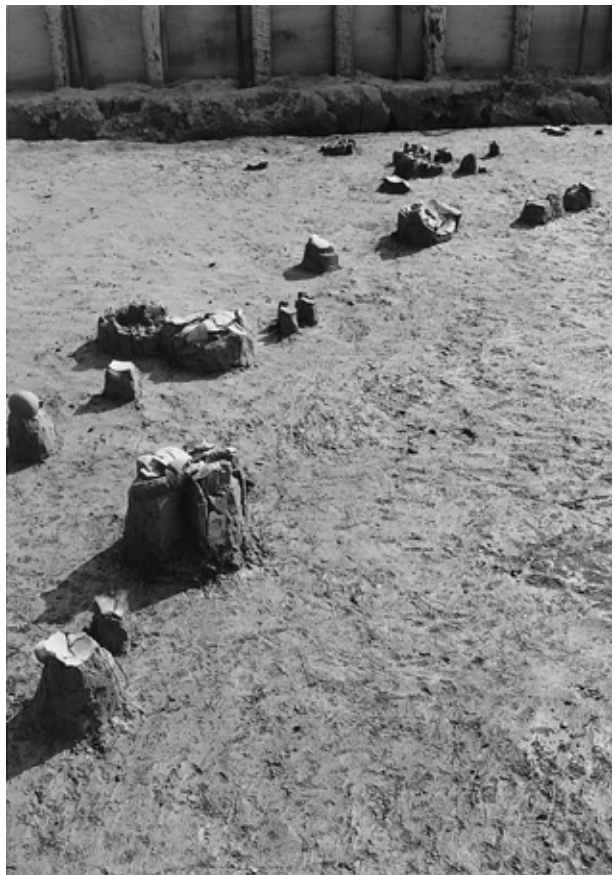
A区下層遺構（東から）



1 SX12 下層遺物出土状態（南西から）



2 SX11 上層遺物出土状態（北東から）



3 SX11 上層遺物出土状態（西から）



B区下層遺構全景（南西から）



1 SD104 (南東から)



2 SD104 東側遺物出土状態 (西から)



3 SD104 西側遺物出土状態 (西から)



1 SD108 (北東から)



2 SD108 遺物出土状態 (南から)



3 SD108 完掘状況 (北から)



B区上層遺構（西から）



1 SB101 (北西から)



2 SX103 遺物出土状態 (南東から)



B区水田関連遺構（東から）



1 SX101 遺物出土状態（北西から）



2 SX101 遺物出土状態（南東から）



1 SX101・102、SD103 遺物出土状態（北西から）



2 SD103 土層断面（北から）



C区下層遺構（西から）



1 SD201 下層遺物出土状態（東から）



2 SD201 下層遺物出土状態（南西から）



3 SD201 下層遺物出土状態（南東から）



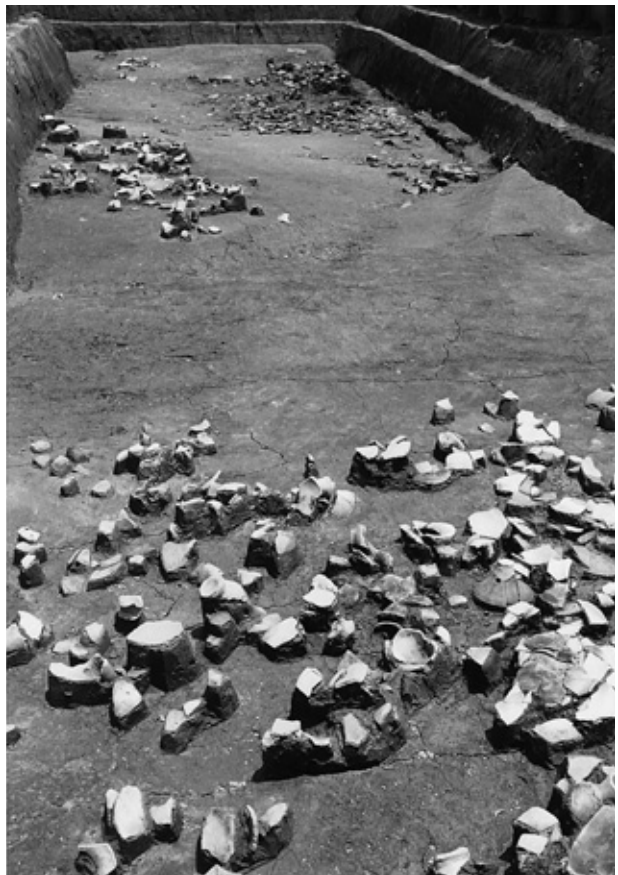
C区上層遺構（西から）



1 SD201 上層北西群遺物出土状態（北西から）



2 SD201 上層北西群遺物出土状態（西から）



3 SD201 上層北西群遠景（西から）



1 SD201 上層遺物出土状態（北西から）



2 SD201 上層遺物出土状態（北西から）



3 SD201 上層遺物出土状態（北東から）



1 SX204 遺物出土状態（北東から）



2 C区最上層遺構（西から）



1 SK202 遺物出土状態（北から）



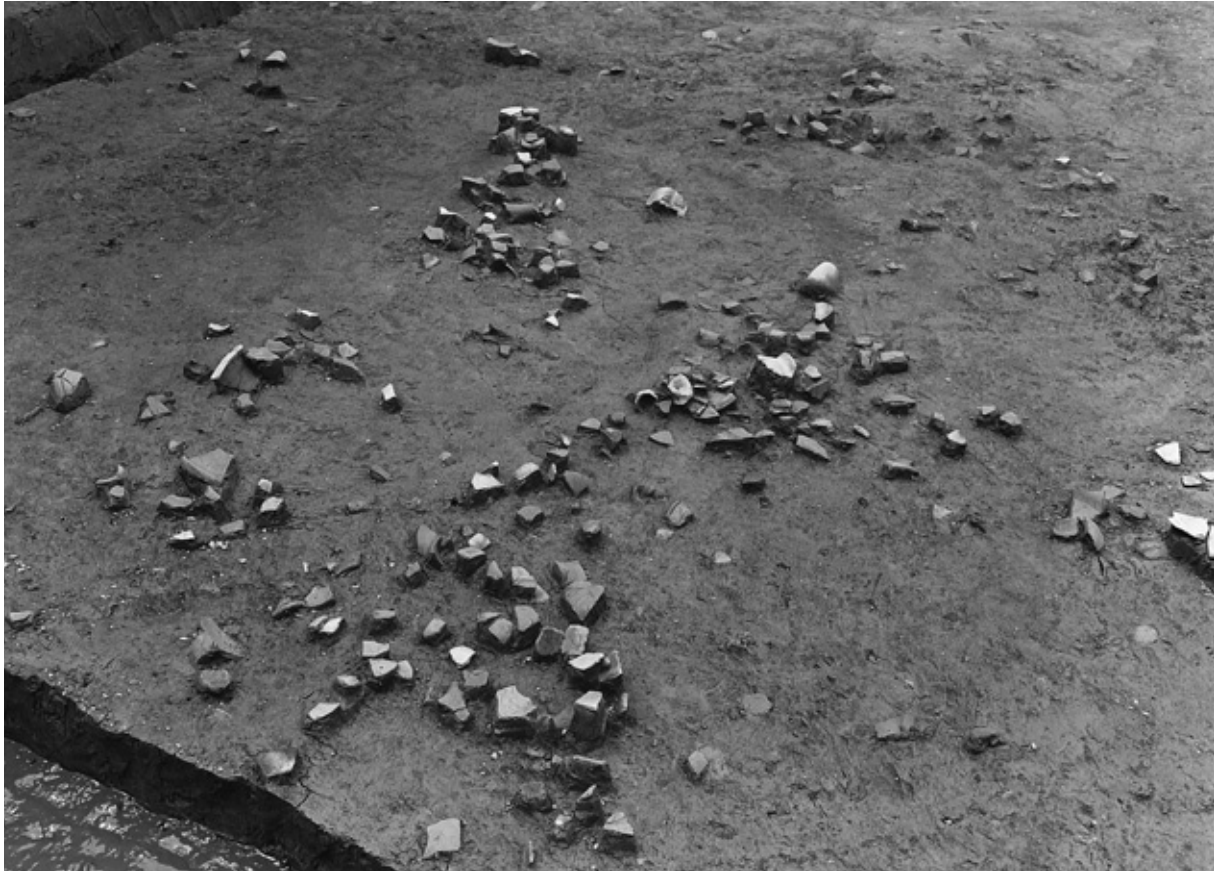
2 SK202 遺物出土状態（北東から）



3 SK203 遺物出土状態（東から）



4 SP202 遺物出土状態（南東から）



1 SX201 遺物出土状態（北東から）



2 SX201 遺物出土状態（南東から）



3 SX201 遺物出土状態（北から）



弥生時代主要出土遺物





24



37



26



40 · 38

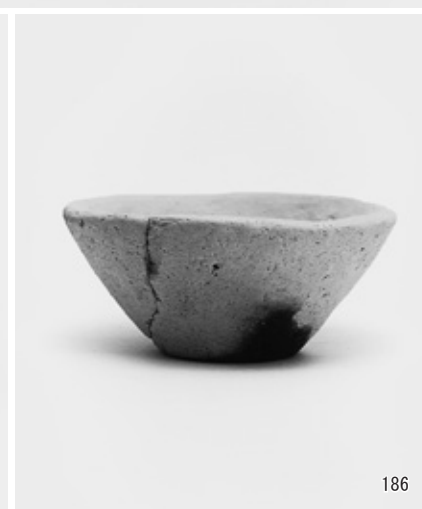


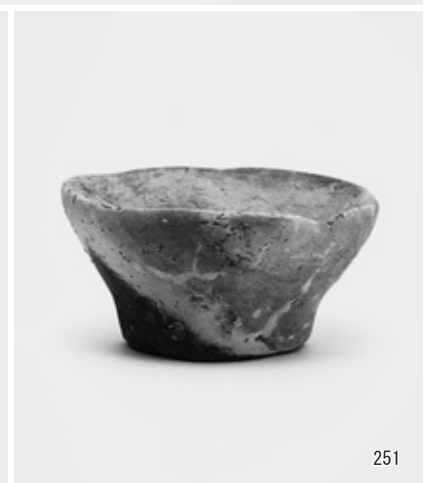
44



45













1 SD103 出土遺物



2 水田層出土遺物



SD201 下層出土主要遺物



SD201 下層出土遺物 (1)









SD201 下層出土遺物 (5)



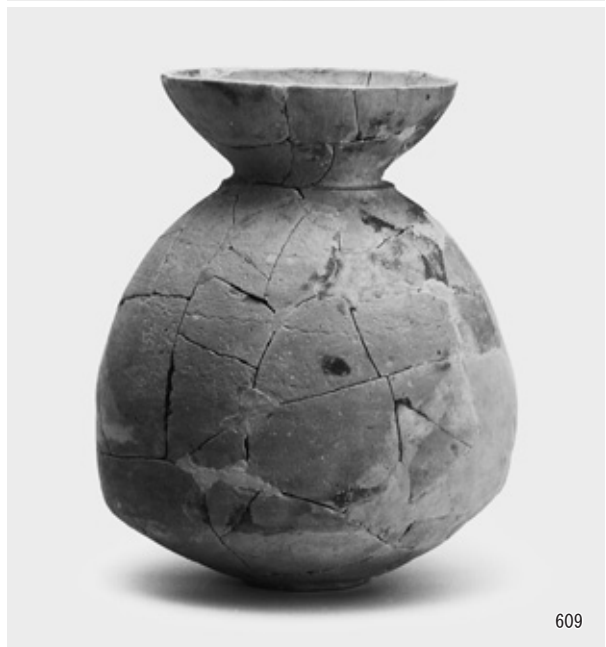
SD201 下層出土遺物 (6)



1 家形土器



2 SD201 上層出土主要遺物



SD201 上層出土遺物 (1)



SD201 上層出土遺物 (2)



報告書抄録

書名（ふりがな）	鳥居松遺跡 5 次 弥生時代編 （とりいまついせき 5 じ やよいじだいへん）							
編著者名	鈴木 一有							
編集機関	浜松市教育委員会 〒 430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（053）457-2563							
発行機関	（財）浜松市文化振興財団							
発行年月日	2009 年 12 月 25 日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とりいまついせき 鳥居松遺跡	静岡県 浜松市中区 森田町	22202	01 04 28	34 度 41 分 35 秒	137 度 43 分 11 秒	2008 年 1 月 4 日 ～ 2008 年 6 月 16 日	1200 m ²	宅地造成に先 立つ事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥居松遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物 掘立柱建物 環濠 土坑 土器集積	弥生土器 家形土器		弥生時代後期の拠点集落 家形土器や南関東系土器など 希少な遺物が出土した。		
	水田跡		畦畔 灌漑用水路 土器集積					
	河川跡		自然河川					

北緯、東経は世界測地系の数値である

鳥居松遺跡 5 次

弥生時代編

2009 年 12 月 25 日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当

(教育委員会の補助執行機関)

〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印刷 松本印刷株式会社

Toriimatsu Site

The 5th excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 1st-2nd Century
Village in Western Shizuoka Prefecture, Japan



December, 2009

Hamamatsu Cultural Foundation